

---

# マスカレイド

ちーきー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マスカレイド

### 【Nコード】

N5769L

### 【作者名】

ちーきー

### 【あらすじ】

何もない田舎町、石間町。

閑静なベッドタウンに暮らす七人のペルソナと呼ばれる人間と、その者たちの前に突如現れた七人のシャドウと呼ばれる使い魔。

何の為に現れたかも分らないその使い魔達の戦いが今始まる――

## プロローグ

準備は整った。

この地は最適——ではないが、それでも今回の儀式に使うには丁度良い。

大地を流れる脈に術を刻む。大気に術を送り込む。大空に術を張る。

後は主演が集まるだけ。この地では七人が限度だが、そもこれは実験。あまり増やしすぎるのも良くないだろう。

「さて」

呟いた言葉と共に、優しい風が吹く。次いで羨望と破壊衝動。礼儀正しい憎悪。陰湿な陰謀。無垢な水。故意の悪意。無意識の善意。

「まあ順当だろう」

髪を上げて鞆を手取る。後は、背中を押すだけだ。

「さあ、マスカレイドの開幕だ。良い色をつけて欲しいものだね」

呟く言葉に答えはない。そもそも答えなどいらなかった。欲しいものは結果だけ。この仮面舞踏会で最後まで踊り続けたモノだけだ。まずは誰の背中を押そう。そう考えれば、今の僕にはただ一人しか思い浮かばなかった。

師匠に弓引く行為だけどそこに後悔はないし反省もしない。だって——

「魔術師なんてのはそんなものだろう」

呟く言葉に、やはり答えはなかった。

## 第一章 桐式紅葉 その一

◇Side 無口七緒

石間高校。そこは偏差値がほんの少し他校よりも高いという意外はごくごく平凡な高校だった。

進学率はそこそこ。就職率はまあまあ。学生数も普通だし、敷地面積も普通だ。周囲は学生らしく慎ましく学べと言うかのようには娯楽施設など一つもなく、あるのはコンビニが一軒程度だった。それでも自転車で十分程度走れば駅がある為にそこまで行けば娯楽施設も多少はある。そんな訳で駅前には下校した生徒達の溜まり場となっているのだ。

そんな高校を抱える石間町と言う場所はしかし、ど田舎と言って良いほどに何も無い町だった。ベッドタウンだった。閑静な町だった。正直休日などは退屈で仕方ない場所だった。

しかし、そんな何も無い、ただ勉強をする為に来ているこの学校には二つの見所がある。

一つは僕の一つ先輩にあたる三年生の女生徒、鞍馬智子。よく漫画で見るような、全校生徒に知られる程の美少女と言うのはフィクションなのだろうと、僕が入学した頃までは思っていた。思っていたけれど、それが現実になるとは思わなかった。それぐらいの美少女なのだけれど、しかしそこは現実。星の数ほどの男が彼女に告白して振られる、なんて言う事態は起こっていなかった。少なくとも僕の属する二年生とその下、一年生の間ではそんな話は聞いていない。別段彼女に問題があると聞いた訳では無いけれど、まあその理由は一つだろう。同級生ならともかく、友達でも何でも無いような相手に告白をしに行くような下級生がそうそう居る訳がないのだ。まあ、綺麗だけどそれだけだ、と言う事でこの話題が長く語られる事は無い。せいぜい擦れ違った時に思い出したように話をするだけ

だろう。実際に話をした僕も、可愛いと思ったくらいでそれ以上の感想を持たなかった。

そしてもう一つ。僕が一年生の時の話だ。これはもうあまりにも有名すぎて当時の一年生の間から鞍馬先輩の噂が掻き消えたほどだ。むしろ知名度で言えば鞍馬先輩よりも上かもしれない。

名前は桐式紅葉。これまた女。そして、レディース。これはただ女性と言う意味ではなく、暴走族と言う意味でのレディースだ。そしてあだ名——と言えるのか疑問だけれど——は、生ける伝説、現代に蘇った番長とまで来ている豪快な女性。

何故そんなあだ名が、それも女性についたかと言うとそれは簡単な話だ。

どんな学校にも品行方正な生徒しか居ない訳ではなく、つまり、はみだし者と言うかなんと言うか。一言で言えば不良がこの学校にも居る訳だ。そんなのが三十人——となると大体一クラス分となる。すげえ——が桐式を狙って現れたとか何とか。単純に同じ匂いのする彼女を自分の女としようとしたのか、それとも根性焼きでもしようとしたのか。ともかくそんな三十人の不良を、彼女は一人で、たった一本の木刀で千切っては投げ、とやってしまったんだとか。普通そんな事は噂の域を出ないか、それか過剰に誇張されただけで実はたいした事が無かったとか言うオチなのだろうけれど、事実彼女は一週間の停学を食らっていたりする。それはつまり、事実か否かは別として彼女が何らかの事件を起こしたと言う事なのだろう。

しかしまあ、割と他人に興味が無い僕がかなり細かく彼女の事を知っている理由はと言うと——

「おいムクチ」

教室の一番後ろの窓際。秋のちょっと肌寒い季節ではあるものの、今日のように太陽さえ出ていれば非常に温かい絶好の位置で窓の外を見ながらそんな考え事していると退屈な授業が終わったらしく、隣に座っていた男子生徒——名前が分からないから不良Aとしておこう——が話しかけてきた。

「ちょっと喉乾いたから自販機行って飲み物買って来いよ」

と、Aは馬鹿な事を口走る。僕は不本意なあだ名通りに無視を決め込むと、苛ついたように舌を打って椅子から立ち上がり僕の前に立った。

「おい」

無視。

「おいつつってんだろ」

とことん無視である。何で僕がこんな横柄な奴の言葉に応えなければならぬのか。周囲の生徒達は僕の事を一瞥すると、またか、と、自分に危害が無いようにとでも言うように視線を逸らしていた。無視されているのだから放っておけばいいのに。暇なんだろうか。暇なら自分で買いに行けよ。なんて思っていると、僕の胸倉をAが掴む。

「人が話してんだからなんとか答えろよ」

「……言わせて貰うけど、こんなやり取りを何回繰り返してると思ってる？」

確か一ヶ月前に席替えをしてから既に十は同じ事をしていていると思うけれど、と言ってみると、目を血走らせながら、

「んな事今関係あんのかよ!？」

と怒鳴ってくる。関係ないのだろうか。そんな事も分からないのだろうか。少なくともこの高校は勉強をしなくても入れる程にレベルは低くないと思ったのだが。

「いいから行って来いよ、ああ!？」

「そんな怒鳴って喉乾かない? 早く自分で行って飲み物でも買ってくれば?」

誰が聞いても正論だろう、そんな言葉を投げ掛けてみると、Aの顔がみるみる赤くなり――大きく右腕が振るかぶられる。十回の繰り返しても始めての行動だったけれど、いつかはそうなるんだろうと予想もしていた。まあ殴ってくるつもりならこちらにも考えがある、のだけれど――

「のあ!？」

どこぞより飛んできた上履きがAの左頬にクリーンヒットする。その拍子にAの手が僕の胸倉から離れ、そして空中に舞っていた上履きがぱすん、と僕の机の上に落ちた。それを見て、手に取り、飛んできた方向にひよいと投げる。

「悪いね」

「こちらこそ」

教室の前後二つある出入り口の一つ、後ろの出入り口から現れたその人はAに絡まれるまで頭の中に居た女性、桐式紅葉だった。高校指定のブレザーにロングスカート。腰までの長い黒髪をポニーテイルにし、化粧つけの無い、しかしそれでも美人と言える健康的な顔は僕に絡んでいたAに向けられた途端に怒ったような表情になっていた。

「お前は何度も何度もしつこいやつだなあ……ムクチ君が困ってるだろう？」

上履きを履きつつ、Aに詰め寄る桐式。Aの方も、

「いや、その、だってよ……」

と、まるで僕が悪いと言うようにちらちらとこちらを見ながら弁明をしている。曰く、Aは桐式にちょっかいを出してボコられた一人だとかなんだとか。事実桐式が停学を食らった後、一週間くらい学校を休んで出てきた時には包帯やら絆創膏やらを顔に付けていたので信憑性がある。

「おら、こっち来いばか。……たく、ほんと悪いな、ムクチ君」

「別にいいよ。あとムクチはやめてくれ」

「はは、そうだな、無口君」

そう、僕の名前はナクだ。ムクチと読めるけど、ナクなんだ。あと僕はそれほど無口な訳ではなく、単に君らと話す理由が無いから話していないだけなんだ。

なんて言う事をAに初めて絡まれた日に言ったら思い切り怒鳴られた。まあその後桐式が仲裁に入ってくれたのだけけれど。

と、言う訳で。桐式紅葉とは一年、二年と同じクラスに振り分けられている。違うクラスならまだしも同じクラスで彼女の話題を知らない者は居ない。

桐式紅葉と言う人間は確かに不良なのだろう。このミニスカートの全盛している時代にロングスカートで、しかも日によっては竹刀を片手に闊歩しているのだから文句の言い様が無い。いや、ロングスカートは人それぞれの趣味だろうし高い背——悔しいけど僕より少し高い——も相まって似合っていたりする。ちなみに胸もでかい。竹刀だって彼女が女子剣道部だからなのだからそれを持っているから不良なのだと言うのは完全な決め付けだったりする。しかしそれでも彼女は不良連中との付き合いもあるようだし、そんな連中を束ねているのは周知の事実だから隠しようもなく彼女は不良に属している。しかしまあ彼女の起した事件はただの一度だけだし、それ以降不良による騒動はまったく無い上に、あったとしても桐式による折檻が行われているとか何とかでこの石間高校は至って平穏な毎日を送っていたりする。

結果的に見ると桐式は世直しをしたと言う事だろう。風紀委員よりも風紀委員をしている訳だ。一年生の間にそんな伝説を残してしまふのだから、それはもう上級生の美少女なんていう噂も掻き消されてしまう訳だ。

Aが桐式に頭を叩かれたりしつつ自分の席に戻っていくと、僕は平穏に、今度は桐式やら先輩の事やらは考えずに——

「あーあ、また助けられてんの」

頭の中に響く声の相手をしてやるのだった。

自転車に乗っての帰宅途中、家に程近いコンビニで雑誌を立ち読みして、飲み物を買ってから再度家路へ。

学校から十五分ほど。駅とは反対の方向に自転車を走らせればそこは我が家だった。大きな門に「無口」の表札。そこを抜ければ大きな日本家屋。以前は兄弟も合わせて十人以上は住んでいたけれど、



今は結婚やらなにやらでどんどん家から離れていつて僕と父親の二人だけ。家政婦の人も居たけれど、つい二ヶ月前に家の事情で辞めてしまった。僕も父さんも家事が出来ない訳では無いから困らないけれど、ご飯が不味くなったのが一番の問題だった。

駐輪所に自転車止め、玄関からではなく勝手口から家に入る。台所の冷蔵庫に飲み物を入れて部屋を指し、途中の父さんの部屋を覗くが中に誰も居なかった。靴も無かったし出かけているんだろうと、そのまま部屋に入る。

十二畳の和室に漫画が詰められた本棚が二つと三十七インチのテレビ、そしてゲーム機。まあ、オタクと言われればそれで終わりの僕だけれど、楽しい物を楽しいと思えなければ人間はそれで終わりののである。

「なあ、ゲームしようぜ」

……まあ楽しすぎて他の物が手に着かなくなるのも考え物だけど。取り合えず制服から私服に着替えて部屋を出る。

「無視すんなよー。ゲームやろうぜえー」

「うるさいな」

まったくもってうるさいとしか感想が無いその声に、感想そのままの言葉を返して家を出る。まだまだ外は明るい。

自転車を押して門から外に出ると、つい一ヶ月程前から見かけるお姉さんが道の向こうから走ってくる。青いジャージに身を包んで走るそのお姉さんはいつもの事ながらジョギングと言えないような速度で僕に迫り、そして擦れ違い様に軽く会釈をして走り去った。それと同時に爽やかな、この時期にしては珍しく温かい風が吹いた。まあ、いつもの事だ。

自転車に跨り、走り出す。特に当ては無いけれど、やらなければならぬ事は決まっている。さて、右と左、どちらに行こうか。

「昨日は左だったし、左でよくね？」

「そうなるも明日も明後日も左になるな。まあ僕も左にしようと思ってたし、そっちに行こう」

左に進んですぐの大通りを更に左に進むと処川<sup>ところがわ</sup>に突き当たる。石間町と隣町の三弦町とは丁度その川で遮られている形になっている。昨日はそちらへは行っていないから今日は川のほうへ行くでしょう。どうせ当てがないのだ。



「いやあ、歌った歌った。喉がらがらだ」

鞆を片手に桐式紅葉が夜の公園を歩く。等間隔に設置された街灯が照らし出す彼女の格好は学校に居た時と同じ制服姿だった。

あー、と声を鳴らしながら鞆の中の半分ほど中身の入ったペットボトルを取り出し、それを飲み干した。

「たまにはカラオケでばか騒ぎってのも良いもんだな、姫」

紅葉の言葉は何者かに向けられたものだったが、そこに何者の姿も無い。しかし紅葉は満足げに、続けてその何者かに話し続ける。

話しながら、ふと紅葉の視線が動くとその先にはゴミ箱があり、ふらりとそちらに足を向ける。空のペットボトルを捨てると、足を元の方向に戻した。しかしそこには、

「あれ、さっき人なんかいたか？」

小声で、その目の前の人物に聞こえないように呟く紅葉。そこには黒いスーツに身を包み、手に杖のような物を持ったすらりとした体格の男が立っていた。その視線は真っ直ぐに紅葉に向いていて、何かを聞いたそうなの、話掛けてきそうな雰囲気<sup>きふき</sup>に紅葉の足も止まる。そんな紅葉を見て、しかし男は近づく素振りも話しかける素振りも見せない。何事かと首を傾げる紅葉にしかし、男は深く一礼をした。しかし気付く。自分と男の立つその距離が剣道で言う一歩踏み込めば相手を刺突出来る距離、一足一刀の距離であり、そして男が持つ物が杖ではなく剥き身の日本刀である事を。さらに男が頭を上げると、その日本刀を紅葉に向けて上段に構えた。

街灯に照らされ、男の頭上に構えた刀が鈍く輝く。それを見て、

紅葉はあまりの出来事に動く事が出来なかった。それでも、普段から剣道で武器を持った相手と対峙しているからか、体は勝手に臨戦態勢を取った。それを見て男は小さく微笑む。

「っ!？」

男の迷いを見せない踏み込みと同時に繰り出された袈裟切りを身を振って避けた。男の刀に迷いもなく、その剣筋は紅葉の命を確実に絶つものだった。だが、

「は、はは……なんとか見えたよ姫」

紅葉は言いつつも冷や汗と引き攣った笑みを浮かべ、大きく後ろに下がる。その紅葉に対し、男は剣が避けられた事にも動ずる事無く構えるだけだった。

紅葉とて剣の道に身を置く者であるが、しかし今の紅葉にその日本刀をどうにかする為の武器は無かった。

絶体絶命。たとえ敵の攻撃が見えていても、紅葉には確実に自分の命を絶てる武器を手に襲い掛かってくる相手との戦いなどした事はなかった。故に、どれだけこの場で攻撃を避けようと相手を打倒するかこの場から逃げ出すかしなければいずれはその凶刃に倒れるだろう。

「……ふざけんなよ」

しかしだからと言って敵を背に逃げ出すほど、紅葉の性格は穏やかではなかった。

「姫!」

叫ぶ声に、一瞬男の視界に幽霊のような少女の幻影が見える。しかしその姿はすぐに掻き消え、それと同時に紅葉の手に白い手袋と――

「おお、漏れてるって!」

その手袋から湧き上がるような水が現れた。しかしその水は段々と手の中で形を持ち、そして長い棒のように延びて固まる。見ればそれは相手と同じ刀のようであり、

「安心しろよ、これは木刀と同じだぜ？」

まあ頭に受けたら死ぬか

も知れないけど」

それを中段に構える紅葉の姿は既に女生徒ではなく、剣士の雰囲気  
気を纏わせていた。

静かに、切れ長の双眸を真っ直ぐに男に向ける。紅葉がすり足で  
一步近付けば男は一步下がる。そしてその逆に男が近付けば紅葉が  
下がる。さながら剣道の試合のようなその差し合いは、

「きああああ！」

気迫の声と共に紅葉の突きが繰り出される。振りかぶる事もなく  
直線的に繰り出される打突は男が防御に刀を振り下ろすよりも早く  
相手の体へと迫る。しかし男は一足飛びに背後へ下がると同時に刀  
を振り下ろした。その一撃で紅葉の刀は下へ弾かれる。その筈だっ  
た。その筈だったのだが――男の刀は水の剣に当たるだけでその軌  
道を逸らす事が出来ない。真っ直ぐに打ち込まれた水の剣は男の肩  
に当たると大きく体勢を崩させた。

「ちっ！」

舌を打ったのは紅葉からだった。男が飛び退いた所為で突きは十  
分な威力には至らず、ただ体勢を崩すだけに留まる。これが剣道の  
試合であっても有効打とはなりえない。

男はまたも構える。その表情に焦りも何も無い。構えは変わらず  
上段。対する紅葉は中段。自分の武器の特性が読まれたか、と紅葉  
は焦り、殺し合いの中でも十分に戦える敵に男は焦る。

先程まで以上の読み合い、差し合い。その均衡を破ったのは、耳  
と目を同時に潰す強い音と光の炸裂だった。



自転車で土手を走りつつ、適当に辺りを見回す。しかしそれで目  
当ての人物が見つかる訳が無かった。

暫く行くと右手に向かって伸びる橋が見えた。その橋から向こう、  
そして橋を渡った先は三弦町に入ってしまうのでそこで左に曲がる。

そこから暫く走れば広大さで有名な公園がある。とある街の紹介をするテレビ番組でも特集されたくらいだ。とは言え、有名なのは広さだけでそこには釣りが出来る池があるくらいなのはあまり知られていない。

暇だ、なんて言う声が聞こえてくるけどそれを無視して自転車を走らせ続ける。既に一ヶ月近く行われているその行動も、まるで一切の実りが無いからマンネリになってしまう。ひよっとしたらあの金髪野郎は既にこの町に居ないんじゃないだろうか。そんな悪態をつきながらも、立ち寄るような店さえも無い道を走り続ける。本当に、三十分走ってコンビニが一軒しかないとかどれだけ田舎なんだろうか。田舎と言えば田んぼに畑だけど、そう言えばこの辺は個人の畑が多い。おお、見事に田舎の条件が揃ってる。

「……田舎に失礼だろ」

「それもそうだな」

知らずに口に出てたらしい。突っ込まれてしまった。

——程なくして公園に辿り着く。道路を挟んで田んぼの田のように四つに分かれているこの石間公園は田の字で言う左下の場所には草原が広がるだけの広場が。右下には時々陸上競技が行われる運動場が。左上には釣りが出来る池があり、右上にはまたも草原。そんな公園の右下、方位で言えば北西に当たる場所から中に入る。中央の運動場を囲うように整地された通路があり、そこを走る。街灯が多く、一通り走っても人通りが無い事がすぐに分かった。運動場の周りから中見たけれど誰も居ない。死角に隠れているかもしれないけれど、出入り口は封鎖されていたし中には誰も居ないだろうとして放置した。そこで念入りに探さないのは、既に何度も中を探したからだった。入ってきた場所から一周したからその場所から出て道路を渡り、今度は北東に位置する公園へ。そこは公園の外周に街灯があるだけで中はまったくの暗闇だった。ざっと見渡しても人の気配が無く、何度もこの中に入って探してはいるけれどその度に裏切られてきた。正直ここには居ないだろうし居ても何もやる事が無い

だろうとしてそのまま南に向かって外周の舗装された道を自転車で走る。マンネリが続いている身としては面倒で無駄な事はしたくない。

そして道路に突き当たり、信号を待つて渡る。南東の公園。そこは釣りをする人達が多く、運動場のある北西の公園ほどではないけれど整地がされている。近道の為にこの公園を突っ切っている人も多く、北西の公園とこの南東の公園を経由して道を横断するからあいつがこの公園を使っている可能性が高い。とは言ってもそれは期待論に過ぎなく、単純に家の中にでも引き込まれていたら探しようがない。とは言え探さなければ見つからないのだから――

「面倒なんだよな」

呟いて中に入る。舗装された道を照らす街灯に沿って走る。ここも中央に大きな池がある為にその池を囲うように通路が作られているけれど、公園を斜めに横断できるように通路が作られているから中まで探しにいかなければならない。まあ、道自体はきちんと舗装されているからそれは苦ではない。

まずは外周を回って――そう思って走っていると、その公園の中では一番人通りが少ない暗がりが多い道に差し掛かり、そこで何か普通とは違うような音が聞こえてくる。咄嗟に僕は自転車を降りてその音の方向へ走り出した。

「……イチ」

「分かってる」

ポケットに手をつ込み、バタフライナイフを取り出す。グリップ内に収納されたブレードを片手で展開して持つ。音はもうしないが、しかし、街灯が途切れた暗がりです倒れる一人の人の姿が見えた。背中に傷は無く、うつ伏せに倒れた体の前面から血が流れていた。漂う血の匂い。それは間違いない死臭。

「……不本意だけどビンゴだった」

「リーチなのかも知れないぜ？　これをやった奴は逃げ去ってるとかさ。それに金髪野郎じゃないかもしれないし」

「それはそうだろうけど……」

携帯を取り出して送り先に秋子さんと父さんを指定し、素早くメールを打ち込む。メールが無事送られたのを確認すると同時に――

「きああああ！」

悲鳴のような声が響き渡る。驚きに一瞬体が竦むが、すぐさまその声の方向へ向けて走った。

見えたのは刀のようなものを構えた二人の姿。一人は上段、一人は中段。剣道の経験は無いけれど、中段の構えが現代の剣道ではもつとも基本でもつとも有利な構えだと言われているのは知っている。とは言え二人がどの程度の使い手なのかは分からないし、

「……どっちをやれば良い？ それとも両方やれば良いのか？」

「後者で」

どの程度の使い手だろうと関係ない。

耳に栓をし、目にサングラスを付けて走る。そして同時に、後方から投げられたペットボトルのような形の物をサングラスの下でなんとか確認する。その物は二人の間に落ちる。まだ二人は僕達の姿には気付いていない。

走り出してから五秒。長くもなく、短くもない時間。炸裂。閃光。轟音。サングラスがなければ一瞬にして目をやられていただろうその閃光は二人の目を焼き、栓をしていなければ耳をやられていただろうろう轟音は二人から音を奪う――筈だった。

一瞬早く上段に構えていた方は自分の目の前に腕を下げ閃光を回避する。もちろん僕の事を確認した訳じゃないのだろうけれど、闖入者に驚くでもなくそいつはあらかじめ確認していたらしい逃げ道へ駆け出した。なんとも手際が良いものだ。

光が収まるとサングラスを外す。まともに閃光と轟音を受けたもう一人は目を押さえて悶絶していた。そんな姿を見て僕はナイフを仕舞い、拳を握って――

「おい」

ぽこ、と後頭部を叩かれた。

「なにしてんだよ」

「取り合えず殴って気絶させようとかだな」

「相手は女だぞ」

「そうなのか？」

背後の馬鹿に言われてそいつをしてみる。確かに女だった。何で分かったかと言うと、ミニスカ全盛な時代の気流に逆らうようなロングスカートと黒のポニーテイルをしていたから。て言うかその姿に覚えがあった。て言うか桐式紅葉だった。

「……」

なぜか水浸しな足元を無視して取り合えず近寄り、拳を握る。

「おい！」

またしても後頭部を叩かれた。

「なにしてんだって！」

「だから殴って気絶させようとかだな」

「女だぞ？ 同級生だぞ！？ 可愛いんだぞ！！？」

「その何処に殴らない要素があるんだよ」

「何処に無いんだよ！？」

がーと叫ぶ青髪の馬鹿。本気でうるせえ。しかしまあ、こいつの美意識から見ると可愛いのか桐式は。って、いつも可愛いって言うってたか。

とりあえず、面倒なので、なぐります。一句詠みつつ拳を握ってさらに近寄るが――

「ん？」

突然桐式が付けていた手袋が水のように溶け、さらにその水が少女の形を取り、

「おお、可愛い！」

後ろの青いのが叫ぶ。

両手を広げて桐式を守るように立っていたのは、僕の半分程の背しかない小さな女の子だった。セミロングの髪を主人と同じようにポニーテイルにしているが、主人とは違ってオシャレなのか、赤い



大きなりボンで止められている。服装も桐式とは違って実に女の子らしい柄の長袖のシャツとレギンスパンツだった。

そんなどこから見ても年齢通りの女の子が震える事も無く僕らを睨みつけてくる。僕はその子に向けて拳を握り――

「死ね！」

なんか、本気で殴られた。

「……ひ、め……？」

目と耳をやられていた紅葉が辛そうに呟く。その言葉を聞いてか少女はより一層体を張って僕達の前に立ち塞がった。それを見て僕は拳を――

「おい。いい加減キレルぞ」

「冗談だよ。……君、名前は？」

両手を挙げて降参と言う風にしながら少女に問う。しかし答えは返ってこない。だが、

「その子は姫って言うんだ」

まだ目は治っていないのか、瞼を手で押えている桐式が答えた。姫と言う名の少女は小さく何度も頷く。

「あんた、助けてくれたのか？ でも無茶苦茶だぜ」

桐式が、うー、と唸って耳を何度か叩く。まだ耳に音響が残っているのだろう。馬鹿が投げたのは音と閃光で相手の行動を制するスタングレネードで、それをまともに受けた桐式は暫くは目と耳をやられたままだろう。しかしまあ、驚いた。

「君がペルソナだったなんてね」

「ペる、そな？」

「……後で説明するよ、紅葉」

馬鹿がすたすたと桐式に近寄り、自分の胸の中に桐式の頭を埋めた。その間姫と言う名の少女は僕を睨んだままだった。かなり嫌われたらしい。馬鹿に抱かれた途端、うお、と驚いたような声を出す桐式。まあ、当然だろう。

「お前、女だったのか？」

あの馬鹿、結構胸が大きいんだよな。

「助けたのは僕だよ」

「目が見えないから分からないんだよ」

「それをやったのはそいつだ」

「ああ、そうか。じゃあ……」

助けたのはこっちじゃないか。と言うなんとも的を射た答えを聞きながら、遠くから歩いてくる秋子さんの姿を見つけて軽く手を挙げて応えるのだった。

## 第一章 桐式紅葉 その二

### ◇Side 桐式紅葉

魔法。それはファンタジー。

魔法。それは憧れ。

魔法。それは非現実。

あたしこと桐式紅葉は今、なにやらどこかい屋敷の中に連れ込まれてしまった。ともすれば刺青やクザがわんさか沸いてきそうだけれど、現れたのは一人の同級生と、一人の人の良さそうなおばさんだった。と言うかその二人にここに連れ込まれた。

変な男との死闘を繰り広げたあたしはその同級生、無口君に助けられたらしく、事情を説明してもらおう為に無口君の家に行く事になった。助けられた恩もあるしあたしも事情を知りたいし、無口君も秋子さんと言うおばさんも人を騙すような感じには見えないから信じる事にしたのだ。

石間公園から秋子さんの乗って来たワゴン車で約五分。荷台に乗せた無口君の自転車を下ろしながら家に入り、見た目通りな和風の家の和室の客間で美味しいお茶とドラ焼きを食べながら待つ。あたしの隣では姫が座布団にちょこんと座り、おいしそうにドラ焼きを食べていた。そしてその後ろ。青いショートヘアーに、赤いタンクトップ。それに迷彩柄のホットパンツ姿の奴が。どう見てもこの秋空で着るような服装ではない上に、タンクトップがきつそうに見えるほどの巨乳。今にも肩紐が取れてぼろんとおっぱいが剥き出しになりそうだった。

そんな女がなにやらニコニコと笑いながらあたしと姫を交互に見比べている。……なんか、凄く不吉だ。貞操的な意味で。

「お待ちせ」

と、客間の襖を開けて無口君が中に入ってくる。手には自分達の

だろう二人分のお茶が載った盆があった。

一年、二年とずっと一緒のクラスメイト、無口七緒。相手の怒りを買うような行動はまったくしない。と言うよりは、他人に対してまるで干渉しないのが鼻に付くらしく、血気盛んな奴等に絡まれているところを良く見かける。その度にあたしが仲裁してるけれど本人はそのスタンスを変えるつもりはないようだ。担任から話し相手になってやってくれ、なんて頼まれたりするが、それ以前から話掛けてはいるけれど本人がまったくその気になっしてくれなくて中々会話が續かない。が、一応こちらがきちんとした態度で話しかければきちんと言えてくれる奴でもあった。

無口君の私服は初めて見たけれど白のワイシャツにジーンズと、至って普通。人の事は言えないけど髪はこんな田舎町であっても珍しい黒髪で妙に逆立ったりもしない耳が若干隠れる程度の短髪。背は女子の平均よりも若干高いあたしと同じかちよつと小さいくらい。男の平均から見れば小さめだろう。そんな、ともすれば小動物のような見た目の無口君は、釣り目がちな目で睨むように周囲を見るせいで近寄りがたい雰囲気醸し出していた。

学校ではいつも一人でつまらなそうにしているけれど、成績の方は優秀すぎるほど優秀で、一年の時から学年トップを譲った事が無い程だ。そういう意味では同学年で無口君の名前を知らない奴はいないだろう。それだけの頭を持っているのだから周りに、特にあたしに勉強を教えて欲しいものだけど当然そんな提案は足蹴にされてしまう。

「そいつ、何か変な事しなかった？」

自分の分とまだ来ていない秋子さんの分のお茶をテーブルに置きながら聞いてくる。言われて後ろの青い女を見ると、満面の笑みで小さく手を振ってきた。

「ここに来るまでにさんざ胸を揉まれたけど」

「それ以外で」

「特に。常ににやけてるって事くらいかな」

「なら良かった。いつも通りだ」

これでいつも通りなのか、と思いつつも一度振り返ると、また手を振ってきた。まあ悪い奴じゃなさそうだ。

「じゃあ説明を始めようか？ それとも雑談でも？」

「いや、説明してくれ。何がなんだか」

「オーケー。と言っても僕も——」

無口君が言いかけると、襖を開けて今度は秋子さんが入ってくる。何処にでも居るようなおばさんで、後ろの青い女とは違って包み込んでくれるような優しい笑みを浮かべていた。

「僕もあまりよく分からないんだけどね。まあ一つだけ言っておく。この世には魔術と言う物が存在して、その女の子とか、そっちの青いのとかはその魔術で作られた存在だって事だけは疑わずに信じといて」

——あまりにも横柄かつどうでも良さそうな説明の仕方に少しカチンときたけれど、ここで事を荒げては仕方がない。

しかしまあ、何となくそんなじゃないかなとは自分でも予想していた。そうじゃなきゃ小さな女の子が手袋に変身して、その手袋で水が操れるようになる訳がない。

「無口君も……と言うか、後ろの——えっと……」

「俺は一つて言うんだ。コンゴトモヨロシク」

外道か、邪鬼か。良くて鬼女。そんな感じの挨拶をしてくるイチと言う名の女。うーむ、服装もそうだけど口調も男っぽい奴だな。

「イチも姫と同じで——」

「そう。この仕組みを作った奴の話では”シャドウ”って言う名前の使い魔らしい。基本的に悪い奴じゃないんだけどさ」

性格はアレだけど。と付け加えてイチを睨みつける無口君。それからイチは溜息を吐くと、霞のようにその体を消し、今度は無口君の背後にあぐらを掻いた状態で現れた。

「君もその子の使い方、分かってるんだろ？」

「使い方、って言い方が気に食わないけど、まあ分かってるよ」

姫のあたしと同じ黒髪の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「それとこの子の名前は姫だ。お姫様みたいで可愛いだろ？」

ちなみに名付け親はあたしだ。そんな私の言葉に無口君は無表情に、秋子さんは笑顔のまま、イチは大げさに笑みを作りながら肯定した。

「で、何で姫は急にあたしの前に現れたんだ？ 大体一ヶ月前くらいからなんだけど」

「……魔術の事は疑わないの？」

あたしの言葉を遮るように秋子さんが聞いてくる。その問いにあたしは、

「疑ってたら話が進みませんよ」

と、答えた。

「そうね、お利口さん」

ともすれば馬鹿にされたような言い方ではあったけれど、秋子さんの溢れ出る母性と皺だらけの笑顔のせいでまったく嫌味に聞こえない。

「じゃああれか、あたしは魔法使いになったって訳か」

そんな訳で聞いた話をあたしなりにまとめて言ってみると、無口君は何処か怪訝な表情で、そして機嫌悪そうに目を瞑った。

「正確に言うなら魔術師になった訳じゃなくて、超能力者になったんだ」

「違うのか？」

「違う。いいか、魔術っていうのは科学だ。何時間も何日も何年も研究を積み重ねてやっと実用に足る術を作り出せるんだ。それをこな、ぽっと出の特殊能力と一緒にしないでくれ」

明らかに怒っている無口君。あたしが何か変な事を言ったのだろうか。まあ、この態度を見れば言っただろう。

重い空気が押し掛かる中、こほんと咳払いをして無口君が話を続けた。

「とにかく僕の知っている事だけを話すぞ。……あいつはこの町の

地脈を使って結界を作った。その結界の力で桐式のような魔術の魔の字も知らない奴でも使い魔が作れるようになったんだ。いや、勝手に作らされたって感じか。そんな使い魔と主人が僕らを入れてこの町に全部で七人いるらしい。僕はそいつらを見つけ出すのと、その結界を作った張本人を探す為に毎日走り回っている。そんな中で今日は桐式の事を見つけたんだ」

「へえ、七人か。さっきの刀野郎もその一人か？」

「多分。直接会ってないから分らないけど、こんな町中で日本刀振り回してるなんて精神異常者かこいつ等みたいなシャドウのどちらかだろうね」

またも無口君の口から意味不明の言葉が出てくる。魔法だけでも心がときめいて——もとい、頭が一杯なのにシャドウだと。これ以上あたしの心をワクワク——もとい、あたしの頭に情報を流し込もうとしてくるのだろうか。正直平静を保っているだけで一杯一杯だ。ちよつとでも気を緩めると頬が綻んでしまう。

「……なんかニヤニヤしてるけど大丈夫？」

「は？ 何言ってるんだ無口君。で、シャドウってなんだ？ さっきもペルソナとか言ってたし。あれか、あのゲームみたいなもんか」

「僕は3と4しかやった事ないけどと、話がずれた。……僕もこの結界を作った奴がべらべらと喋ってた事を聞いただけだから良く分からないけど、そいつが僕の事をペルソナ、この青いののことをシャドウって呼んだからそう呼んだだけだけ。意味はまったく分からないよ」

ならスタンドでも良さそうな気がするけど、まあ自分の意思で姫が動く訳じゃないし、ペルソナとシャドウって事で良いか。

「そっか、そう言う事か。……なるほどな——」

「ん？」

「や、こっちの話。まあ、つまり無口君はその結界とやらを作った奴を探しつつ、あたしみたいなのも探してるって事なんだ？」

「そう。言った事をそのまま繰り返し返したような結論を言ってくれて

ありがとう」

あたしなりに理解してる、って事を伝えたかったのだけど、それを知っているのかそれとも知った上でなのか、皮肉が返ってくる。

「どういたしまして。いつかぶっ飛ばすからな」

そんな皮肉にストレートに返事をしてみると、無口君が少しだけ楽しそうに笑ったように見えた。ううむ、今までまともに話をした事が無かったけど、ひょっとしたら相当なひねくれ者なのかもしれない。これはいじりがいがありそうだ。

「さて、僕の方からは特に話す事もないけど、質問は？」

と、無口君が学校の先生のように聞いてくる。どうにも偉そうなその態度はいつもムクチな無口君の印象とはかけ離れていて面白いように腹が立つようで複雑だ。

とは言えここは質問の場。分からない事を分からないままにしていると後で痛い目を見るのはどんなRPGでも同じだ。あたしは説明書はよく読んでからゲームをするタイプなのだ。

「その結果を作った奴の目的ってなんなんだ？　まさか人にスタンドをくっつけて終わりって訳じゃないだろ？」

「スタンドじゃなくて……まあいいや。どうせあいつが勝手に決めただけだろうし。……あいつは色の付いた魔力を集めようとしてるみたいだ。それで何をしようとしてるのかは分からないけど」

「色の付いた魔力？」

またしてもあたしの心をくすぐる魅惑のキーワードが出てきたじゃないか。

「そう。魔術師が魔術を使うには魔力が必要なんだ。それは漫画とかでも同じだね。その魔力なんだけど、普通は大気や大地から体の中に取り入れて自分の力にするんだ。でもそう言った自然界にある魔力って言うのは、基本的には着色されていない、透明な魔力なんだよ。言ってみればミネラルウォーター。美味しいって言えば美味しいけど、味が付いていないから物足りない。で、それを体の中に取り入れて初めてその魔術師特有の色が付けられるんだ。無着色の



魔力と比べると色の付いた魔力って言うのは力の密度が濃くなるし、扱いやすくなる。つまり、あいつはこの土地の地脈に流れる無着色の魔力をペルソナ、つまり僕らの体を通してシャドウ、つまり姫ちゃんやこの青いのを作り出し、そのシャドウ同士が戦って飛び散る色の付いた魔力を一箇所に集める為のフィールド——結界を作り出したんだ。もちろん戦うだけじゃなくてシャドウを倒せばそれはそのまま高濃度の魔力になって集まるから——」

無口君の長い演説。しかし夏場の校庭で行われる校長先生のありがた迷惑な話とは違って垂涎もの過ぎる。いや、垂涎もの過ぎて——「なんでそんな嬉しそうな顔してるんだ？」  
完全に顔が綻んでしまっていたらしい。

「ははは、何を隠そうあたしはいつか剣と魔法の世界に行きたいと思ってたんだ」

「ああ……つまり今この状況が嬉しくてたまらないって事か」  
中々鋭い無口君は、しかし呆れたように肩を竦めた。なんだよ、ゲームが好きな女は駄目なのかよ。

「……他に質問は？」

「えっと、秋子さんはどういう人なのさ？ 無口君のお母さん？」  
にしては息子と違って取っつきやすそうな雰囲気纏っている秋子さん。顔も似てないし、どうにも親子と言う感じではなかった。その予想は正しかったらしく、

「この人はパレット——魔術師とか超能力者達を保護する組織なんだけど、そこから今回の騒動を監督する為に派遣された人だよ」

ずず、と落ち着いた様子で自分のお茶を飲んでいる秋子さんは、静かに無口君の話を聞きながら頷いた。

「どうも初めまして。冬畑秋子です、よろしくね」

改めて自己紹介をしてきた秋子さん。丁寧な物腰に思わずあたしも姿勢を正してどうも、と頭を下げた。

「今なちゃんから説明された通り、私はこの騒動を監督する為に派遣されたの。もし町の住民が大勢巻き込まれるような事になれば、

私の意思でパレットの実働部隊を派遣できるのだけれど、まだ被害は少ないし、パレットも静観する構えでいるから事の収拾は私達でするしかないのよ。だから紅葉ちゃんにもお手伝いを――」

「秋子さん」

あたしに協力を仰ごうとした秋子さんの言葉が無口君はぴしゃりと止めた。応援が来ないのならあたしらのようなのでどうにかするしかないのだから、協力するのはやぶさかではないのだけれど。

「桐式は魔術師じゃないし、この件には巻き込まれただけです。だから協力なんてさせる訳にはいいかないですよ」

「……それもそうねえ」

無口君に諭されて秋子さんがうーんと唸る。全部で七人いるスタンド――郷に入っては郷に従え、無口君の言う通りの呼称に改めよう――ペルソナとシャドウがどれだけの能力と、どんな悪事を働くかは分からない。なら、巻き込まれた身だとしても当事者であるあたしも――

「手伝うぜ？ 楽しそうだしさ」

ぱっと明るい笑顔になる秋子さん。しかし逆に無口君は表情を顰めるどころか、明らかに怒った表情を見せた。

「楽しそうってなんだよ。今日だけでももう人が一人――」

叫び出しそうな勢いで言葉を吐き出す無口君。しかしその言葉を遮ったのは、客間の襖を開けて入ってきた人物の登場だった。

「おお、遅れてすまん七緒。ジバゲが長引いてしまったわい」

現れたのは六十を超えるかと言うおじいさんだった。しかし小柄ながらも精悍な体つきはトレーニングを積んでいる為にその若者との力比べにも負けないし、双眸は長く生きてきた経験を物語るように鋭い。頭は真っ白だけれど薄いわけではなく、むしろフサフサだ。口の周りに生やした髭がチャームポイントらしく、毎日の手入れは欠かさないらしい。

なんでそんな事を知っているかと言うと、  
「ゲンさん！ なんでここにいるんだよ？」

知り合いだったからだった。そうか、今日はジバゲの集会だったか。ちなみにジバゲと言うのは、”ジジババがゲームをする会”の略であり、ゲンさんはその会長であり、あたしはそのおじいさん、おばあさんにゲームを教えに行く講師だった。さらに言うところ、ジバゲは単純に自分達が楽しむ為にゲームをするだけではなく、孫やひ孫が遊びに来た時に自分達がゲームの相手を出るように練習する為の場でもある。うむむ、いつもゲンさんって呼んでたから忘れてたけど、そう言えば無口源太郎と言う名前だったか。となればゲンさんは無口君のお祖父さんにあたるのだろうか。

「おや、紅葉さんかい。……と言う事は」

「うん、そうだよ。それにしてもさ、人が一人死んでるんだからもつと早く来れるようにしてよ」

「ああ……確かにな。すまんかったのう」

苦笑を浮かべながら気まずそうにするゲンさん。しかし——人が死んだ？ それは、どういう——

「……桐式、お前があのだ野郎と戦う前に、そいつは一人切り殺してたんだよ。これが普通の通り魔なら警察沙汰になるだろうけど、魔術師関連になるとそうも行かない。言っとくけど、この騒動で桐式がペルソナかシャドウの誰かに殺される事になったら、死体は家に帰れずにパレットで処理されて世間的には行方不明って扱いにされるぜ？ 二度と、世間に桐式紅葉と言う人間は帰って来れなくなるんだよ」

「なん……でだよ」

「魔術師の事が世間一般に知られないようにする為よ」

あたしの問いの答えは無口君じゃなく、秋子さんが受け継いで返ってくる。

「流石に中世ヨーロッパのような魔女裁判は行われないだろうけれど、それでも魔術師の事が知られてしまうと面倒な事になるのは分かりきっているからね。それに魔術師自体が秘匿的な集団だから、自分から進んで自分達の存在を公表しようとは思わないのよ。だから

ら、魔術関連の事件で起きた被害はパレットによって揉み消されて闇に葬られる。……ななちゃんが言った通りに、もし紅葉ちゃんが殺されてしまったらあたしはパレットの人間として、あなたの死体を処分しなければならなくなるの」

秋子さんは先程まで見せていた優しい笑みを浮かべず、無表情に伝えてきた。今まで纏っていた雰囲気は優しげだっただけに、その真実しか言っていないような威圧感さえ放つ顔で告げる言葉は酷くあたしを不安定にさせる。しかし――

「無口君はそんな危ない事に首を突っ込んでるんだろ？」

あたしと同じ歳で、あたし達のような一般人の知らない世界で、命の危機を知りながら一人で戦う。

「――そんな事を知ってあたしが放っておく訳ないじゃないか」

「……君は馬鹿なのか？」

真っ直ぐに嫌味を言われた。しかし怯む訳が無い。

「そりゃ万年学年トップの成績優秀者から見れば馬鹿だろうけどさ。

……でも困ってる奴を見放すような馬鹿じゃないとは思ってるよ」

思い返せば無口君はいつも一人だ。一人がいけない訳じゃないけど、助けてくれる人がいるのなら助けを求めるのも悪い事じゃない。そして今がその時だ。

「言ってくれば手伝いするぜ？　こう見えても面倒見は良いんだ」

「いらないよ。……この話はこれで終わり。ご飯にしよう」

話は終わり、と言うよりは話を続けたくないと言うような様子で無口君が立ち上がる。ゲンさんも秋子さんもやれやれといった顔で苦笑を浮かべ、

「紅葉さん、もう遅いし今日はうちで晩御飯でも食べていくかい？　うなぎでも取ろう」

「うなぎ！　食べる食べる！」

ゲンさんの提案を一も二もなく受け入れる。孫を可愛がるおじいさんに遠慮をすると逆に落ち込む事をジバゲの会で知っているから、遠慮なんてしないのだ。それにうなぎ好きだし。

「……図々しい奴」

と言う無口君の言葉も聞こえてきたけど無視をしとこう。さてさて、家に連絡でも入れておくか。

「腹いっぱいだー」

と、イチが喚く。ぼすんと無口君のベッドに座ると、そのまま背中から倒れた。

ゲンさんの奢りでうなぎを食べ終えてみると時間は十時を過ぎていた。もう帰るか泊まっていくかを迫られる時間だろうけど、話の続きが終わっていない為に嫌がる無口君を無視してあたしは無口君の部屋へ押し入ってきたのだ。

「それにしても無口君、結構喋る奴だな」

「……あだ名通りにムクチって訳じゃないよ。学校じゃ喋る事がないから喋らないだけだ」

「つまんなくないか、それ」

「つまるつまらないは個人の自由だ。どうでも良いけど早く帰りなよ、送ってくから」

「ふうん」

と唸ってから座布団を引っ張ってきてその上に座ろうと思ったけれど、座布団が一つしかないから姫に譲った。

「……一人死んだって、どう言う事だ？」

制服の上着を脱いでブラウス姿になりながら畳の上にあぐらを掻いて座りながらさっき聞けなかった事を聞いてみる。

「言葉の通りだよ。君らが戦ったところから少し離れた場所で男の人が切り殺されてた」

「つまり一般人に被害が出たって事だろ？ それならパレットってところから応援が来るんじゃないのか？」

「……来ないんだよ」

「来ない？」

「うん」

言いながら無口君が大きなテレビの電源をリモコンで点けた。やっていたのはニュース番組。一ヶ月前に起きた自宅で刺し殺された男性の事件だった。どうにも刃物——それも長物を使った事件らしい。犠牲者の名前は北利道。聞いた事は無いけれどこの町で起きた事件だ。しかし改めて長物と聞くとさっきの刀野郎を思い出すけど——まさかな。

そのニュースを見て無口君にも思うところがあったのか、じっと注意深くそのニュースを見ていた。とは言えそれ以外で人が死んだ——刀で切られた、なんて言う報道はやっていない。そのニュースが終わると無口君はあたしに視線を向けた。

「パレットって言うのはパンドラの箱は開けない。箱の隅にあるほんの少しの希望の為に、多くの災いが出るような物を認めない。でもね、逆に言うて災いと希望の比率が逆になるんだったら彼らは喜んでその箱を開けるんだ。大きな収穫があるのなら、ほんの少しの犠牲は厭わないんだよ」

淡々と言う無口君のその言葉は嘘を言っているような感じではなかった。それは、つまり——

「パレットって言うのはこの騒動で出来る結果に期待してる訳だ」

「そう言う事。秋子さんも教えてくれないけど、集まった魔力であいつが何をしようとしてるかは知ってると思うんだ。そしてその利便性が証明できれば、この騒動を起した事も不問にして利用しようとしてる。そういう組織なんだよ、パレットは」

「秋子さんもそのつもりなのか？」

「知らない。けど、秋子さんはあくまで監督官だから普通はパレットにも属していない僕に事件の調査は依頼しない。魔術すら知らない桐式になんか協力を頼もうともしないよ。だから——」

秋子さんは信用して良いんじゃないか、と視線を泳がせながら呟いた。どうにも恥ずかしそうなその動作は、あまりこういう会話に慣れていないようにも見えた。

しかしそれはそれで、やはり人手が足りないように思える。少なくとも人を平気で殺して、その上であたしまで殺そうとした相手を無口君一人でどうにかしようとするのは危険極まりないだろう。

「……桐式、お前は変な事しなくて良いからな」

「変な事って？」

「分かってるだろ。……いいか、さっきも言った通り僕はパレットにも入っていないような魔術師だ。正直言ってまともな魔術なんか使えないよ。桐式、ナイフを持ったチンピラに守られてお前は安心できるか？」

自分の力量を包み隠さず、でも恥ずかしがる事無く伝えてくる。言いたい事は分かった。つまり、

「無口君はあたしの事を守ろうとしてる訳だ。でも守れないから、余計な事はするなと」

そう言う事だろう。さっきも平然とあたしを家まで送ると言っていたし、割と自分が男である事を自覚して女であるあたしを守ろうとしているらしい。普段は物を言わないからどんな人物かは分からないけれど、無口君はきつと真面目で良い奴なんだろうと思う。

「どうとでも言えよ。とにかく、余計な事はするなよ」

無口君はそれだけ言うといふ顔と顔を背けてテレビに体を向けた。それから改めて部屋の中を見渡してみると、プラモデルのようなものはないけれど漫画とかゲーム機なんか色々置いてある。さっきまで話していて思ったけれど、無口君は結構漫画とかが好きなのかも知れない。そんな中ゲームソフトが並ぶ棚に新作ソフトが並んでいるのに気付く。むむ、あれはバイト代が出たら買おうとしてる奴じゃないか。

「なあ無口君」

「なんだ？」

「お泊りオーケイ？」

「……客室を用意するよ」

「そこってゲーム出来る？」

「テレビはあるけど……？」

あたしの言わんとする事に気付いたのか、首だけをあたしに向けて振り返る。

「なあなあなちゃん、そのゲームやらしてくれよ」

「は？」

「それそれ」

と、さっき見たソフトを指差した。最大二人で出来るアクションゲームでつい一昨日発売されたばかりの新作だ。むう、と唸ってあたしが指差した先を見詰める無口君。

「泊まるって、もしかして徹夜でゲームでもする気か？」

「そだけど」

「……これからやろうと思ってたんだけど」

「じゃあ一緒にやろうぜ！」

言ったのは、さっきまでベッドの上で寝転がっていたイチだった。

「俺もやりたかったんだよ。でも七緒の奴が調査に行くからって言ってさ、やらせてくれなかったんだぜ！」

青髪をぶんぶん揺らしながらベッドから飛び降りてあたしに詰め寄ってくるイチ。何かいやな予感がするんですが。

「初めての共同作業だっぜ！」

ぱっとあたしに向けて飛び込んでくるイチ。その勢いを止められなくて背中から倒れてしまった。

「や、やめろ！」

「いいじゃんいいじゃん！」

「何がいいんだよ！ って言うかやんのはゲームだろ！」

そう言うと、そうだったと言ってイチが離れていった。服を正しながら体を起すと姫が驚いたように目を丸くしながらあたし達を見ていた。

「はあ……まあいいや、やらせてくれよ、ななちゃん」

「ななちゃん言うな。まあやらせるのは構わないけど、イチ、てめーはだめだ」



「なんでだよ！」

「昨日も僕が寝てる間ずっとやってたろ。勝手にセーブデータまで作って」

「あ、ばれてら」

ぽりぽりと自分の青髪を掻き、ちえ、と不満そうにするイチ。それを見てから無口君は手馴れた手付きでゲームの電源を入れた。

「……桐式っていつもこうやって誰かの家に泊まっていったりするの？」

「まあなあ。いつもは女友達のところだから、男の家は初めてだよ」「ふうん。連絡は？」

「してある。男の家に泊まるぜ、ってメールしたら、明日はお赤飯だね、って帰ってきた」

「……誤解が生まれるから帰れよ」

「そこは今日は帰さないぜとでも言うのが男だろ」

「帰れよ」

「明日も帰らないぜ、ってメールしといた」

「帰れよ！」

怒鳴る無口君。むはは、やっぱりこういう輩はからかうと楽しいぜ。そうこうしているとゲームが始まる。帰れと言っておいてちゃんとコントローラーを渡してくれるあたり無口君は本当に良い奴だな。ゲームが始まる前に説明書を読んで操作方法を確かめる。体験版をやったから大抵は分かるけど、やっぱり製品版では何かが追加されたりするするものだ。そんな事をしていてと無口君は一人でゲームを始めてしまい、とりあえずずっと操作方法を憶えたところで協力プレイを始める事にした。よし、あたしはホンダムをしよう。

無口君は……あたしが体験版でやったところまでしか進んでないあたりまだ始めたばかりなのだろうけど、あまり上手いとは言えなかった。ふむ、これは腕の見せ所だねあー！

「い、イチ！　なんであたしの乳を揉んでんだ！」

あたしのブラウスのボタンまで外して中に手を滑り込ませてくる

イチ。そのまま思うままに揉みしだかれる。ちくしょう、この家に来る前にも揉まれたけど、直接触るなんて反則だろ……！

「いや、手持ち豚さんだったんで」

「それをいうなら手持ち無沙汰……や、やめろ！ そんなところ摘まむな！」

嫌らしい手付きについて観念し、ゲームを中断して手を払い除けた。

「いーじゃんかよー。暇なんだよー」

「だったら姫と遊んでろ！」

「ククク……いいのかよ……俺がやるとなったら……遊びじゃすまなくなる……！」

そう言ってイチの視線は鋭く姫に向いた。ぞわっとするようなその視線は受けて姫は逃げるように文字通り姿を消す。

「あーあ、逃げちった。この責任は主人が取らないとさー！」

言って伸ばしてきた手に合わせてクロスカウンター。イチの顔面にめり込んだ拳は見事なクリーンヒットと言わざるを得ない。

「……前が見えねえ」

そのまま寝てろ。

「……なんなんだこいつ」

「知らないよ」

「それにしても、何で姫……シャドウってのはこうやって姿を消せるんだ？ そういう魔法を標準装備なのか？」

「ああ……シャドウは言ってみれば魔力の塊だから。魔力は元々目に見えないから、そうやって煙みたいになって僕達の周りで漂ってるらしい。で、必要な時は魔力で体を作って現れると」

「便利な体してんなー」

「これ自体嘘みたいな能力なんだけどね。それをシャドウ全員に使えるようにしてるんだから、あいつは魔術師としては一級なんだろうな。あと、魔法と魔術は違うからな」

「どう違うんだよ」

言って、ブラウスのボタンを止めながら中断していたゲームを再開する。無口君がポーズで止めておいてくれたらしく、さっき止めたところから続けられた。

「魔術は魔を使う術。色んな道具とか儀式を使う物を言う。魔法はそれ自体が奇跡のようなものだから道具も儀式も必要ない。超能力者の使う能力は魔法だ。言ってみればシャドウは魔法使いでシャドウが使う力が魔法。シャドウを作り出したこの結界を作った奴は魔術師で、その結界は魔術だ」

淡々と説明しつつ、ゲームをする無口君。あ、体力がピンチでやんの。

「うーむ、良くわかんないけど、まあその内覚える」

「覚えなくてもいいよ、桐式には関係ないんだから」

「なんでだよ。友達がやってる事くらい覚えたっていいだろ」

瞬間、無口君の動きがぴたりと止まった。

「友……達？」

「そう。違うのか？」

「……さあ、どうなんだろうね」

それきり口を開かず、ゲームに没頭する無口君。あたしもゲームを楽しむ事にして、今日はもう徹夜する勢いでやり続けた。しかしまあ、イチの奴は何度も何度もしつこくしつこくあたしの胸を揉みに来るもんだから、最後は首をきゅっと絞めてやったらそれで本当に大人しくなった。なるほど、こいつ等にもそういうのは効くのか。なるほどなるほど。

## 第一章 桐式紅葉 その三

黒のスーツに赤い染みを付けた男がまばらに立つ街灯を避けながら夜の道を歩く。時折人の気配を感じると物陰に身を隠し、自身の体から生やしたように生み出した日本刀に手を掛ける。その人影が自分に気付かずに通り過ぎる事を確認すると、男は日本刀を体の中に埋め込んで再度歩き出した。

そんな事を繰り返しながら男は小さな古いアパートに辿り着くと、その身を魔力の霧に変えて明りの灯っている二階の窓から中に入り込んだ。そこには、四十も後半といった女が誰かの帰りを待つように、六畳一間の部屋の中から玄関の扉を睨むようにして見ていた。

「……夕子」

男が部屋の中で、女の背後で自身の肉体を象ると、その女の名前を呼ぶ。

「修一さん！ ……よかった、何処に行ったのかと……」

修一と言う名のシャドウに詰め寄る夕子。細身の体に黒いスーツの修一は、同じように細い体の夕子を抱きとめた。スーツに付いた血は今は無い。

「夕子から離れると体を霧に出来なくなるんだ。だから帰りが遅くなった」

「なら一緒に居てくれればいいのに……」

「そう言う訳にも行かないんだよ。夕子を狙う輩は多いから」

夕子を抱き締める修一の顔は――言葉とは裏腹に醜悪に歪んだ笑みを浮かべていた。その表情に夕子は気付いていない。

「そう……ありがとう。お腹減ったでしょう？ ご飯にしましょう」

「……また僕の分も作ってくれたのかい？ 僕は食事をしなくても

――」

「良いじゃない。もうあたしのご飯を食べてくれるのはあなたくらいしかないんだから」

修一から離れ、歳を重ねる毎に刻まれる皺が目立つ顔に寂しげな笑顔を浮かばせる。そのまま立ち上がり、玄関と部屋の間にある小さな台所で食事の準備を始めた。

慣れた手付きで、何十何百としてきた動作を繰り返す。エプロンを着けたその姿は夕子が若ければそれだけで魅力に満ちたものなのだろう。いや、歳を重ねたからと言って、その魅力が薄れたようには見えない。しかし――

「……チッ」

修一は、その後姿に小さく舌を打った。

## ◇Side 桐式紅葉

「でさー、あいつらの頭を振ったあたしの態度が気に食わないとかでさ、十人くらい引き連れてあたしん所に来た訳よ。十人だぜ、十人。女一人にどれだけビビってんだよって話だよなー」

「へえ。三十人って聞いたけど」

「あー、なんか誇張されてそんな話になってるよな。でもさ、流石に三十人相手なんて無理だぜ」

七緒相手に畳の上でぐったりとうつ伏せになりながら話す。言葉は所々間延びしていて自分でも眠さが限界だと言うのが分かる。て言うかねみー。

「で、十人相手に無双して停学食らった訳だ」

そんな七緒の言葉を、あたしは夢うつつで聞いていた。もう少しで楽になれる。そう思った瞬間、後頭部に軽い衝撃が走って現実に引き戻された。顔を上げれば七緒が眠そうにしながら手刀を構えているのが見える。

一通りゲームをしてからあたし達はあたし達の話をしよう、と言う事になった。でも自分の話をするのが好きじゃないのか、七緒はあまり話をせずあたしばかりが話をし続けるのが続いていると、時間はもう朝の四時。そろそろ寝ようぜ、なんて言ってみるけど、こ

うなったら徹夜だろ、と言うイチの提案でそのまま話し続ける。しかしその言いだしっぺが逸早く七緒のベッドの上で寝てるのが腹立つ。そんなこんなで始まった不眠雑談会。どちらかが寝そうになつたら起すと言う事で、今はあたしがその制裁を食らったらしい。

「あー、何処まで話したっけ。カレー？ え？ カレー？」

イチが寝言でカレーが食いたいと呟いた。その所為で頭の中がカレーで一杯になる。

「違うよ。十人相手に無双したってとこ」

「あーあー。カレーか……いや、無双か。まあそんなとこ。我ながら無我夢中で木刀振り回してたけど、終わってみれば軽い擦り傷以外は無傷だった訳だから幸運なのか、あいつらが弱すぎたのか……まああいつらが喧嘩売ってきて、あたしは逃げられる状況じゃなかったって説明して、なんとか停学一週間で許してもらった訳。あたしが先生方に受けが良かったってのもあるけどさ。七緒なら問答無用で一ヶ月くらい停学食らったろうなー」

あっはっはー、と笑うとまたスイマーが泳いでくる。駄目だ、あたしは泳げないんだよ。助けてくれー……ぐう。

「寝るな」

「あびっ」

後頭部に衝撃が走り、あたしを担いで泳ぐスイマーが水没している。顔を上げて時計を見ると七時だった。

「……ここから学校までどれ位で着く？」

「自転車で二十分。歩いて一時間とちよつと」

「……今日はサボリだな」

「元々そのつもりだよ」

言って、七緒が立ち上がった。そのままあたしの体を跨いで自分のベッドまで歩いていくと、その上のイチを抱えて畳の上に落とした。ずどん、と受身も取っていないイチの体が重い音を立てて落ちる。顔と腹を打ったイチが悶絶していると、

「じゃ、おやすみ」

七緒はそのままベッドにもぐりこんだ。それを見てあたしもベッドのところまで歩く。

「寝るなー、寝たら死ぬぞー！」

ガクガクと布団を被った七緒を揺さぶるが起きない。

「寝るな七緒！ 寝るんならあたしも寝るぞ！」

それでも起きないのだから、仕方ないので七緒の上に覆いかぶさるようにしてベッドに横になった。布団の下から、うぐう、と言うくぐもった声が聞こえてくる。

「退くんだ。そこを退くんだ桐式」

「もう無理」

「……」

七緒が起き上がると、自然あたしの体がベッドから転げ落ちる。するとその下に居たイチの上に落ちた。良いクッションだ。イチは背中を打って悶絶してるけど。

「眠い」

「あたしもだ」

「桐式は五分間隔で三秒寝たろ」

「んなの寝た内に入るかよ。それにそれを言うなら七緒は三十分前に一分くらい寝てた」

「寝てない。って言うか名前で呼ぶな、馴れ馴れしい」

「んだよ、友達だろ」

びたり、と七緒の動きが止まる。どうにも友達と言う言葉に反応したようだ。イチがさんざん友達が居ないとか言ってたからその響きは新鮮なんだろう。

「……なあ、腹減らないか」

照れ隠しのように、眠たそうに細めてる目であたしを見ながら七緒が聞いてくる。

「んー、それより眠いけどなあ」

「寝させないなら食って誤魔化させろ」

「変な日本語だ。あたしゃこれでも国語は平均点以上取れてるんだ

ぜ」

「僕はいつも九十五点以上だよ」

嫌味を言いながらベッドから降りて上着を手に部屋の外へ出て行く七緒。それに続いて悶絶しつつも眠っていたイチを放り、ブレザーを着てその後続いた。

七緒が廊下を歩いて行く。昨日居た客間の横を通り、玄関へ。どうやら外に行くらしい。靴を履いて玄関の扉に手を掛けると、

「学校か？ 七緒」

通路の向こうから眠たそうなゲンさんが声を掛けてきた。しかし七緒の服装を見るなり、ああ、と声を漏らし、

「今日の朝食の用意はいららないな。いってらっしゃい、七緒、紅葉さん」

そう言って顔を引っ込めた。行ってきましたと言って七緒が外に出て、お邪魔しましたと言ってあたしも後に続く。

外は寒く、一瞬体が震えるほどだった。太陽は出ているけどそれでも寒い。体を小さく竦めながら歩いて門を抜けると、今度は温かい風が吹く。思わずその方向を見てみると、そこには緑のジャージを来たお姉さんが走ってきていた。そう、走っていた。ジョギングなんて速さじゃない。

七緒が小さく会釈をすると、そのお姉さんも会釈をしながら通り過ぎ——止まった。

「……おはよう。その人は彼女？」

すげえ、この人あの速さで走ってるのに息切れ一つしてねえ。

「あ、いえ……その、友達です」

そしてどうにも齒切れが悪い七緒。やっぱり友達と言う言葉に抵抗があるようだった。

「へえ。……今の時間から学校に間に合うのかい？」

「いや……」

ははーん、と声を漏らして微笑するお姉さん。それからなるほどね、と呟き、



「若いのはいいね」

と言って片手を挙げて走り去っていった。

「知り合い？」

「いや、ちょっと前からこの辺りをしょっちゅう走ってる人。話したことも無かったよ」

それだけ言うで行こう、と言ってお姉さんの走っていった方とは逆の方向に歩く。ふと振り返るとお姉さんの後姿が道を曲がっていくのが見え、

「おお……」

瞬間、さっきまで吹いていた暖かい風が止んで七緒と二人で体を震わせた。

ぶるぶると震えながら七緒の着ている暖かそうな上着が目に入り

「あ」

ぱっと、思い出した。

「ん？」

あたしの声に気付いて七緒が立ち止まり、振り返る。

「昨日、公園にあたしの鞆置いてきちゃった。あそこに着替えが入ってるんだよ……」

「……じゃあ取りに行くか？」

「悪いね」

言って、歩みを再開する。方向的には七緒が向かっていた先と公園は同じだった。そう言えば朝食と言っていたけど――

「なあ七緒。七緒の両親ってどうしてるんだ？」

「ん……母さんは僕が小さい頃に病気で亡くなったよ。父さんは――」

「あ……」

我ながら迂闊だったと反省。しかし七緒の口からは思いもかけない言葉が続いた。

「結構驚かれるんだけどね、あの爺さんが僕の父さんだ」

「はえ？ ゲンさんの事？」

「そうそう」

「ゲンさんって確か六十超えてたよな……」

「うん。父さん、三回結婚しててね。僕も含めて七人兄弟でね、僕と母親が同じ兄弟は二人だけ」

「はあ……ちなみにお母さんの歳は？」

「僕を産んだ時は二十七だった」

「それはまあ」

随分お盛んな。しかし分からないでもない。ゲンさんはジバゲでもモテモテなのだ。実際優しい人だし、実年齢よりも若く見えるし元気だし、二十近く離れた歳の差でも惚れ込んでしまう人だって多いだろう。流石にあたしはもう少し若い方が良くいけど。

それからは口が滑らかになった七緒から少しずつ身の上話を聞きます。初めは戸惑うようにしながらも、ちよつとずつ話してくれる。ゲンさんの奥さんは三人が三人とも不慮の事故や病気で早くに亡くしてしまつたらしい。お墓はきちんと作られ、ゲンさんは自分の子供達と一緒に毎年墓参りに行っていて、今でも愛しているんだとか。子供の目から見てもそう見えるのだから、きっと本人の心情は今も昔も変わらずに自分の妻に愛を注いでいるんだろう。

そんな話をする七緒は、どこか寂しそうだった。きっと母親の愛に飢えてるんだろう。小さい頃に亡くしてしまったのなら尚更だ。

「そう言えば桐式の両親は？ 確か父親が警察官だって聞いた事あるけど」

「うん？ そうそう。お父さんが警官で、お母さんが元巫女さん。今でもアツアツで見てるこっちが恥ずかしくなるよ」

「へえ。警察の娘が不良ってのも難儀だな」

「そうか？ あたしは間違つた事はしてないし、した事はない。まあ十人をのした時は流石にやりすぎだつて怒られたけど、無事でよかったって泣きながら抱き締めてくれたぜ」

「……いい両親なんだな」

「まな。自慢の親だ」

本人の前じゃ絶対にそんな事言えないけど、と心の中で付け足す。  
「今度遊びに来いよ。親に会わせてやる。その後一緒にゲームやろうぜ」

そんな誘いに七緒はあたしの前で歩きながら振り返る事無く、

「遠慮しとくよ」

と、片手を挙げて軽く振りながら気恥ずかしそうに――あたしにはそう見えた――断った。まあ、いつか遊びに連れてきてやろう。何気に話をして面白い奴だし。

そんなこんなで二人でとぼとぼと歩いていると石間公園に辿り着いた。まだ登校時間中だから自転車や歩きで学校に向かう連中の姿がまばらに見える。そんなあたしも制服姿だから登校中に見えるだろうけれど、これからサボりなのだ。さて、サボって何をしよう。

あ、そう言えば間違った事してないとか言っておきながら今思いつき間違った事してるな。はっはっは。

「それはそうとなちゃん」

「ななちゃんって言うな。で、何？」

「七緒って結構学校休むよな」

「ん……まあそれなりに」

「あたしもそこそこ学校休むんだよ。もちろんサボりだけど。でさ、回りの連中に聞くとあたしと七緒の休みの周期が似てるらしくてさ、付き合ってるんじゃないかって疑われた事があったんだ。でもそんな訳じゃないよな。じゃあなんであたしらの休みが被ると思う？」

付き合ってる、と言う言葉に一瞬怯んだ様子を見せた七緒。なんだ、嫌なのか、失礼な奴だ。それから少し考えるように首を捻ると、

「ゲームの発売日？」

「ファイナルアンサー？」

みのさん降臨。

「ファイナルアンサー」

「……………正解」

あたしの言葉を聞いて七緒が黙る。少しの間の沈黙。何か気に障る事でも言ってしまったかと思ってフォローを考えていると、

「……ぷ……くく……」

と言う声と肩を震わせている七緒に気付く。なんだ、七緒も笑うのか。そんな事を考え、釣られるようにあたしも笑ってしまうのだった。



吉野家。牛丼の店。安くてうまし。公園で無事に鞆を見つけ、草陰でささっと着替えてから家路に着く。家路と行っても七緒の家だけ。その道中にあった吉野家で朝食にする事にした。そんな牛丼の店でカレーを頼む七緒。なんか食べたくなってしまったんだとか。あたしは豚丼だ。そう言えば普通豚丼と言うと焼いた肉をご飯に乗っけるらしい。吉野家のお陰で煮込んだ肉を乗せるのが豚丼だと思うようになってしまった。

「ところで、イチは連れてこなくていいのか？ それとも姫みたいに姿を消してるだけ？」

「ずず、と一緒に頼んだみそ汁を啜りつつ聞いてみると、

「いや、家に置いてきた。シャドウはある程度ペルソナから距離が離れると体を霧に変えられなくなるんだとさ。姫ちゃんからそう言うの聞いてないの？」

「あ……姫はさ、喋れないんだ」

「え？」

「いや、紙に字を書いてるのは出来るんだけど、喋れないから中々……ね」

「そうなんだ。……秋子さんはテレパシーが出来るらしいけど、一度秋子さんを通して話してみたら？」

「テレパシー？」

頭の中で話すと言う、漫画とかで悪の総大将がよくやるあれだろ

うか。

「そう。秋子さんは元々医者で、治療の為に魔術を習い始めたんだって。で、言葉を喋れない人の治療をする事もあって――」

「それでテレパシーを習ったと。へえ、それなら姫ときちんと話せるかな」

「自分を介して当人同士を話させる事も出来るって言ってたし、大丈夫なんじゃないかな。でも秋子さんには話が聞かれるよ」

「それは仕方ないさ。話が出来んならそれでいい」

言いながら頬が緩んでいるのが自分でも分かった。姫とは一度、じっくりと話をしたいと思っていたんだ。多分そうしなきゃならないと言うのを直感的に感じていた。そうでなければ姫があんな姿で私の前に現れる筈が無い。

そうと決まれば、と七緒が携帯を取り出して電話を掛けた。父さん、と言う言葉が出てきたから――あまり実感が沸かないけど――ゲンさんに掛けているんだろう。暫く話をして電話を切ると、カレーを食べる手を再開させる。

「秋子さん、今朝方ご飯を作って家に帰ったってさ」

「秋子さんがご飯作ってんの？」

「いや、時々ね。二ヶ月前に家政婦さんが辞めちゃったから今美味しいご飯を作る人がいないんだ。これなら外に出ないで家で待つてれば良かった」

「そんなに美味しいのか？」

「少なくともこれよりは」

と、スプーンでカレーを差す七緒。うん、分かっているからそんな目であたしらを見ないでくれ店員さん。

「秋子さんの家はここから近いからさっさと食べて行こうか」

「お、分かった」

そうと決まれば早食いクイーンと呼ばれたあたしだ。こんなものはぱっと食べて――

「って、早えー！」

隣では七緒がぺろりとカレーを食べていた。

「？ カレーは飲み物だろ？」

自慢げだった。

「どこのデブだよ……」

ごつつあんどすとか言い出しそうな感じだった。待たせるのも悪  
いからあたしもぱっぱと豚丼を食べる。そう言えば姫もお腹減って  
るんじゃないかと小さな声で呼びかけてみたけれど、どうやら寝て  
いるようだった。すみません、と七緒が店員に声を掛けると、あた  
しの分まで代金を払ってくれた。

「ま、今日は奢るよ」

「悪いね。なかなか豪気じゃないか」

「この程度で……？」

この程度……豚丼みそ汁付き三百八十円がこの程度……むむ、も  
しやとも思っただけであんなでかい家に住んでるあたりこやつはお金  
持ちなのか。そんな疑問を口にする前に七緒が席を立つと、それに  
続いて二人で外へ出た。外は相変わらず寒いけど、着替えをしたあ  
たしにはその寒さは無駄無駄無駄。

二人で並んで道を歩く。石間公園から西に離れていくような形で  
秋子さんの家を目指した。

「そう言えばさ、イチが居なくて七緒は大丈夫なのか？」

「大丈夫って、何がさ」

「いや、昨日の刀野郎に襲われたりしたら」

「大丈夫だろ。あいつら、別に身体能力が滅茶苦茶高いとかそう言  
う訳じゃないから。単純に超能力を使えるだけだって言うならいく  
らでも逃げようがある。それにね、僕は――」

七緒がふう、と溜息を吐いて立ち止まると、何か疲れた様子で俯  
く。それから暫くして顔を上げた七緒の口からは、

「イチが嫌いなんだ」

と、辛辣な言葉が零れた。

どうにも姫に対するあたしの感情並みに込み入った事情がありそ

うな七緒とイチ。そんな事が感じられてそれ以上何かを聞ける様子じゃなく、沈黙を保ったまま目当てのアパートに辿り着く。監督官と言うからには相応の家に住んでいそうなものだけど、そこは本当に、普通のアパートだった。

一階の手前から奥に伸びる通路に沿って五つ並ぶ部屋の内の入り口から二番目、一〇二号室の前に立って七緒が扉をノックした。ほんの少しの間を置いて扉が開かれる。

「あら、いらっしやい。どうしたの？」

と、昨日と変わらない秋子さんの優しい笑顔が出迎えた。

「さ、中に入って。寒いでしょう？ ココアを淹れてあげる」

言われるままに中に入る。小さいけれど一人で使うには十分なアパート。台所を抜けて八畳の部屋に案内され、座布団を敷いてテーブルの前に座る。ココアの準備を終えた秋子さんがその前に座った。カップは四人分。秋子さんは自分の分のお茶を用意していて――

「あ、今日はイチは居ないです」

「あらそうなの？ つい居るもんだと思って四人分用意しちゃった」  
姫はまだ寝ているようだけど、今日来た理由は姫だ。ちょっと起きてもらおう。

「姫ー」

何も無い空間に向けて声を掛ける。一回、二回と声を掛けても出てこなかったけれど、四回目でやっと起きたらしく、ぽーっとして眠たそうに目を擦っている姫があたしの横に現れた。どうしたの、と言わんばかりに首を傾げる姿は、一見すれば船を漕いでいるようにも見えた。

「あの、姫は言葉が喋れなくて……で、七緒から秋子さんはテレパシーが使えるって聞いて」

「ああ、なるほど。そう言う事ね。お安い御用よ」

にこっと笑う秋子さん。取り合えず冷めるからと、七緒と姫と三人でココアを飲んでからあたしたちはテレパシーを、初めての対話をする事にしたのだった。

◇Side 無口七緒

テレパシー、念話。自分の考えている、または他人が考えている事を相手、もしくはは自分の頭の中に伝える魔術。単純に世界に働き掛ける術より高度で高難度だけれど、その習得難度に見合った収穫が無いとしてその魔術を習得しようとする魔術師は少ない——と言う話だ。その辺り、僕は良く知らない。

とは言え秋子さんの助けもあって桐式は姫ちゃんとの対話を成功させていた。どんな話をしていたかは僕には分からない。けれど一喜一憂する桐式を見ている限り、僕が割って入っていいような内容ではなさそうだった。

話に夢中な桐式を他所に、秋子さんに目配せをして家の外に出る。さて、ここからあの人の家までは歩いて数分だったと思うけど。

ポケットに手を入れてナイフを持っている事を確認する。しかし相手は長物、ナイフ程度でどうにかなるとは思えないけど——正直、イチの手を借りたいとは思わなかった。寒さを忘れ、これから起るであろう事の対処を考える。一歩間違えれば訪れるのは死だ。

程なくして古いアパートの前に辿り着く。直接来るのは二度目だったか、その二階の端の部屋が目当ての人物の家だった。階段を上り、部屋の前に立つ。ブレードを展開したバタフライナイフを握りながらポケットに手を入れてインターホンを押した。家の中で響く電子音。暫くすると、まるで覗き窓からこちらを伺うような間を置いてから扉が開いた。

「……七緒君？」

現れたのは北夕子さん。二ヶ月前まで僕の家勤めていた家政婦さん。そして二ヶ月前に夫の病気を理由に仕事を辞め、そして一ヶ月前に、その夫を長物で——警察の捜査では刀と言われている——殺された人だった。

「久しぶりです……お葬式の日以来ですね」



僕も父さんも北さんの旦那さんとの面識はない。しかし家政婦として雇っていた人の家族が殺されたなんて言う衝撃的な事件が起きた事で北さんの様子が心配になり二人でお見舞いに行ったのだ。北さん夫婦は話に聞く限り仲の良い夫婦だった。ニュースでもそう報道している。その所為だろう、北さんはその時は衰弱しきり、僕らが来た事も分からないようだったけれど――

「そうね……あの時はありがとう。ろくにお構いできなくてごめんなさいね」

疲れた様子で微笑んだ北さんは、しっかりとその時の事を覚えていたようだ。

「ええ。ところで、犯人の目星って付いたんですか？ ニュースではそう言った報道はしてませんでしたか」

単刀直入に聞くと、北さんはあからさまに嫌そうな表情を見せる。しかしそれで引き下がる訳が無い。

「長物で――刀で殺されたらしいですね、旦那さん。それと、昨日僕、刀のような物を持った人を見かけたんですが」

瞬間、北さんの顔が青ざめた。視線が泳ぎ僕と目を合わせようとしない。余所余所しい態度は早く話を終わらせたいと言う様子だった。自分の夫が殺された事を思い出したのか――いや、そんな風には見えない。その様子は何かを知っている感じだった。何かを、隠している様子だった。まるで、刀を振り回して人を殺すような人物を知っているような。

「ごめんね、ちょっと具合が――」

北さんが閉じようとする扉を足で押える。

「昨日、まだニュースではやっていないんですけど一人刀で切られて死んだ人が居るんです」

「そ、そうなの？ 私は知らな――」

「シャドウとか、ペルソナって言葉を聞いた事ありませんか？ 金髪の、僕より少し年上くらいの男から」

それは決定的だったと思う。さっきまでの反応ならただ犯人を知

っていて、でも何かの事情があって言えないだとか、単純に、本当に事件を思い出して気分が悪くなっただけでも見えた。しかしシャドウもペルソナも――金髪の男の事も、恐らく今回の騒動に関与してなければ知らない事柄だ。それに反応したならば、

「北さん。北さんが――北さんのシャドウが、旦那さんを殺したんですね？」

殆ど勘だった。昨日桐式と戦ったシャドウが刀を使っていたから、北さんの旦那さんが刀で殺されたらしいとニュースでやっていたから、だから北さんを連想しただけだった。とは言え普通の一般社会で起きる事件ならともかく魔術師が関連してるなら、身内が死ぬのは身内に原因がある場合の方が多い。師匠の奥義を知る為に師匠を殺す弟子なんて言うのはさらにいるのだ。

「ち、ちがうの……修一さんは私を守って……」

泣き崩れるようにその場に座り込む北さん。青かった顔はさらに色を悪くしている。

「あの人は、あの人はいつも私に乱暴をして……私はあの人から逃げたかった。でもそんな事許してくれる訳が無くて……」

「だから殺した、と？」

「違う！ 修一さんは私を守ってくれたのよ！」

「でも実際に殺したのでしょうか？ それは変えられない事実だ」

僕の言葉に北さんの動きが止まる。暫く俯いたまま涙を流していたけれど、

「ならなんだって言うのよ！ 私を警察に連れて行くつもり？ そんな事をして……」

「そんな事をして、自分は捕まらない？ そうですね。シャドウに人権は無い。この世に存在する証拠が無い。旦那さんの事件だって、旦那さんが一人で、何も無い空間で、誰も居ない場所で、あるはずの無い刀で斬られて死んだだけだ。この事件に犯人は居ない。犯人が出てくるとしたら、それは警察がでっち上げたか警察に魔術師が、それも今回の騒動に関与しているような人がいるかだ。ただ

それでもこの件を人の法で裁く事は出来ない」

「なら関係無いじゃないの……七緒君には関係ないでしょう!？」

「関係ない訳じゃない。異能者が起した事件は同じ異能者が片を着ける決まりになってるんだ。本来その仕事は父さんがやっているけど——僕もその跡を継ごうと思ってるからね」

「……じゃあ、七緒君が私を裁くと言うの？」

「そうなる」

「そう……」

力なくうなだれる北さん。観念したのだろうか、そう思っただけで、まだ肝心の北さんのシャドウが現れていない。しかしその矢先——鈍く輝く刃が、突然北さんの背後から突き出された。回避なんてする余裕がない。当たり前だ、刃が見えた瞬間、その刃は僕の体に触れるか否かの距離に現れていたのだから。

「ッッ!？」

元々一撃で殺すつもりはなかったのだろう、刀は僕の肩を貫いただけで死に至るような傷にはならなかった。しかし、もちろんそんな経験は無いけど焼き鏝を当てられたような熱い痛みが左肩を蝕む。

「修一さん……」

「安心しなよ夕子。僕は君を守っているんだ。君を守って、君が憎いと思う相手を殺す。そう、僕は法で裁けない。だから、君が憎いと思う相手をいくらでも、どんな場所でも殺す事が出来るんだ。今、ここで君を殺すようにね」

言って、黒いスーツ姿に日本刀と言う奇妙な出で立ちの男が北さんを後ろに下がらせて刀を構えた。

「なんだ、桐式からは妙に礼儀正しくしてたって聞いたけど、いきなり不意打ちするような卑怯な男じゃないか」

シャドウと言う異質な存在を知りながらも、迂闊に近付いた自分に腹を立てながら、それでも強がって立ち上がる。正直初めて受けた刀傷の痛みで意識を失いそうだけれど、僕も敵も死んでいないのなら戦いは続く。意識を失えば、その時点で僕の負け——死だ。

「はは、その不意打ちは自業自得と言う物だよ。君が夕子を追い詰めるから、夕子に憎まれるから僕はそうせざるを得なかった。それでも利道のように、夕子の愚夫のように一撃で殺されなかっただけマシだと思うけどね。さあどうする？ 君は素手。僕は刀。勝ち目は薄いと思うけど」

不敵に笑みを浮かべ、刀の切先を揺らしながら僕に向けてくる。昨日は確か上段に構えていたけれど、玄関先と言う事でその構えは出来ないようだ。とは言えこんな場所で日本刀なんて物を持って立っている姿を見られれば法も何もないと言うのに。

「あほなんだろうな」

「ん？」

ポケットに入れたままの右手。その手に握るナイフを取り出し――投げた。その先は刀野郎ではない。その背後の、北さんだ。

シャドウだなんだと言われているにもその実態は使い魔。使い魔なら、生み出した者を殺せば消える。さらにシャドウは驚異的な身体能力を持っている訳じゃないとは言え、正面から戦って勝てるだなんて思っていない。主人を殺して逃げてしまえば自ずとシャドウは消えてしまうのだ。スマートに勝とうだなんて思っちゃいない。管理地で暴れる異能者を押える為には手段なんか選ぶ暇は無い。正攻法で挑む必要が無い。単純に、簡潔に、ただ最善を選んで最良を行う。それで、僕の勝ちだ。勝ちだと言うのに――

「チィ！」

刀野郎は僅かに体を動かして、体で、足で僕の投げたナイフを受けて北さんを守る。突き刺さるナイフが刀野郎の服を血で濡らす。

しかし僕の作戦はそれで終わりだ。イチも居ない中、もう手の内が無い。あまりにも無策すぎたと言うしかなかった。功を焦ったと言わざるを得ないだろう。これじゃあ今まで何の為に努力していたかも分からなくなる。

「く……！」

空いた右手で左肩を押えながら走る。階段を駆け下りると、刀野

郎は二階の廊下の手摺を乗り越えて下に落ちながら刀を振り下ろしてきた。立ち止まり、階段に体を打つ事も構わずに後ろへ飛んだ。鉄製の階段を躊躇無く斬りつけた事で刀野郎の刀が折れる。これはチャンスだった。半分になった刀で追撃をする刀野郎の体を蹴りつけ、体勢を崩したのを見てから横を走り抜ける。はずだった。

「ぐあ!？」

腹に走る激痛。刀野郎の刃が僕の左脇腹を切り裂いていた。ぼたぼたと血が巻き散るが、後ろを振り返る余裕も無い。その場から逃げなければ死ぬのは僕だ。

「くそ!」

走る。走る、走る。

アパートの敷地を抜けて車道に出る。何処へ逃げれば、なんて考える余裕も無い。しかし身を裂く刃は続いた。

「ぐ、があ——!!」

足、腹。背後から二本の刃に貫かれて動けなくなる。そこで初めて振り返った。数歩先の距離に居る刀野郎は、右手に折れた刀を、左手に右手に持つ物と同じでいて、しかし刃が無事な刀を持っていた。僕を見ながら刀野郎が右手の刀を捨てる。そして、手の平から生えてくるようにして一本の刀を握りなおした。見れば僕の足と腹に後ろから刺さっているのは、どれもあいつが使っている刀と同じものだった。

刀を生み出す能力。あまりにも攻撃的でただただ相手を殺す事しか考えていないような能力。しかしそれは僕のような者には絶対的に有利に立てる力でもあった。その証拠と言うように、今僕は文字通り手も足も出ない。

刀野郎が近付いてくる。こんな事が起きていると言うのに、アパートから人が出てくるような気配は無かった。殺される。そう思った。思わざるを得なかった。思う以外に無かった。しかし——

「七緒!」

助けは現れた。手に水の剣を持つ桐式が血相を変えて走ってきて

いた。その後ろには青い頭を揺らして走るイチの姿もあった。

「……くそ、ふざけんな」

小さく呟く。僕は、敵に負けた事よりも、どんな事よりも、今この時この瞬間が悔しくて仕方が無く——やり場の無い怒りを、どうやって後につけてきたのかは分からないけれど、腹の立つ笑みを浮かべて僕を見ていたイチに向けるしかなかった。

## 第一章 桐式紅葉 その四

◇Side 無口七緒

僕を一瞥した桐式はそのまま刀野郎の前へ。イチは僕に駆け寄り

「危なかったなあ。俺が紅葉の事を呼びに行ってなかったら死んでたぜ？」

なんて言うことをにやけた顔で言っていた。

「お前、僕達のこと尾けてきてたろ？ そうじゃなきゃこのタイミングで桐式の事呼びにいけないからな」

「バレたか」

多分、僕らが家を出た時点で体を魔力の霧にしてついて来ていたに違いない。他の――特に優秀な魔術師ならばそうなっているも使用魔の気配くらい分かるもんだろうけど、僕には分からないから自分で自分に腹が立つ。

「で、お前は僕が襲われているのも構わずに桐式に助けを呼びに行った訳だ」

「お前……天才だな」

言葉どおりではない、人をからかうような顔で言い放ったイチの額に拳を打ち込む。瞬間刀だ刺され場所が酷く痛んだ。

「ったく、秋子さんも来てるから大人しくしてろよ」

秋子さんは治癒魔術を使える人だからこの件に関わっている以上これからもお世話になる事は多いだろう。それは秋子さんに事件の調査を頼まれた時から考えていた事だから抵抗は無いけど、しかし

刀野郎に水の剣を向けて対峙する桐式に視線を向ける。剣道の試合は見た事が無いけど、下手な攻撃をするとそれをいなされて返す剣で打たれる、そんなイメージがある。故にただ切先を向け合って

佇む今の二人の間には、いかに相手の隙を見つけるかと言う駆け引きがされているのが分かった。しかも桐式にしてみれば相手の武器は一撃で自分の戦闘力を奪い、最悪は命をも奪う事の出来る武器だ。迂闊には攻撃出来ないのだろう。

横で見ている事しか出来ない僕らにも伝わってくる程の重い空気。まだ数十秒しか経っていないだろうに、もう数分はそのままにいるように見えた。まったく動きの無い斬り合いに自身の体の痛みすら忘れていると――

「あやや、これは珍妙な場面に出くわした」

僕の背後から女の声が聞こえた。きっちりとしたスーツにサングラス姿の、セミロングのブロンドを靡かせた外人の女はしかし血を流す僕にも、刀を構える二人にも動じず、

「怪我人。これは私の出番だね」

出番、と聞いて助太刀でもするのかと思いきや――

「ぎ、ツツツツ!!」

僕の後ろに持っていた鞆を置きながらしゃがみ込み、一本、二本と足と腹に刺さったままだった刀を一気に引き抜く女。一瞬にして意識が消えかけたところを、パパンと軽快な音を立てながら頬を叩かれて覚醒させられる。

「寝たら死ぬよ、少年」

言って、風穴の開いている腹に女が手を当てた。短く、素早く何かを呟く。それは呪文だった。聞き取れなかったけれど、英語に聞こえたその呪文を言い終わると僕の腹の痛みはすぐに消え、そして傷まで消えてしまった。

「お、おおー……凄いねお姉さん」

「でしょう? 治すも壊すも自由自在よ。ほら、もう二箇所」

続いて肩、足と傷を治した。まったく痛みが無く、怪我は完全に治癒していた。ありえない。秋子さんだって――いや、話に聞く治癒を扱う魔術師だってここまで素早く怪我を治す事など出来ない筈だった。しかし強力な薬には副作用がある。この治癒力にも――



「あんまり激しく動くとすぐに傷が開くから気をつけなよ、少年」  
やっぱり副作用があった。しかしそれは普通の怪我をした時と同じもので、副作用なんてのはあって無いようなものでもあった。

「これは驚いたわ……」

その声は秋子さんからだった。遅い到着ではあったけど、息が上がる程に急いで走ってきたのは見て取れた。単にイチと桐式の足には追いつけなかったのだろう。

外人の女の治療風景を見ていたのか、自分以上の治癒魔術の使い手に驚いて目を丸くしている秋子さん。女はそんな秋子さんや僕とイチ、そして僕らにも目をくれず対峙している二人に向け、

「さてさて、そろそろ警察が来る頃だから逃げた方がいいわよ、皆さん」

と言って自分はひらりと身を翻して歩いていってしまった。

それを聞いて、桐式は刀野郎から一步、二歩とすり足で後ろに下がる。刀野郎はそんな桐式の姿を見ると刀を納めて体を霧に変えて姿を消した。恐らくアパートの二階の廊下で僕らを見ていた北さんの元へ戻ったのだろう。

桐式も水の剣と白い手袋に変身していた姫ちゃんを消し、僕らの元に歩いてくる。

「行こう」

言って、僕に肩を貸すようにして立たせた。痛みは消えたけど――動かすと、まだ少し痛む。あの女の治癒魔術も見た目どおりに完治する訳じゃなかったようだ。とは言え走れないほどじゃない。桐式の手を振り払って自分の足で立つと、秋子さんの家に向けて足を進めた。意地っ張り、と言う言葉が桐式から聞こえたけど気にしない。

秋子さんの家に辿り着いた頃、遠くの方からパトカーのサイレンが聞こえてくる。巻き込まれないようにしながら僕らを見ていた人が通報したのだろう。あの女が言ってくれなければ面倒な事になっていただろうし、間一髪だった。

家の中に入ると、まずは秋子さんに傷を見せる。とは言っても見せられる傷は無いのだけれど。触診をしてみても微かに痛むだけそれ以外に目立った変な所は無かった。

首を傾げながら、しかしその見事な手法に感心するしかないと言  
う秋子さんが溜息を吐きながらも、

「とにかく無事でよかったわ」

と言って父さんに連絡をする為に電話を掛けに行った。

そうしてから桐式が近寄ってきて――めし、と言う音が聞こえて  
きそうなほどに額を殴られた。

「この野郎、あいつの所に行くんだったらあたしに一声かけろ！」

「なんでだよ」

「あたしも手伝うって言っただろうが」

「僕は認めてない」

言って、今まで黙っていたイチが突然僕の頭を叩いた。

「ごめんな、紅葉。こいつ友達が居ないから礼も言えないんだよ。  
って言うか初めて友達が出来たもんだからいいとこ見せようとして  
さ」

「そんな事に友達は無関係ないだろ。お前は引っ込んでろ」

「うるせーばか」

罵倒と共にもう一度殴られる。そろそろ頭の形が変わりそうだ。

「とにかく七緒は休んでろよ。あとはあたしがやる」

「なんでお前が」

「友達がやられて黙ってられる訳無いだろ。それにあいつは人殺し  
だ。放っておけるか」

そんな、正義感丸出しな事を恥ずかしげも無く、それでいて格好  
つけてる素振りも無く言い放つ桐式に僕は何も言えず、そして――

## ◇Side 桐式紅葉

秋子さんのアパートの隣にある駐車場で車に乗り、七緒を家まで

送る。事の次第をゲンさんに伝えたと、何も言わずに難しい顔をして七緒と肩を組みながら家の中に入っていく。秋子さんはその足で家に戻っていき、あたしは一人手持ち無沙汰になる。姫は霧になってあたしの傍に居る。空を見上げる。太陽が一番高く昇った空にはわたあめのような雲が幾つか浮かんでいて実に良い天気だ。こんな良い天気の下で、あの刀野郎は人を殺そうとした訳だ。

「よし」

ぱん、と両手で頬を叩く。あまりこっちの方には来た事が無いけど今日だけでも二度通った道だし、ほぼ一直線だったから道に迷う事は無いだろう。そうと決まれば、

「お礼参りだ。行くぞ姫」

刀野郎のペルソナが住んでいたアパートへ向けて歩き出す。こんな事なら秋子さんの車に乗せてもらえば良かったと思うけれど、一人で戦いに行くなんて知られれば流石の秋子さんだって止めるだろうし、七緒はもっと反対するだろう。それじゃ動き辛くなる。フォーローが無いのは厳しいけれど、幸いな事にあいつはタイマンで勝てないような相手じゃない。刀は恐いけどこっちだって武器があるのだ。姫との対話で得た絆と言う武器が！

「……流石に恥ずかしいな」

言って、一人で顔を赤くしながら道を歩いた。携帯を見ると、友達やら担任やらからメールが来ていた。その殆どが「またゲームでもやってるのか」だったのがあたしの普段の行いが悪いのかなあと思ってしまう。つか担任にすらそういう目で見られるってどうよ。

三十分ほどしてやっと刀野郎の家の近くまで辿り着く。が、遠目から見ても分かる通りにパトカーと警官の――

「し……死体……!？」

刀が何本も突き刺さったパトカー。正面から袈裟に斬られた警官。車内で、車外で、血の海が広がる。まだ匂いの届くような場所ではないのに血の匂いが漂ってきそうなほどにその光景は酷く残酷で、酷く残酷で、酷く現実味が無かった。その場に胃の中の物を全て吐

き出したくなるが堪える。すぐにその場から離れたいのには足は動かない。そうしている間にも、あの刀野郎は、全身に返り血を浴びながら迫ってきていた。

# ◇Side 無口七緒

自分の部屋の中、服を脱いで傷の消えた自分の体を見詰めながら佇む。父さんは気にするなど、生きているだけで儲けものだと言っていた。あの状況で父さんならどうする、とは聞けなかった。僕と父さんは使えるカードがまるで違う。同じ状況に立たされても自分のやり方で活路を見出さなければいけない。他人のやり方なんて参考に出来ない。そうしなければ町の管理など――あの刀野郎よりもよっぽど厄介な魔術師の相手など出来ない。

生きているだけで儲けもの。ああ、そうだ。その通り。生きていれば次がある。死ななければ次がある。僕は刀野郎を――ぶっ潰す。「――さて、となると」

ベッドの下に手を突っ込む。ご禁制の書物はもっと狡猾に隠してあるけれど今はそれを探している訳じゃない。ベッドの真裏に隠してある物を掴んで引っ張り出すと、

「おい七緒！」

頬にご飯粒、手に稲荷寿司を掴んだイチが慌てた様子で部屋に入ってきた。

「大変な――ってなんだそりゃ！」

「……マシエットだよ」

ベッドの下から取り出したのは山地で草木を刈る為に使う大型ナイフだった。多目的に使う、と言う意味では確かにナイフだけれど、遠心力と重さを得る為に刃先に行くほど刃の幅が広がっている為、下手な武器――刀のような細長い武器でこのマシエットの一撃を受け止めようとするとその武器ごと相手の頭を叩き割る事だって出来る、十分に戦闘用に見える武器だ。とは言えその形状故に細かい動

作をし辛いのだけれど、そもそも今の僕にそれほど細かい動作は必要ない。

そんなマシエットを見ながらイチは稲荷寿司を食べ、

「……あいつにはリーチで負けねえ？」

至極当然の事を聞いてきた。確かに攻めに回れば刀を折るくらいは出来るのかも知れないけれど、その為には相手に近づく必要がある。木刀やら鉄パイプやらなら何とかなるだろうけれど、刀が相手じゃ分が悪い。

「……バタフライナイフよりはマシだろ。で、なんだよ」

「あ、そうだった。テレビ見てみるテレビ！」

言って、イチが油の付いた手でリモコンを掴もうとするのを、その手を弾いて止めて代わりにリモコンを取る。そのまま電源を付けてみると、今の時間はいいとものがやっているはずなのに、緊急特番はつい最近見たような——それもまだ一時間経ったかどうかと言うくらいの——場所で、警察官が刀で切り殺されたと言う事だった。って言うか北さんのアパートの前だった。

「あの野郎、何がしたいんだよ……！」

「パパさんがな、取り合えず様子見ろって。こうも報道されてちゃ俺らは動けないから、まずはパレットからの連絡を待ってさ」

「分かっているさ。でもな……」

報道の中に、軽症を負って病院に運ばれた高校生の少女、と言う言葉が流れる。単なる偶然かも知れない。桐式ではないのかも知れない。けれど、しかし。

「放っておけるか？」

イチの顔を見ずに問い掛ける。帰ってくるのは、首を横に振る気配だった。

「あいつをぶっ潰す。いや、ぶっ殺す」

「だな。俺も協力するぜ」

言うなりイチは姿を霧と変える。僕も服を着込み、マシエットを

「おいおい、今から行くのは病院だろ？」

「いや、あの野郎——」

「病院、だろ？」

「……」

マシエットをベッドの下に蹴り入れ、さっき無くしたナイフの代わりのバタフライナイフを小物入れから取り出して外に出る。玄関に向かう途中、父さんが部屋から顔を出し、

「昼はどうする？」

「いない」

「稲荷寿司ならあるぞ」

ひよい、と皿に載った稲荷寿司を差し出してくる父さん。

「……もらう」

その前を通り過ぎながら稲荷寿司を手にとると、口に放り込んだ。

「見舞いか？」

「まあ」

「紅葉さんによろしく言っておいてくれ」

「分かった」

玄関に辿り着き、自転車の鍵を持っている事を確認しながら靴を履く。しかしここから一番近い病院までの距離を考え、靴箱の上に置いてある小物入れの中のスクーターの鍵を手に取り外に出た。

処川の土手沿いに南下する。軽快に走るスクーターはすぐに石間町の境を越えた。すると、ずっと頭の中で僕を急かしていたイチの声が消える。シャドウを生み出した結果は石間町にのみ作用し、その範囲を——多少は境界に差はあるけれど、ほぼ石間町の中のみだ——出てしまうと存在していられなくなる。その状態でずっと放置するとうなるかは分からないけれど、また町の中に戻れば元に戻るから例え今の状況で北さんに襲われたとしても相手も同じ状況だからと、気にはならなかった。

改造した訳でもないスクーターは後方からの自動車に何度も抜か

れる。しかしそれでも最高速度で走らせて病院を目指す。程なくして病院に辿り着き、入り口前の駐輪場にスクーターを止めると――

「大丈夫だって、ただのかすり傷なんだからさ」

と、桐式が出入り口前で男と口論している姿が見えた。左手に包帯を巻いている以外はまったく健康体に見える。

「心配しすぎだよお父さんは――あれ、七緒じゃん」

僕に気付いた桐式はお父さんと呼んだグレーのスーツに無精ひげを生やした男から離れ、僕に歩み寄ってきた。報道陣も居ないし他の警察の姿も無い。事件の関係者ではなく、単純にその場に居合わせた不幸で、学校をサポートした不良な少女として扱われたのだろう。それはそれでほんと安堵の溜息が出る。

「なんだ、心配して来てくれたのか。良い奴だなーお前」

ポニーテイルを解いた腰まで流した黒髪を揺らしながら左手でペしペしと僕の肩を叩く。その手を取り、

「大丈夫なのか？」

「うん？ 大丈夫だよ。ちっと驚いて転んでさ、手を擦りむいただけだ。でもさ……」

ゆっくりと歩いてくる桐式の父親を気にするようにしながら声を潜め、

「姫が消えたんだ……どう言う事なんだよ、姫は大丈夫なのかな。また会えるのかな」

酷く心細そうに、とても悲しそうに。ともすれば――今にも泣いてしまいそうな、今まで見た事が無い表情で言った。僕は今まで他人にそんな表情で僕に話しかけられたことがない。どんな風に対応すれば良いのかは分からない。けれど、桐式の不安を解消出来るだけの知識を持っていたのは幸いだった。

「大丈夫だ。石間町に戻れば姫ちゃんも戻ってくる。結界の話したろ？ あの中にペルソナが居ないとシャドウは存在してられないんだよ」

ぱっと明るくなる桐式の顔。喜びを隠しきれないのか、桐式は掴

んでいた僕の手を振り解いてまで僕の両肩をバンバンと叩いてきた。そうしていると桐式の父親が僕らの元に辿り着き、

「あー、君は紅葉の友達かな？」

と、警官だと言っていたけれどどう見ても刑事と言う威圧感で聞いてきた。いや、私服で捜査をする事が多い警官の事を刑事と呼ぶだけだから意味は同じなんだけれど。

「娘の見舞いに来てくれたのか？ それは嬉しいが、学生が学校をサボるのはあまり感心しないな」

普通の事を言っているのだけれど、うちのぐうたら親父と違って刑事の貫禄と威圧感たっぷりなその様子にたじろいでしまう。なんて返せば良いのか、そんな事を考えていると、

「おー、お父さんがきちんとお回りやってるよ。普段は学校なんて適当に行ってりゃいいんだ、なんて言ってるくせに」

「あ、このやろ！ ……ったく、人がキメてる時に茶々入れやがって」

ぼりぼりと自分の頭を搔くおじさん。そして一気におじさんの纏っていた威圧的な雰囲気は薄れ、

「まあなんだ。学校なんてのは卒業出来りゃいいんだ。あそこで学ば事が社会で活きる事はないからな。……まあいい、紅葉のお見舞いに来てくれてありがとな、えーっと」

「あ、無口です」

「無口君か。無口？ ああ無口か？ ゲンさんのとこの」

「あ、そうです」

ゲンさんは老若男女問わず大人気だな、おい。いや、人望があるのは知ってるけど、警察にまで手を伸ばしてるのかあのおっさんは。「そうかそうか。ゲンさんによろしく言っておいてくれ。ん？ そう言えば昨日は男の家に泊まるって……」

「あー、分かったから早く行けよ！ まだ犯人捕まってないんだろ！」

桐式がおじさんの背中を押して僕から引き離す。分かった分かつ



た、と言って仕方無さそうにおじさんが離れていき、気をつけろよ、と片手を挙げて病院の駐車場に向けて歩いていく。その後姿は刑事として生きてきた経験を物語るような頼れる背中に僕には見えた。

「まったく、過保護なんだからさ。悪いな、面倒掛けて」

「面倒じゃないよ、別に。……でも大丈夫なのか、行かせて。あの刀野郎無差別にやってたみたいじゃないか」

「……それなんだけどさ、あいつ、単純に銃を向けられたから斬りかかったみたいだ。お父さんがあいつを見つけて銃を向けたりしない限りは大丈夫だと思う。あの時あたしに向けて歩いてきたんだけど、武器を持たないなら相手にしない、って言ってあたしの目の前で消えたんだ。ペルソナの……北っておばさんはドサクサに紛れて逃げたらしいから早々見つからないんじゃないか？」

「銃を向けたからって……それでも昨日の公園で桐式と、桐式の前に戦って殺した男は何もせずには斬りかかってきたんじゃないか？」

「それもそうだけど、妙にあいつ礼儀正しい所があるからな。あたしと初めてやった時も一礼して、自分が刀を持ってるって事をあたしに気付かせた上で勝負を挑んできた。その人も逃げようなんてしないで立ち向かおうとしたんじゃないか？ 背中に怪我は無かったんだろ？」

「僕には後ろから刀を投げて来たぞ」

「それは……七緒が逃げたからじゃないか？ 刺されたって言うても急所は外れてたし。警官殺しだって遠目からしか見てないけど皆正面から切り殺されてた。お父さんから聞いたけど、一目散に逃げた奴はお前と同じで刀を投げつけられたけど、生き残ったらしいぜ」  
それはつまり、戦う時はあくまでも正々堂々と、って事なのだろうか。妙な話だ。あまりにも人間臭い、矛盾した行動。作られた生物である使い魔にあるまじき行為。どうにも謎だらけだ。

「……なあ、戻ろうぜ。なんか姫が居ないと落ち着かないよ。七緒もイチが居ないと——って、イチが嫌いなんだったっけか」

「そう言う事だ。……そう言えば桐式はどうやって帰るんだ？」

「え？ ……あー、歩きかバスだなあ……」

言いながら、桐式はもうすでに居ない父親の姿を思い出すように天を仰いだのだった。

## ◇Side 桐式紅葉

病院から歩くこと十分。石間町の町境に入ったところで、ぼんと姫が目の前に現れた。嬉しさに思わず抱き上げると姫も嬉しそうに笑った。きつと”もみちゃん、寂しかった？”と言っているに違いないその笑顔に見蕩れていると、突然胸にむず痒い感触が走る。

「うひゃ！」

なんて声を出して姫を手放してしまう。姫がコンクリートの上に着地するのを確認すると、あたしの胸を揉んでいた手を掴んで思い切り握った。

「あいたたた！ やーめーろーよー」

「うるさい。お前の乳も揉んでやろうか！」

言って、あたしの背後に立っていたイチに振り返る。まったく、あたしよりも立派なもんぶら下げてるんだから自分で揉めばいいものを。歩きでついて来てくれた七緒はあたしの一歩後ろを歩いていて、イチの暴走を止める事無く見ていた。やはりと言うかなんと言うか、イチが戻ってきてきても嬉しそうな表情を見せない。まああんまり感情を顔に出さない奴みたいだから本当の所は嬉しいのかも知れないけれど、まあそのあたりはあたしには分からない。

「それにしても悪いな、付き合ってもらって。原付も置きっぱなしでさ」

「いいよ別に。スクーターなら後で取りに来れる。こんな事になった責任は僕にもあるからな、送ってく位はするよ」

なんだかんだとあたしを心配してくれてるんだろうか。仏頂面だけれど良い奴だなあ。

「紅葉と一緒に帰りたいだけのななちゃんであった」

と、モノローグを入れるイチが七緒に殴られる。おいおい、女相手に酷いじゃあないか。

「お前は何を言っているんだ」

「またまたまたまたまー。本当は嬉しいんだろ」

「そうならそうと言えればいいのに。これから登下校は一緒に行くか？」

イチに乗っかってからかってみると、

「桐式の家はうちと逆なんだろ」

なんて返ってきた。そう言えばそうだったなあ。

「一緒に行くのは否定しないなあちゃんであった」

「なあちゃん言うな」

ごす、と音が聞こえてくるほどにイチの頭を殴った七緒。ふむ、こう見ると仲が良く見える。けど、そう言ってもイチはともかく七緒は否定するだろう。人間、認めたくないものは否定するもんだ。頭を殴られたイチが助けを求めるようにしてあたしのところまで駆け寄ってくる。無論助け舟を出す――事はしないが、代わりと言うかお返しというか。取り合えず赤いタンクトップの中の零れんばかりの巨乳に手を伸ばしてみた。

「おほほーう」

「気持悪い声出すなよ。……うーむ、こんなん揉んで楽しいのか？」

「楽しいっていうか、気持ち良い。あー、俺にちんこがあれば押し倒してやるのに」

「お、女がちんこか言うな！」

と言いつつあたしも言ってしまった。突然の事で顔が赤くなってしまう。しかもそんなあたしを見てイチが嫌なというか、エロイ笑みを浮かべた。なんて言うか、セクハラ親父が露出の高い服を着ている女を見るような、そんな目で。

「紅葉はウブだなあ。もうね、めっちゃ好み」

「……肉食系女子だったらその指向を肉か男に向けてくれよ」

「えー、なんで俺が肉ならともかく、男に欲情しなきゃならんだ。

それとな、見てくれで勘違いしてるかも知れないけど俺は男だぜ。  
七緒の邪な願望でこんな体になっただけだっぜ」

「へ？ ……………お、女だから許してたけど——男が女の胸を平然と揉むんじゃないええ！」

そうと分れば実力行使。顔面に一発、腹に一発。鼻血を出しつつ、おごご、なんて声を出しながら体を霧にして逃げたイチ。ちくしゅう、次に人の胸を揉もうとしやがったら瞬極殺を決めてやる。てゆーか七緒……

「お前も男の子なんだなあ」

「納得したような言葉を吐きつつ人を変態を見るような目で見るな！ イチが言ってるのはでたらめだ！」

「そうか。でも昨日七緒の部屋のベッドの下にエロ本があったぜ」

「それは無い」

「なんで」

「別のば……エロ本なんて持ってないからだ」

ふむ、別の場所に隠してるのか。なるほどなるほど。まあ男なら普通の事だな。

「ちなみに隠し場所は天袋の中だ」

にゆるりとイチが現れる。そして七緒がイチを叩いた。

「あれ、鼻血は？」

「ん？ シャドウってのはさ、一度体を魔力の霧に変えれば怪我は治るんだよ。ただ痛みは残るけどな——」

言ってイチが鼻と腹を撫でた。ふうむ、便利なのか不便なのか。骨が折れたって元通りになるけど痛みはそのまま、それはどんな感覚なんだろう。成長痛みみたいなものか。試しに隣を歩いている姫のほっぺたをつねってみる。痛がる素振りを見せながら、あたしが手を離すと明らかに怒って両手を頭の上でブンブンと振り回していた。いやぁ可愛いなあ。思わず目的を忘れてしまうほどだ。

それにしてもシャドウだとかペルソナだとか、漫画の中でしか聞かないような魔術だとか魔法だとか、小さい頃から懂れていた事が

自分の身の回りで現実起きていて嬉しい気持ちはある。姫は可愛い。イチは変な奴だけど悪い奴じゃない。七緒とは話していて面白い。シャドウだとかペルソナだとかを抜きにして皆で遊びに行きたいくらいだ。でも、それでも、だからこそ。

「なあ七緒。あたし、死にかけたんだよな」

そんなシャドウやペルソナに、あたしは殺されかけた。刀野郎に殺された警官を見るまで、あいつが人を殺したと言う事に、そして自分が殺されかけていたと言う事に実感が持てないでいた。周りにいるシャドウ達がそんな事をするだなんて微塵にも思っていなかった。だからショックが大きかった。

「そうだな。だから、桐式は大人しくしてなよ。後は僕と父さんと秋子さんで何とかするさ。別に関係を断絶するって訳じゃ——」

「嫌だね」

でも——でも、七緒はその実感を持って、自分から死地に赴こうとしている。実際に七緒はあたし以上の怪我をして殺されかけたんだ、その覚悟はあるんだろう。でも、やっぱり友達がそんな危険な目に遭ってるのに放ってはおけない。

「あたしのお父さんはさ、刑事だから危険な場所でも危険な犯人相手でも立ち回らなきゃいけない。けどさ、一度だってそれが嫌だなって聞いた事ないよ。そうやってればあたしやお母さんを守るって。大事な人を守るから辛いとは思わないってさ。その血を引いてんだろうね、あたしは。七緒が一人で危ないことしようとしてるんなら、あたしはいつだってどこでだって手を貸すぜ？」

「……死にかけたんだろ？」

「本当に死にかけたのは七緒だろ。本当に危なっかしいのはお前だ。一人で突っ込んでさ、一人で死んでくんだろうな、お前みたいな奴は。そんなのあたしは許さない。それがあたしの友達になるって事だ」

「友達になった覚えはないけど」

「友達ってのは何時の間にかなってるもんだ。同じ屋根の下で一晩

語り明かした。それでいいんじゃないか？」

むう、と押し黙る七緒。その隣ではイチが両手を青い頭の後ろで組みながら横目で七緒の事を見ている。七緒の返事は無い。多分、何だかんだと言って他人を巻き込んでしまうのが嫌なんだろう。優しい奴なんだろう。そんな奴だからこそあたしは手伝ってやりたいと思うのだ。

七緒が答えに悩んで、と言うよりはどうやってあたしを言いくめようと考えている様子で歩く。そんな状態がずっと続いたまま歩き続けていると、石間公園まで辿り着いた。ここから南に――七緒の家とは逆方向に歩いていけばあたしの家に到着する訳なのだけだ、

「……おい、七緒」

正面を見据え、身構える。ほんの数メートル先には、まるであたし達を待ち構えるように、まるであたし達を挑発するかのように、刀野郎が刀を片手に腹が立つほど丁寧に頭を下げ、そしてそのまま姿を霧に変えて消えていった。その近くには石間公園が――四区画に分かれている公園の中で、雑草しか生えていない広場があった。そこは周囲は木に囲まれて外から中は見辛い。整地もされてなく、ここを横切ってまで近道をしようとする人もそうそう居ない。つまり、昼間から決着を付けるにはうってつけの場所だった。

「桐式は――」

「帰らない。友達をやられた仇はとらないとな」

「僕は死んでない。それに二対一は――」

「卑怯か？ いいじゃんか、別に。あっちはあたしらを殺すつもりだぜ？」

言うのと、七緒が心底驚いたような、妙な反応を見せる。でも、もうあたしを一人で帰させるつもりは無くなったようで、何も言わずに公園の中に踏み入っていく。イチは姿を霧に変えていた。姫も同じだった。命のやり取りをすう緊張。剣道の試合なんて比べ物にならないその空気に、あたしは心を入れ替えて挑む事にする。

公園の中、膝辺りまで伸びる雑草を掻き分けて進むと、そこには  
刀野郎とそのペルソナの北とか言うおばさんが立っていた。静かに、  
怯えた目で、鋭く、憎々しげに、あたし達を見ていた――

## 第一章 桐式紅葉 その五

### ◇Side 桐式紅葉

姫が霧に変えた自分の体であたしの手を覆う。目に見える訳じゃないけれどそうしているのが分かった。多分二人で話をしたからだろう、以前と比べて姫の存在をより近くに、より確かに、より大切に感じる事が出来るように思えた。姫の姿が白い手袋に変わる。まるで貴族が着けているかのような真っ白な手袋。手の平を広げると、そこから水が湧き出てきた。水の量は段々と多くなって手の平から零れ落ちる。しかしその水が地面まで落ちる事は無く、むしろ途中から落ちる方向を変えて天に向けて直立していった。水は剣の形を、握り慣れた木刀の形になると、中段に構えて刀野郎に向けた。

「……桐式、お前は下がってろ」

「何言ってるんだよ、そんなちっぽけなナイフで刀と渡り合おうってのか？」

七緒の手に握られているのはせいぜい拳一つ分程度のバタフライナイフ。もっと刃渡りのあるものならともかく、そんな物で長物相手に立ち回るのは厳しい。

「あたしがやる」

言って、刀野郎ににじり寄る。既におばさんは刀野郎の後ろに下げられ、刀野郎は自分の主を守るかのように、しかし礼は欠かさずに頭を一度下げてから一步、また一步と刀を構える事も無く迫ってきた。一足一刀。剣道の試合で何度と無く立ったその立ち位置であたし達は止まった。

「桐式……！ あ？ 邪魔するなイチ——」

後ろで七緒が叫んでいる。しかしもうそんな事も聞こえない。目の前には刀を構え、あたしを確実に殺そうとしているシャドウが居る。最早後ろを気にしている余裕は無い。



刀野郎が構える。多分、自分が最も得意としている構えなのだろう、現代剣道では最強とされる中段ではなく、左手、左足を前に出す左上段の構え。剣を頭上に構える為に首下、特に胴の守りが非常に薄くなる。しかし、上段に構えると言う事はそこからの振り下ろしが中段に比べて早く、その速度、威力も半端じゃない。更に相手は真剣——木刀以上の重みで振り下ろされるその切先はこちらの守りを打ち崩して頭を割られる事だってありえる。ましてや相手は自分の体から武器を作り出せるのだから、その打ち込みで自分の刀が折れようが構いやしない。礼儀正しいその態度とは裏腹に攻撃的過ぎる構えだった。

上段への対抗法はどうだったか。中段の次に多い構えとは言え、それでも剣道では中段を使う方が圧倒的に多い。あたしは上段の構えとの対戦数は多くない。その対抗策が良く分らない。

「……君は、何故戦う」

構えたまま、あたしを睨み付けたままで刀野郎が呟いた。

「あ？」

「君達が夕子を追い詰めなければこんな事にはならなかった。妙な正義感を掲げて、自分が死ぬかも知れないのに何故戦う」

「……あたしは腹が立てば相手を殴りたくなる性分でさ。別にあなたには恨みは無いけど、人を殺すような相手を放っちゃおけないだろ」

「なるほど、人を殺すのがいけないと。……使い古された問答だけれど、何故人を殺しては駄目なんだ？ 法律で決まっているからか？ 人だって家畜を——」

「んなの関係あるか！ 人は人だ。動物は動物だ！ 人の世界の常識に動物を巻き込むんじゃないねえ！」

「その言い口だと動物はいくらでも殺して良いって聞こえるけれど」

「頭の固い野郎だな！」

「君は深く考える事をしない奴だね。それと、何故人を殺しては駄目なのか、の答えを聞けてない」

「んなの——駄目なもんは駄目なんだよ！ 人殺しなんてする奴は生きる価値が無ねえ、今自分で死ぬ！」

「そうか」

言って——刀野郎の視線があたしの後ろに、多分あたし達の様子を伺っているであろう七緒に向く。

「君の友人は、さっき僕と戦った時に一も二も無く夕子を殺そうとしたよ。それはそうさ、ただの人間がシャドウを相手取るには不利すぎる。ならペルソナを狙うのが手っ取り早いからね。つまり、その彼は人殺しを厭わない僕寄りの人間だと思っただけけど、そのあたり君はどう思うかな」

野郎の言葉に思考が止まる。いや、考えすぎて自分が今何を考えているのかが分らなくなる。七緒は否定しない。野郎もそれ以上は何も言わない。多分、刀野郎の言っている事は全て真実。つまり、つまりつまり——七緒は人を殺そうとした。自分はさっき何を言った？ 人殺しをする奴に生きる価値は無い？ つまりあたしは七緒に死ぬと言った——？

「……さっきの答えをちょっと訂正だ」

「ん？」

「人殺しはいけない。だから人を殺した奴は自殺でもしろ。それは変わらない。でも——」

七緒は頭が良い。何をするのが一番最善かを分かっている。それをするとなんが起こり、その後になるのかも分かっている。それを踏まえた上であのおばさんを殺そうとしたのだろう。あたしは成績だけで言えばクラスで中の中と言ったところだけ——

「なあ七緒、今の話本当なんだな？」

「……まあ、な」

それでも七緒の言い分は分る。理解出来る。でも、

「七緒は人を殺した事、あるのか？」

「それは無い」

断言した。なら、答えは一つ。

「人を殺すのは悪い。いや、何が悪いって言うなら、人を殺さなければならぬ状況が悪い。それならあたしはそんな状況を作り出した原因をぶっ潰す！ さし当たってはお前だ！」

「そうか。でも、君はどうなのかな？」

刀野郎の視線は七緒に向いていた。真っ直ぐに、あたしなんか見えないかのよう。

「僕は……」

七緒は答える。ゆっくりと、自分の意思で。

「目的の為に手段は選ばない。それを桐式が否定するのならそれはそれでいいさ。僕は勝手にやるだけだ」

刀野郎がそうか、と嘆息する。そうか、と感嘆する。七緒は良くも悪くも自分と言うものを持っている奴なんだろう。

「じゃあさ、あたしは邪魔するよ。お前が人を殺そうとするなら、それより早くあたしはそいつをぶっ飛ばしてお前が人殺しをする前にどんな問題も解決してやる」

「なんで桐式がそんな事をする必要があるんだよ」

「友達だからだろ。あたしは、友達に死ねなんて言いたくない」

そうか、と呟く七緒。前を向いているからどんな表情をしているかは見えない。でも、多分呆れているんだろう。多分、もうあたしの相手なんかしないとでも考えているんだろう。それでもいい。それでも、あたしは勝手にやらせてもらっただけだ。

決意し、覚悟し、決心し——刀野郎を睨みつける。七緒を睨んだままのその表情は酷く苛ついていて、酷くあたし達を憎んでいるようだった。

「……死ね」

刀野郎の視線があたしに戻った瞬間、刀が振り下ろされる。あたしはその一閃を一度避けている。それで刀野郎の動きを全て読んでいるなんて思いはしないけど、それでも初めて見るのと一度見ているのでは全然違う。そう、初めて見るその一撃は、あたしの想像とも、一度見た記憶ともまるで違っていた。

「ツツツ!!」

右手を水の剣から離し、刀野郎に直角になるような形で体を大きく開く。右上から左下へ振り下ろされた剣線は紙一重のところあたしの体を掠めていった。あまりにも早く、あまりにも速く、あまりにも疾い。あたしからの反撃を恐れてか、二の太刀を繰り出す事はせずに即座に後ろに下がり、またも威圧的な左上段の構えを見せた。

中段の構えは常に相手に剣を突き出した形だから不用意に踏み込めばそのまま迎撃される恐れもあるし、まともな迎撃が出来なくともほんの少し剣先の位置を変えるだけで自分から剣に当たりに行ってしまうなんて事もある。しかしそれすらも——いや、あたしにそんな反撃をさせる事も無く、刀野郎の剣はあたしの命を絶つ為に振り下ろされた。

「……僕は、お前達が憎い。その憎しみが僕の剣に力を乗せる。逃げるなら見逃す。だから、退け」

あたしは、そこまで恨まれる事をしたのだろうか。いや、本人が言うのならしたのだろう。なるほど、あたしへの恨みが殆ど無かった一戦目は力が発揮出来なかった。だから簡単に避けれたと言う事だったのか。つまり今のこいつには簡単に勝つ事は出来ない、と言う事か。

「じよ、上等だよ……!!」

剣を握り直す。しかし、あたしの手は震えていた。恐怖で、がたがたと震えていた。でも——

「やってやらあ!」

大声を出し、震えを止める。緊張を止める為にも攻撃の為にも声を出すと言うのは非常に効果的だ。それでも微かに震える手で、体で刀野郎に対峙する。

「キアアアアア——!!」

叫び、一步踏み込み、あたしの得意技である突きを繰り出し——しかし、刀野郎の姿が消える。あたしの背後か、それとも頭上?

どちらにせよ、何処からか攻撃が――

「ぐあ！」

しかし叫びはあたしの背後から。振り返ろうとした瞬間、七緒の持っていたナイフが力無くあたしの近くに落ちる。その延長線上にはおぼさんの姿があった。それは、七緒が刀野郎を無視しておぼさんを狙ったと言う事だろうか。

振り返る。そこには腹を刀で斬られた七緒と、刀を持って佇む野郎の姿があった。野郎が憎しみを増すと言うのなら、おぼさんを狙った七緒に対する憎しみで姿が捉えられなくなるほどの動きが出来るようになったと言う事だろう。

「は！ 掛かったな……！」

何とか致命傷にはなっていなかったらしい七緒が、しかし負け惜しみのように呟く。

「何を言って――」

だが、刀野郎は知らなかったんだろう。そう言えば刀野郎は七緒と戦った時にイチは居なかった。居ても、イチはただ駆けつけただけで戦いをしていなかった。だから――

「紅葉！」

イチがあたしを押し倒して地面に伏せさせた。その数瞬後、イチが覆い被さってきている所為で見る事は出来なかったけれど――激しい爆音が轟いた。

「へへ、やったぜ」

言いながらイチがあたしの体を支えながら立ち上がった。爆音のした方向を見る。そこにはおぼさんが倒れていた。恐らくイチが投げたのは爆弾なのだろう。あたしを助けてくれた時もそんな物を投げたらしい。そんな爆弾の直撃は受けなかったものの、おぼさんは左半身に火傷を負っていた。それでも、生きてはいた。

「な……お前！」

刀野郎が自分の足元に倒れ伏す七緒にトドメを刺すべく刀を振り上げる。しかしその動きは止まり、数秒の躊躇いを見せてからおぼ

さんの元に駆け寄る。それを見てあたし達も七緒に駆け寄った。

「やったか？」

血の流れる腹を押えながら七緒が体を起し、あたしに問い掛けてくる。

「その台詞を言う時は大抵やってない。て言うか無茶しすぎだ！」

「は、こうでもしなきゃ勝てな——」

「勝つ！ あたしはあの刀野郎に勝つ！」

怒りに任せて剣を握り、刀野郎に向ける。しかし、しかし、しかし——刀野郎は、自分の主を、ペルソナを、自分の刀で刺し殺していた。

左手で顔を庇ったからだろう、焼け爛れた左手で刀野郎の顔を引き寄せ、綺麗な顔を近づけ、おばさんは刀野郎に口付けをし——そしてそのまま息を引き取った。

「何して——」

「君は、人を殺したい程に憎んだ事は無いか？」

「何してんだよお前！」

「僕はいつもそうだった。夫の暴言に耐え、それを悟らせまいと周囲に気を配り、常に円満な家庭なのだと意地を張るしかなかった。しかし僕は心底夫を憎み、そんな自分の心情を悟ってくれない周囲の人間を憎み、そしてそんな事をしなければならぬ自分を憎んで今まで過ごしていたんだ。僕が人を殺すのは、他人が憎いからだ。僕が人を殺さなければならぬのは、他人が僕の事を知ってくれなかったからだ。僕が僕を殺すのは、全てを曝け出せなかった僕が憎いからだ。だから僕は殺す。全てを殺す。憎い者を殺す。僕を殺さなければならなくなったお前も、皆、全て、一切合切、全て平等に殺す——！」

意味の分からない事を口走りながら憎しみに顔を歪めた刀野郎は、ただその憎しみをぶつける為にあたし達に向けて走ってきた。脇に刀を構え、走る勢いを刀に載せて全速全力の胴。まともに受けければ同じ刀を持っても砕かれ、体を真っ二つにされるその一撃を、

あたしは水の剣で受ける。刀が――折れる。当たり前だ。ただの刀でこの剣は折れない。

「シアアアア！！」

無我夢中だった。この剣で頭を叩けば人間は死ぬ。そんな事は分かっていたけれど――目の前で人を殺したこいつを見てあたしは冷静でいられなかった。

刀野郎が新しい刀を手の平から生み出しながらあたしの面打ちを防ごうとする。しかしそんな事が出来る訳も無い。刀は簡単に折れ、頭を狙った剣はしかし辛うじて避けた刀野郎の左肩にめり込む。いや、そのまま叩き切った。姫も怒ったのだろう――力の調整を誤っていたようだ。

「な――なんだ、その刀――！」

「は！ プール一杯分の水を固めてんだ、テメエの頭なんざスイカみてえに叩き割ってやるよ！！」

もう剣道だなんて言えないような、バットでも振り回すようにして剣を振る。刀野郎は再度刀を生み出しながら大きく後ろへ下がった。叩き切られた肩からは血が吹き出ていたが、地面に落ちた腕からは血は流れ出ず、段々と霧のようにして消えていく。シャドウは体を魔力の霧に戻せば傷が治るらしい。腕が切られても治るのかは分らないけれど、それでも血を止める為にも一度はそうするだろう。その前に――

「ペルソナを失ったシャドウは体を霧に出来ない。そんな事をしたらそのまま魔力は霧散して元の体に戻れなくなる。……そもそもペルソナを失った時点で自分の体を作る魔力が送られてこなくなるからシャドウは消えるしかない。もし人殺しが嫌だって言うなら、このまま逃げればあいつは勝手に消えるぞ」

腹の怪我が痛むだろうに、イチの肩を借りながら七緒は立ち上がって言った。あいつはそれを知らずにペルソナを殺したのだろうか。いや、知っている筈だ。シャドウは、そういう存在だ。ペルソナの事を全て知って、そして自分の事を全て知っている。そんな存在だ。

だから——こいつはあたしが言った通りに、自分で自分を殺したんだ。もちろんそれはあたしが言ったからじゃないだろう。むしろ、それは——

「自分が望んだからって、自分を殺す奴は人殺しと同じくらい大嫌いだ！」

剣を振りかざしながら駆け、大振りに、それこそスイカ割りをするかのように振り下ろす。逃げるような素振りは見せない。しかしあたしの剣を受けるようにして残った右手に刀を持ち、頭上に掲げる。もう何も分らなくなっていた。この一撃で、人間を殺してしまう事になるのは分かっているのに、何も分らなくなっていた——そんな矢先に、この秋空に不似合いな爽やかで温かな風が吹いく。あまりにも温かくて、暖かくて、今自分が何をしようとしているのかを思い出させるほどだった。

刀野郎の頭を狙って振り下ろした剣を強引に止める。止まった剣を見てしかし、野郎は頭上にかざしていた刀を振り、あたしに切りかかってきた。剣を止めるのに夢中でその反撃を避ける事も受ける事も出来ない。やられる、そう思った瞬間、あたしの体は後ろに引き倒された。空を斬る剣線。しかし返す刀で、あたしを後ろに倒した七緒の体に、

「やめ——」

あたしの声なんてまるで無視をして、その刀の切先は七緒を引き裂く。血を撒き散らして倒れる七緒。その体をイチが顔を蒼白にしながら抱き止める。トドメを刺すべく、刀野郎は血走った目であたし達に襲い掛かった。倒れたまま立ち上がる暇が無く、それでも刀野郎を迎え撃つ為に剣を構える。振り下ろされる刀。たとえその一撃を防いでも、座ったままの状態で二度三度と繰り返される攻撃を捌ききれとは思えない。死。それを覚悟した瞬間、突風は起きた。雑草を地面ごと抉るようにしながら己の突進の勢いを殺しつつ飛翔。空中で体を反転。その勢いを足に乗せた飛び後ろ回し蹴り。あたしに見えたのはその三つの動作だったけれど、その威力は人間を、



それも大の大人を十数メートル吹っ飛ばす程の威力を持っていた。

見えたのは色気も何も無い緑のジャージ。セミロングの茶髪を頭の後ろでゴムで止めている姿は、普通にそこら辺にいるお姉さんには見えない。端正な顔立ちはテレビで見るとような美人からは見劣りするのだろうけど、何となく体育会系な活発さが伺え、きつと男からは人気があるだろうと思える。そんな人が、温かな風を纏ってそこに立っていた。きつく睨む目は吹き飛んだ刀野郎に向いている。しかしその目はすぐに心配そうな様子に変わり、七緒の事を見詰めていた。

「大丈夫？ もう少し早く気付いていれば……」

言いながら自分のジャージの上着を脱いだお姉さん。下は白いシャツで、汗で少し濡れている。小ぶりの胸を包むスポーツブラが少し透けて見えていた。イチが多少警戒しながらも近付いてくるお姉さんに七緒の体を委ねる。ジャージを傷口にきつく巻き、血止めをした。その間も痛みで呻いていた七緒。取り合えずまだ生きてはいけるけれど、それでも命の危険があるのは変わらない。こんな時に昼間に会ったあのお姉さんが居れば、と無い物ねだりをするが今はそんな時じゃない。七緒のポケットを弄って携帯を取り出し、不慣れた携帯で何とか秋子さんの電話番号を見つけて電話を掛けた。すぐに電話に出た秋子さんに事の次第を伝えていると――

「あ――う、後ろだ！」

あたし達の事を心配して刀野郎から目を離していたお姉さん。しかしあたしがその後ろから近付いてくる刀野郎の姿を捉えると、即座に叫ぶ。その声に素早く反応し、振り向き様に回し蹴りを刀野郎の頭に食らわせた。たたらを踏む刀野郎、しかしそれでも刀を構えて諦めようとしない。力ない足取りで、最早刀を持つ手も上げられないような足取りで、それでもあたし達を殺す為に強い足取りで――三步、歩いたところで崩れ落ちるように倒れた。だが刀野郎は諦めない。右腕を使って這うようにしてあたし達に迫る。鬼気迫るその表情はまさに言葉通りに鬼のようだった。お姉さんが一歩後ずさ

りながら身に風を纏って更に追撃を加えようとし――

「もういい！　もう、いい……」

ごほ、と口から血を吐き出しながら七緒が叫んだ。刀野郎がぎり、と歯を噛み締める。しかしそれも一瞬――もう這う力も無くした刀野郎の体は断ち切られた腕を初めとし、怪我を負った部分から霧に変えていく。主を――ペルソナを無くしたシャドウは一度霧に代わった体を二度と人の形に戻す事が出来なくなる。もう、刀野郎は終わった。ここで消えていくしかない。それは魔術とかの知識をまったく聞いてなかったとしてもすぐに分かっただろう。それほど目の前の殺人者の存在は希薄になっていた。

「……なあ、あんた、名前は？」

必要も無いだろうに、あたしは聞いてしまった。

「北……修一。夕子の初恋の相手の名前だ」

必要も無いだろうに、刀野郎――北修一は名乗った。

それからは誰も話さない。七緒の荒い呼吸音だけが聞こえてくる。既に秋子さんに場所も伝えている。すぐにここに来てくれるだろう。お姉さんは――そう言えば七緒の家の前で見た人だ――一緒に、あたし達を守るようにしてその場に居てくれて、秋子さんが到着する何事も無かったように公園を出る為に歩いていった。その別れ際に、

「またね、お二人さん」

そう言っただけでジョギングとは思えない速度で走り去っていく。そして、爽やかで温かな風が吹く。今度会う事があればお礼を言おう、そんな事を、あたしは考えていた。

◇Side　無口七緒

赤い夕日の差し込む自室で茶色掛かったオレンジ色の柿の皮を果物ナイフで剥く。そう言えば今年初柿だ。貝の方のカキもそろそろ食べたい。

四つに切った柿を皿に置き、もう一個皮を剥く為に柿を取る。その間にイチが自分で皮を剥いた訳じゃないのに横から搔つ攫って行ったのに腹が立ったけど気にしないようにしておこう。気にしてたらキリが無い。合わせて三つの柿を剥き終わると、手を拭いてから僕も食べ始める。その頃には既に一個と半分が食べられていたから流石にイチの頭を叩いてやった。仕方無さそうに今度はイチが柿の皮を剥いていたのでそれで手打ちにしてやる。

刀野郎こと北修一とそのペルソナ、北夕子さんとの戦いが終わってから三日が経った。秋子さんの治癒魔術のお陰で傷の治りは大分早まってはいるけど、それでも学校に出れるようになるにはあと一週間は欲しいところだ。そんな訳で怪我を理由に学校、それと他のペルソナと金髪野郎の搜索を三日休んでいた。その間に新しく買ったゲームもクリアしてしまい、割と暇をしているところだった。イチは父さんに甘えつつ外に遊びに連れて行ってもらったり一人で رفتりしてるのが何となく羨ましい。それに父さんは父さんでまた一人子供が出来たかのように、それも――中身はともかく――女だからとにかく可愛がっていたりする。それで服を買って貰ったりして、なんかいつも女のような格好をして気持ち悪かった。今もジーパンの上はなんて言う服なのかは分らないけれど、白いフリフリのついた服でとにかくキモイ。

「可愛いだろ」

なんて言うもんだから二、三回吐いたくらいだ。

「嘘をつけよ」

「何で僕の独白がお前に聞こえるんだ」

「知るか」

ぱっぱと柿を切り終わったイチが飽きずにまた食べ始めた。

さて、これからどうするか。柿を食べつつやり終わったゲームしかない棚を見詰めていると、廊下を歩いてくる足音が聞こえた。父さんだろうかと思っていると、ノックもせずにも襖の戸が開かれると、そこに居るのは制服姿の桐式だった。よし、なんて声を出して部屋

の中に無遠慮に踏み込んでくると、手に持ったビニール袋を部屋の中央、柿の皿の乗ったテーブルの上に置く。

「また来たのか」

「なんだー、嬉しくないのかーこのやろー」

時間的にも部活帰りなんだろう。ポニーテイルの髪からほのかに香るシャンプーの匂いは部活で掻いた汗を流したからだろうか。我が校の剣道部はかなり強い所為か優遇されていて、シャワールームまで付けられていたりする。進学校じゃないから割とギリギリまで部活に勤しんでいる三年生も居るらしい中でレギュラー入りしている桐式の腕前はやはり相当なものらしい。まあ、そうじゃなきゃあの刀野郎とは渡り合えなかっただろう。

そんな桐式はこの三日間毎日僕の家に来てきていた。何でもバイト代が溜まらなくてゲームが買えないから僕の家でやらせてもらうとか何とか。いい迷惑だよほんと。

「人の家を漫画喫茶か何かと勘違いしてるんじゃないか」

「んなこと無い。あ、柿おいしそうですね」

「それほどでもない」

「謙虚だなー。しかしだな、消費者が謙虚だと生産者が困る訳だ。宣伝が出来ないからな。どれ、味覚鑑定士百八段のあたしが味を見てしんぜよう」

言って、ひょいと柿を摘まんでぱくと食べる。しかも一気に三つ。そして感想は、

「美味しい、おかわり」

だった。イチに視線を向けると、めんどい、と言って僕に振ってきた。ちくしょう、使い魔なのになんで主の言う事を聞かない。

「まったく暇人だな桐式は」

「学校休んでゲーム三昧。バイトをするでもない奴が言う事か」

「学校休んでるのは僕の所為じゃない」

と、軽口で言い合っているだけのつもりだったけれどーそれもそうだな、と桐式は少しばつの悪そうな顔を見せて苦笑した。この

女、僕が怪我をしたのを自分の所為だと思っているらしい。そんな訳もないし、そも自分でやった事なんだから気にするなと言っても聞かないから面倒だ。ただまあ、これで懲りただろう。殺し合いを体験したのなら、もう馬鹿な事など言わないだろう。そんな僕の想いは、

「そうそう、昨日もぱーっと守風と手分けして見回ってたけどさ、その金髪野郎は見つからなかったよ」

あっさりと裏切られていたのだった。って言うかあの件の翌日、僕が痛みで起き上がる事も出来なかった時に見舞いに来て、あたしは諦めないぜ、なんて怪我人に鞭打つような事をただでさえ無駄にでかい胸を張って言うんだから溜まったもんじゃない。しかも言っても聞かないし、あのお姉さん——その日の帰りに家の前で会ったらしく、名前は守風さんかみかせと言うらしい——と協力までしてるんだから性質が悪い。僕は、僕が関わっている事に僕を無視して事を進められるのが一番嫌いなんだ。なんて言っても聞く気が無いと言うよりは、怪我を治るまでは寝てろ、とまるで母親のような事を言うから腹が立ち、もう不貞腐れる事にしたのだ。勝手にやって勝手に野垂れ死ねば良い。

「あ、でも昨日見つけたラーメン屋は美味かったなあ。守風の奢りだったし」

「おー、そうそう。俺塩ラーメンあんま好きじゃなかったけど、あそこのは普通に食えたよ」

にはは、と笑って自分の青い髪を弄っているイチ。うん？ 昨日守風さんで見つけたラーメン屋の話に、何でイチが混ざれる。

「……退散」

「さてこの！」

僕の拳は体を霧に変えたイチの所為で空を切る。そのまま顔を——多分滅茶苦茶眉間に皺が寄っていると思う——桐式に向けると、そっぽを向いて自分で勝ってきたペットボトルのコーラを飲んでいった。

「……勝手にしろ」

言って、不貞寝する。もう人の話を聞かない奴なんて無視だ無視。

「おうい、起きろよー。ゲームしようずえー」

「知らん」

「なんだよー、つまんねーじゃねーかよー。あ、まあいいや」

そう言って何やら携帯を取り出した桐式。イチも出てこないし、もう何もかもが面倒になったからこのまま寝てしまおうかと思った矢先、テーブルの上に置いておいた携帯からコール音が鳴る。

「お、電話だぞ七緒」

ぽい、と桐式が放って来た携帯を寝そべったまま掴む。画面には数字が羅列されていた。つまり登録してない相手から掛かってきている訳だ。振り込め詐欺とかだったらイマイさんのように何度も掛け直して、って言うのをやってみたいが、今までそんな詐欺野郎からの電話は掛かってこなかった。とりあえず出なくても良いかと思いつつ、数秒の間を取って悩んだ結果、電話に出てみた。

「もしもし」

聞こえる声は、携帯と目の前の桐式から。呆れながら電話を切り、「何してんだよ」

「や、お互いの番号知らないと困るだろ。メアドは登録しといたぜぐ、と親指を立てた右手を突き出した桐式。ぺろと出した舌はペコちゃんを思い出させた。言われてアドレス帳を確認すると、確かに桐式紅葉の名が――無い。代わりに、地母神モミジの名前が。お前はどこのアトラスゲーの悪魔だ。」

「分りにくいから名前は変えておく」

「なんだとこの野郎。人が三日間考えて考えたあたしの愛らしい愛称になんてことしてくれやがる」

「うるせえこの野郎。お前勝手に携帯見たんだからな、後で謝罪会見開くからな」

「この度は、大変申し訳ありませんでした」

正座に座り直し、深く頭を下げる桐式。なんだろう、自分でネタ

を振っておいてなんだけど大量のカメラのフラッシュを焚いた方が  
良いんだろうか。

「ま、登録を消さないと言ったから許してやろう」

「許すのは僕だろ！ 消すぞこの野郎！」

「なんだなんだ、ななちゃんは口が悪いなあ」

「桐式の所為だ。ったく……」

そんなやり取り。そう言えば確かにお互いの連絡先を交換してい  
なかった。まあ――別にそれくらいはしてもいい。

「ん、嬉しくなさそうだな」

「嬉しくはないな」

「なんだと。あたしと話をしてもつまらないってか」

「……いや」

「ん？」

頭を掻きつつ、桐式から視線を外す。まあなんと言うか、楽しく  
ない訳はないわな。

「楽しくて楽しくて仕方ないぜ。結婚しよう、紅葉」

「てめえは引っ込んでろ！」

イチが出てくるタイミングはもう把握している。馬鹿を言ったイ  
チがまた消えてしまう前に顔面に拳を叩き込む事に成功すると、む  
きゅう、と声を上げながらイチがまた姿を消した。良い気味だ。

「なるほど、楽しいか」

「んな訳ないだろ」

「はは、七緒はまだ知らないからなー。ま、だからこそからかって  
て面白い」

「は？ 知らないって、なにが」

「さーな。ま、一度位腹割ってイチと話したらいいんじゃないかな」  
「けけ、と笑いながらまだ僕をからかおうとする桐式。なんだか腹  
は立つ。」

「ま、いいか。それにしてもあのぶっきらぼうな七緒と友達になれ  
るとは思わなかったな」

「ソウデスカ」

「ははは、照れんなよ。ま、コンゴトモヨロシク」

言って、桐式が左手で頬杖をしながら右手を差し出してくる。僕はその手に体を起しながら右手を差し出し、

「なんてな」

握手をしようとする桐式の手を、自分の手をサッと引いてかわすのだった。

「おいおい、ツンデレだなあ。でもちょっとツンが長すぎるゾ」

そう言って桐式は笑うのだった。柔らかく、温かく、無垢な、そんな笑顔で笑うのだった。



## 第二章 ヴァイオレット・アヴァロン その一

鬼の形相で北修一が迫る。しかしその身は足から腕から、段々と朽ちていった。まるで赤く彩られた紅葉が枯れ落ちるように、しかしそんな季節の移り変わりでも、時間の経過でもその記憶を忘れさせないように、北修一は決死の表情で、必死の表情で睨みながら朽ちていく。

これは夢。そんな事は分かっている。あれから一ヶ月が経ち、何度も同じ夢を見ているのだからそんなものは確認せずとも分かっている。現実の世界は夜。深まった秋の寒さを全身に感じながら自分は眠っているのだらうけれど――

「っ！」

苦痛に、悲痛に目が覚めた。外気は予想通り寒いが、体はまるで暑い夏の朝のように嫌な汗でぐっしょりと濡れていた。

◇Side 無口七緒

ごく平凡な生徒の通うごくごく平凡な石間高校へ向けて僕は自転車を走らせていた。一ヶ月前に負った怪我も秋子さんの治療のお陰ですっかりと完治している。学校に向かう途中の公園の地面には落葉が敷き詰められ、深まった秋と後の冬の到来を感じさせていた。この時期になると毎年父さんは家の庭の落葉を集めて焚き火をして焼き芋を作っている。僕の母さん――あまり顔も覚えていないけど――が焼き芋が好きだったから家の仏壇にお供えする為だとか。まあ自分が食べたいからと言うのもあるんだろうけど。

早すぎも遅すぎもしない時間に学校の校門を抜ける。比較的新しく近代的な校舎はしかし、コンクリートの打ちっ放しの外壁の所為で寒そうに見える。そんな校舎を尻目に自転車を止める為に駐輪場に向かうと、見知った顔が駐輪場から歩いてきた。

「おはよう、無口」

にかつと爽やかな笑顔で片手を挙げながら挨拶をしてくる男。その人は三年生で剣道部のキャプテン——いや、元キャプテンの立石先輩。高校卒業後は就職をすると以前から言っていたらしく、既に内定も貰っている事から引退をした身でも部活動に顔を出し後輩の育成に励んでいるんだとか。個人戦ではあるものの何らかの大会で優勝をしたらしく実力は折り紙付き。高い背と整った顔立ちとその実績から女子に人気があるらしく、彼の存在による女子の入部者は多いと桐式から聞いた。まあ、桐式の所為で見た目ちよつとアレな連中も入部したらしく、その上キャプテンのしごきがキツイらしくてその大半が辞めていったのかなんとか。僕も桐式に勧められて——と言うか無理矢理連れられて——見学に行ったのだけれど、本当に高校生の部活動なのかと言う位の練習をしていて驚いたほどだ。

そんな桐式との出会いをきっかけに知り合った立石先輩に会釈をしつつ擦れ違うと、今度は毎日見る顔が向こうから歩いてくる。制服の下にセーターを着込み、赤いマフラーを首に巻いての完全防寒。女子高生の防寒は大抵上半身だけを暖めて下半身は短いスカートと言うものだけれど、あいつはいつも通りのロングスカートだから他の女子よりは温かそうに見えた。

「七緒ー、おはようさん」

自転車を停めている僕の背中を思い切り叩く桐式。寒さで敏感になっている肌を叩かれればかなり痛い訳で——

「つつつつ——！」

「ははは！」

桐式が痛みに悶絶する僕を指差しながら笑う。お前の背中を叩いてやろうかこんちくしょう。

「ふいい、今日も寒いなあ」

ひとしきり笑ってからそんな事を言って体を震わせた桐式と並んで校舎に向かう。が、桐式の様子が少しおかしい。家が僕の家とは正反対の方向にある桐式とは登校が一緒になることは無かったけれ

どクラスが一緒な事でほぼ毎日顔を合わせている。そんなだからいつもより少し顔色が悪いな、なんてのもすぐに分かっってしまうのだった。

「なんか疲れてるな」

「ん？　ちよつと夜遅くまでゲームしてたりしてて疲れてるんだ。部活もあるしさ」

はは、と先程とは打って変わって乾いた笑みを浮かべた桐式。県大会はもう一ヶ月ほど前に終わったらしいし、次の大会は来月に迫る新人戦と言う事で一年生の育成に励んでいるとの事で、その練習で疲れているんだろう。ちなみに桐式は女子剣道部のキャプテン級の実力があるものの、サボリが多いからとキャプテンには選ばれていない。とは言っても女子のキャプテンも桐式と同じくらいの実力らしいから問題はないんだとか。

「お、鞍馬先輩だ」

桐式の言葉にふと視線が向く。僕らの少し先を歩いている場所に、この学校きっての美少女と言われる鞍馬智子先輩がいた。僕らには気付いていないようだけれど――

「おお、いつもぶきつちよ、クラスメイトの名前も知らない七緒君も鞍馬先輩には興味津々か？　まあ学校一番の有名人だもんなー男の子だもんなー仕方ないもんなー」

桐式が言いながら嫌らしい顔で言ってくる。この女は自分こそが一番の有名人であると言う事に気付いていないのだろうか。気付いていないんだろうな。

玄関の中に消えた鞍馬先輩の背中を見てほっとしつつ少し遅れて僕らも玄関に入る。しかし鞍馬先輩はそこで友人と会って話していたらしく、運悪くも遭遇してしまった。

「あ、おはよう」

鞍馬先輩が僕に気付くと消え入りそうな声で挨拶をしてきた。視線は僕と桐式に交互に移っている。それに対して、どうも、と軽く会釈をして横を通り過ぎた。玄関で靴と上履きを履き替えると、先

に履き替えていた桐式が下駄箱の向こうで待っていたのでそのまま合流して歩いた。

「……おいおい、挨拶される仲なのか？」

「挨拶くらい誰でもするだろ」

「いやー、そんな感じには見えなかったぜ？」

「はいはい」

桐式の言葉を適当に流しつつ二人並んで玄関を抜けて中庭に出る。教室へは玄関から左右に伸びる通路を行っても行けるけれど、一旦寒空の下に出るとは言え中庭を行った方が近いからそちらを行く生徒の方が圧倒的に多い。僕らもその口だった。

購買で暖かい飲み物を買ってから階段を上って三階の二年生の教室に向かう。この学校はまるでショッピングモールのように校舎の真ん中が吹き抜けになっていて、その吹き抜けを取り囲むように教室が配置されている。中学の頃は通路側にも窓が並んでいたから入学した当初は珍しく思っていたけれど、二年も通っていると飽き飽きだ。そんな校舎内を歩いていると同級生だけでなく上級生、下級生共に人気のある桐式に挨拶をしてくる生徒達に桐式は何度も挨拶をしながら僕らの教室である二年五組の教室辿り着いた。教室の前後に設けられたストーブはフル稼動していて、その暖気にあやかうと何人かの同級生がストーブの前にたむろしていた。つい先日席替えをした教室内は今までは違う配置で同級生達が自分の机に座っていたけれど、くじ運が悪かったのかそれとも良かったのか、僕は以前と変わらず教室の一番後ろの窓際の席になった。そのちょっとした後ろにストーブがある訳ではあるが直接ストーブの温風が当たらないからストーブの恩恵と言うのがあまり無い。そして何の因果か、僕の前の席に座るのはいつも僕に絡んでくる名も知らぬ男Aで、そして右隣が桐式だった。当然桐式は毎日のように話しかけてくるし、Aはなんか前よりも僕に絡むようになってきた。まったくもって鬱陶しい。

友人の所へ歩いていった桐式の背中から視線を動かして窓の外を

見る。空は雲ひとつ無く青く澄んでいたが、

「おお……」

不意に襲ってきた体の震えは、やはり辛い寒さを痛感させてきていた。



石間町の交通の要となる石間駅。閑静な町の中で唯一、大勢の人で賑わうその場所は平日の昼間であっても活気を見せていた。

駅へ向かう者や駅から出てきた者達の間を歩き、肩が当たる事も厭わずに、むしろ肩が当たった相手を威嚇するように睨みつけながら若い男が歩く。細く鋭い目つきは常に見る物を睨んでいるかのようで、服装もどこか挑発的な印象を持たせていて、そんな様相から彼を避けるように行き交う人の間を進んだ。

駅から五分ほど歩いた場所にある小さなゲームセンターに足を踏み入れる。そこは夕方になれば下校する学生の姿が見れるが、昼間ともなれば殆ど人の姿が無い。男は暇を潰すように筐体に硬貨を入れてゲームを開始する。男はあまりそのゲームが上手い訳ではなく、やがてコンピューター相手に負けてしまうとその怒りに表情を歪めながら筐体に蹴りを入れた。激しい音がゲームセンター内に響き渡ると、その行為を注意する為に店員が現れる。しかし怒りを隠さない男に睨まれた途端に店員はすぐと引き下がってしまった。

男が舌を打ちながら店を出る為に振り返る。すると、そこには男と同じ歳程で背は男の頭二つほど小さい一人の少女が立っていた。突然の少女の登場に一瞬男が怯むが、

「お金……」

ぽつりと呟きながら少女がポケットから取り出した数枚の万札を差し出すと、男はそれをひったくるようにして受け取る。そのまま男は少女の横を通り過ぎて外に出ると、少女もその後を追った。筐体の画面を見やすくする為に薄暗くしている店の中から爽やかな青

空から太陽の光が降り注ぐ外へ出ると、その眩しさに男が目を細める。

「――若い身空の少女に援助交際をさせて金儲けとは、同じ女としては捨て置けないね」

そんな声がしたのはその時だった。男が声の方向に首を向けると、そこにはスーツに身を包むセミロングのブロンドを靡かせた女が立っていた。黒いサングラスの向こうにうつすらと見える双眸はきつく男を睨んでいるようだった。

「あんたに関係あんのかよ」

「無いね。無いが、たとえ人間じゃなくとも人の尊厳を踏みにじるような事をさせている姿を見るのは黙っていられないのさ」

女の言葉に男が僅かに動揺を見せる。そして一瞬視線を背後の少女に向けた。

「それに君も学生だろ？ 学校はどうした？」

「うるせえよ」

男が威嚇する。しかし女は動じない。

「こう見えて私は人助けを生業としてるんだ。相談なら――」  
「うるせえ――！」

男が叫ぶ。その声に背後の少女が反応し、目を見開く。一瞬周囲に風が吹き――咄嗟に振り上げた女の左腕が一瞬にして燃え上がる。

「っ――！ これは、酷いね」

炎はすぐに消えたが焼け爛れた左腕に手を当てながら女が苦痛に声を漏らした。

「は！ 余計な事するからだ」

男は悪びれる様子も無く言い放つと女の横を通り過ぎて歩いていった。周囲の人間は発火の瞬間を見ていなかったのか、ただ二人が口論しているだけだと思ったのか、とにかく騒動に巻き込まれないようにと言わんばかりに目を逸らして歩き去っていった。そんな人の流れに乗った男の背中に、

「ふむ……思っていた以上に粗暴な性格だな、白沢武人君」

その男の名前を、初対面で知るはずも無い名前を投げ掛けられて男が勢い良く振り向いた。

「流石に人の往来の激しいこんな場所で暴れる訳にはいかないからね、ここは手を引かせてもらおうよ。さて、君の住所はどこだったか……ま、これからの行動と夜道には気をつける事だ、病院で病院食を食べる羽目になりたくなければね」

言って、女は左手を振りながら歩いていった。服は焼け焦げ、しかし焼け爛れていた筈の肌は元の白さを取り戻している。男——白沢はその場に立ち止まり、女の姿が見えなくなるまでその後ろ姿をずっと睨みつけていた。

焼け焦げた左腕のスーツの袖を右手で隠しながら道を歩く女。とにかく着替えよう、そう考えていた矢先に、頭の中に男の声が響く。

「ヴァイオレット様、あまり無茶は……」

「黙ってなさい」

その声に冷たい返答をした女、ヴァイオレットはつまらなさそうに口を尖らせていた。

「それにあの文句はどう聞いても彼等を脅しているようにしか……」  
「脅してるのよ。あれで私に怯えて変な事をしなくなれば儲けものでしょ。とにかく、あんたは黙ってなさい」

ヴァイオレットの剣幕に押され、声の主は、はあ、と元気の無い返事をして言われたとおりに黙る。田舎町に珍しい外人の姿に周囲から視線が向けられるが、それを気にした風も無く駅から程近い十階建てのホテルへ到着した。エントランスを抜けてエレベーターホールからエレベーターに乗り、最上階のボタンを押すとエレベーターはゆっくりと移動を開始する。その籠内にヴァイオレット以外の人の姿は無く——

「ヴァイオレット様、お怪我は大丈夫ですか？」

そこに、執事服に身を包み短い黒髪をオールバックにした男が現れた。二メートルに届くかと言う長身痩躯の男は頭一つほど背の小

さいヴァイオレットを心配そうに見詰めている。

「ジョン。ジョン・スミス。あなたは私が命令した時以外は出てこないって言った命令を忘れたのかしら？」

「ですが今は主の生命の危機。これでヴァイオレット様に傷が残るようでは従者の名折れです」

「ジョン・スミスなんて名前を付けられても名折れなんて言えるなんて、あんたはよっぽど自分に自信があるようね」

「いえ、それほどでも。とにかく腕を見せてください」

言ってジョンの白い手袋を嵌められた手がヴァイオレットの左腕に伸びるが、まるで触れられたくないと言っても言うように勢い良く腕を引いた。

「私の治癒魔術は完璧よ。あんたに見てもらおうほどじゃないわ」

「ですが後遺症が残ってしまったら――」

瞬間、ヴァイオレットの左の張り手がジョンの頬を打った。それと同時にエレベーターは止まり、扉が開く。二人は無言でエレベーターから出て通路に人が居ない事を確認して向かい合う。

「まったく問題ないでしょう？」

「はい、普段通りのキレの良い、ともすれば絶頂を迎えてしまいそうな平手打ちでした」

「……あんたのその性癖が嫌だから、私は出てくるなと言っているの。分った？ 従者なら主の言葉に従いなさい」

両手を腰に当てながら仁王立ちをして言うヴァイオレット。その言葉に、

「分りましたヴァイオレット様。しかし私はシャドウ……ペルソナの危機の時にはこの身を粉にしても守る存在である事をお忘れなきよう」

叩かれた瞬間から嬉しそうに頬を染めていたジョンは小さく頭を下げ、そしてその身を霧に変えた。そんなジョンの言動を受けてヴァイオレットは頭を抱えるように俯き、

「何でこんな変態マゾ野郎が私から出てくるかなあ……オズワルド



の奴はどんな魔術を使ったのよ」

一人愚痴を零すのだった。

## ◇Side 桐式紅葉

学校が終わった後の放課後、無口家週に一度のお楽しみ。しかしこの日の末っ子のご機嫌はいつもナナメ。

七緒の家の客間には大黒柱のゲンさんとその息子の七緒とイチ、秋子さん、あたしと姫、そして守風の七人が揃っていた。ペルソナとシャドウの関わるこの事件を解決する為に秋子さんに協力を仰がれたあたし達六人は週に一度はこうして集まって情報を交換する事になっていた。とは言っても主に情報を持ってくるのは常日頃からジョギングとは言えない速さで走って町の見回りをしている守風からなのだけれど。

日によって色の違うジャージ——今日は赤だった——を着込んでいた守風は流石に四回目ともなるとこれと言った有力な情報は無く、少し申し訳なさそうだった。しかし普段学校に行っているあたし達や仕事や魔術師としての町の管理をしているゲンさんは守風のようなフットワークの軽さが無いから、むしろ守風にばかり捜査をさせていて申し訳なくなるのはこちらの方だったりする。

「結局最近聞く噂以上の収穫はないのー」

そう言って蓄えた白髭を撫でるゲンさん。ちなみにその髭がオシヤレだとジバゲのおぼさん達はメロメロだ。

「正体不明の正義の味方と黒い風、それに七緒君と紅葉さんの学校の同級生か。同級生はともかく、前の二つは噂だけで姿は見えないですね」

あぐらを組みながらむう、と唸る守風。

その三つの噂はあたし達の前にシャドウが現れた二ヶ月前から徐々に、一ヶ月前から顕著に聞く様になった噂だった。

その内の一つ、正体不明の正義の味方とは、例えばカツアゲ現場

に颯爽と現れては加害者を一蹴して立ち去るだとか、喧嘩の場に颯爽と現れて両者を足蹴にして立ち去るだとか、果ては暴走車の前に颯爽と現れてその車を破壊して立ち去るだとか。噂の域は出ないけれど、とにかく被害者を病院送りにする以上の噂は聞かないからとあたし達の間ではその人物への接触の優先度は低い。そもそもペルソナが絡んでいるかも知分かっていないからだった。

そして黒い風。普通風なんてのは目に見えるものじゃないのだろうけれど、その被害者の大半は”黒い風にやられた”と言ったらしい。それを風と認識したのかは分らないけれど、とにかく黒い何かに襲われたのだとか。そして被害者――そう、被害者が出ている。それも怪我だとかじゃなく、死者が――は増え続ける一方で、この一ヶ月で死者は三人、怪我人は十二人に及んでいる。ペルソナが絡んでいるかは断定出来ないし、他から流れてきた魔術師による被害かも知れないけれど、それでもあたし達が見つけ出さなければならぬ相手の最優先はこの黒い風だった。そして――

「その同級生、学校に来ていないのよね？」

秋子さんが聞いてくる。

最後の噂――あたしの同級生、とは言ってもあまり話した事もない他のクラスの生徒なのだけれど、その生徒、白沢武人の噂は同じ学校同じ学年と言う事で一番に聞こえてくる。とは言え噂され出したのは一週間以内と言うつい最近だ。

「どんな奴なんだ？」

七緒が聞いてくる。

「あたしもあんまり知らないんだけど……」

「お節焼きの桐式が知らないなんて珍しいな」

「まーな。あいつ、結構気難しい奴でさ、協調性が無いと言うか社会性が無いというか……遊びに誘ってもめんどくせえの一言で断るんだと。代わりに自分から誘う時は無理矢理にでも連れ出そうとするから周りからハブられてるって感じ」

「へえ。面倒なやつだな。一匹狼気取りって感じか？」

「どうなんだろうなあ。あたしから話しかけた事もあるけど無視されたよ」

ふうん、とそれきり興味をなくしたようにテーブルのお茶に手を伸ばした七緒。

「そいつって何をやらかしてんの？」

そして七緒の言葉を引き継ぐ形でイチが聞いてくる。この一ヶ月でイチと姫はすっかり仲良しになって、今もイチの膝の上に姫が座っていた。どうもイチからすると姫は子供すぎて守備範囲外らしい。ちなみにあたしはイチに告られた。丁重にお断りしたけれど。

「あたしが聞くのは自分の女を使って援助交際させて儲けてるって話だけど。もう一週間近く学校に来てないからその程度しかあたしも知らないな。で、その女ってのがどうもおかしいらしくてさ。火を起すらしいぜ？ ライターも持ってないのに白沢の煙草に火を付けたとか」

「ふーん。まあその程度なら放っておいてもいいか」

そうイチが言って、テーブルのせんべいを取って二つに割ってから姫と二人で食べ始めた。しかし反論をしたのは守風だった。

「駄目だ。いくらシャドウだからと言って女にそんな事をさせる奴は許せない。見つけ次第制裁を加えるべきだ」

「いやー、でもさ……って言うかその女がシャドウだなんてのも分らないんだし」

「そんな事は関係ない！ 同じ女なのだからお前だってこの気持ちちが分るだろう！」

がー、と怒鳴る守風。姫とは対照的にイチと守風はなんとも仲が良くない。初めの頃こそお互い良く知らない同士だったから探り探りな感じだったけれど、今は犬猿の仲のようだ。大抵は不真面目なイチを生真面目な守風が叱ると言う様子だ。

「俺は男だって何度言えば……」

「ええい、ならその体を好きでもない男に弄られる事をイメージしてみろ！」

と、自分に言われた訳じゃないのに想像してしまって嫌な気分になる。そんなあたしの様子に気付いたのか、ばつが悪そうに守風がすみませんと皆に謝って姿勢を正した。

「じゃあこれから当面の目標は黒い風の捜査、と言う事でいいかの」

ゲンさんがそう言うのと、全員が納得するようにして頷いてそぞろと立ち上がる。時計を見てみるとまだ五時を少し過ぎた頃だった。

今日はバイトが無いからそのまま帰ってもいいし、七緒の部屋で遊んで行ってもいい。それとも守風と一緒に捜査をするか――なんて考えていると、

「七緒……いい加減諦めんか。ワシらが使える手段は少ない、紅葉さんが協力してくれるんだから――」

「危ないだろ。桐式に何かあったらどうするんだよ」

「そこはお前が守ってやればいいだろうに」

「何でそんなに楽観的なんだよ！ あの刀野郎との時だって守風さんが居なかったら今頃は――！」

七緒とゲンさんの毎回聞くやり取り。週に一度の会議の時、いつだって七緒は機嫌が悪い。それはあたしが参加しているからだと言うのはひしひしと感じている。と言うか、お前は関わるなど何度も何度も言われている。まあそれを言われる度に無視したりしてるから最近は注意もしなくなってきたけれど。

しかしこんな調子じゃこの後遊んで行くことも出来ないだろうし、捜索に行く事になっても七緒は連れて行ってくれないだろう。一人で行っても良いし守風と一緒に行っても良いけど、取り合えずそう言う事をする素振りを七緒に見せずに帰るしかあるまい。

「七緒、そうツンケンするなよ。ま、とにかく今日の所はあたしは帰るよ」

「どうせその後捜索に行くんだろ」  
ばれてた。

「……分ったよ。僕も一緒に行くから、頼むから一人で変な事をし

ようとしなくてくれ」

大きく、大げさに、これでもかと溜息を吐いた七緒。それから重い腰を上げて立ち上がると実の父のゲンさんを睨みながら玄関に向かつて行くと、あたしもゲンさんに挨拶をしてからその後を付いて行く。姫はイチと手を繋いで仲良く付いて来る。

守風は七緒と並んで歩いていた。生真面目な七緒と守風は気が合うらしくとても仲が良さそうだ。そして一人取り残されるあたし。うーん、悲しい。

## 第二章 ヴァイオレット・アヴァロン その二

◇Side 無口七緒

桐式と二人、無言で自転車を走らせる。取り合えずその足は石間公園へと向いていた。イチと姫ちゃんは体を霧に変えて僕らの周りに居る。姫ちゃんとはとかくイチは自転車が無い訳じゃないけど、その方が楽だと言う使い魔にあるまじき言動だったから後で殴る。守風さんはそろそろ自分の主が帰ってくるからと、一足先に家に帰ってしまった。守風さんはもしもの事を考え――決して僕らを信用していない訳じゃないが、それでも用心の為と言っていた――僕らと自分の主、ペルソナを会わせようとしなかった。そもそも守風さんのペルソナは仕事が忙しくてこの騒動に関わってる暇が無いらしいから放っておいても問題ないと言っていたし、正義感の強い守風さんを見ていて大丈夫だろうと僕らの間で結論は下っている。

「なあ七緒、魔術ってさ、あたしでも使えるんかな」

赤いマフラーで口を覆いながら周囲を見ている桐式が唐突に話しかけてきた。――多分、僕が不機嫌だから何を話せば良いのかと考えていたんだろう。その結果がこんな質問なのはファンタジーに憧れる桐式らしいと言えば桐式らしい。

「使えるんじゃないか？ 修行すれば」

「ふうん。七緒は何年くらい修行したんだ？ 子供の頃から？」

「小学生の……五年頃だったな。魔術師を親に持つ子供にしてみれば遅いほうだよ」

後継者を育てようとするなら、親はそれこそ生まれた時点で魔術師として大成するような儀式を施す。しかし僕はそんな事も無く安穩に、平穩に小学生の高学年まで過ごしていたのは今でも腹立だし。

「あたしも習いたいなあ」

「良い師匠が見つければいいな」

「おいおい、冷たいなあ。七緒が教えてくれればいいじゃんかよ」

「僕は――」

言葉が出てこない。ペダルを踏む足が急に重くなる。別に桐式に教えたくない訳じゃない。魔術なんて言っても深い所まで求めなければ巷の占い師がやっているような事と変わらないだろうし、危険は無い。桐式は頭が悪い訳じゃないし悪い奴でもないから魔術を悪用したり自分の力量を超えた事を望んだりもしないだろう。けれど――

「……まあいいか」

「お、その気になったな？　じゃあ早速教えてくれよ」

「あ？　何をさ」

「んー……何をだろ。あ、そう言えばさ、パレットだけ、その魔術師の組織。それってなんなんだ？」

「なんなんだ、って言われてもな……」

少し考えてみる。こうして誰かにこんな説明をするのは初めてだからどう説明して良いか迷ってしまう。それに――あの組織の深い所は説明するべきじゃないだろうし。

「元々パレットってのはさ、突然力に目覚めた超能力者を保護する為の組織だったんだ。その超能力者の力を真似て魔術として使えるように研究をし始めたのがきっかけで今は魔術師の為の学校みたいな組織になってる。もちろんそんな能力を持った連中が世間で暴れないように管理して、暴れた場合は迅速に対処出来るように専門の部隊も作ってる。父さんはさ、地域ごとで魔術師の動向を管理する仕事をしてるんだ。表向きは酒の卸売りをしたり、町の相談役みたいな事してるけどさ」

あの歳でパソコンを自分の手足のように使えるし、相談役をやっている顔が広い高性能ジジイだから色んなところで引っ張りだこで町の管理なんてしているようには見えないけど。とは言え土地の力がそれほど強い訳じゃないこの町で暴れるような魔術師はそうそう

出てこない。こんな大きな事件は僕が知る限りこれが初めてだった。「で、その管理者を七緒が引き継ぐと。親孝行だねえ。でさ、何でパレットって言うんだ？　そもそもパレットってなんだ？」

質問の意図が分り辛いが、まあ何となく何を聞きたいのかは分ったからそれに答える事にする。

「前に魔力に色が付く、って話したろ？　別にあれば本当に魔力に赤だの青だのって色が付いてる訳じゃないんだけどさ、どうもパレットの創始者の一人に個人の魔力を色で見分けてたのが居たらしくて、そんな色んな色を持ってる連中が集まってくるから絵を描く時に絵の具を混ぜる板みたいだ、って組織の名前をパレットにしたんだとさ。まあ魔術師を匿うなんていかがわしい組織だから適度に呼びやすい名前が欲しかったんだろ」

「なるほどなー」

「ちなみに魔術師として功績を残した奴には色の名前を称号としてもらえるんだ。その称号が色の三原色に近いほど偉大な功績を残した証で、金銀銅、白黒みたいな色は特殊な称号で与えられる人間は限られてて――」

説明に調子が増えてきて口が滑らかになった頃、僕の視界に、待ち焦がれてたと言ってもいい人間の姿が見えた。

短い金髪。あまり十分な栄養を採らずに研究をしているんだろう、分厚いコートの上からでも分るほどに細い体。しかし外人特有の高い背。もやしと言われそうなそんな体格ながらも意思の強そうな整った顔立ちはしっかりと僕を見詰め――そして、一ヶ月前にあの刀野郎と戦った場所にその男は入って行った。あの刀野郎のように、まるで僕らを殺す為に誘っていた。多分、いや、まず間違いなくあいつは僕がこの二ヶ月間探し続けていたあの男だ。桐式と顔を見合わせる。桐式はあいつとは会っていなかったけれど、その容貌は伝えていたから僕が何も言わずとも言いたい事は分かってくれたらしい。

四つに分かれた石間公園の南西の広場の入り口に自転車を止めて



二人で入る。一ヶ月前に比べて草は短くなっていたが、やはり何も無い、ともすれば遊び場にすらならない場所なのは変わっていないかった。もちろん北さんと刀野郎の姿は無い。そんな広場の中央に、そいつは居た。

「――修一さん、辛いのに、殺して」

不意の声。しかしその声は女のような喋り方に反してどう聞いても男の声だった。て言うか目の前の男が発していた声だった。

「あなたが殺してくれるなら私は――」

近付いてくる僕らに不敵な笑みを浮かべてそいつは言葉を続けた。  
「……北夕子は自殺願望があった。でも自殺をするのは恐かった。

周りになんて言われるか分らなかったからね。人間の――特に日本人の美徳なんだろうね、例え二度と会わない相手にだろうと嫌われたくないと思うのは」

舞台俳優のような、どこか芝居がかった口調で男は言う。

「彼女は心に闇を抱えていた。夫への憎しみ。他人への憎しみ。自分への憎しみ。特に本心を外に出せず溜まりに溜まったフラストレーションから来る自分への憎しみは強かった。それこそ自殺を考えるほどにね。そして彼女の心の闇は、夫を、見も知らぬ他人を、そして自分を殺してくれる北修一と言う人物を作り出したんだ。そして、彼女の心の闇は晴れた。死ぬ事が救いになるとは思わないけれど、彼女にとってはそれが救いになった訳だ。――結局は君に追い詰められてそうするしか無くなったただけなのかも知れないけれど、ね」

長台詞を言い終わると男はその青い瞳で僕を見た。睨むでもなく、見詰めるでもなく、ただ見てきた。

「さて、二ヶ月ぶりだね無口七緒。元気してたかい？」

ひらひらと片手を挙げるとまるで友人に会ったかのように笑った。

――酷く、不愉快だ。

「今まで隠れてた奴が今更なんで出てきた」

「隠れていた訳じゃないさ。ちよっと事情があってね、夢の国に行っていた」

「……舐めやがって」

ポケットからナイフを取り出す。マシエットがあれば、とは思っただけであんなもん携帯してたら職質されてしまう。しかし相手は魔術師、それも自我を持った使い魔を作り出す結界を町一つ包む範囲で作るような奴だ。正直生身のスペックが違うのだから装備で補いたい。

「まあまあ待て待て」

「っ！ 七緒！？」

しかし――突然僕の体が地面にうつ伏せに引き倒される。いや、違う、背中から押し倒された。叫ぶ桐式の声聞きながら首を動かす。背中に圧し掛かる何かの感触があるのだが、その何か霞が掛かったように薄ぼんやりとしか見えなかった。

「不可視の魔術、これは君に使えるかな？」

「っ……！」

腕を地面に立て、ぎり、と奥歯を噛み締めて体を起すがビクともしない。水の剣を作り出した桐式が僕と男の姿を交互に見詰めながら右往左往している。どうやら桐式の目には僕の背中の何かが薄ぼんやりとも見えていないようだった。

「自己紹介をしよう。七緒にも名乗ってなかったからね。僕はオズワルド・アヴァロン。そっちの道ではクロウズ・ヘッドとも呼ばれているけれど、まあ本名はオズワルドだ。とこれで……紅葉、君はさつき七緒に魔術を教えてくださいと頼んだね？」

「は？ それがどうしたって言うんだ！」

体は相変わらず押さえつけられたまま。首だけを何とか動かしてオズワルドと名乗った男を睨み付けた。

「君は七緒の事をそれはもう特別な奴だと思っているけれど――それは多いに間違いだ。確かに魔術師と言う枠組みで見ればその末席に彼は居るのだろう。かなり加減しているとは言え不可視の魔術も若干効いていないようだからね。でも、それだけだ」

「……何が言いたいんだ、お前」

「分からないかい？　じゃあもう少し具体的に言おう。……彼はさも魔術について詳しいと言うように君に色んな話を話していたけれど――」

「――やめろ――」

不意に、本当に不本意に、絶対に言いたくないのに、絶対に聞かれないのに――

「彼が何か一つでも魔術を使ったところを――」

「やめろ！――！」

僕は叫んでいた。叫ばずには居られなかった。

「見た事が、君にはあるかい？」

「ぐ……う、ああああ！！」

唸り、叫ぶ。全力も、限界も超えた力で体を起すがしかし、僕を押さえつける力に勝てない。

「彼は極平凡な人間だよ。魔術を習って七年経ったかな？　かの高名な、この僕でさえ師事する事を望んだ無口源一郎の教えを七年受けてもただの一つも魔術を使えない。そんな落ちこぼれだ、何の準備も修行もせずに力を使える超能力者を羨むだろうさ。憎むほどにね」

――悔しかった。何が悔しいって、何一つ言い返せない自分が悔しかった。口の中に入ってきた土の味が、その悔しさをまざまざと思い知らさせる。

偉そうな事を言っていた僕に桐式は幻滅するかも知れない。でもそれも仕方ない、全て真実なのだから。

「……だったら修行すれば良いだろ、まだあたしには時間があるんだ。勉強が出来ない奴だってな、必死に頑張ればテストで百点取れるんだよ。落ちこぼれだ平凡だって言うんならそいつの人生を全部見届けて、本当に何もせず何もやらなかった時に言いやがれ！」

桐式が叫ぶ。同情するでもなく、見放すでもなく、まだ頑張れると見守るような言葉で、僕を守ってくれた。でも――悔しくて、悔しくて、涙が出てきそうだった。

「は、良い事を言う。確かにそうだ。何と言うか、魔術師の才能は君の方が有るさうだし僕が教えてあげても良いくらいだ」

「断るね。テメーはどうせろくでもない事しか教えてくれなさそうだからな」

「ろくでもない？ ふむ」

オズワルドが小さく眉を顰め、溜息を吐いてからコートの中から黄色い何かを取り出した。それは黄色くて、はちみつの壺を持ったクマのぬいぐるみだった。どう見てもアレだった。しかしそのぬいぐるみは初めはぼんやりと、しかしすぐにその姿を完全に消した。何も見えないのに――

「逃げる桐式！」

いや、何も見えないからこそ何かとてつもなく嫌な予感がした。桐式にしても僕を置いていけないんだろう、その場に立ち止まって剣を振り回して見えなくなってしまうたぬいぐるみの襲撃を迎え撃とうとしていた。

不可視の魔術は相手に見えなくしたい対象を視認させなくする術を仕掛けるものだ。確かに僕には使えないけれど、その原理は知っている。この魔術は何も本当に見えなくしている訳じゃなく、ただそこにあると言う認識を無くさせるだけだ。対象はそこにあるし、そこにあるのだったら対象を透過して向こう側の景色が見える訳でもない。目に、脳に意識を集中する。人間、視界の端の端に見えるものは見えていようがいまいが構わなくなる。これもその原理で、そこにあると言う事実を重要視させない、言ってみれば他の物に強制的に注意を向けさせるだけだ。なら集中して見れば――

「桐式、目の前だ！」

桐式の顔の前にぼんやりと、まるでそこだけ、その部分だけに濃い霧が掛かったかのような何かが見える。

「目の前――って、あたしには何も見えねえよ！」

「良いから目の前、顔の前――！」

しかしもう遅かった。その霧は桐式の顔に当たり、

「むお!？」

「桐式!！」

「あ、あんあおえ!？」

水の剣から右手を離し、顔に付いた霧を驚づかみにする桐式。そのまま顔からそれを引き離すとオズワルドが魔術を解いたのか、桐式の手の中にさっきの黄色いクマのぬいぐるみが現れた。

「はは、夢の国からのお土産だ」

「本当に夢の国に行ってて居なかったのかよてめえ！」

気付けば僕の背中に圧し掛かっていた何かも姿を現していた。僕の背の半分はありそうな大きな赤い半ズボン姿の黒いネズミのぬいぐるみ。それが僕の事を押さえつけていたらしい。が、もう拘束する力は無く簡単に押し退けられた。

「ま、そう言う事だ。僕がその気なら君達は何の抵抗をする事もなく殺されていたんだ。これが魔術だよ。これが、魔術師だ」

立ち上がって土を落としながらネズミを蹴り飛ばす。ごろごろと転がっていくネズミを尻目に、オズワルドを睨み付けた。

「七緒、確かに君は大きな目で見れば魔術師なんだろう。今の不可視の魔術も君は辛うじてだが破ったからね。でもそれまでだ。それが君の七年の努力の結果だ。はつきり言って才能は無いしその七年は無駄な努力でしかないね」

「黙れよ」

「それに、北修一との戦いの時もそうだ。北夕子がペルソナと言う事が半ば分かっている状態で紅葉どころか自分のシャドウすら連れて行かずに一人で先行した。君は確かに勉強は出来るようだけれど——父親に認められたいが為にそんな事をするだなんて可愛いじゃないか。しかしだからこそ、君は魔術師に相応しくない。ましてや、先行した理由の一つに、紅葉に——」

「黙れ!」

ナイフを投げる。それを慌てた素振りも見せずオズワルドは避け、小さく溜息を吐いた。

「流石にこれと言うのは悪いか。まあそれも無意味なんだがね」

「うるさいんだよお前は！ 知りもしない事をぺらぺらぺら、その軽い口をぶっ潰してやるよ……！」

「は、知りもしない事、か。じゃあ教えよう。僕は君の大嫌いな超能力者だ。相手やその場所に残る記憶や思考を読み取ると言う、実に忌み嫌われる能力だよ。だから君が何を考えているか、君が紅葉を、紅葉が君をどう言う風に思っているか、そして北修一の時のようにイチの姿を見せず切り札として温存している事も全て知っている。僕の前で隠し事は無意味だ」

そんな事だろう、と今までの言動から察していたが、そんなものはどうでもいい。今はとにかくこいつをぶっ飛ばしたい。

「出来るかな、君に」

「出来る出来ねえじゃねえんだよ」

「はは、恐い恐い——つと、僕はここらで退散しようかな。うん、そうしよう」

瞬間、オズワルドが慌てた様子を隠さずにそんな事を言い始めた。明らかに動揺していて周りに、木々で囲われている広場の外に視線を向けて何かの到来に怯えているようだった。

「じゃまた」

「待てこら」

もちろん、逃亡を許す訳が無い。背中を向けたオズワルドの頭を通り越すように姿を現したイチが爆弾を放り投げた。もちろん、それは確実に殺す為の殺傷能力を持った手榴弾だ。あまりに慌ててた為に僕らの行動を読んでいなかったのか、

「おわ！？」

と言う声をオズワルドが響かせながら勢い良く背後に、僕らの方向に向けて飛んできた。イチが桐式を庇うように体を被せて守り、僕は逆に倒れるオズワルドの方向に向けて歩いた。次いで爆音。爆風で冷たい風が体を包むが、それを無視して倒れたオズワルドに向けてナイフを構え——

「刺せるのかな？」

うつ伏せのまま呟いたオズワルドの言葉に、その手が止まった。

「よっと……なんて危ない。まあいい」

コートに付いた土を払いながら、まだ周囲の様子を伺いながら言葉が続ける。

「君、この一ヶ月の間にあの夢をどれだけ見た？」

言われ、体が凍りつく。

「紅葉、君は北修一が死んでから何か変わった事は？」

オズワルドの視線が僕の肩を通り越してその後ろに居る桐式に向いた。

「……あたしは別に。ただ、人が目の前で死んだのはちょっと堪えたけどさ」

「そうか。はは、やはり魔術師としての才能と素質は紅葉の方があるようだね」

そんな軽口を聞いて頭に血が上る。

「なら教えよう、七緒がどれだけ平凡な男かと言う事をね。七緒は、あれから何度も何度も北修一の死の間際の夢を繰り返して見ている。夜中に飛び起き、震える体を抱えながらも一度眠る。そんな事を何度も繰り返して――」

もう限界だった。僕の放った右拳がオズワルドの左頬を穿つ。たたらを踏んだオズワルドが左手で頬を押えながら溜息を吐いて姿勢を正した。

「ま、今回は言い過ぎたからね、この一発はありがたくもらっておくよ。それじゃ」

左手を挙げ、今度こそはと小走りに行ったのだが――

「オーズワルドー！！」

一言ごとに大きくなってくるその声に、呼ばれた張本人の足が止まった。

「オズワルドー！ 逃げるなこの馬鹿！」

見れば、いつかの日に僕の怪我を治してくれた金髪の女が今オズ

ワールドが逃げ去ろうとしたのとは別の公園の入り口から全速力で駆けてきていた。そしてそのままの勢いで、体重を全て乗せた体当たりをぶちかまし——オズワールドを吹っ飛ばした。割と体格の良いその女の体当たりはもやし体型のオズワールドには十分すぎるほどの威力を持っていたらしい。

「あ、あああ、姉上、お、お久しぶりですね……」

「まったくだよこの馬鹿弟」

立ち上がろうとしたオズワールドの背中を踏みつける女。はちゃめちゃなその動向を見守っていると、弟と同じ青い瞳を僕らに向けてそのまま歩み寄ってきた。

「私はヴァイオレット・アヴァロン、こいつの姉よ。まあ君達もこいつの悪戯に巻き込まれたみたいだけど、こいつは私から叱っておくからさ、ちょっと今回は見逃して欲しいのよね」

そんな事を呟きながらオズワールドの姉、ヴァイオレットが手を伸ばしてきた。握手をしようと言う事だろう。

「……悪戯ってなんだよ」

僕はその手を、思いつき叩いた。

「何人死んだと思ってんだよ。それを悪戯で片付けるのかよあんたは！」

「……血の繋がった姉だからね、悪いとは思ってる。だから肉親の私から——」

「それが甘い、って七緒は言ってるだろ」

僕の言いたい事を桐式が言いながら僕の横に立った。イチも僕の後ろで、僕の体に隠れて手に武器を作り出している。

「犯罪を犯したら警察に引き渡すのが普通だ。あんたがパレットに所属してるかは知らないけど、それは魔術師でも同じだよ。そいつはパレットに引き渡す」

「どうしても？」

「どうしても。……怪我を治してもらった借りはあるよ。でも、絶対これには譲れない」



「オズワルドのやった事の責任は私が取る。私もその被害者だしさ、この町で暴れてる他のシャドウは全部私が片付けるよ。聞いた事無い？ 正義の味方の噂。訳あって私はそんな事をしててさ、ま、その傍らでばっばと片付けるから」

「傍らでってなんなんだよ！ そいつをパレットに引き渡して、この結界を消せばそれで終わるんだよ！」

あまりにも身勝手なアヴァロンの言い分に思わず声を荒げてしまった。しかし自分が言ってる事が間違ってるとは思わないし、オズワルドをパレットに引き渡すのが最善で最速の改善法だと断言できる。

「あんた、噂どおりに悪人を倒して歩いてるんだろ。そう言う、悪人を許せない奴なんだろ？ だったら何でオズワルドは例外なんだよ。肉親だからこそ厳しくするのが普通だろ」

「じゃあ君はパレットに連れて行かれる弟の姿をむぎむぎと見送れって言うのかい？」

「そう言ってんだ」

「……そうか。なら、君は私の敵だ」

突然現れ、突然敵対宣言をしたアヴァロン。台風のような女だ。

「七緒、個人的にあたしはこいつ等が許せない。手伝うぞ」

「いや——」

台風のような女だけど、でも、多分——

「ここは僕がやる。正直言うとおズワルドをパレットに引き渡しても特に何もされないよ。秋子さんが今以上の動きを出来ないのがそれを物語ってる。だからさ、これはぶっちゃけると……」

頬を掻きながら呟くと、桐式は一瞬目を丸くして僕を見詰めた後、クスクスと笑った。

「なあ正義の味方さん。あんたが人殺しをしたって噂を聞いた事無いから頼む事なだけどさ」

言って、桐式が真っ直ぐにアヴァロンを見詰めた。

「殺し合いは無しだ。どちらかが死ぬような事はしないでくれない

かな。代わりにあたしは七緒がどれだけ痛めつけられても手出ししないから」

「……別にいいよ。その方がこちらもありがたい」

「だよ。お前は どうする？ 七緒」

桐式がおどけた様子で片手を挙げ、僕に聞いてくる。その言葉に大きく溜息を吐いて、

「桐式はさ、強いよな」

「は？」

「なんでもない。僕だって本心じゃ殺しはごめんだと思ってるよ」  
言って、ナイフを仕舞った。殺さなくて済むならそれに越した事はない。

「そっか。じゃ頑張れよ、七緒、イチ」

ぽん、と僕の肩を叩き、

「うひゃ!？」

イチから変な声が上がる。思わず振り返るとイチの、桐式よりも大きな胸から桐式の手が離れて行くのが見えた。小さな声で、七緒を守ってやれ、と言った桐式の言葉は聞こえないようにする。

今までしてきた事を逆にされた事に違和感でも覚えたのか、自分の胸を触りながら歯痒そうな表情で僕の横に立った。きもちのわるい女物の服装に身を包んでいたイチだけ――

「紅葉、これ持って」

言って、その服を脱ぎ去って桐式に投げ渡すと、タンクトップにホットパンツと言うこの寒空に似合わない服装になった。

「初めての共同作業だ。あの二人むかつくからぶっ飛ばしてやろうぜ、七緒」

「だな」

イチが左拳を軽く挙げると、僕も右拳を挙げる。二人で拳を軽くぶつけ合うと、それを待っていたかのようにヴァイオレットが仁王立ちしながら大きく溜息を吐き、

「ま、流石にこうなったら不利よね。ジョン！」

何者かの名前を呼んだ瞬間、ヴァイオレットの横にオールバックの黒髪をした執事服の男が手に鞭を持って現れた。ジョンと呼ばれた男がその鞭をヴァイオレットに手渡した。

「初めて……初めてヴァイオレット様に必要とされてわたくし、感激でございます」

言いつつ、僕らの真似をしてるのだろう、右手を握ってヴァイオレットに向けて挙げる。それに対して、

「おうふ！」

ヴァイオレットの拳は真っ直ぐにジョンの頬を穿った。

「ふふ……心地よい痛みです」

「気持悪い奴だな」

そうして、僕としても初めてのペルソナとシャドウの共同戦線が始まる事になった。

## 第二章 ヴァイオレット・アヴァロン その三

「逃げるなら今のうち」

そう呟き、オズワルド・アヴァロンは自分の姉、ヴァイオレット・アヴァロンと自分を追ってきた無口七緒との戦いの場から抜き足差し足で離れて行った。離れて、行こうとした。

「どこ行きやがる！」

しかしそれを防いだのは桐式紅葉だった。水の剣を振り降ろし、オズワルドの頭を叩く。しかし水の剣はその形を崩してただの水となりオズワルドの全身を濡らした。

「さ、寒い！」

「はっはっは。てめーの所為でこうなってんだろが、逃げんなよ」紅葉の腕がオズワルドの首に回り、ヘッドロックする形でその顔を七緒とヴァイオレットの戦いの場に向けさせた。それを待っていたかのように――二人、いや、七緒とそのシャドウ、イチとヴァイオレットとそのシャドウ、ジョン・スミスの戦いが始まった。

初めに動いたのは七緒だった。低い姿勢でヴァイオレットに向けて走りつつ、七緒はポケットから取り出した弦の無いサングラスを目に当てた。その行動に疑問符を浮かべながらもヴァイオレットは鞭を構え、七緒に向けて振るおうとするが――七緒の背後のイチが野球のオーバースロー投法の要領で、拳大の何かを投げつけた。その何かは縦回転をしながら真っ直ぐに、一直線にヴァイオレットへと向かう。

「ヴァイオレット様！」

ジョンが叫ぶ。同時にその身をヴァイオレットの前で広げて主人を守る。次いで、イチの投げたその何かは七緒とジョンの間で強い閃光と音を発しながら爆発した。

ヴァイオレットの叫ぶ声も、ジョンの主人を想う声も掻き消す轟音。敵の姿を見る為の目は焼け、サングラスと耳栓で目と耳を守っ

ていた七緒の接近を用意に許してしまった。容赦の無い七緒の回し蹴りは手で顔を覆っていたジョンの腹部を強烈に打ち、その身を地に倒させる。次いでヴァイオレットに攻撃を加えようとするが——ジョンの背後に居た筈のヴァイオレットはその十数歩は離れた場所で鞭を振り上げ、

「ふん！」

容赦なく、的確に七緒を狙って振り下ろした。避ける間も無い鞭の一撃は咄嗟に防御の為に上げた七緒の左腕に当たる。しかし——

「痛ッッッ！」

元々牛や馬、果ては人間相手の拷問など、対象に致命傷を与えない程度で苦痛を与える為のその武器での打撃は七緒に予想以上の痛みを与えた。

「ちい……！」

音にやられたのだろう、片耳を塞いだヴァイオレットの姿からイチが投げた物が閃光手榴弾だと言う事に気付いていた訳ではないだろうと七緒は察したが、それでも自分のシャドウを盾にした上に見捨てるような真似をしたその迷いの無い行動から改めて敵の手強さを知る。

左腕に痛みが走りながらも動く事を確認しながら七緒は距離を詰める。対するヴァイオレットは距離を離し、鞭による追撃を放つ。二度、三度と放たれた攻撃を腕で、体で受けながらも七緒は突進を止めない。攻撃をしながら下がるヴァイオレットと攻撃を受けても進む七緒。すぐにその距離は縮まり——

「——ッ！」

繰り出されたのは、七緒の鳩尾を挟み抜くヴァイオレットの右の前蹴り。だが即座に両腕で腹を守った七緒に蹴りは止められる。蹴りを止める為に前かがみになって頭の下がった七緒の姿を見て、蹴り足を戻して地を踏み抜き、続く左の回し蹴りがその下がった頭を狙って放たれた。しかしその攻撃も右腕で防ぎ、

「シッ！」

受けた右腕をそのまま突き出しての前突きを放つ。七緒自身、防がれる、と思いつつも放ったその拳はしかし、真っ直ぐにヴァイオレットの胸を打った。痛みに顔を歪めて飛び退くヴァイオレットを七緒は追撃せずに呼吸を整えて静観する。

「……中々やるね、君。その体技はマスター無口の教えかい？」

「まあね。あんたはどうにも守勢に慣れてない感じだけど」

「そうかな？ まあこんなものだよ、私は」

ヴァイオレットが言い終わると七緒に打たれた胸に手を当てて小さく呪文を呟く。治癒の魔術は一瞬でヴァイオレットの胸から痛みを拭い去った。

「……オズワルドから手を引いてくれないかな？ あんた、正義の味方なんてやってるくらいだから悪い奴じゃないんだろ？ だってら……」

「断る。あれでも私の弟でね、姉の私が守らなきゃ誰が守るって言うんだ。それに私は正義の味方はやってるけど、それは慈善事業じゃない。単にね、助けられて安心した表情で私を見てくる連中の顔を見てると快感が走るんだよ。私が助けてやったって思うと楽しくてたまらない。ただその快感を得たいから私は正義の味方をするだけだ」

「ふうん」

ヴァイオレットの言葉を聞き、七緒は興味が無さそうな声を漏らす。だが、

「物は言いようだな。ひねくれた奴」

言って、拳を前に突き出して構える。

「悪いけどこれからは本気だ。私の鞭でずたずたにされる前に降参した方がいい」

「は、何言ってるんだ、強がり言いやがって」

「強がり、ね。ただまあ、二対一の状態になってるんだから強がりにはならないと思うけれどね」

ヴァイオレットが顔を少し動かして七緒に後ろを見るように促す。

強がりかブラフか、そんな事を考える暇も、二対一と言う言葉を聞いた七緒の頭には無かった。促されるままに、半ば自分の意思で後ろを振り返る。そこには、中身が男だとは言え女が男に馬乗りになってその顔面をひたすらに殴り続けていると言う、妙にシュールな光景が広がっていた。七緒の体に強烈な痛みが走ったのは、その光景を見た瞬間だった。

「騙しやが——」

「騙してない！」

鞭の穂先は人の目で追える速さではない。しかしその鞭を振るう腕からある程度の軌道は読める。そうやって鞭による攻撃の被害を最小限に抑えていた七緒だったが、不意打ちからの連撃に腕を見て鞭の軌跡を追う余裕もなく、ただ両腕で顔面を庇いながらその攻撃を受けるしかなかった。

「あの馬鹿……！」

半ばトリップするようにジョンを殴り続けていたイチが七緒の危機に気付いたのは、ジョンの顔面が大きく晴れ上がって最早原型を留めない程になってからだった。

自分の拳の皮が裂けて血が出ている事も構わずジョンの上から飛び降りて七緒の元に走る。だが、その右足首をジョンに掴まれ、突然の事に受身も取れずに前のめりに倒れる。

「てめ！」

倒れたまま体を反転し、掴まれていない左足で右足を掴みジョンの手を、頭を蹴りつけるがその手は離れない。

「離しやがれ——え？」

突如イチの動きが止まる。その視線はジョンの顔を凝視していた。つい先程見ることも阻まれるほどに変形してしまっていたジョンの顔がものの見事に戦いが始まったばかりの端正で整った元の顔立ちに戻っているその顔に、訳の分からない状況に動きが止まってしまったのだった。その機会にジョンは先程とは逆にイチの体に馬乗りになる形になり、白い手袋を嵌めた拳を振り下ろす。が、その拳は

イチの顔面の横、地面を打ちつけていた。

「……あの、お名前は？」

「はあ？」

「先程の攻撃、容赦も躊躇いも無くとても心地よい快感を私にもたらしてくれました。そんな攻撃を繰り返せるあなたの名前が聞きたい」

「……お前、マゾなのか？」

「はい」

即答だった。瞬間、イチの全身が悪寒で震え上がり、鳥肌が腕にびっしりと現れる。

「ど、どどど、どけ！！」

馬乗りにされたまま放つイチの拳。しかし背の低い七緒よりも小さなその女の体ではそもそもの筋力が無い上に寝転がされた状態で放つ拳はジョンに大したダメージを与える事が出来ない。しかしその拳がジョンの体に当たったときに、ジョンはどこか恍惚としたような表情を浮かべて頬を染める。その仕草にイチの悪寒は更に走り、「う、うおお！！」

指の先程度の小さな球を作り出したかと思うと、それをジョンの顔面に向けて投げた。先程の閃光手榴弾の件を思い出したジョンは右手で右耳を塞ぎ、左の二の腕で左の耳を、左の手の平で目を覆った。しかしイチが投げたその球は閃光ではなく小さな爆発と炎を起し、目を覆ったジョンの腕の肉を吹き飛ばし、骨を焼く程の傷を負わせる。

「ぐあー！」

流石のジョンもその痛みには怯み、イチの拘束が若干緩む。ジョンと同じように顔を手で覆って守っていたイチはその瞬間に腕を伸ばしてジョンの体を突き飛ばし、体を起した。七緒に視線を向けたイチの視界には、何とか鞭の穂先を掴んで膠着状態に入った二人の姿があった。しかし度重なる攻撃を受け続けた七緒の服は所々が破け、そこから血が流れ出ていた。イチの顔が青ざめる。走る足を早めよ



うとしたその時、体を揺らす衝撃が背後から襲った。

「てめえ、まだ――」

言葉の途中で、自分の脇腹に走る強烈な痛み気付く。見れば、腹から奇怪な白い何かが突き出ていた。

「……殺してしまったては約束を違えてしまいますからね、急所は外しました。それに先程のあなたの攻撃は明らかに私を殺す為の攻撃だった。文句は、無いですよね」

静かに怒ったような、そんな口調で背後のジョンが呟くと、脇腹に刺さったその白い物を引き抜く。

「あ……くあ……!」

苦痛に顔を歪めながら――しかし、すぐに異変に気付く。確かに腹は貫かれていた。血も流れ、赤いタンクトップと太ももを顕わにしているホットパンツも赤く濡れている。しかしその血を流していた筈の怪我が完全に消えていた。何度刺された場所を触っても、押しても、痛みすらなかった。

「私の力は過剰治癒……オーバーヒールとヴァイオレット様は呼んでおります。つまり、どんな傷でも一瞬で治してしまうのです。それを応用してこうして骨を成長させ武器とする事も出来る」

自身の能力の解説をするジョン。肉を削り、骨を焼いていた筈の左腕は完全に治癒し、そしてその左手を突き破る程に伸びた白い骨からはイチの体を貫いた際に付いた血が滴っていた。自身の骨に過剰な治癒を施し、肉体を突き破って武器とする。しかしそれは自分の骨である事には変わりなく、そんな物でイチの体を貫いたその衝撃はジョン自身の体にも響いていた。痛みに顔を歪めながらも手の平から突き出た骨は木の枝が朽ちるようになって地面に落ち、すぐに手の平の傷も消えて元通りに直る。

「厄介な能力だな」

「いえいえ。恐らくあなたの力であれば私に治癒の暇も与えずに消し飛ばす事も出来るでしょう」

「直撃すれば、の話だろ。……ったく、七緒があんなだってのにお

前をどうにかしなきゃ助けにも行けねえ。……まあ、あいつなら何とかやるか」

全身血まみれと言う姿ながらも、鞭と言う武器の特性からそれほど怪我ではないだろうと踏んだイチはまず目の前の敵の排除を考える。しかし、ジョンはそんなイチに対して笑みを浮かべ、

「恐らくあなたの考えは間違っております。……この場で一番危険な相手をしているのは私で、二番はあなたの主人だ。誤解が無いように言っておきますが、私と主人の力量はあなたとあなたの主人とは逆です。本来なら私がヴァイオレット様の治癒を即座に行い、そしてヴァイオレット様は怪我を負うと言う事を考えずに敵への攻撃を行う。そんな戦い方がベストなのです。つまり——私は先程あなたに組み敷かれたように、それほど戦闘力は無いのです。むしろ——」

「が!？」

ジョンの言葉の途中で、七緒の声がイチの耳に入った。思わず振り返ると、鞭を手放したヴァイオレットと肉弾戦に入った七緒がその連打を捌ききれずに強烈な蹴りを腹に食らっている瞬間が目に入る。

「七緒!」

思わず叫ぶが、七緒も負けじと突きを繰り出し、ヴァイオレットの肩を打つ。だが倍返しとでも言うかのように今度はヴァイオレットの拳が七緒の額を打った。七緒は頭を、ヴァイオレットは肩を痛めて苦痛に顔を歪める。

体術に関しては互角に見える二人だがしかし、血を流しながら戦う七緒に対し、有効打を何度か食らっているにも関わらずヴァイオレットはまるで堪えていない様子だった。

「あなたも見たでしょうけれど、ヴァイオレット様は治癒魔術を使う。それとても強力なものを素早く。分りますか? 治癒を行えないあなたの主人と戦いながらも自身のダメージを回復する事の出来るヴァイオレット様。同じ人間同士での戦いなら、どう足掻いて

もヴァイオレット様には勝てない」

「相性負けかよ……！」

体を翻して七緒の元に向かおうとするイチ。その背中をジョンが追い、服の襟首を掴んで動きを止める。

「だあ！」

苛立ちながら叫ぶとイチは体を霧に変えた。

「させない！」

ジョンがイチの体があった場所に向けて手をかざす。すると霧に変わっていたイチの体が再構築されその場に現れた。

「くっそ……！」

「そんなに主人が大事ですか」

「ツたりめえだろうが！」

イチが拳を突き出すが、ジョンの手の平で軽々と止められる。その上間髪居れずに伸びた腕の肘関節に向けてジョンの掌が打ち込まれ、軽い音と共に関節が外された。

「いっでえ！」

叫んでジョンから離れるが、腕を確認するとまたも治癒を行われていて痛みもなくなっていた。

「……舐めやがって」

俯くイチ。表情が窺い知れないが、七緒を心配していて気を散らしていた先程までと雰囲気が変わっている事にジョンが気付く。そして――イチの両手に拳大の丸い球が握られているのに気付くと、ジョンは表情を固くして身構えた。

「体、治せるんだろ？ だったらこれくらいしても大丈夫だよな」

球を手を持ったままジョンに向けてかざすイチ。その球を手放した次の瞬間、爆音が響き、そして爆炎が一直線にジョンに向けて放たれた。避けきれず体の半身を焼かれたジョン。すぐにその傷の回復は行われたが、次いで放たれたもう一つの炎の直撃を受けてしまう。

「っ……っっ！」

炎に包まれたジョンが声を発する事も出来ず、体を焼かれながら治癒を行う。炎が消えてみれば執事服の上が完全に焼かれながらも無傷のジョンが立っていた。

「は、はは……面白いなあんだ。どれだけやれば死ぬんだろうな？  
どれだけやればぶっ壊せるんだろうな!？」

ジョンの背筋に冷たいものが走る。イチの表情は恍惚に歪み、目の色は獲物を求める獣のような輝きを放っていた。

「もう七緒なんてどうでも良い。どうせ殺されないんだろ？ だったらお前が壊れるまで好き放題やらせてもらうぜ……!」

イチが両腕を振り上げると同時に黒い小さな影が幾つも上空に放り投げられた。ジョンが見上げると、それは先程自分に向けて炎を吐いたのと同じ丸い球だった。思わず背後に飛ぼうとした瞬間、上空の球が炸裂する。降り注いだのは――小指程度の大きさの数百の針だった。頭を守る為に腕を上げてその針を防ごうとするが、全身に降り注ぐ針の前にはその行為はほぼ無意味とも言える行為だった。

「い、イチ!？」

そんな、完全に相手を殺す為の行為に驚きを隠せずに叫んだのは静観していた紅葉だった。声を聞いてイチの顔が紅葉に向く。その表情は、どう見ても楽しんでるようにしか見えない。

そしてその行動に気付いたのは紅葉だけではなく、共に戦っていた七緒とヴァイオレットもだった。

「……あれは君の意思か？」

「違う」

「私のシャドウはそれほど戦える訳じゃなくてね、あんな奴が相手では瞬殺される。君の恋人との約束を違えてしまうが、どうする？」

血まみれの七緒が繰り出した拳を無傷のヴァイオレットが片手で受けたその状態で固まる二人。暫く七緒が考えた後、

「桐式は別に恋人とかじゃない。……あの馬鹿を止めよう。このままじゃそろそろ桐式がしゃしゃり出てくる」

「オツケイ、そうしよう」

ぽん、と七緒の額に手の平を当てるヴァイオレット。即座に短い呪文を呟くと、一瞬にして七緒の傷は塞がっていた。

「有効打だけで言えば私の方が何度も貫っていたけれどね、今回は引き分けでしょう」

その言葉の答えを待たずにヴァイオレットは走り出す。イチから投げられる爆弾の数々を、自分の治癒を行いつつ受けるジョンに視線を一瞬向けながらイチの背中に体当たりをする。地面に引き倒されるイチに、

「この馬鹿野郎、何してんだよ！」

七緒が叫びながら襟首を掴んで引き起こす。しかしイチは腕を振るって七緒を殴ると、一足飛びに三人から離れた。手には球、それをヴァイオレットに向ける。その表情は今まで七緒が見た事も無いような、快楽に歪んだ、酷く悪魔的な笑顔だった。

「チッ！」

七緒がヴァイオレットの体を抱えながら地面を転がる。その体の上を炎が走った。七緒の背中を炎が掠める。その熱に七緒が苦痛にヴァイオレットを抱える腕の力を強めた。

「だ、大丈夫か？」

その腕の締め付けに痛みを感じながらも七緒への治癒を行うヴァイオレット。炎が止むとヴァイオレットを離して立ち上がる。イチは――七緒がヴァイオレットを抱き抱えている所為で攻撃が出来ないとなると、その標的をジョンに変えていた。流石のジョンも度重なる肉体の損傷と治癒に疲れを見せ始め動きが鈍くなっている。

「イチ、止めろ！」

様子を伺っていた紅葉がイチの背後から羽交い絞めにする。暴れるイチの肘が紅葉の脇腹を打つと拘束が緩み、その瞬間イチが体を反転させて押し倒す。

「どうしたって言うんだよイチ！」

「うるさい！……紅葉はさ、可愛いよなあ……ぶっ壊してやったらどんな顔するかな、紅葉は」

イチの愉悅の表情が紅葉の顔に迫る。目を瞑り顔を背ける紅葉の顎を掴んで自分の唇を近づけていくと、紅葉の手袋に変身していた姫が人の姿に変わり、イチよりも小さな体を使って全力でイチを突き飛ばす。

紅葉の上から地面に転がされたイチはすぐに立ち上がると、

「ぶわ!？」

姫が手の平から出した水を全身に浴びてその動きを止めた。瞬間、「このやろ!」

七緒の容赦の無いバックドロップキックがイチの体を吹っ飛ばした。地面を何回転もしながら転がり、最終的に仰向けで地面に倒れる。そのままピクリとも動かない。七緒が紅葉に駆け寄り腕で支えて体を起す。

「大丈夫か？」

「う、うん……ちょっとびっくりした」

紅葉が立ち上がると体に付いた土ぼこりは姫が必死に叩いて落としていた。

「終わったかな？」

濡れた体を抱えてくしゃみをしながらオズワルドが歩いて寄ってくる。それに合わせてヴァイオレットとジョンも歩いてきた。

「ま、まさか死んだのか!？」

紅葉が叫ぶが、

「シャドウが死んだら体が魔力の霧になって霧散する。ただ気絶してるだけじゃないかな」

オズワルドが慌てた素振りもなく、体を震わせて答えた。七緒が恐る恐る倒れるイチに近付くと、それに釣られるように紅葉と姫が後に続いた。イチの体を仰向けにすると、本当に気絶していたらしく眠ったように目を瞑って動かなかった。

「……姫ちゃん」

七緒に呼びかけられてこくと頷く姫。イチの横に駆け寄ると手の平に水を溜めてイチの顔に勢い良く降り掛けた。

「ん……？」

何度か水を掛けている内にイチが目を覚ますと、

「ふあ……ふあつくしょん！」

大きくしゃみと同時に体を起した。

「あれ？ 俺なんで……？」

「僕が蹴っ飛ばしたんだよ」

「あ、そうかそうか。あれ？ 戦いは終わった？」

「お前の所為で中断したんだ」

「あ……なるほど」

と、ばつが悪そうに頭を掻きながら口を尖らせて呟く。泳ぐ視線が姫と七緒の間を交互に動くが、

「……なにか言う事はないのか」

紅葉が自分に視線を向ける事をしないイチに向けて怒った様子で言い放った。それを聞いて申し訳無さそうに紅葉を見上げながら、

「その、すみませんでした」

「あたしだけに言われてもな。約束破ろうとしたんだから皆に謝れ」

「あう……その、あの……どうもすみませんでした」

その落ち込んだ様子を見ながら七緒は珍しいと思いつつ、ヴァイオレット達に向き直る。

「で、どうする？」

「私達の勝ちでいいんじゃないかな」

「なんでだよ」

七緒の反論にヴァイオレットが答えようとした瞬間、オズワルドのくしゃみがそれを遮る。

「ああ、ごめんごめん。でもさ、僕がやった事は例えれば……スパーで売ってる包丁を買った人がその包丁で誰かを刺したようなものだ。多分文句はあるだろうけれどパレットが動いてないんだから、魔術師の法ではまだ罪を犯した訳じゃない。人の法や感情から見れば罪を問いたいんだろうけれど僕は君に連行される謂れはないよ？」

「……ああそうかよ。どうせ無理矢理連れて行こうとすればあんた

が邪魔するんだろ」

苛つきながら七緒がヴァイオレットを睨む。すると、嬉しそうに頷いた。

「今回はあの馬鹿の所為で面倒な事になったから見逃すけど、次は絶対に捕まえてやるからな」

「はは、なんだ、逃がしてくれるのか。どうもありがとう」

「うるせえ馬鹿」

七緒が不機嫌なのを隠さずに言うのと、紅葉が笑う。そんな紅葉を睨みつけるが更に笑うだけだった。

「馬鹿は風邪引かない、って日本では言うんだっけ？ でも流石にこの馬鹿も風邪引きそうだからお言葉に甘えてそろそろおいとまするよ」

「姉上、馬鹿とはなんですか馬鹿とは」

「馬鹿だろう？ ……ああそうそう」

ヴァイオレットが七緒に歩み寄り、何かと警戒した七緒の顔を掴んだ瞬間軽く唇を重ねる。

「さっき助けてくれたお礼。初めてだったぞ、あんな風に抱き締められたの」

「……あ、あっそう……」

突然の事に呆然とした七緒に手を振りながらヴァイオレットが歩いていく。ジョンは何時の間にか姿を消していたが、離れていくヴァイオレットの背後に現れると先程と同じ執事服姿で頭を下げ、また姿を消した。オズワルドが相変わらず寒そうに体を抱えて姉に突いて歩いていると、何かを思い出したように踵を返して七緒に歩み寄ると、

「兄弟子から一つだけ助言しよう。全てをやるうとは思わず、まずは何か一つを出来るように集中するんだ。あと、強がるのも良くない。テストで百点を取り続ける事だって恥じる事じゃ無いし、遠慮して一問間違えるのはお門違いだ。ま、僕から言えるのは素直になれという所か」



それだけ言うとう足を止めて待っていたヴァイオレットの元に駆け足で戻るオズワルド。そのまま二人で並んで歩き、公園を出て行った。

「どう言うことだ？」

「……さあね」

七緒が唇に軽く手を当ててから大きく頭を振り、イチに歩み寄ると頭を小突く。すると申し訳無さそうに目を伏せながらイチは体を霧に変えていき、

「七緒、初キス奪われちゃったな」

完全に体が霧に変わる直前でそんな事を呟いたイチに、七緒が顔を真っ赤にしながら拳を突き出すがその頃にはイチの姿はなくなっていた。顔を赤くさせたまま、恐る恐る七緒が紅葉の顔を見る。すると、笑いを堪えている、と言うように片手を口に当てながら笑顔を見せている紅葉の姿がそこにあった。



「オズワルドが他人に助言なんて珍しいね」

ヴァイオレットが一步後ろを歩くオズワルドに言うと、

「たまにはね。姉上こそどうしたんです？ あんな事をして」

「たまにはね。頑張り屋は好きだよ？ 特に実力が伴ってない頑張り屋を見ていると必死に餌を食べる子犬のようで胸がきゅんとなる」

「相変わらずサドっ気が強いようで。でも彼も姉上の本質を見抜いたと言うかなんと言うか」

オズワルドの言葉にヴァイオレットの足が止まる。その様子になんでもありません、と答えながらもオズワルドも足を止めた。

「何でも無いのに何故立ち止まる」

「いや、僕は姉上がどこに行こうとしてるか分らないので」

「私の思考を読めば良いじゃないか」

「いえいえ」

ヴァイオレットが歩みを再開する。その後をオズワルドが続く。  
「……家族の思考や記憶は読まないようにしていますから」  
そんな言葉を、ヴァイオレットは背中で聞いていた。

## 第二章 ヴァイオレット・アヴァロン その四

ヴァイオレットが泊まるホテルの一室、そこにアヴァロン姉弟が戻るとオズワルドが寒さに体を抱えながら真っ先にバスルームに駆け込む。そんな弟の姿を見ながらヴァイオレットがベッドに座ると着ていたスーツの上着とワイシャツを脱いだ。そのまま背中からごろりとベッドに横たわるとその勢いを利用して足を振り上げながらズボンを脱ぐ。下着姿になったヴァイオレットがそのままベッドに横になるとジョンがベッドの横に現れた。

「ヴァイオレット様、弟様がいらっしゃるのですから……」

「別に構わないわよ。家じゃこれが普通だったし」

「はあ……」

不貞寝を決め込むような主の姿に諦めにも似た様子を見せて姿を霧に変えようとするが、ヴァイオレットに呼び止められる。

「ジョン、あなたペルソナやシャドウについて私に話していない事はある？」

「いえ、ありません。何かありましたか？」

「これからオズワルドと話すのにこちらの知識が足りていなかったら話にならないからな」

「なるほど。私は席を外していた方が？」

「いや、いい。今日は良くやったからな、同席を許そう。と言ってもお前はいつでも私から離れないがな」

ありがとうございます、と頭を下げるジョン。それからジョンがヴァイオレットの為にコーヒーを淹れつつオズワルドがバスルームから出てくるのを待っていると、三十分ほどしてから真っ白のバスローブに身を包んだオズワルドが気分が良さそうに笑いながら出てきた。白の下着姿の見る者を魅了する姉の姿に、しかしオズワルドはまったく気にする様子は無かった。

「いや、良い風呂だった」

「知らん。で、オズワルド、お前は何が目的でこんな事をしたんだ？」

「目的？」

姉の言葉に暫く考えるような素振りを見せてから両手を広げて顔を横に振る。その表情はどこか人を馬鹿にしたような表情だった。

「……何も考えずにこんな事をしたのかお前は……」

「いえいえ、これはただの実験ですから。もっと多くの地脈の流れる土地でやってこそ効果のある実験ですよ姉上」

「ほう。なるほどな」

ヴァイオレットがゆらりと立ち上がるとオズワルドに歩み寄る。白く細く、しかし鍛えられたしなやかな筋肉の付く腕が伸びると、オズワルドの額を強く指が弾いた。鋭く走る痛みに目を瞑るオズワルドの頭を、

「この愚弟が！」

自分の脇に抱えるように引き寄せてフロントチョークを決めると、

「ぐああ！ な、何をするだー！」

「うるさいバカモノ！ 人に迷惑を掛けるなど何度も言っただろうに！ あの二人だってまたお前を探しに来るぞ！ まったく、この町にお前が来ていると聞いて来てみればこんな事に巻き込んで……」

ヴァイオレットがひとしきり首を絞めると、段々と抵抗する力を弱めていったところでやっとその首を離れた。

「い、いや、分かってますがね。でもまあ、パレットが本格的に動かなければ大丈夫でしょう」

首を擦りながらオズワルドが近くにあった椅子に座ると、ヴァイオレットもベッドの上に座りなおした。

「まったく……残り七人のシャドウが今以上の動きを見せたら正直危ないんだぞ？ 私にもお前の監視をしろと言う命令が来ているんだ」

「はは、僕はこれ以上何もしませんよ。確かに一人二人、危ない動きをしているシャドウが居るようですからね。でもまあ七緒と紅葉、

それに守風に姉上が居れば最悪の事態は避けられるでしょう。ああそれと一ヶ月前に一人のペルソナとシャドウが死にましたから、今は六人ですよ」

「六？ 七人だろう？」

「はい？ いえ、六人ですよ。作り出した本人が言っているのだから間違いないです」

「ふうん。……ところでペルソナになる人間はお前が選んだのか？」

「いえ、高い魔力容量を持つ者から優先的に選ばれるようになってますよ。とは言っても源一郎をこの仕組みに組み込んでしまうと厄介なので彼だけにはシャドウが作られないようにしましたがね。まあ姉上が来ているとは思っていなかったものでこんな事になってしまいました」

「そうか。……まあそれなら良い。あんな小さな子を自分の意思で巻き込んでいたのだったら、その時は流石にあの二人に引き渡そうと思っていたところだよ。まあいい、弟の後始末は姉の仕事だ、と言う訳で準備でもするか」

「また行くのですか？」

「ああ。白沢武人に釘は刺したが……黒い風とやらにはまだ遭遇もしていないからな、早い所何とかしないと犠牲者が増えるだけだ」

「なるほど」

ヴァイオレットが離れた場所で一人立っていたジョンに目配せすると、既に用意していた新しいスーツをジョンが手渡した。そのスーツを着込むと体を霧に変えたジョンと共に部屋を出ようと歩き出す。部屋の戸に手を掛けると、

「オズワルド、面倒だから一人でどこかに出歩かないでよ？」

「分かりましたよ、姉上。暫くは何も用事はありませんしここで大人しくしています」

そんな弟の言葉に、本当かなあ、と声を漏らしながらもヴァイオレットは部屋を後にした。

◇Side 桐式紅葉

パチパチと音を立て、もくもくと白い煙を立ち上らせる無口家の庭。門を抜けて覗いてみると、庭の木から落ちる枯葉を集めて焚き火をしているゲンさんの姿があった。焚き火の前でヤンキー座りをして軍手を嵌めた手に持った木の枝で焚き火の中を突いてる姿はなんだか可愛らしい。七緒が玄関ではなくゲンさんの所に足を向けていったからその後続いた。

ヴァイオレットとオズワルドの姉兄と別れた後、あたしは家に帰らずにそのまま七緒の後をついて戻ってきた。何だかんだと言ってオズワルドに言われた事を気にしている七緒は目に見えて落ち込んでいる。あたしがついてくる事に何も言わなかったけど、そもそもこの帰路で七緒は何一つ喋らなかった。そんな七緒に掛ける言葉も思いつかず、あたしもただ心配だからここまで来てしまったのだった。

あたし達が帰ってきた事に気付かないゲンさんは焚き火の中を執拗に突きまわし、あたしが声を掛けようと思って口を開こうとすると、横に置いてあったはさみを焚き火の中に突っ込んでアルミホイールに包まれた焼き芋を取り出していた。

「ほ？ お帰り。今帰ってきたんかの？」

そこであたし達に気付いたゲンさんが振り返る。そんなゲンさんにあたしと七緒は揃って、ただいま、と言った。五個の焼き芋を入れた籠を持ちながらゲンさんが真っ直ぐに七緒を見る。七緒はヴァイオレットと戦った際に全身に怪我を負って血を出していたけれど、それを治してもらったから怪我は無い。しかし服は破れて血まみれだった。そんな七緒に何を言うでも無いゲンさんに対する七緒は目を伏せた後、何も言わずに玄関に向けて歩いていくだけだった。

「……ま、若い内は仕方なかうて」

そんな、まるで息子の事は何でも知っているとでも言うような口調でゲンさんは苦笑を浮かべながら玄関に向けて歩き、

「紅葉さん、焼き芋食べるかい？」

そんな事を呟きつつ、あたしに焼き芋を差し出してきたのでそれを受け取った。

玄関から台所へ向かうゲンさんの背中を眼で追いつつ、先に戻ってしまった七緒がどこに向かったのかを考えるものの、とりあえず部屋にでも行ってみようかと足を向ける。七緒の部屋の襖を開けるとそこには無表情で、しかし落ち込んだ七緒の姿があった。

「帰らないのか？」

服を着替えていた七緒はベッドに座り、点けたテレビを見る事もなく部屋に入ってきたあたしにそんな事を聞いてくる。

「まあもう少しな。ほら、焼き芋」

半分に割った焼き芋を受け取りながら、ふうん、と呟いて七緒はあたしとテレビに交互に視線を移す。特にやる事もなく、焼き芋を食べ終わると本棚の漫画を手にとって読み始める。そんな中でふと背後に視線を感じて振り返ったそこには申し訳無さそうに正座をして佇むイチがいた。あたしと目が合うと何かを言いたそうに口をぱくぱくさせるイチに、

「別にあたしは怒ってないぞー」

多分さっきあたしを押し倒した事を謝ろうとしているんだろうと思ひ、笑って言ってやるとパーっと表情が明るくなった。実際あたしは何かをされた訳じゃないし、本当に怒っていないし、何よりも笑ってないイチの顔を見るのはどうにもつまらない。しかし、

「姫は怒ってるけどな」

そう呟くと同時に姫が仁王立ちをして現れる。口を尖らせて眉を顰めているその表情はまさに怒った女の子だった。可愛かった。

「その、ごめんなさい……」

そんな姫の様子を見るなりしゅんとした態度に戻ったイチはすぐに頭を下げて謝った。すると姫はイチに歩み寄り、ぽん、と頭を撫でる。その後キョロキョロと部屋の中を見渡すと、テーブルに置いてあったボールペンとメモ帳を見つけてカリカリと何かを書き始め

る。そこには丸文字で”ゆるしてあげる”と書かれ、それをイチに向けて突き出す。

「あ、ありがとうー！」

そうするとイチは一転して笑顔になって姫に抱きついた。姫はふふん、と鼻息を漏らしつつ、イチに抱きつかれたままメモ帳に再び向かって文字を書く。それを覗いてみると、

「たいやきがたべたいな、だって」

書いてある事をそのままイチに伝える。

「うんうん、姫の為なら何個でも買うよー！」

むぎゅー、と抱き締める力を強めるイチ。なんとも可愛らしい二人のやり取りを暫く見ていると、何を血迷ったかイチはその唇を姫の頬に近づけ――

「それはやめろ！」

すんでのところであたしが突き出した手の平で遮る事に成功する。手の平に伝わるイチの唇の感触は柔らかくて暖かくてきもちわるかった。

「ぶー」

「ぶーじゃねえ」

こちんとイチの頭を殴ってみると、痛そうに手で押えながら姫から離れる。すると姫はおもむろにイチに顔を近づけ――ちゅ、とイチのほっぺたにキスをした。見ているあたしが恥ずかしくなってぽつと顔を赤くしていたのだけれど、

「へ？ えっへへへ……」

あたし以上に顔を赤くして明らかに動揺するイチ。ニヤニヤしっぱなしで視線の定まらないイチに対し、姫は腰に両手を当てて平らかな胸を張って誇らしげだった。

微笑ましいその姿を見ながら、ふと七緒に視線を向ける。元気の無かった七緒は、あたしと同じようにイチと姫の事を見ながら小さく微笑んでいた。



◇Side 無口七緒

夢を見た。それはここの所何度も見た、あの刀野郎——北修一の夢ではなく、古い記憶の再生だった。

小学生の高学年の頃、父さんに入るなと言われていた、兄弟揃って開かずの間と言っていた部屋の鍵がその日だけは開いていて、僕は好奇心の赴くままに入っていた。しかしそこには夥しい量の書物と良く分らない置物が広がっていただけだった。この程度か、そんな風に考えていた当時の僕はそのまま部屋を後にした。後にしようとした。しかし、その書物や置物から放たれる圧倒的な存在感が僕をそこに縛り付ける。ふと、机に置かれていた本を捲ってみた。何が書いてあるかは分らなかったけれど、そこに書かれていた字は父さんの字だったのは分った。つまらない本だ、そう思いつつも全てのページに一通り目を通し終わると本棚にあった別の本を取り出してはまたページを捲っていた。どれぐらいそうしていただろう、気付けば本棚の半分の本を見終わり、そしてそれが魔術に関する事だと言う事におぼろげに気付く。その頃から漫画が好きだった僕にしてみれば——これでは桐式の事を笑えない——父さんもこう言う物が好きなんだな、と言う子供らしい発想の中に、ひょっとしたら父さんは魔法使いなんじゃないか、と言う淡い期待を持っていた。そしてその日の夕食、兄達が自分の部屋に引っ込んでいく中で一人父さんと一緒に居間に残り、頃合を見計らってその部屋の事を、魔術の事を問い質した。その時の父さんの、見つかつてしまったか、と言うような表情と魔術に憧れ、魔術を教えて欲しいと言った僕を見て喜んだ表情は忘れられない。忘れられないからこそ、僕は父の跡を継げるように、大魔術師と言われる父に並び、超えられるように努力を重ねる事になった。

それから読み漁る事になった父さんの書物——魔道書、グリモワールと言うが、父さんはただのメモ帳だと言っている——を読み、魔術を習う。遊びに行く暇を惜しみ、友人との関わりなど持ってい

る暇は無かった。それに魔術師なんて人の道に外れた存在になるのだから人の道で落ちこぼれになるなんてのは持ったの外だ。幸い僕は勉強は出来るくらいの頭は持っていたから成績は常にトップでいられた。しかし体格に恵まれなかった所為で運動能力では劣っていた為に、小学、中学と魔術の修行をする傍らで父さんから様々な武術を習い、肉体改造にも励んだ。その結果、運動能力でもそれなりの成績を残す事が出来た。

勉強では常にトップ。運動でも専門の道を行く人には負けてはいたけれど、それでも総合的に見れば常に上位をキープしていた。それをきっかけに話しかけてくる人は寄せ付けず、ただただ人の道で頂点に居続ける為に僕は孤独を選んだ。孤立を選んだ。孤高になる道を選んだ。

ただそれでも、それだけやっても、それほどやっても――僕は、魔術を、ただの一つも、たったの一つも、ほんの一つも、習得する事が出来なかった――

ベッドの中、緩やかに覚醒する。頬に冷たいものが流れるのは自分への不甲斐なさからか。陰鬱な意識は冷たい外気に触れても冷めない。風呂にでも入ろうと体を起し、着替えを持って風呂場に向けて歩く。僕の家には小さいながらも道場があった。そこは父さんが自分を鍛える為に、そして僕が父さんに鍛えてもらう為に使われ、今も使っている場所だ。鍛錬をして流した汗をすぐに洗い落とす為の風呂が道場のすぐ傍にある。家族が普通に使う風呂よりも小さいけれど、それでも足を伸ばして入れる位には広いその風呂に父さんと二人でよく入ったのを思い出してつい頬が緩んだ。

脱衣所で服を脱ぎ、中に入る。もちろん浴槽にお湯は張ってなかったけど十分あればお湯は溜まるからと、その間に体を洗う事にした。しかし深まった秋の寒さの中裸で待つのも宜しくない。体を洗い終わって半分程溜まったお湯の中に飛び込み、半身浴のような状態で体を温める事にする。

段々とお湯が溜まり、胸の辺りまで浸かれる位になると、浴場のガラス戸の向こうに人影が写ったのに気付く。父さんだろうか、そう思っていたら入ってきたのは素っ裸のイチだった。

「俺も入れろー」

そう言っただけで体を洗う事もなく、ましてやお湯を体に掛けることも無く浴槽に飛び込んできたイチ。胸の辺りまで溜まっていたお湯はイチが入ったお陰で溢れる程になってしまったから首まで浸かり、無駄に出るお湯は止める事にした。

「はふー。紅葉も今頃姫と二人で風呂に入ってるのかな」

「さあな」

「なんだよー、冷たい奴だな。……って言うか俺の裸見という無反応ってなんだ。ボンキュッボンでスタイルいいーだろ俺」

「お前を見て欲情した事なんか一度も無い」

そうかー、なんて言っただけで自分の体を見るイチ。桐式よりも大きい――桐式の談で、僕が確認した訳じゃない――胸や、細いウエストなんかを見る限り確かにスタイルは良いんだろうけれど、不思議な位にそれを見ても何の反応もしない。てっきりなんかの病気かと思っただけで秘蔵の本を引っ張ってきたけどそれには反応したからそう言う事では無かったようだ。

「なあ七緒。もうじきテストだな。けーこーとたいさくはばっちりか？」

「何を今更。学校の勉強なんて暗記と応用だろ、対策を取る必要も無い」

「その割には毎回毎回、わざと一問間違えてるよなお前」

「だからなんだよ」

「いや、そんな事いつまで続けるのかねえ、って思ってさ。もうお前に話しかけてくる奴なんて一人しか居ないじゃん。何を気にして――」

僕が突き出した拳は空を切る。首まで浸かっていたお湯の水位は一気に胸の下辺りまで下がった。

「お前には何も関係ないだろ」

「関係ない訳ないだろ、自分の事なんだから」  
頭の中に声が響く。正直鬱陶しい。

「僕は僕だ。お前は関わってくるな」

「……はいはい、そう言う事にしておくよ」

それきり黙るイチ。少なくなっただ湯を足しながら三十分ほど何も考えずに体を温めてから風呂を出て、父さんが用意していた朝食を食べてから僕は学校に向かう事にした。

授業が終わり、

「七緒ー、帰りにマック寄ってこうぜ」

等と言う桐式。すると前の席のA——最近桐式に教えられて赤井と言う名前だと知った。結局イニシャルで言えばAだった——が僕を睨んでくる。

「いや、悪いけど今日は用事があるから」

僕がそう言って断ると桐式はそうか、と言って少し残念そうにしていた。Aこと赤井がさらにきつく睨みつけてくるのは、桐式の誘いを断った事を怒っているからだろう。お前は僕に桐式と一緒に行ってほしいのかほしくないのかどっちなんだと思うがそれを口にすればまた絡まれるからそっとしておく事にする。

じゃーなー、とひらひらと手を振る桐式に手を振り返して教室を出る。あの二人最近仲良いよね、なんて言う女子連中の声が聞こえてきたけれど、それもそっとしておく事にした。足早に下駄箱まで歩き上履きを履き替えて外に出ると、そこには――

「あ、七緒君……」

鞍馬先輩が消え入りそうな声で、しかし笑顔を浮かべて立っていた。

「……どうも」

挨拶をして通り過ぎようとするが鞍馬先輩は駆け足で僕の前に回った。

「あの、その、今日は桐式さんとは一緒じゃないの？」

「はあ。まあ僕にも用事がありますから」

「そ、そう……えと、じゃあこの後一緒に、って言うのは出来ないのかな？」

「ええまあ。それじゃ僕はこれで」

残念そうな鞍馬先輩を尻目に駐輪場へ向かう。学校一の美少女と噂される鞍馬先輩。実際僕もそう思うけれど――僕は、あまり鞍馬先輩に興味が無い。と言うか苦手だ。

自転車に跨り走らせる。片側三車線の大通りを走りながら向かう先は石間駅。そこで今日は――

「紅葉と顔を合わせ辛いから用事がある振りをして暇を潰す、と。ガキめ」

「あ？」

頭の中に響くイチの声について声を上げてしまうが、それきり黙ってしまった為にも言い返すこともなく自転車を走らせる事になった。すぐに止まったけれど。僕の視界に入ったのは、昨日僕と殴り合った――

「……ヴァイオレット・アヴァロン？」

ヴァイオレットさんはどうやら陸橋を渡ろうとしているおばあさんの荷物を持って上げている様子で、暫く待っていると陸橋を渡り終えておばあさんに荷物を渡し、満足そうな笑顔で歩き出していた。すると、その様子を見ていた僕に気付いたようで足をこちらに向けてくる。

「あら、君は七緒君」

「そういうあなたはヴァイオレットさん」

ハロー、と片手を挙げてにやかな笑顔で近付いてくるヴァイオレットさん。そのまま僕の自転車の荷台に乗り、

「ゴーゴー」

「どこにですか……」

「どこでもいいわよ。あ、でもそうね……何処かのファミレスとか

喫茶店とか、落ち着いて話せる場所は無いです。ちょっと七緒君に聞きたい事があってね」

「はあ……ところで何で僕の名前を？」

「うちの愚弟から聞いてね。今日は彼女はいないの？」

「……桐式は彼女じゃないです」

「あら、そうなの。まあいいわ、行きましょう」

ヴァイオレットさんが自転車の荷台に乗ったまま、ぼん、と肩を叩いて促してくる。仕方なく一番近いファミレスまで行く事にした。五分ほどで着いたそのファミレスにはそれほど客は入っていないかったけれど石間高校の制服がちらほらと見える。知った顔が居ないかを確認しつつ、店員に案内されて席に着く。

「さて、ドリンクバー二つと……あ、このハンバーグとライスのセツトを食べようかな。七緒君は？」

「ドリンクバーだけで良いです」

ヴァイオレットさんが僕の分も一緒に店員に注文すると、とりあえず飲み物を取りに行く。席に戻り、グラスに入ったコーラをストローで飲んでみると、

「さて、七緒君。聞きたい事と言うのは他でもない、君が昨日言った事だ」

そう言って話を切り出してきた。

「昨日言った事？」

「……ほら、私が正義の味方をやってる理由を言った時、物は言いよう、って言っただろう？ あれの事よ」

「ああ、あれ……」

正直拍子抜けだった。たったそれだけの事かと、って言うか、その意味も分からないのかと。

「簡単な話ですよ。人を助けた後の安心した顔を見ると快感が走って、単に人の喜ぶ顔が見たいってだけじゃないですか」

「……ん？ 何が違うんだ？」

「だから何も変わらないんです。それを難しく言ったただけと言うか、

難しく捉えていると言うか。……そう言えばなんでそんな人助けなんてやってるんですか？」

「え？ ……それは、人の安心した顔を見るのが楽しくて……」

首を傾いで考え始めるヴァイオレットさん。人助けは別に悪い事じゃない。と言うか良い事だ。特にヴァイオレットさんはさっきの様子を見た限りでも、本当に見返りを求めている。いや、明確に安心した顔を見たいと言う見返りを求める分、真偽はともかく、何もいらないと言ってボランティアをする人よりも信用できそうな気がする。ただ人助けをする起源を思い出せないらしく、それが気に入らない様子のヴァイオレットさんはずっと唸りながら考え続け、注文した料理が来てもそのままの状態で非常にゆっくりと料理を食べていた。

「……話ってそれだけだったんですか？」

「え？ ああ、うん、そうよ？」

ヴァイオレットさんは僕の問いに、それが何か、と言う風にハンバーグの付け合せのコーンを一粒ずつフォークで刺して食べる。うーん、なんだろうこの徒労感。なんの意味も無いよなあ。

「ふう、ご馳走様。さて、まあ折角だから別の話でもしましょうか。とは言っても私達の間でする話なんてペルソナ絡みだけだね」

「まあ、そうですけど」

食器をテーブルの端に寄せ、肘を乗せて組んだ手の上に端正な顔を乗つけて僕を真っ直ぐに見詰めてきた。セミロングのブロンドと日本人離れた——って外人だから当然だけど——整った顔立ちは美人だ。とは言え僕の好みから言えば鞍馬先輩や——……鞍馬先輩には負ける。

「君と、あの紅葉さんと、会った事は無いけど片山——守風さん、そして私。半分ものペルソナが善意で動いていて、そして私達がどうにかしなければならぬペルソナはたったの二人。まあ悪くない数字だけれど、君達はその二人のペルソナの正体は知っている？」

「一人だけなら。噂の黒い風と言うのがペルソナ関係の事件なのか

は分らないですけど、そっちはまだ一度も」

「あらそう、私と同じね。白沢武人で合ってるわよね？　その一人って」

「はい」

「一応私から釘は刺したんだけど、ああいう手合いってそう言うの気にしないどころか、逆に反発するから手に追えないのよね。まあ今の所変な動きは見せてないけど」

「ヴァイオレットさんは黒い風には会った事はあるんですか？」

「無いわね。どうにも仕事は一瞬で済ますみたいだし……犯行現場がどうなってるか、見たりした事ある？」

ヴァイオレットさんに言われて思い出す。テレビではあまり大事にはされなかったけれど――

「弾けるのよ、体が。私はパレットの人間で、既にここに着てる冬畑秋子監督官とは別口でこの事件の監査をしてるからそう言う現場の後始末をする事もあるんだけど――最悪ね、あれは。爆弾を使うって訳じゃないんだろうけれど、外部からの爆発で体が弾け飛ぶと言う感じ。正直あれを平然とやれるなんて相当キてる魔術師か、突然超能力に目覚めて自制が効かなくなった超能力者くらいね。だから――黒い風を追うなら気を付けた方が良いわよ。白沢武人はまだお小遣い稼ぎ程度にしかシャドウを使ってないけれど、そいつは本当に快樂で人を殺してるわ」

苦い顔をして自分のコップのメロンソーダを飲み干すヴァイオレットさん。魔術師は人道を外れた外道が多いと聞くと、実際の魔術師には数える程しか会っていないけれどその殆どがどこか人間性が無い人ばかりだった。けれどヴァイオレットさんはあまりそう言う感じが無い。弟を守る為に僕と戦ったと言う事実も、無償で人を助けていると言う事実も、言ってしまうえば自己の欲求を満たす事を目的とする他の魔術師とはかけ離れた行為であるとも言える。

「はあ……オズワルドは公平を期すためだ、とか言ってる黒い風の事は教えてくれないし……ほんと、人に迷惑を掛けるなって教えてき



たのが無駄になったわね」

「ヴァイオレットさんはオズワルドみたいな能力は無いんですか？」

「ん？ 無いよ。あれは本当に特殊。近々黄色の称号を貰うとか何とかって噂ね。ま、アヴァロン一族の誇りであるのは否定出来ないわね」

「ふうん。でもヴァイオレットさんも何か力を隠してるんですよ？ 暴走車を破壊したとか聞きましたし」

「あー……それが無いのよね。実はさ、ここだけの話オズワルドって子供の頃、自分がアヴァロン家の長男だからって他人を寄せ付けずにただ魔術の研究しててね、結構苛められててさ、怪我をして帰ってくる事が多かったのよ。で、私が守ってやる！ って。怪我なんて私が治してやる！ って。それで治癒魔術を覚えてねえ。って言うか、暴走車を破壊って……どれだけ尾びれのついた噂になるのよ」

「……あの」

「ん？」

「……いえ、なんでも。その、僕そろそろ用事があるんで」

「あら、そうなの？ なら早く言ってくればいいのに。じゃあ出ましょうか」

言って、ヴァイオレットさんが伝票を手にしち上がった。自分の分くらいは出すと言ったけれど、

「年下にお金は出させない主義なのよ。これでも稼ぎはいいからね」  
と言って全額払ってくれた。とは言ってもドリンクバーだけだけで。ファミレスを出て時間を確認する為に携帯を取り出す。すると桐式からメールが一件着ていた。今度イチと姫と一緒にカラオケでも行こうな、そんな、ちょっとしたメール。僕はそれに、そうだね、とだけ打って返す。

「じゃあね。あ、そうそう私今から近いホテルに泊まってるから何かあったら来なさい」

そう言って僕に背中を向けて歩いていくヴァイオレットさん。そ

の背中を見ながら、

「ヴァイオレットが人助けし始めた理由って、オズワルドを助けたからじゃないのか？ まあ、本人が気付かないなら良いけどさ」  
今まで黙っていたイチがそんな事を呟き、そしてまた黙ってしまった。僕はそれを気にする事も無く、駅前に行つて暇を潰そうと言う考えも無くなって自転車を家に向けて走らせた。



イチがのんびりと自転車を走らせて家路に着く七緒の背中を、霧に変えた体で眺めていた。平然とした様子で、何にも興味が無さそうな様子で自転車を漕ぎ続ける七緒。

「……オズワルドってさ」

その背中にイチが声を掛ける。

「なんだ？」

「……いや、なんでも」

言葉を切ったイチに七緒は何も言わずに自転車を走らせ続けた。

はあ、と溜息を吐くイチ。

「あいつ、七緒と似てるんだなあ。気づいてんのかな、こいつ。いや、気づいてるからあれ以上話を聞きたくなくて帰ろうとしたのか」  
そんな事を七緒に聞かれぬように小さく呟いていた。

### 第三章 無口七緒 その一

#### ◇Side 無口七緒

「おいみんな聞けー。無口が九十八点を取ったぞー。これも普段の授業をマジメに聞いているからだな。それに比べて鵜飼は――」

高校一年の五月。ゴールデンウィークを終えてすぐに行われた数学の小テストを返しながらその教師は言った。九十八と言う点数を取った僕に対する感嘆の声は多い。しかし、家から近いと言う理由だけで選んだこの高校には同じ中学からの同級生も多く、彼等は僕の取った点数を聞いてもさしたる反応も見せず、ただ自分の取った点数に対して一喜一憂しているだけだった。

数学教師が、僕ら生徒がきちんと授業を聞いているかどうかと言う事を確かめる為に行われたこの小テスト。その内容は、確かに授業を聞いていれば簡単に百点を取れる内容だった。しかしそれは一字一句聞き漏らさず、と言う事が前提だ。中学の頃に既に高校でやる分野までの勉強はしていた僕にしてみればある程度授業の内容を聞かずとも分る内容ではあったが、他の生徒にしてみれば五十点を取れば良いと言った具合だろう。それだけに高得点を取った僕に勉強を教えてくれるよう頼んでくる生徒は多かった。特に女子が多く、それを妬むように男子が僕を睨んでくる事もあったけれど、そんな女子の頼みも、男子の妬みも僕は無視してただひたすら自分の道を進んでいた。しかしそれだけ無視をしても突っかかってくる奴も居た。それが――桐式だった。四月の中旬に学校中の話題になった不良連中とのいざこざで停学処分を食らった桐式は、その分勉強が遅れていた。その結果テストの点数も芳しくなかったらしい。見た目的には脳味噌が筋肉で出来ていそうな連中の仲間に見えるけれど、それなりの偏差値が無いと入学するのが厳しいこの学校に入っていると言う事や、意外と勉強家な所もあって僕が教えなくても問

題ないくらいに桐式は頭が良いように見て取れた。

「無口君、これ教えてくれよー」

隣の席に座っていた桐式は授業中、休み中、何度と無視をされていると言うのにそんな事を何度も聞いてくる。面倒になって余計な事を言わず、とりあえず答えだけを教えてみると嬉しそうに笑いながら、ありがとな、と言ってノートに書き写していた姿は今でも印象に残っている。

不良連中を取り仕切っている桐式なのだが、そんな持ち前の性格の良さが幸いして色んな連中から好かれている。休み時間中に一人で居るところなんて見た事はないし、逆に一人で居る奴に自分から声を掛けている様子だった。もちろんその対象には僕も選ばれていて時々遊びに誘われた事もあるけれど、当時の僕はそこまで他人に干渉をしたくは無いと断っていた。今でもその考えは変わらない。変わらないのだが――

掛け声と共に放たれた守風さんの蹴りが顔の前を横切る。その隙を狙って打った僕の突きはしかし守風さんの体に触れる事は無かった。

肌寒くも気持ちのいい、二学期末テストを終えて後は冬休みまでの数日間の登校日を適当に済ませるだけと言う日々が続く日曜日の晴れた朝、僕の家のだ場を使って守風さんと僕は軽く組み手をしていた。僕は父さんから習った空手ベースの我流拳法で、守風さんは蹴り技主体のこれまた我流。そんな二人の組み手は傍から見ると異種格闘技に見えなくもない。しかし技の習得度で言えば僕の方に分があったらしく、今の所三戦三勝をしていた。

「やあ、七緒君は強いなあ」

守風さんが繰り出した大振りな蹴りの隙を突いてレスリングの容量で足を掬い上げて引き倒す。そんな決着を迎えた後に守風さんが汗を拭きながら笑顔で言った。ジャージの前のジッパーを開いて手で仰ぎながら火照った体を冷ましていたが、中のインナーが汗で肌

に張り付いていて――小さいとは言え胸のラインが見えてしまい慌てて視線を守風さんの顔に移した。

「でも守風さん、手加減してるんじゃないですか？」

僕の言葉に、いやいや、とはにかむ守風さん。僕らが学校に行っている昼間、守風さんはシャドウ探しの合間に家に来ているらしく父さんに稽古をつけてもらっているらしい。土曜日である昨日は父さんが暇だったから稽古を付けていたけれど、今日は僕と組み手をする事になった。父さん曰く、実力的には僕とどっこいだそうだ。それで全勝しているのだから手加減と言えなくもないだろう。しかしまあ、柔道にせよ空手にせよ筋力が物を言う武術を、もうじき七十になって筋力が相当衰えてくるはずの父さんに未だ力負けするのは納得いかない。実はあの人はまだ三十代なんじゃないだろうかと思えてきてしまう。

「さて、もう一勝負してくれないかな？」

言って、守風さんが立ち上がる。僕は普段から寸止めをしているから突発的であろうと拳を止められるけれど、守風さんはそんな習慣が無いから当てられる時は当ててしまう。そのお陰で体のあちこちが痛いけれど、だからと言って引き下がるのは男として宜しくない。汗を拭いていたタオルを置いてもう一度組み手をする事にした。が、

「……七緒、あたし部屋でゲームやってるわ」

今まで黙って僕らの組み手の様子を見ていた桐式がそんな事を言っただけから出て行ってしまった。見てるだけだから暇になったんだろうか、と守風さんと顔を見合わせて首を傾げると、

「あーあ。まったくお前って奴は……」

体を霧に変えていたイチが姿を現し、僕をジト目で見ながら道場から出て行った。その後姿を、やはり僕達は何が起こったか分からないまま見送っていた。

暖房など無い道場と、七緒の部屋まで続く通路を白い息を吐きながら歩く。ぶるりと震える体を思わず抱き締めると、不意に背中に衝撃が走った。と、同時にあたしの首に腕が回される。

「なんだよイチー。重いぞ」

振り向かずとも背中に取り付いた人物がイチだと分った。なぜなら背中に柔らかいものが二つ当たっているからだ。今この家に居る人物でこれほど立派なものを持っているのはイチくらいだ。腕を離さず、しかし自分で歩こうとしないイチを引き摺りつつ七緒の部屋へ向かって歩く。部屋の前まで来て戸を開けると、姿を霧に変えていた姫が誰よりも先に中へ入っていった。イチも腕を離して中に入ると、姫を膝の上に乗せながら二人でテレビの前に二人で座る。

「よし、桃鉄やろうぜー」

言ってこの間あたしが持ってきてそのままだったゲームソフトを手にとってセットする。コントローラーを三人分用意し――

「なーもみじー」

ぽちぽちと色んな設定を決めているとイチが呟く。

「なんだ？」

「いやー……まあ、七緒のことで謝ろうと」

「なんで」

「最近あいつ紅葉に余所余所しいしさ。やっぱ、気にしてんだろうなあ、あのこと」

あれから――オズワルドとヴァイオレットに会ってから、確かに七緒は少し様子が変だった。元々口数が多い訳じゃないけれど、珍しく七緒からあたしを遊びに誘いながらもあんまり会話を弾ませる事も無くそのまま帰る事もあった。原因は分かっている。オズワルドに――自分の秘密を暴露されたからだろう。

「……けどまあ、嫉妬はよくない」

「別に嫉妬してる訳じゃないけどな。でもまあ、ちょっと元気になって貰わないとなー。一緒に居るあたしがつまんないよ」

「ふうん」

そんなこんなでゲームは始まる。あたしが順調に物件を買い集め、地道に、時に大胆に目的地に向けて爆進するも、ここぞという所で姫にジャマされる。しかしそうやってあたしと姫が熱烈なバトルを繰り広げている最中、地味に駒を進めていたイチは順調に目的地へ到達しているのであった。なんと言う伏兵。そうしてキングボンビーを姫から押し付けられる事四回、そろそろ心が折れ始めた頃にイチがあたしに擦り寄ってくる。お互いの体温が感じられる程の距離。お互いの肌が触れる距離。お互いのほっぺたがむぎゅ、となる位の密着感。

「なんだよ!」

「いや。提案を」

「提案? このボンビー地獄をどうにかしてくれるのか?」

「いやいや、それは自分で何とかしてくれよ。んでさ、提案ってのはさ」

イチが顔をあたしの耳に近づけてくる。誰が聞いていると言う訳でもないだろうにと思いつつ耳を貸してみると――ふ、と耳に息を吹きかけられ、

「あにゃにゃ!!」

ぞわぞわと背中走るんだか良く分らない感触に実を振るわせつつ、イチの頭にゲンコツを落とす。

「いたた……ま、まああれだ。そのだな、今度紅葉の家に七緒を招待するべきだよ」

「なんでまた?」

「いや、男として女の子の家に招待されるってのはそれだけでテンション上がるぜ?」

「へー。なんかやましい物を感じるな」

「や、まあ期待しますよ? 男の子だもの」

「あーそう」

そう言えば男友達を自分の家に呼んだ事は無い。そんな事を思い

出しつつ、

「やや、桃鉄か。私も混ぜてほしいな」

良い汗を流してきた守風と七緒が戻ってくるのを流し目で見るのであった。



もうじき零時となろうかと言う深い夜の闇の中、温かい風が吹いていた。その風に乱れる髪をかき上げながら白沢武人は道を歩く。

白沢は先の一件でヴァイオレット・アヴァロンに忠告を受けながらも、自分のシャドウを使って援助交際を行う事を止めていなかった。その証拠とでも言うように彼の身を包む服や装飾品は一介の高校生と言う身分では中々揃え辛い高級な物で彩られている。肌に風を受けながら向かった先は小さな、しかし建てられてそれほど経っていない三階建てのアパートだった。そのアパートの目前まで歩み寄ると、二階の端部屋の前に佇む少女が白沢の事を見つけ、小走りに階段を下りてくる。

少女が白沢の前に立つ。手には封筒に入った札束があり、それを白沢に差し出した。封筒の中を確認する事も無くそれを受け取ると階段に足を掛ける。その瞬間――

「お前が白沢武人か」

凜とした声が白沢の背中に掛けられた。振り向いてみると、そこには手に写真を持った守風の姿があった。手の中の写真と白沢の顔を交互に見ると、用が無くなったとばかりに写真を投げ捨てる。

「……その手に持っているのは金か？ 紅葉さんやヴァイオレットさんからお前がしている事は聞いている。女としてお前が自分のシャドウにさせている事はどうしても許せない。――ここでお前を倒す！」

白沢に向け、真っ直ぐに指を差して宣戦布告をする守風。しかし白沢はその守風にさしたる興味も見せず背中を向ける。そしてその



背中を守るように、名も無き白沢のシャドウが立ちはだかり――

「ふん！」

少女の目が見開いた瞬間、守風の姿が掻き消える。少女の目にほんの一瞬見えた軌跡を追って顔を右に向ける。しかしそこに守風の姿は無く、次いで吹く突風。気づけば、アパートに向けて歩いていった白沢の視界一杯に守風の足が迫っていた。あまりにも突然の事に白沢が出来たのは辛うじて身を振る程度で、守風の蹴りは白沢の側頭部を強烈に穿った。

「が――！」

主人のそんな叫びに少女が慌てて振り向く。視界に捉えた守風の姿を凝視し、目に力を込める。だが次の瞬間、巻き起こった突風と共に守風の姿は掻き消え、少女は背後から守風によって押し倒され、組み伏せられてしまった。

「分つたろう、白沢武人。お前のシャドウでは私には勝てない」

少女を組み伏せながら守風は白沢を睨む。少女が必死に顔を動かして守風を睨もうとするも、その頭を守風がコンクリートの地面に押し付けている所為で動かす事も出来ない。

「デメエ……」

白沢が、ぎり、と歯を噛み締めながら守風を睨む。白沢のシャドウの能力は自然発火、パイロキネシス。少女が念じた物体の分子を激しく運動させて発火する力。視界に捉えさえすれば対象物だけを即座に発火させる事が出来る強力な能力ではあるものの、それ以上に守風の動きは早く、少女の力を発揮させないように対策を取られてしまっている為に勝負にもならない。それを痛感したように、先程までは少女が守風を倒すだろうと慢心し、守風に対してなんの興味も、恐怖も覚えなかった白沢が今は焦りに満ちた表情で守風を睨んでいた。

少女を抑える守風の手から、ふと少女の体が消える。魔力の霧にその身を変えて白沢の元に戻ったのだ。その瞬間守風は駆ける。巻き起こった突風で白沢が一瞬目を瞑る。目を開くとそこに守風の姿

は無く、声だけが周囲に木霊していた。

「その少女から話を聞いているだろう？ シャドウとの関係を断てばこれ以上何もしない。しかしそれを拒むならお前を徹底的に打ちのめす。それか——お前のシャドウを殺す」

ペルソナとシャドウの関係——ペルソナから行われる魔力供給を断てばシャドウはその存在を維持し続ける事が出来なくなる。もちろんペルソナを殺してしまえば魔力供給などは行えず、シャドウを倒してしまえば供給先が消える。今の状況ではペルソナを殺す事も、シャドウを殺す事も守風には容易かった。ならば一番白沢武人に害を及ぼさないのは、自分からシャドウへの魔力供給を断つ事だった。いや、魔術師でもない白沢にそんな器用な事を出来る訳も無く、ともすればシャドウに命じて自分達の関係、契約を断つ事だった。

白沢がどれだけ周囲を見渡そうとも守風の姿は見えない。このままではただ一方的に守風に攻撃されて倒され、最悪は自分が殺されるだけだった。それだけは避けたい。しかし今の自分の生活があるのはシャドウに依るところが大きい。いや、シャドウを失えば、もう今までのような生活は出来ない。そう考えた瞬間、白沢の考えは固まる。例えそれが困難な道だとしても、白沢は逃げる道を選んだ。「……馬鹿だなお前は」

もちろん守風がそれを許す筈も無い。人の足では到底敵わぬ快足で迫る守風に、しかし白沢のシャドウはまるで自分が盾になるようにして立ちほだかり、迫る守風を睨みつける。だがやはりその視界に守風を捕らえる事は出来ず——

「な——え!？」

突如巻き起こる突風。驚きの声を上げたのは守風だった。残酷なほど冷たいその突風は——守風の体を吹き飛ばす。それも右腕をずたずたに引き裂き、引き千切って。

血を撒き散らしながら道路を転がる守風。視線を上げると今一度自分へ迫る——黒い風、としか形容出来ないような空気の壁が迫っていた。守風が顔を引き攣らせながらその黒い風に向かって左手を

突き出す。巻き起こるは温かな突風。二つの風が中空で衝突し、しかし黒い風はまるで内に秘める狂気を表すかのように守風の放つ風を打ち消し、伸ばした左手に襲い掛かる。

「くあッッ！」

守風の放った風がほんの少しでも黒い風の威力を落としたのだらう、左手が引き千切られる事は無かったが、それでも腕としての役割を果たせそうに無いほどに破壊されていた。

守風の起せる風は自分が素早く動けるための補助的な物でしかない。敵が放つその風は明らかにそれ単体で相手を死に至らしめる事の出来うる威力を持ち、その上で守風の目にその風を放った相手が映らない。白沢はこの騒動に紛れて既に遠くに逃げていて、このままでは自分は狙い撃ちにされるだけだと守風は悟る。ならばとばかりに足に力を、全身に風を纏ってその場を逃げ出そうとする。

「——え？」

その瞬間、守風はもう一度驚きの声を上げた。物陰から現れたマントのような物を羽織った黒い影、その影に守風は見覚えがあった。背の低い、ともすれば小動物のような外見と、まるで全てを睨みつけているような釣り目がちの双眸。耳が隠れる程度の短髪——明らかに、どう見ても、その人物は無口七緒だった。

◇Side 無口七緒

二学期期末テスト最終日の放課後。周りの生徒はテストからの解放と、これから来る長期連休への期待でどこかソワソワと落ち着かない様子だった。本来ならそれは僕も同じなのだろうけれど、今の僕はそこまで冬休みを喜ぶ余裕は無かった。

「無口！」

玄関に向かう為に寒さに震えながら校舎の中庭に出ると、そこで僕の名前を呼ぶ声が響いた。声の方向に振り向いてみると、そこには桐式の所属する剣道部元キャプテンの立石先輩が立っていた。僕

よりもずっと背の高い立石先輩の、女子に大人気の爽やかな笑顔。それが僕に向けられている。何事かと歩み寄ってみると、

「無口は今日暇か？」

と言いながら逃がさないとばかりに僕の肩に腕を回してきた。

「まあ暇です」

「そうかそうか。じゃあ剣道場に行こうぜ」

「いやいや」

何がじゃあなのかが分らない。しかしこの人が割と強引なのは付き合いの浅い僕にも既に分かっていたし、どうせ暇だからついて行って良いとも思った。しかし――そこに桐式も居るのだろうと思うと、少し気が引けた。

「なんだよ、まだあの時の事気にしてんのか？」

頭の中にイチの声が響く。それを無視しながらも雑談をしてくる立石先輩に連れられて剣道場の前に立つ。

「ああそうそう、剣道場に入るにはこの書類にサインが必要なんだ」立石先輩がそう言ってポケットから一枚の紙を取り出した。不自然に文面を隠すように持った紙は、自分のサインを書く場所のみが見えるようになっていた。って言うか入部届けだった。

「だから部活には入らないって言ってるじゃないですか。それに後三ヶ月もしたら僕は三年ですよ？」

「だからどうした。やる気があれば何だって出来る！　と言う訳でさあ、サインをするのだ無口」

握りこぶしを作って豪語する先輩。

「……帰ります」

今更部活に入ってどうするのか。僕は進学するつもりは無いし、父さんの仕事を継ぐだけだから今から入部しても他の進学組の三年生よりは長く部活動をしていられるだろう。けれどそれも少しの間だけだ。一応家で剣道をやった事もあるけれど趣味じゃないから止めてしまったし、そんな僕が桐式と同じくらいの高みまで行ける訳も無いだろう。

「まあまあ。って言うかだな、ここに来た以上帰るのにもこの入部届けにサインが必要なのだよ！」

くわ、と目を見開いて僕の顔のすぐ前に入部届けを突きつける先輩。

「嫌ですよ！ もっと将来有望な一年生が居るんですから勧誘するならそっちに行ってくださいよ！」

「やだよ！ 俺は無口が良いんだよ！ 今入部しないとお前の家の前に三日間居座るからな！」

「この先輩めんどくせえ！」

「この後輩口わりい！」

「何やってんすか先輩……」

そんな風にぎゃあぎゃあど喚いてみると、騒ぎを聞きつけたらしい剣道部員が剣道場のある体育館からひよっこりと顔を出して覗いてきていた。

「いやな、無口がな」

「子供みたいな事行っていないで、入るなら入ってくださいよ。先輩が騒ぐと俺らが恥ずかしいんですよ」

「えー……もうやだこの後輩達……なんで先輩を敬わないん……？」  
一年生と思われる男子剣道部員にたしなめられ、しょんぼりと肩を落しながら剣道場に入って行く先輩。そのあとその一年生が、

「立石先輩が迷惑掛けました。どうぞ上がってください」

と、丁寧に僕を招き入れてくれた。桐式の話では立石先輩は信頼が厚いと言うし、まああんな対応されるのも信頼の証と言う訳だろう。僕はとりあえず勧められるままに剣道場に入る事にした。

この石間高校の剣道部はそこそこに強い。授業でやらないにも関わらず専用の道場がある事をはじめ、広い部室やシャワールームなど、他の部活動よりも優遇されているのは目に見えて明らかだった。帰宅部の僕からは分らないけれど、他の部活との優遇の差の所為でしばしば衝突が起きているとか何とか。

そんな広い道場には三十人ほどの部員が円を囲んである二人の試

合を見ていた。それを見た瞬間、道場に入った瞬間に鋭く切れるような張り詰めた空気がその二人——いや、竹刀を上段に構えた一人から発せられていた。垂に記されていた名前は桐式。得意の構えは中段だと言っていたけれど——

「なあ無口、桐式って何か変わった事でもあったのか？」

何時の間にか僕の横に立っていた立石先輩が聞いてくる。

「二ヶ月くらい前かな？ 桐式が突然上段で戦うようになったんだよ。元々あいつ大きく動いて戦う感じじゃなかったけどさ……ああやってる桐式の前に立つと分るんだけど、あの構えでどっしりと立たれると物凄い威圧感があるんだよな」

実際に立ち会っていない僕らにも桐式から発せられる威圧感が伝わってくる。それは相對しているもう一人の部員の方が如実に感じられるだろう、完全に気圧された様子で打ち込もうとする気配が見られない。

「シ——！」

短く鋭い桐式の声が発せられ、道場に竹刀の打ち込まれた乾いた音が響いた。実際には数秒だっただろう。しかし数分にも感じられる二人の牽制——いや、桐式の気当たりの末、まさに烈火の如き勢いで繰り出された桐式の面打ちが相手の頭に吸い込まれるように打ち込まれた。相手は気当たりに反応が遅れ、打ち込まれた後で防御の為に竹刀を上げていた程だった。

一瞬の静寂の後、周りの人垣が動き出す。初めに動いたのは一年生と思われる女子連中だった。憧れの先輩に汗を拭いてもらおうと言うのだろう、それぞれが手にタオルを持っている。

「凄いよな、あいつ。こりゃ来年は玉龍旗も狙えたりしてな」

「……そうかも知れませんか」

桐式の話では部員全体のレベルが相当上がっているらしい。剣道に限らず部活動で本当に強い所と言うのは団体戦での戦績が高い所を言う訳で、桐式一人がどれだけ強くても仕方ないのだ。その点で言えば先輩の言うとおり、来年はそれこそ大きな大会で優勝を狙え

るのかも知れない。との事だ。とは言え部外者の僕にはそこまでの内情は分からないけれど。

「桐式が変わったのってお前と付き合うようになってからなんだよなあ。なあなあ、無口、お前桐式とどう言う関係なんだよ？」

にやにやと、恐らく部員の変化が気になると言う訳じゃなく単純に興味があるだけと言った風に先輩が聞いてきた。しかし、

「別に、ただの友達ですよ。僕、もう行ってもいいですか？」

「あ？ まあ、いいけど……桐式の事待ってればいいんじゃないか？」

「……いえ、今日はちょっと寄り道するんで。それじゃまた」

まだ何か言いたそうな立石先輩を無視し、道場を後にする。外は相変わらず寒かったがそれも気にならない。玄関まで歩いて靴を履き替え、自転車置き場まで歩いて自転車に跨る。

「……チッ」

自転車を走らせると、思わず舌打ちをしてしまった。

「なに苛ついてんだよ」

頭にイチの声が響く。

「うるせえ」

「自分は今でも夢に見るほどあの刀野郎の事で悩んでいるのに、って感じか？」

「うるせえよ」

「紅葉は凄いやな。紅葉だって悩んでるだろうに、ああやって相手の事も想いながら自分の中に取り込んで。いつまでもグチグチ悩んでるお前よりよっぽど——」

「うるさいって言ってんだよ！」

自転車を止め、思わず叫んでしまった。同じように下校をしている生徒達に見られるがすぐに僕から視線を逸らして走り去ってしまった。イチはもう何も言っていない。僕も、何も言う事は無い。そしてその日はそのまま無言でどこに寄る事も無く家に帰る事にした。人に自分の弱みを見せた事がない僕にとって——桐式のあの精神

的な強さは毒だった。毒にしかない物を見続けるには……正直  
辛いのだった。



### 第三章 無口七緒 その二

#### ◇Side 無口七緒

テストを終え冬休みを待つしかない上に色々やる気が出ない月曜日のなんとも身の入らない授業を終えた放課後。

守風さんと組み手をし、その後ゲームに勤しんだ昨日はあのまま昼まで遊び、その後はペルソナの捜索に出た。相変わらず黒い風の噂は広まり続け、そして被害者も出続けている。事態を重く見ている警察は警戒態勢を敷き、石間町では至る所に警官が配備されていて夜遅くまで出歩いているとすぐに職務質問を受けてしまう状態になっていた。しかし、それでも黒い風は凶行を止めない。警察の警備を掻い潜り、被害を広める。その凶行も以前ならば被害は怪我人が出るばかりだった。でも今は怪我人なんてものは出ない。全てが血と肉の塊にされてしまっているらしい。そしてその凶行は人目の少ない夜中から段々と、まるで時の流れを逆行するように夜から夕方、夕方から昼へと犯行の時間をずらしていった。それでも警察は止められない。犯人の姿すら捉える事が出来ない。

「――って言うのに、何で桐式の奴は遊びに誘ってくるのか」

「などと文句を言いつつちゃっかりと支度をしているなちゃんであつた。まる」

「うるさいよ、お前は」

珍しく男物の服に身を包んでいるイチの頭を小突く。

「そう言えば今日は守風は来なかったな」

「そうだな。まあ毎日来るって事も無いだろ。守風さんのペルソナもそろそろ冬休みに入るらしいし家の事で忙しいんじゃないか？」

「ふーん。まあいいや、行こうぜ」

イチに命令される形なのが不本意だけれど、もう約束した時間が迫っていた。玄関に向けて通路を歩き、途中の父さんの部屋の戸を

開けて中を覗く。この時期は色々忙しいから部屋には居なかった。別段用事があった訳じゃないけれど、どこか安心した気持ちで家を出る。自転車に跨って外に出ると、後ろの荷台にさも当然と言うようにイチが座っていた。

「降りろよ」

「置いてく気かよ」

「お前には立派な足が付いてるだろ」

「鬼畜だな七緒は」

「じゃあお前が前に乗れ」

「……時々さ、女の後ろに乗ってる男いるじゃん。あれって物凄く情けなく見えるよな」。男なら女に力仕事させるなって」

お前も男だろ、と言う言葉が出かかったけれど、こうなったらイチはてこでも動かないのを僕は知っている。無駄な事をするんだったらこのまま行ってしまうと、自転車を走らせる事にした。しかし町中を走るパトカーにすぐに見つかり、注意をされてしまった。むすっとした膨れっ面を見せたイチは体を霧に変えると、僕の周りで待機する事にしたようだった。後に残されたのはイチが着ていた男物の服だけ。シャドウは服を着替えたりする事は出来るけれど、その着替えた服ごと体を魔力の霧に変える事は出来ない。例えば元々着ていた服を脱いだとしても一度体を霧に変えてまた姿を表せば、怪我が治るのと同じように元通りの服装に戻る。だからオシャレをして出かけようとしても、こうして体を霧に変えてしまうとまた元通りになってしまうのだった。イチは微妙にオシャレだから目には見えないけれどきつと今も膨れっ面をしているに違いはない。しかしそうまでして自分もう一台自転車を乗ってくるって事をしたくないのだろうか。

イチの服を拾って自転車を走らせる。昼前と言う事もあって道には割と人が多かった。どれだけ死者の出ている通り魔事件が起きていようと、やはり皆自分は大丈夫と思っているのだろうし、そうそう人は自分の生活を変えられない。僕らにしても何日も掛けて探し

ているのにその姿すら見た事が無いと言う事もあるし、正直この町でそんな事件が起きていると言う事にすら実感が沸かない時もある。ただ死者が出ているのは確かだし、危険があるのも確かだ。これ以上の被害が出る前に何とか捕まえたいものだけれど――

そんな事を考えながらも、僕は一軒の家に到着した。桐式に聞いたとおりの場所に立つ、桐式の表札を付けた家。小さな門の奥に見える玄関を見つつ、門に付いているインターホンを押す。

「お、紅葉が見てるぞ」

そう言いながらイチが僕の後ろに立っていた。上を見るイチの視線を追うと、二階の窓から桐式が僕らに手を振っているのが見えた。すぐにその姿が窓の向こうに消えると、それから暫くしてインターホンに応答がある訳でも無く玄関の戸が開かれて桐式が出てくる。その間にイチはさつき脱いだ服を着ていた。

「いらっしやーい」

言いつつ門を開けて僕の腕を取って中へ引き摺り込む。玄関から奥に伸びる通路の先には台所が見え、その途中の左手には居間と思われる部屋の入り口が見える。右手の壁伝いに二階へ伸びる階段が続いていた。桐式はまず僕を連れたまま左手の部屋に顔を出し、

「友達が来たから二階に来んなよー」

と、いつかの日に病院に居た時に見た桐式の父親に言った。

「お邪魔します」

と、桐式に腕を取られたまま挨拶をすると、いらっしやいとおじさんは言っていた。もはや犯人はこの世居らず、真相は永遠の闇の中へと消えてしまったあの刀野郎の事件を追っている所為か、髭も剃っていないその顔は非常に疲れた様子だった。僕の後が続いてイチも挨拶をすると、桐式は僕らを引き連れて二階へと歩き出す。階段を上る毎に二階から聞こえてくる掃除機の音が大きくなってくる。上り切った階段の先には三つの部屋が並び、その中の左の、さつき桐式が窓から手を振っていた部屋に向かうと、

「あらあら、昨日言ってたもみちゃんのお友達？」

と、右の部屋から人の良さそうな女の人が出てきた。桐式の母親だろう。掃除の為にかどうかは分らないけれど、髪を頭の後ろで纏めている姿は桐式にそっくりだった。

「そうそう。七緒とイチってんだ」

「あのゲンちゃんのとこの子よね？ あらあ、お父さんに似て良い男なこと。って、イチちゃん？ イチちゃんは女の子？」

ワシワシと頭を撫でられる僕ら。それから、後でケーキを持ってくるね、と行っておばさんは掃除機を片手に階段を下りて行った。それにしても男物の服を着ていると言うのによくイチが女だと気付いたもんだ。

「桐式って母親似なんだな」

「うんうん。よく二人で歩くと美人親子だね、って言われるよ」

自分で言うか、と言う突っ込みは飲み込み、桐式の部屋に足を踏み入れた。初めて入る桐式の部屋。予想としては見た目のギャップを披露するかのようにピンクピンクしてるもんかと思ったけれど、そうでもなかった。窓際にあるベッドのすぐ近くに設置されている本棚には本がきっちりと並べられ、小さなテーブルを取り囲むように四つある座布団の一つにはちよこんと姫ちゃんが座っている。テレビとそのテレビを置いている台にはゲーム機が置かれていて、ついさっきまでやっていたと言うようにコントローラーが散乱していた。入ってすぐ横にある本棚の上には昔懐かしいダンシングフラワーとファアービーが置かれている。そんな物を見せられて手を叩かないほど僕は人の道を外れていない。パン、と言う音に反応したダンシングフラワーはモーター音を鳴らしながらうねうねと踊り始めた。

「あーあ。七緒、その張り紙をよく読むんだ」

と言う桐式に言われ、ダンシングフラワーの奥に張られた紙に視線を移す。

「この花踊らすべからず。躍らせた者には金百円頂戴いたします。ただしイケメンに限る……」

しばしの逡巡。そして僕は財布を取り出した。

「おー、豪気だなー。しかしこれで七緒は自称イケメンに昇格したな。このナルシストめ」

「なんだと。じゃあやめるよ」

「おーおー、もっと自分に自身を持てよ。七緒って結構モテるんだぜよ？」

「じゃあ払う」

「おう、ナルシスト野郎」

「めんどくせえな桐式は」

そんなやり取りの後、結局僕は百円を払う事になった。隣のファ―ビーにも何か張り紙がされていないかを確認し、何も無い事を見てから手をかざすと「ナデナデシター」と言うから撫でてやった。そんな事をしてから既に三人とも座っているテーブルに僕も座る事にした。

座ってから改めて部屋を見渡す。部屋に入った時点で一度見ているからこれ以上見る必要も無いけれど、こうして見てしまうのはどうにも落ち着かないからだろう。――他人の、友達の家に来るなんて何年ぶりだろうか。見ればイチも僕と同じように妙にソワソワとしていた。まあイチの場合は桐式の事が好きだから、どうしても色んな物に興味が沸くんだろう。

「なんだなんだ、二人して挙動不審だなあ」

けらけらと僕らを笑う桐式。

「紅葉ってこの部屋に友達呼んで遊んだりすんの？」

「んー、まあそこそこには。男を呼ぶのは初めてだけだよ」

イチが部屋を見渡す視線を桐式に向けると、少し考える素振りを見せて答えた。

「いやあ、お父さんなんかさっきは気にしていない風だったけどさ、やっぱり凄い気になっているらしいぜ？ 昨日お母さんが言ってた」

「紅葉が彼氏連れてくるって？」

「そうそう」

「だってよ！」

なんて言うイチの肘が僕の脇腹に突き刺さる。だからなんだというんだろうか。とりあえず一発は一発と言う事でチョップを返しておく。それに合わせる様に部屋の戸がノックされ、桐式の返事を聞いてから開かれる。そこにはお盆にケーキと飲み物を載せたお婆さんが居た。

「はい、ケーキ。ゆっくりしてってね」

と、テーブルにお盆を置いてから姫ちゃんの頭を撫でて出て行く。その後姿を見送ってから、

「お婆さんって姫ちゃんの事知ってるのか？」

「んにゃ、知り合いの子供って事で誤魔化してる。でもま、いつかは本当の事話したいよな」

言って桐式が姫ちゃんの頭を抱き寄せた。とは言え本当の事を話しても理解してもらうのは難しいだろう。もし話すとなれば桐式の父親には刀野郎の事を、警察官殺しの犯人の事を話さなければならなくなる。警察として仲間を殺された仇も討てないと知ったらどれだけ悔しいだろうか。桐式だってその所は理解しているだろう。理解しているからこそ、

「七緒が羨ましいよ。こんな事態になってもきちんと理解出来る人が周りにいてさ」

こんな風に少し寂しい様子で言うてくるのだろう。

「……こんな事態、そうそう起きないだろ。それに魔術師ってのもそんなに良いもんじゃない」

「そうかな？　けど普通あたしらの年代だと魔法だのなんだのってのに憧れるもんだぜ？」

それにしても桐式の憧れは異常だ、と言う言葉は飲み込む。けど実際のところはそうなんだろうか。僕としてはもう何年も魔術に携わっていたからその辺の感情が良く分らない。

「そういえばそろそろ冬休みで、んでもってクリスマスだな」

言いつつ桐式の視線が部屋の壁のカレンダーに動く。冬休みが始まる十二月二十五日はクリスマス。二十四日のクリスマスイブと相

まっってこの小さな町も活気付く日だけれど、毎年僕には関係の無い日だった。もちろん今年も関係の無い日となるだろう。

「紅葉はなにか予定あるのか？」

と、イチが何かを期待するように笑顔で聞いていた。何を期待したって無駄だろうと言う事が分かっているんだろう。

「や、特に無いぜ。なんなら四人でカラオケでも行くか？」

——どうやら期待が現実になったらしい。ぱあっとイチの表情が明るくなり、嬉しそうにガッツポーズを僕に向けてしてきた。

「七緒だってどうせ用事なんかないだろ？」

「どうせってなんだよどうせって」

「じゃあ用事があるのか？」

テーブルに片肘を付き、手の上に顎を乗せながらむふふと笑う桐式。なんかむかつく。

「無いけどさ」

「じゃあ決まりだな。カラオケで良いのか？」

「用事が無いからって行くとは言っていないぞ」

「なんだなんだ、ノリが悪いなあ。じゃあ三人で行くか？」

むう、と口を尖らせて桐式がイチに向けて言う。すると、どこか慌てた様子でイチが僕の顔を見詰めてきた。その後はなにかしら憎まれ口でも叩くかと思っただけれど何も言わずに桐式と僕とで視線を交互に移動させるだけだった。

「一人のクリスマスは寂しいぜえ？」

「桐式は僕らじゃなくても友達がいるだろ」

「まーなー。けど七緒にはあたししかないだろ？　一緒に居てくれるって奴が居るんだからいいじゃないか」

恩着せがましい言い方をする。と思いつつ、つー、と僕の前に移動してくるチョコレートケーキに気づく。何かの小細工でも仕掛けられていないのであれば、皿を手で押している姫ちゃんがやっている事に見えた。

「姫ちゃん？」

何をしているのか、と首を傾げてみると、ケーキと一緒にメモ紙が僕の前に置かれているのに気づいた。メモには、

「ケーキあげるから一緒に遊ぼう、だってよ」

ばつーんとイチに背中を叩かれる。

「まさかこれで断るほど人間性が無い訳じゃないよなあ？」

イチが僕を見ながら笑っている。非常に不愉快だ。

「確かに行くとは行っていないけどさ、別に行かないとも言っていないぞ」

「なんだその屁理屈。で、行くのか？ 行かないのか？」

桐式が少し不機嫌そうに頬杖をしながら聞いてくる。眉を顰めて、なんだか嫌な迫力を出しながら答えを迫る桐式に、

「分ったよ。行く。行くよ」

僕は両手を上げて降参をしながら承諾する事にした。しかしそれでも桐式は不機嫌な表情を崩さず――

「ぬふ。おっけおっけ、じゃあどこに行くか考えないとなー」

しかし一転して嬉しそうな笑顔になって隣の姬ちゃんの頭を撫でた。姬ちゃんも嬉しそうにしつつ、その視線は僕にくれたはずのケーキに注がれている。僕の目の前にはチョコレートケーキが二つ。僕はその二つのケーキを姬ちゃんに差し出した。

「おや、七緒は甘い好きじゃないのか？」

「家が酒屋だからね。甘いよりは辛いの方が好きだよ」

「と、言いつつ姫が可愛いくて仕方ないからあげたなちゃんであつた」

振り上げた右拳は真っ直ぐイチのこめかみへ。拳を右に。インド人を右に。

「痛い」

「知らん」

「なっはっは。さて、こうなると冬休みが更に待ち遠しくなるな。今回の期末は色々教えてもらって点数も良かったし、通知表も胸を張って親に渡せるよ。ありがとな」



と、何度聞いたかと言う文句を聞き流す。こうして魔術関連で桐式と知り合う前までも何度か勉強を教えてくれと頼まれた事はあったけれど、その度に僕は断ってきた。しかし今回は桐式の強い押しに負けて教える事になってしまったのだ。とは言え桐式は頭が悪い訳じゃなく、むしろ理解力も応用力もあるから教えるのは何の苦労も無く、桐式は学年十位に入る成績を残したのだった。正直桐式は勉強をしないのでも無く出来ない訳でも無いから教師の教え方に問題があるような気がしてきた。

「それにしても七緒はいつ勉強してるんだ？ 割と遊んでるし夜とかも見回りに出たりするし——その、魔術の修行もしてるんだろ？」  
「……僕は桐式みたいにバイトしてる訳じゃないし、変な集まりに出たりもしてないからな。時間はあるよ」

「へえ。でもま、本当に今回は助かった。イチも教えてくれたしな」  
うむ、と腕を組んで偉そうにするイチ。なんだか見た目馬鹿っぽく見えるこの青頭だけれど、シャドウはペルソナの記憶を持って生み出されるから頭脳レベルではイチと僕は同じらしい。しかしそれなのになんでこんなアホなのが生み出されたのが良く分らないのだけれど。なんなんだろうこのアホは。しねばいいのに。

「こりゃお年玉も期待出来るね。……お、そう言えば正月は？ 初詣とか行くんだろ？」

「まあ行くとは思うけど」  
「じゃあ一緒に行こうぜ」

まるでそれが当然と言う様に、何の逡巡も無く桐式は言い放った。積極的と言うのかお節介と言うのか自分勝手と言うのか。

「……あのさ、さっきも言ったけどなんで僕と一緒に行くこうするんだよ。つまないだろ。彼氏とか居ないのか？」

「んなもん居ないよ。それにあたしは七緒と一緒に居て楽しいぜ？」

「はあ……？ 僕と一緒に何が楽しいんだか」

「そりゃ話が合うからな。あたしも中学から数えて五人くらいと付き合った事あるけどさ、あいつら結局彼女が居るって事実を作った

いだけでさ、そこそこに顔が良ければ誰でも良いんだろうな。ほら、あたしはそんなにオシャレに気を使う事も無いし、ゲームとか漫画ばかりだろ？ でもどうにも今まで付き合った奴ってゲームとかやらない奴ばっかでさ、その上話のネタに他人の悪口に陰口、自分の不幸自慢ばかり。口は悪いし態度も悪い。あたしはもっと前向きに楽しい話をしたいんだよ。な、その点七緒は後ろ向きな事は言わないし、あたしの遊びに付き合えるしさ。七緒だってあたしと遊んで楽しいだろ？」

「まあ……楽しくない事はないけどな」

「はは。そう言う回りくどい言い方をしつつも素直な七緒が好きだぜ」

桐式が口の端を吊り上げてにや、と笑う。横のイチもにんまりと笑っていた。なんだこいつら。きもちわるい。

「じゃあさ、紅葉ってその、なんだ。前の男とエッチしたのか？」

イチが言った瞬間、反射的に僕は拳を頭に叩き込んでいた。おふう、と声を漏らして倒れるイチを睨みつつ、恐る恐る桐式に視線を移すと、

「はは、ちゅーはした事あるけどな。ずっと健全なお付き合いしてたぜ？ さっきも言ったとおり趣味が合わなかったからなあ、付き合い合っても一ヶ月持たなかったよ。それに高校に入ってから部活一筋でそんな事してる暇もなかったしさ、中学生でそんなことやってる奴等も早々居ないだろ」

「いやあ、最近はやいって言うぜ？ 童貞が許されるのは小学生までって言うしさ」

「それは早すぎだろ。と言う事であたしはユニコーンに会いにいける清らかな女性だぜ。そう言う七緒は誰かと付き合った事はあるのか？」

「無い。それと別に僕が言った訳じゃないぞ」

付き合った、と言う表現をしていいのかは分らないが小学生の低学年とか幼稚園とかの頃に好きな女の子と一緒に歩いたりはしたけ

れどそれは言う必要は無いかと伏せておく。

「へえ。じゃあ誰かに告白されたりとかは？」

「無い」

「おい嘘つき」

僕の言葉に間髪要れずに突っ込みを入れたのはイチだった。そのイチの言葉にぴくん、と反応した桐式と姫ちゃん。こう言う色恋話が好きな所は何だかんだと女なんだなあと再認識してしまう。

「誰に告られたんだ？」

桐式が凄く嬉しそうな笑顔でイチに詰め寄る。イチが変な事を言わないようにと口を手で塞ごうと伸ばした瞬間、テーブルの上に身を乗り出した桐式に突き飛ばされ、そして何時の間にかテーブルを回りこんでいた姫ちゃんに取り押さえられた。

「ほら、あの鞍馬智子だよ。昔から好きだったらしくてさ、七緒が高校に入ってからすぐに告白してきたんだよ」

「マジか！？ だから二人が会うとなんか余所余所しい感じだったんかー。で、付き合ったのか？」

僕が動けないのを良い事にイチから情報を聞きだそうとする桐式。しかし小さな女の子に押さえつけられた程度で長いこと動きを止められる訳もなく、腕を振り解いてイチの口を塞ぐ為に拳を振り上げる。が、姫ちゃんのロケットダイブが脇腹に突き刺さって悶絶。涙が出てくる位に痛いのと、そこまでして僕の恋愛事情を聞きたい二人の気力に色々と面倒になって放置する事にした。だって言うのに、姫ちゃんはその小さな体を目一杯使って僕の体を押さえつけてくる。「それがさ、すみません趣味じゃないです、の一言であっさり振っちゃったんだよな。ま、俺にしても趣味じゃないから別にいいんだけど。そのまま付き合って今も毎日毎晩キャッキャウフフされても困るぜよ」

「しゅ、趣味じゃない！？ あんなに可愛い人にそんな事言うだなんて豪気だなあ」

「まー顔は良いんだけどなあ……あの人もー」

「イチ」

イチが言い掛けた事を制す。それ以上は桐式に言う必要も無い、  
と思ったのだけれど、

「……ひょっとして魔術師だとか？」

「なんでお前はそう鋭いんだ」

「や、カマ掛けたただけけど」

まんまとしてやられてしまった。

「七緒は頭は良いけどあんまり会話しないからこう言う駆け引きに  
弱そうだな」

「……余計なお世話だ」

頭をボリボリと掻きながら体を起し、姫ちゃんを抱き抱えて膝の  
上に座らせる。

「確かにあの人も魔術師だよ、僕よりも数段立派だね。だからあん  
まりあの人に近寄らない方が良い」

「魔術師だから？」

「いや、あいつ顔は良いけど性格がねちっこいからな。目付けられ  
ると後々面倒だぜ」

「イチ……」

ごす、とイチの頭にチョップをする。

「もう余計な事言うな。面倒だから」

イチが頭を押えながらへえへえ、と返事すると、桐式も満足した  
のか、それとももうその話を続けたくない僕の気持ちを汲んだのか、  
乗り出していた体を元に戻していた。

「まさかストーカーされたとか？」

だと言うのにまるで僕の油断を狙ったかのように鋭い一撃が放た  
れる。

「へー、鞍馬先輩ってそんな人だったんか」

「僕はまだ何も言っていない」

反論してみるも、

「じゃあどうだったんだよ」

その問いに対する言葉が出てこなかった。

「わっかかりやすいなあ」

「うっさいなお前は」

「おや、ななちゃん反抗期ですかあ？」

にやりと挑発するように笑う桐式にそろそろ腹が立ちそうだったが、それをぐっと押えた。ここで怒鳴り散らしても意味が無い。

「ふうん、鞍馬先輩は魔術師でストーカーか。ん？ ……なあ、ペルソナってどう言う基準で選ばれてるんだ？ ヴァイオレットの事もあるし魔術師の方が選ばれやすいのかな」

「さあ……それはオズワルドのバカに聞かないと分らないけど、それがどうかしたのか？」

「いや、鞍馬先輩がペルソナなんじゃないかなって」

「それは無かったよ」

「そうなのか？」

「うん。イチが僕の前に現れて、オズワルドのバカが現れて、それから僕はあのバカを探す片手間でペルソナも探してて、まあ魔術師だからって事で鞍馬先輩の事も探ってたけどそんな素振りは無かった」

「その行動の所為であの人に勘違いされてストーカー行為が再開されたんだよな」

イチの相槌に嫌な事を思い出させられて眉間に皺を寄せてしまう。とは言えそのストーカー行為ももう収まったから一安心だ。

「……それってどれ位前まで続いていた？」

「ストーカーか？ ……確か刀野郎の時の少し前くらいだったな」

「じゃあ二ヶ月くらい前か。でもさ、確か黒い風の噂ってその頃から良く聞くようになったんだよな」

「ん？ それが？」

「……や、なんでも。さて、話が十分逸れたなー。でさ、七緒は初詣はあたしと一緒に行くのか？」

「しつこいな桐式は！」

余りの話の変わりように思わず叫んでしまった僕が居る。その声に反応したのか、離れた棚の上のダンシングフラワーが踊り始めてしまった。その場に居た全員の視線が彼に注がれ、そして桐式の差し出した手に眉を顰めながら僕は百円を支払う事となった。

「しつこいも何もまだ答え貰ってないしー。これ以上話を続けたくなかったらさっさと行くと言うべし」

「その言い方だと行くって言わないと延々とこの話を続けるって聞こえるぞ」

「え、そう言ったんだけど気づかなかったか？」

「この野郎」

「あたしは野郎じゃない」

「ったく……行くよ。行けば良いんだろ」

「そうそう。素直なのは良い事だ」

「なんて女だよ……」

「そんな女に引っ掛かったのが自分の幸運の始まりだと思うが良い」  
がつくりと項垂れる僕。にこやかに笑っている膝の上に座ったままの姫ちゃんのほっぺたをつねてみると、

「こらこら、幼児虐待だ」

イチに頭を小突かれた。もうやり返す気力も無い。どうにでもなれ状態になった僕に追い討ちを掛けるように、

「七緒君、イチちゃん、今日は晩御飯は食べてく？」

と、桐式の母親が突然部屋に入ってきて聞いてくるのだった。

「お母さん、ノックしろよー」

そんな風に不満を口にする桐式にごめんね、と笑顔で軽く謝りながら桐式の母親は僕らの返事を待っていて、イチは嬉しそうに頂きます、と答えていた。僕も同じように返事をするとおばさんは笑顔を崩さずに、

「じゃあおばさん腕によりをかけちゃうから、期待しててね！」  
と言って部屋を出て行った。

「……元氣な人だね」

「はは、自慢の母だぜ」

そんな風に言う桐式は少し照れているようで、同時に親の事が好きなんだと言うのがよく分った。ふと膝の上の姫ちゃんが何かしているのに気付いて視線を下げてみると、メモ帳につらつらと文字を書いているのが見えた。体を動かしてそのメモを見てみると、そこには「お母さんのごはんおいしいよ」と書いてあった。

メモを掲げながら僕を見上げる姫ちゃんの表情は明るい。

——シャドウはペルソナの記憶を持って生み出される。姫ちゃんからすればおばさんは桐式と同じように自分の母親なのだ。そう思うと、いつかはおばさんとおじさんに姫ちゃんの事を知って貰いたい、そんな事を姫ちゃんの頭を撫でながら僕は考えていたのだった。

### 第三章 無口七緒 その三

石間駅へと続く道の途中に設置された自動販売機から、ガタン、と音を立てて缶が取り出し口に落ちてくる。それを取ったのは緑色のジャージに身を包む守風だった。おしるこ、と銘打った缶の暖かさを片手に感じながら何度も上下に振り、プルタブを開ける。缶を口に付けるて傾けると小豆の甘さが流れ込んできた。

一口飲み終えると缶を両手に持って暖を取る。それから缶を左右に軽く振りながら歩き出した守風の表情は暗い。

「……もう八時か」

道に並ぶ店の軒先に設置された時計を眺めて守風が呟いた。重い足取りで歩を進めた先は石間駅だった。閑静な住宅街である石間町と他の町とを繋ぐ駅を、しかし守風は無視して踏切を越えて道を行く。石間町に不足しがちな娯楽が一手に集う駅前には家へと向かうスーツ姿のサラリーマンが多く、その間を掻き分けて守風は駅から離れていくように歩いていた。すると、その道の先から一人の男が歩いてくる。その男と守風がお互いの事に気付くのはほぼ同時だった。男が片手を軽く挙げて少しだけ歩く速度を速めて近付いてきた。

「迎えに来てくれたのか」

歳は三十前後と言った外見で中肉中背のその男と守風が合流すると、守風は体を反転して来た道に戻るようにして歩く。

「そろそろ帰ってくると思ってた」

「そっか。じゃあどこかでメシでも食ってくか？ たまには贅沢したいしな」

「給料日はまだ少し先だぞ？」

「お？ 俺様を見くびるなよ。それくらいの蓄えはあるぜ」  
「む。……じゃあ私はハンバーグが良い」

守風が答えると、よし来た、と男が歩く先を変えた。



守風の表情は暗い。しかし隣に歩く男の、仕事が終わった後の解放的な笑顔を見ると、その表情は若干和らいでいた。

——その道の先に桐式紅葉と、無口七緒の姿を見るまでは。

## ◇Side 無口七緒

「また来てねー。ゲンちゃんによろしくねー」

と、おばさんが玄関で手を振っていた。

桐式の家で晩御飯をご馳走になった僕らはおばさんとおじさんに見送られながら家を出る事になった。食事中もおばさんは終始話し続け、それに桐式とイチが楽しそうに答える。僕はおじさんと二人で肅々と話をしながら食べていた。その話の内容が、紅葉とは付き合ってるのか、だとか、うちの娘は可愛いだろう、だとか。刑事と言う事もあってもっと厳しくてガンコな人なのかと思っただらとんだ親馬鹿だった。そしてそんな話をしているのが桐式にばれると怒られて萎縮していた姿も僕の第一印象とはまったく違っていて拍子抜けだった。

笑顔で見送る二人に軽く頭を下げ、乗ってきた自転車を押しながら歩き出す。久しく——本当に数年ぶりにこうして友人の家に招かれ、晩御飯までご馳走になった。それは悪くなく、むしろ——

「楽しかったなあ」

と、イチが背筋を伸ばしながら言った。

「はは、またいつでも来いよ？」

「やふーい。じゃあまた明日」

「調子に乗るな」

ごち、とイチの頭を殴ると、恨みがましい目で僕を見てきた。

「で、桐式は何しに出てきたんだ？」

「ん？ いや、この後遊びに行く約束だろ」

「いやそんな約束いつしたよ」

とは言え桐式も、イチと手を繋いで歩いている姫ちゃんも遊ぶ気

まんまんだから幾ら言っても仕方ないんだろう。

「家がダメならゲーセンでも行くか？」

「僕はゲーセンで出来るようなゲームはないぞ」

「マジか！　そう言えば七緒んちに格ゲー置いてないよな」

うむむ、と顎に手を当てながら唸る桐式。また変な事を考えているんだろうか。

「ま、取りあえず行くとしようぜ」

「はあ……面倒だな。ま、いいか」

そんな僕の言葉にイチはひゃっほうと喜び、姫ちゃんも両手を挙げて喜んでいた。桐式も表に出して喜ぶ様子は見せなかったけれどそれでも嬉しそうだった。

この町で遊びに行くとすると石間駅の方に行くしかない。イチ達と一緒に言うのと町から出る訳にも行かないし、と僕達の足は自然と駅に向かっていた。桐式の家から駅までは歩いて三十分は掛かるらしく、それならばとイチと姫ちゃんは体を霧に変え――

「張り切ってゴーだぜ！」

と、僕の自転車の後ろに乗った桐式と一緒に二人乗りで向かう事になった。イチの脱いだ服は前籠に放り投げる。しかしこれだったら自分の自転車を持ってくればよかったのに、と思ったけれど――  
「おやおやなちゃん、背中になにやら柔らかいものが当たっている様子ですが？」

僕の頭の中に響く声に突っ込みを入れたいけれど今のイチの状態だとそれも敵わない。と言う事で無視をする。って言うか桐式が自転車の二人乗りで僕の体に腕を巻きつけてしがみ付くようにして乗ってくるのは予想だにしてなかったと言うか見た目から似合わないと言うか。しかしまあ荷台を跨いで座るあたりは見た目通りだったけれど。まあ下はスカートじゃなくてジーパンだったから別に問題は無いのだろう。

「いやあ七緒がこんなにたくましく思えるだなんて」

「それじゃ僕がいつも頼りないって聞こえるんだが」

「……あたし、七緒が戦って勝ったとこ見た事無いぞ」

「あー、それじゃ仕方ないな」

言いつつ思い返してみるとそうだった。とは言っても桐式の前で戦った相手と言えば刀野郎とヴァイオレットさんの二人。刀野郎はともかく力量だけで言えばヴァイオレットさんより僕の方が強いとは思わけれど、殴った傍から傷を治してしまうような相手にドノーマルの僕が正面から勝てる訳がない気もする。と言うか桐式でも勝てないんじゃないだろうか。

「よし、今度手合わせしよう」

頼りない風に見えるなら、その見識を覆す事をすればいい。手っ取り早い方法は桐式に正面から戦って勝つ事だろう。

「あたしと？ ……剣道三倍段って知ってるか？」

「知ってる」

「ほうほう、七緒はそれを知った上であたしに勝つ自信がある」と

「勝てるさ」

「あたしの段位知ってるか？」

「……二段？」

「残念、四段だ。ま、段位が高いつて言っても実技だけで段位が取れる訳じゃないから同じ四段でも実力はまちまちだけどさ。ちなみに部長のたちんも四段な。あたしとの戦績は五分五分……と言いたいけど流石にたちんの方が強い。ま、それは置いといて。七緒があたしに勝つには最低でも十二段の実力が必要な訳だが勝算は？」

「楽勝だろ」

言った瞬間、後頭部に軽い衝撃が放たれる。桐式に叩かれたのかと思っただけで叩いたのは突如現れて僕の横で並走するイチだった。「紅葉、ちょっと離れてやらないとこいつ変な事ばっか言うぞ」

「へ？」

「ほら、胸が背中に当たってるから興奮して訳が分からなくなってるんだよ」

「お？ おお……」

まるで今言われて気付いたとでも言うような声をあげて桐式が少しだけ体を離す。しかしそれでもまだ背中に当たっているあたり、桐式が二人乗りする時はいつもこうなんだろう。……いや、桐式の胸が大きすぎるとも言うのだろうか……？

「悪い悪い」

「別に何も」

「だよなー。むしろお金を払っても良いくらいだよなー」

バカを言っているイチに向けて拳を放つがその拳はイチが体を霧に変えた所為で空を切った。まったく便利な体してやがる。

「さてさて、行ってなにしようかね。つーか連続殺人が起きてるってのに人が多いなあ。駅前だからか？」

「もう八時だからな、仕事帰りだろ。殺人事件が頻発してるからって会社が仕事を止めるのは難しいんじゃないか？」

「だよなー。まあそんな中であたしらがこうして遊びに出てるのもアレなんだけどな。……お父さんも北修一の事件だけじゃなくて黒い風の事でも走り回ってる。でも一番どうにか出来るあたしらがこんな事してるってのは間違いないのかな」

その呟きは桐式にしては珍しく——本当に珍しく、自転車の二人乗りで僕にしがみつくようにして乗る姿よりも似合わないような、気弱な声だった。確かに黒い風がペルソナやシャドウの仕業だとして——いや、もう疑う余地も無くどちらかの仕業だろう。だとしたらそれを食い止められるのは僕らしか居ない。パレットが動かないのであれば尚更だ。だけど……

「桐式。桐式は学生だ。ただの普通の高校生だよ。こんな事に首を突っ込んでるのがおかしいんだ。だから変な事は考えなくて良い。ペルソナの事もシャドウの事も僕に任せて忘れろよ」

それは僕の本心だ。社会の事は社会に任せればいい。だから魔術師の事は魔術師に任せればいいんだ。桐式はまだこちらの世界の事を知っただけ。こちらの世界に触れただけ。まだ足を踏み入れている。まだ踏み込んでいない。

「桐式は僕の友達だ、友達になってくれた。それは素直に嬉しいよ。だから僕は……友達に危険な目に遭ってほしくない」

「だから忘れろって？」

「……そうだよ」

「無理だね。でもま、七緒があたしの事を心配してくれるのは凄く嬉しいよ」

言って、桐式の腕が強く僕の体を抱き締める。自然と体が密着して桐式の体温が、心臓の鼓動が伝わってきた。

「……ありがと。でもあたしは――」

耳元で囁かれる桐式の言葉に吐息に体が身震いを起す。しかしその言葉の続きは紡がれる事は無く、

「あれ、守風じゃん」

桐式のそんな言葉と共に遮られた。見れば目の前には男の人と一緒に並んで歩く守風さんの姿があった。自転車速度を落としてその二人に近寄ると、驚いたようで、そして――まるで警戒するかのような表情で僕らを見る守風さんの顔が見えてくる。

「や、やあ……」

「こんばんは」

軽く頭を下げて挨拶をし、そのまま視線を横の男の人に移す。髪は短く、中肉中背。どこか疲れた様子の顔は若いサラリーマンと言った感じだった。守風さんのペルソナは仕事をしていると言うし――「ひょっとして守風の……？」

桐式が僕の疑問をそのまま、しかしその人がペルソナじゃなかった場合の為に核心に触れる言葉は使わずに問う。

「ん？ まさか君達もペルソナなのか？」

そんな桐式の問いはその男の人から返ってきた。

「ちよ、秋人……！」

あきひと、と守風さんが呼んだその人は人の良さそうな笑みを浮かべ、

「そっかそっか、君らがいつも守風の言ってるペルソナか。色々話

は聞いてるよ。初めまして、俺は片山秋人って言うんだけど、えっと、無口……君って言ったかな？ 守風がメシとか奢ってもらったりして迷惑掛けてるらしいね、改めてお礼を言うよ」

「あ、いえ、どうも……」

守風さんに関しては別段僕が食事を奢ったりと言うのは少ない。むしろ夜に見回りに出た時に奢ってもらう場合の方が多かったりする。

「あー……俺達これからメシなんだけど、一緒にどうかな？ 奢るけど」

そう言って片山さんの背後にあるファミレスを指差す。

「え、でも僕達もう食事を済ませてしまったんで……」

「じゃあデザートとかは？ あ、何か用事があるんなら無理に引き止めないけど……やっぱ俺もペルソナって奴だし、ほら、今変な噂があるだろ？ こいつはその辺の事を聞いてもはぐらかすからさ、詳しく聞きたいんだよ。俺も力になれるかもしれないし」

片山さんは言いながら守風さんの首に腕を巻きつけて引き寄せ、固めた拳を頭にぐりぐりと押し付けていた。守風さんはどこか浮かない表情をしながらも片山さんを睨むようにして怒った様子だった。普段から守風さんは自分のペルソナの事を話さなかった。見たところ片山さんはサラリーマンのようだし、ただでさえ忙しいのに僕らの――魔術師の事に巻き込みたくないんだろう。

そうなるところで片山さんに今の僕らの状況を話す事は守風さんの意思に反する行為なんじゃないか。そう思って桐式に視線を向けると同じ事を考えていたらしく困った表情を見せていた。そんな僕らの心情を察してか片山さんの責めを外してから大きく溜息を吐く。「秋人も最近はこの話ばかりだ。このままじゃ一人でほっつき歩かかねないし、出来れば七緒君達と一緒に話をしたい」

諦めた様子でそう呟く守風さん。

「まああたしらもゲーセンで暇を潰そうと思ってただけだしな」

桐式が言うと、僕にも同意を求めるようにして片眉を上げながら

見てくる。僕も小さく頷いて答えると、

「よし、じゃあ行くか。席空いてるかね」

言いながら片山さんを先頭にしてファミレスへと向かっていった。

「あ、ちよつと待ってください」

桐式が言うと、全員が振り返った。それから桐式が周囲の様子を伺い、他から見えないように体で影を作ってから姫ちゃんを呼ぶ。

するとその体で作った影にちよこんと姫ちゃんが現れた。それから僕にも目配せをすると、

「よつと」

と、他人の目を気にする事も無くイチが現れた。人に見られたらどうするんだと思ったけれど幸いに周囲に人が居なかったから助かった。

片山さんが目を丸くしてイチと姫ちゃんを見ている。守風さんはいつも単独行動をしている様子だし、ひよつとしたらこうしてシャドウ達が体を霧に変えているところをあまり見た事が無いのだろうか。

「いやあ……可愛いなあ、二人とも。いやもちろん桐式さんも可愛いけどさ。驚いちゃったよ」

と、思っていたら違っていたらしい。姫ちゃんはともかくイチが可愛いとは到底思えないのだけど、まあそれは人それぞれだろう。

「確かイチ君と姫ちゃんだったっけ。守風から聞いているよ」

ども、と小さく頭を下げるイチ。姫ちゃんも丁寧におじぎをしていた。それを見てから片山さんが再度ファミレスへと向かった。

「……君ら、ゲーセンに行こうとしたのか？」

入り口の戸を開きながら片山さんが聞いてくると、それに桐式が頷いて応える。

「そっか。この辺のゲーセンだと、あの本屋の並びのдар？　もう何ヶ月も行っってねえなあ」

「片山さん、ゲーセンとか行くんすか？」

と、ヤンキーが目上の先輩に対して使うような敬語で桐式が問い

掛けた。最近桐式の事をよく知るようになってからはただのゲーム好きのオタクだと思ってしまうようになっていたけど、そう言えば桐式はレディースだった事を思い出し、それならこう言う言葉遣いもあるのかと納得する事にする。とは言え今思うとレディースだというのも僕が勝つてに思い込んでいただけな気もするけれど。

「まーね。最近は仕事が忙しくてめっきりと行ってないけどさ。割とゲームとかやるよ、俺は。あ、六名禁煙で」

店内に入り、桐式と話しながら出迎えた店員に席に案内される。タンクトップにホットパンツと言う、この寒さに相応しくないイチの姿にぎよっとする店員は放っておく。店内はそれほど混雑してはいない様子で、席も幾つか空いていた。

隣同士の四人掛けのテーブルと二人掛けのテーブルに腰掛ける。二人掛けの方には僕とイチ、四人掛けの方に残りの四人がそれぞれのパートナーと隣り合わせになるように座った。やはりと言うべきなのか、守風さんは片山さんを身動きの取れない壁側の席ではなく、出入り口に近い通路側の席に座らせていた。

食事を済ませていない片山さんと守風さんがメニューを手料理を選ぶ。僕はドリンクバーで済まそうと思ったけれど、イチはデザートを食べようともしているのかメニューを眺めていた。

「決まった？」

「決まりましたー」

片山さんが聞いてくると、桐式が応える。それから店員を呼ぶためにインターホンを押すと、暫くしてから店員が現れて料理を注文した。桐式と僕はドリンクバーだけだったけれど、姫ちゃんとイチは二人で揃ってパフェを頼んでいた。

飲み物を持ってきてから軽く話をする。まだ本題には入らないのかそれとも興味がそっちに移ってしまったのか桐式と片山さんは二人でゲームの話をしている。その間も守風さんは不機嫌そうで、いつもなら笑いながら僕に話しかけてきたりするのにそれも無かった。それから更に時間が経ち、料理が運ばれてくる。片山さんはカレー



うどんでは守風さんはハンバーグのセットだった。さっき桐式の家で晩御飯を食べて満腹だと言うのに人が食べているのを見てると美味しそうに見えてくる。

「……食べるか？」

そんな僕の視線を、まるでお腹を空かせた子供のようにでも見えたのかイチがパフエをスプーンで指し示しながら勧めてきたがそれを首を横に振って断る。

「――さて、じゃあ……」

片山さんがご飯を入れたカレーうどんのスープを飲み干して口元を拭きつつ呟いた。全員の背筋が伸びて話をする為の準備を整える。「最近噂の黒い風、あれってペルソナとかシャドウ絡みの事件なんだろう？」

その片山さんの問いに対面して座っている桐式が一度僕を見てから、

「多分」

と答える。十中八九シャドウの仕業なのだろうけれど僕らもまだ裏が取れていない。その事を片山さんに伝えると、

「でもこんな事出来るのってシャドウくらいじゃないのか？　こいつだって風を起せるし」

そう言って隣に座る守風さんの頭をガシガシと撫でると、守風さんが鬱陶しそうに眉を顰めていた。

「いや――……そう、ですね。シャドウだとは思いますが」

片山さんは魔術師の事を知らない。シャドウでなくてもこんな事が出来る人物も存在するには存在するのだろうけれど、霊地としてのレベルが低く魔術師から狙われる理由に乏しいこの土地にこれほど目立つ行動をするような輩がこのタイミングで来ると言うのも考え辛い。ならば今後の片山さんの生活の為にも余計な事を教える必要は無いだろう。

「そいつの目的も分らないんだろう？　厄介なもんだよな。そいつの所為でうちの会社のおばちゃん達も怯えちゃってるよ」

片山さんは大きく溜息を吐きながらコップの中のコーラをストロ―でかき回す。氷は入れない人のようで、コーラは音も立てずコップの中を回っている。

「路地裏、公園の影、開けてるけど人通りの少ない道、それに――家の中。はっちゃけすぎだよな。慣れてきたのか慣らしているのか。色んな場所、色んな状況で姿を見せずに人を殺す方法を試してるんじゃないのか、そいつ」

ストローが回遊魚のように回るコップを見下ろしながら片山さんは呟く。あまり考えた事は無かったけれど、確かにニュースで報道される被害現場は多岐多様に渡っていた。それが片山さんの言うように殺人の手法を試しているんだとしたら、黒い風のペルソナは相当地頭のイカレタ奴なんだろう。

「それに確かシャドウとペルソナは七人居るんだろ？ この間の警察官殺しの犯人だって――」

「あ、その犯人はあたしらが――その、殺し……」

「そいつは僕が捕まえましたよ。残念ながら死んでしまいましたけど」

自分が殺した、と言わんとした桐式の言葉を遮るように片山さんに伝える。直接の原因は僕らなのかもしれないけれど、結局北さんも刀野郎も自殺したようなもんだ。僕らが直接手を掛けた訳じゃない。

「――シャドウも死ぬんだな」

「俺らだって殴られれば痛いし刺されれば死ぬよ。ただまあ普通の人間よりは死に難いだけで。怪我をしても一度体を霧に変えて再構築すれば治るしさ」

「……なるほど、それで……」

イチの言葉に片山さんがそう呟き、守風さんを一瞬見た。それから僕らに視線を戻す。

「幾ら警官殺しの犯人だって言っても、死んだとなっちゃあんまり良い話じゃないな」

片山さんは椅子の背もたれに背中を預けて腕を組み、大きく溜息を吐く。一瞬桐式の事を見たのは――さっき言い掛けた言葉から、桐式が殺したんだと言う事を思ったからだろうか。

「残ったペルソナは今のところ六人。その内の四人――僕と桐式、それにヴァイオレットさんって言う人と片山さん。僕はもちろんの事、桐式もヴァイオレットさんも、それに片山さんも人に被害を出すような事はしないと思います。それで残った二人なんですけど、一人は僕らと同じ高校の生徒でこの所学校にも来てなくて行方を眩ましてて、もう一人は姿すら見せない噂だけの存在です」

「へえ。もう一人協力者が居るんだ」

「協力者……と言えるかは分らないですけどね。この騒動の原因を引き起こした黒幕の姉で、そいつを守ってますし」

「黒幕ってあの金髪の？」

「会った事あるんですか？ まあヴァイオレットさんはそいつの姉です。その人自身は馬鹿な事はしないし信用できそうだし、自分で色々探っているらしいんでその内この騒動も治まるかも知れないですね」

ヴァイオレットさんは僕らと違って魔術師として色々やってきた経験もあるだろう。とは言えこの街の管理者の息子がただ指をくわえてヴァイオレットさんの活躍を見ているのも面白くない。父さんの跡を継ぐ為にも今回の騒動は僕が解決したい。と言いつつも僕らの行動で何が変わったとは言えないのが玉に瑕なのだけれども。

そんな訳で結局僕らが片山さんに教えられる事は殆ど無く、刀野郎こと北修一との戦った事、オズワルドと出会いヴァイオレットさんと戦った事を話したところで話す事も無くなってしまった。ドリンクをおかわりをしつつしばしの間を無言で過ごし、

「……取りあえず私としては――」

守風さんがカルピスとメロンソーダを混ぜ合わせた微妙な色のジュースを飲みつつ口を開く。

「私としては前々から言っているように秋人にはこの件に関わって

欲しくない。いつ消えてもおかしくない私と違って秋人は社会の歯車のひとつなんだ。もし秋人に何かがあった場合困る人も悲しむ人も大勢居るのを忘れないで欲しい。……出来れば七緒君と紅葉さんにも大人しくして欲しいけれど、私は魔術の事は詳しくないし……本当のところを言うと危ない事は私やイチに任せて欲しいんだ」

屹然と、強い意志の籠った表情でそう言い放った守風さんは僕らを、そして一際強く片山さんを睨むように見詰めた。それに異を唱えるような視線を僕に向けてくるのはイチと姫ちゃんだった。イチは多分、なんで危険な役目の方に自分が含まれているんだと言う感じで、姫ちゃんはなんで危険な役目の方に自分が含まれていないんだと言う感じだ。そんな視線を僕に向けられても困る。

「七緒も守風もさ、なんでそんなに自分一人で解決しようとすんだよ。もちつとあたしらを頼れって」

そんな守風さんの言葉に異論を唱えたのはやっぱり桐式だった。

その言葉を聞いて守風さんは苦笑を浮かべ、

「まあそう言うだろうと思って今まで何も言わなかったんだよ。いつもその事で七緒君と紅葉さんは喧嘩してるからね」

桐式がごねるだろうと言う結果は分かりきっていたと言う様に呟いた。

「まったく……」

怒ったらしい桐式は腕を組んで頬を軽く膨らませて不満を顕わにし、それを姫ちゃんも真似していた。まあ桐式の言う事はもつともだし嬉しいのだけれど、それでも桐式は魔術にかかわりの無い普通の人だから危険な事に首を突っ込んで欲しくない。とは言えここでまたその話を蒸し返しても結果は同じだろうから黙っておく事にした。

「それで――」

桐式と姫ちゃんから怒りのオーラが撒き散らされる中、様子を伺っていた片山さんが口を開き、

「俺は何をすればいいんだい？ その危険な二人の顔写真か何かで

もあれば探しにいけるけど」

そんな言葉を聞いた守風さんがぽかんと口を開けた後に片山さんの後頭部を引っ叩くのだった。いつもは大人しくて礼儀正しい守風さんからは考えられないその行動は、片山さんとの間にある絆のよきな物を感じさせる行動に僕には見えた。

◇

食事を終わらせファミレスを出る僕ら。暖かった店内に比べる  
と外は刺す様な寒さで思わず体が震えてしまう。

話し合いの結果特に何かが決まった訳ではなく、最低限一人で危ない行動はしない事、と言う取り決めだけをするに至った。要は今  
までと変わらず、ただ協力者が一人増えたと言う事だ。しかし守風  
さんは片山さんがこの件に首を突っ込む事を良しとせず、終始不満  
そうだった。

今日はこのまま家に帰ると言う片山さんと携帯の番号を交換して  
いると、守風さんが桐式を連れて少し離れた場所で話を始めていた。  
僕らが居ると問題があるのだろうか、片山さんとイチと三人でそ  
の姿を見守る。

「……無口はさ、守風の事どう思う？」

桐式達の話が終わるのを待っていると片山さんから質問された。  
どうにも曖昧なその質問の答えに困っていると、

「あいつ、結構男勝りな所があるんだよな。家で家事をやってくれ  
てるんだけどさ、割と男の家事だぜ？ 洗濯物にアイロンしないし、  
部屋を箒で丸く掃くし、料理だって煮るか焼くか茹でるかで。まあ  
俺がそんな風だから守風もそんななんだろうけどさ、でも君らと居  
る時は女らしくしてる感じ。あいつ寝起きだと俺の目も気にしない  
で腹をぼりぼり搔いたりするんだぜ」

「そうなんですか？」

片山さんはその時の事を思い出したのか、苦笑しながら守風さん

を見ている。

「もう四ヶ月になるのかな、あいつが俺の前に現れて。あいつさ、さっきも言ってたけどいつ自分が消えるかも分からないからってあんまり人と関わろうとしないんだよ。君と桐式が初めての友達になるのかね……だからまあこれからも仲良くしてやって欲しいんだよ」

「はあ……いや、まあ僕らも楽しくやらせてもらってますよ」

僕の答えに、そか、と言って笑う片山さん。その視線が僕から逸れてイチに向くと、

「でもしよっちゅうイチの悪口は言ってるなあ。嫌いな訳じゃないんだろうけど」

「へえ」

と、イチは両手を頭の後ろに回しながら興味無さそうに嘆息した。  
「ま、殴り合いの喧嘩はしないでくれよ？」

ぽん、と片山さんがイチの肩を叩くと、イチは口を軽くへの字に曲げながら小さな声ではい、と答えた。そうしていると桐式達が戻ってくる。

「よし、じゃあ帰ろうか秋人」

守風さんが先程までの不機嫌さから一転、声にも表情にも元気が出たような様子で片山さんに声を掛ける。その様子に首を傾げたのは僕だけでなく、片山さんも言葉を詰まらせつつ応える。

「七緒君も紅葉さんもあんまり無茶をしないで気をつけて」

「はあ……その、片山さんと守風さんも無茶しないでください」

「私よりも秋人だよ。ま、その辺は任せてくれればいいさ。と、言う事だ。イチ、二人を頼むぞ」

きつ、とイチを見据えて守風さんは言うが、

「……気の強い女は……」

「ん？」

ぼそ、と呟いたイチの言葉を聞く為に守風さんが寄ってくる。

「アナルが弱つぶう！」

突如巻き起こる突風。守風さんが振り上げた足と共に吹いた風は

イチの体を舞い上がらせ、二メートルほど後ろに吹き飛ばした。

「帰るぞ、秋人！」

顔を赤くした守風さんが怒鳴りながら言うと、片山さんは口をあんぐりと開けつつ守風さんに言われるままに歩いていく。片山さんが驚くのも無理が無い。僕も守風さんがあんな風に力を使ったところを見るのは初めてだった。

二人の背中を少しの間眺めてから吹き飛ばされたイチを見る。まるでサイバイマンに倒されたヤムチャのような姿は見てて悲しくなる。

「そんな体張って守風さんを挑発して何が面白いんだ？」

言いながら歩み寄ってみるが返事は無い。

「おーい、大丈夫か？」

桐式が寝転がるイチの横で屈みこんで指で突くがイチは動かない。ごろんと体を転がして仰向けにさせる。

「うう……」

イチが小さく漏らした声は苦しそうなものだった。受身も取れなかったんだろうか。

「もう、俺はダメみたいだ……む、無念……」

イチの体が霧散していく。焦った様子でその散っていく体を集めるように手を動かす桐式と、突然の事で目に涙を浮かべ始めてしまった姫ちゃん。しかし心配には及ばず、

「イチちゃん復活！」

と言いながら僕の横で再度姿を現したイチの後頭部を思い切り引っ叩いた。

悶絶するイチを放り、桐式に歩み寄る。

「……守風さんと何話してたんだ？」

「え？ あ、別に何も。大した話じゃないよ」

少しだけほっとした様子の桐式はしかし、何かを隠しているような感じでそう答えた。女同士の、男である僕には言えないような話だったのだろうか。

「さて、遅くなっちゃったし今日は帰ろうか」

言って桐式が僕の自転車まで歩いていき、スタンドを降ろしてから荷台に跨った。そして早く乗れとばかりに僕を見ながらサドルをバシバシと叩く。まあ乗れとばかりに、では無く乗れと言っているのであり、僕は小さく溜息を吐きながらイチの頭をもう一度軽く引っ叩いてから自転車に跨った。あまり自転車を横に揺らさないようにしつつ来た道を戻る為に自転車の向きを変えようとすると、

「いやいや、向きが違うぜ。無口家へゴートウホーム」

「なんでだよ」

「ん？　ただいまってゴートウホームじゃなかったつけ」

「それじゃ家に行く、だ。ただいまはアイムホームだ、ってそう言う事を言いたいんじゃない。帰れよ」

「いや、帰るんだよ」

また泊まりに来るって訳なんだろう。なんでこう桐式は人の家を自分の家のように使うんだろうか。それにいくら父さんが居るからって言っても僕が男だと言う事を忘れてるんじゃないか。

「ほらほら、早く帰ろうぜえ。明日は祝日だしさ。他人の誕生日で休めるなんて最高だよな」

ぽんぽんと僕の両肩を叩く桐式。段々と考える事も面倒になり、「はいはい、分かった分かった。分かりましたよ、ったく」

仕方なく僕は自転車を走らせて家路に着く事にするのだった。



### 第三章 無口七緒 その四

ウドの大木とプリントされたエプロンを身に着ける守風の持つ包丁が、自分の胸を彷彿させるまな板を叩く規則正しい軽快な音がダイニングキッチンと六畳の和室しかないアパートの一室の中に響く。味噌汁を作り終え、野菜炒めを作り終え、炊飯器から炊飯が終了した事を知らせる音が聞こえるが、しかし和室に眠るその部屋の主、片山秋人は目覚めなかった。

食事の準備が終えた守風は秋人を起こす為に和室へと移動する。そのテーブルの上にはノートパソコンと数日分の新聞が置かれていた。その新聞は守風が集めたものであり、どの誌面にも黒い風と呼ばれる者が行ったとされる連続殺人事件の事が書かれていた。守風はそれらを尻目にテーブルの横に敷かれた布団で眠る秋人の傍に寄り、

「起きろ秋人。朝食の準備が出来たぞ」

そう言いながら足で秋人の体を揺さぶった。

「ぬう……もう少し……」

「何がもう少しだ。ご飯が冷めるから早く起きろ」

ぺちん、と守風の平手が秋人の額を叩く音が響くと、観念したように秋人は体を起した。寝ぼけ眼で壁に掛かった時計に目を遣ると、その針は十一時を差していた。

「へあ!？　ち、遅刻……って、今日祝日だった」

一瞬でも遅刻と勘違いした事で秋人の頭は一気に覚醒に向かうが、そんな姿を守風は苦笑を浮かべつつ見ていた。

「ってもこんな時間に朝食って」

「お前が夜遅くまでそんな物を見てるのが悪い。折角私が隠しておいたのを引っ張り出してまで情報を集めても無駄だって言っただろうに」

「いや、何か気付く事もあるかも知れないだろ？」

「私が気付いた以上の事を秋人が気付くとは思わないけどな」

「まあそれもそうかも知れないけどさ。ま、取りあえず朝ごはん、ありがとな」

「うん、早く食べよう」

二人でダイニングのテーブルに朝食を並べて食べ始める。守風の作る料理はさして手の込んだ事はしていない、ただ煮ただけ炒めただけの料理ではあったが秋人にはそれで十分らしく美味しい美味いと言いながら食べ、そんな感想を聞いて守風は悦に浸りながら食べていた。

朝食を作った守風に変わり、その後片付けをしたのは秋人だった。守風は食器の片付いたダイニングのテーブルに座って朝刊に目を通していた。秋人は新聞を取っておらず、今守風が手にしている新聞もテーブル上に積まれている新聞も守風が買ってきているものだった。誌面には黒い風による殺人事件の事は大々的には書かれておらず、捜査の進展も無ければ新たな被害も出ていない事を表していた。それ以外にも気になる事に目を通し終えると新聞を畳んでテーブルの端に置く。

「……なあ守風」

「ん？」

秋人が皿を洗い終え、タオルで濡れた手を拭きながら、しかし守風に視線を向ける事も無く呼びかける。

「一昨日の日曜さ、大怪我して帰ってきたろ。あれどうしたんだ？」

イチが言ってたようにして治したのか？」

その言葉に守風の体が驚きに震える。

「……気付いてたのか」

「まあな。お前が帰ってきた時に目だけが覚めてな。すぐに寝ちまったて単に寝ぼけてたのかと思ってその時は気付かなかったけど右腕が痛い事になってたじゃんか。お前普段からそうやって人の姿でいるだろ。あの体が霧になるやつさ、あれになるとなんか俺のすぐ傍に居るような感覚がするからその日にお前がそうやって体を霧に

変えてたのが分かるんだよ。まあ気付いたのは昨日イチから一度体を霧に変えれば怪我が治るって聞いてからだけど。お前な、そういう事も言えよ」

秋人は一度も守風を見ず、怒りつつも守風を心配する語調で言う  
と、守風は口を尖らせながらむう、と唸った。

「俺はお前みたいに戦う力はないけどさ、俺はお前の主なんだぜ？  
手下を働かせて俺一人ふんぞり返ってられないだろ」

「そんなだからお前は出世出来ないんだよ」

「いいんだよ、俺は現場が好きなんだ」

けけ、と笑いながら秋人が振り返る。守風は口を尖らせたままで  
視線を合わせようとしない。

「昨日あいつ等と会って良かったんかね。お前日曜からずっと不機嫌だったし」

「……まあ確かに気は紛れたから。でも、だからと言ってお前を危  
ない場所に行かせる気はないからな」

「はいはい分かった分かった。んじゃ俺は出かける準備をするか」  
「どこに出かけるんだ？」

「大人の遊び場。お前も来るか？」

「……如何わしいところじゃないだろうな」

「如何わしいかどうか知らないけど、裸のねーちゃんが出てくるだ  
ろうな。そりゃもう、ぼいんぼいんの」

秋人の視線が守風のみより豊かとは言えない胸に注がれると、守  
風は眉を顰めて一層不機嫌な表情を見せていた。

「勝手に行ってる！」

守風が怒鳴ると、秋人は苦笑しながら和室に入って戸を閉め、着  
替えを始めるのだった。

# ◇Side 桐式紅葉

ぶるりと体が震え、毛布を巻きつけながら体を丸めたところで目

が覚める。ぼんやりとまどろんだ目で時計を見ると十時を指している。見れば毛布と掛け布団を掛けていたはずなのに掛け布団は丸まって端に追いやられていて私は薄い毛布一枚で眠っていたようだった。道理で寒い訳だ。あくびをしながら体を起す。部屋の反対側にあるベッドでは七緒が眠っていて、その横でまるでベッドから落ちたかのようにイチが眠っていた。いつもタンクトップにホットパンツで歩き回ってるイチにしてみるとこの寒さでも毛布一枚使わなくても屁でもないのだろう。

昨夜にこの家に来て皆でゲームをやり始め、ようやく寝たのが午前三時。今が十時だから起きるには遅い時間だけれど祝日なのだから問題は無い。それに本当にはしゃぐべきは明日なのだから今日はもう少し寝て体力を回復しても良いだろう。そう思って掛け布団を引っ張ると、なにやら重い。それでも構わず引っ張り続けるところごろと布団の中で何かが転がる感触がした。布団を捲ってみるとそこには姫が気持ち良さそうに眠っていたのだった。まったく、と溜息を漏らしつつあたしの隣に寝かし直し、毛布と布団を掛けて並んで寝転がった。姫の体は温かく、まるで猫を抱いて寝てるような気分になる。猫飼った事ないけど。

「……それにしても」

二度寝をしようとしてやって布団に潜り込んでから十数分、眠い事は眠いけれど眠れなかった。

昨夜の事を思い出す。

” 昨日の夜、紅葉さんは七緒君と一緒に居たの？”

あたし達がファミレスから出てすぐ、守風があたしに聞いてきたのはそんな言葉だった。守風の言う昨日の夜と言うのは、守風が七緒と組み手をやっていた日曜日の事だ。その日は昼間は七緒達と遊び、そしてそのまま夜に見回りに出ていた。そんな話を話すと、何時まで一緒に居たのか、ずっと一緒だったのか、と言った感じで質問攻めをされ、夜の一時位に帰ったと言った所で、守風の気が済んだらしくその攻めは終わったのだった。

今までされた事がないそんな質問だったけれど、守風の表情は真剣そのものだった。質問が終わった後も何か考え込むような様子ではあったけれど、七緒達の所に戻ると打って変わった上機嫌さで話をしていた。そう言えばあたし達とファミレスの前で会った時はなんだか嫌そうな顔をしていたけれど――

「ひよっとして守風って七緒の事好きなのかね」

呟いてみるが返事は無い。姫は相変わらず気持ちよさそうに眠っていた。

右へ寝返り。左へ寝返り。待てど暮らせど悩みの答えは返ってこない。そもそもあたしが何を悩んでいるのかも――や、それは分かっているんだけど。分かっているからこそ答えが出ないのを望んでいるのかも知れない。いつになっても寝れないから起き上がってベッドとその傍らで眠る二人に近付く。七緒もイチもあたしの事など露知らずと言った風に眠っていた。試しにイチのほっぺたを突いてみる。ぶみゅう、なんて声を出しつつも目覚める気配は無かった。「……十時かあ。あれ、今日ジバゲの日か」

携帯を取って時計とカレンダーを確認してみる。今日は十二月の二十三日、天皇誕生日で祝日だ。それでもってもうちょいで冬休みも始まる。年末商戦でゲームの発売日が集中しているこの時期はおじいちゃんおばあちゃんにゲームを買ってもらえるお子様が多い。んでもってそんなおじいちゃんおばあちゃんを買ってあげたゲームで可愛い孫と一緒に遊ぶ為に前もってゲームの練習をするのだ。その為にも今日と言う日は皆必死なのであたしもそれなりに気合を入れてジバゲに行かなければならないのだ。

「ふむ、取りあえず……」

お花を摘みに七緒の部屋を出る。Uの字の形で通路が続いているこの家の左端に位置する場所にある道場の前、そこにトイレとお風呂場があるのでささと用を済ませた。もう何十回と来ているこの家の勝手は大体知っているつもりだったけれど、まあ暇だし探検でもしてみようと思ってそのまま七緒の部屋には戻らず通路を進む事

にしてみた。

かなり広い無口邸にはその大きさに見合って多くの部屋がある。そしてゲンさんの部屋——普段居る私室ではなく、七緒曰く魔術師としての研究室や工房と言われる部屋がある場所は家族でもあまり立ち入らない奥まった場所にあるらしい。七緒の研究室もそのすぐ傍にあるらしいけれどそこまでは案内してもらえなかった。

廊下の両側に部屋があり、七緒の部屋は道場から二つ隣の部屋にある。その向かいと隣の部屋は全て空き室で、六人いる七緒の兄や姉やらの部屋だったらしい。その一つの部屋の襖を開けて中を覗いてみると、整理されつつも本が入ったままの本棚や机などがあって誰かが使っていた事と、いつでもその部屋の主が帰ってきてよいようになっていた事が分かった。あたしが今居る部屋の入り口の反対側は中庭があり、そこから朝日が障子越しに差し込んでいた。部屋の主が居ないからと言っていつまでも覗いてるのも悪いと思い襖を閉めて通路を進む。そのまま歩いて通路を左に曲がる。左手にゲンさんの私室があるけれど物音がしなかった。ゲンさんもまだ寝ているのだろうか。そのまま進むと右手に玄関が見え、更に行くと左手に家族で過ごす為の居間が、通路を曲がってすぐの右手には勝手口のある台所がある。そのまま歩いていくとUの字の右端へと辿り着くいた。

一番奥の右側の壁にぼつんとある一つの扉。そこからゲンさんと七緒の研究室のある場所へ行けるらしい。そちらの場所が離れで、こっちの皆が普段暮らしているほうが母屋と言うんだったか。あまりお屋敷の事は良く分からない。

扉を開いて中を覗く。そこから続く通路の電気が付いていなかったけれど明り取りの窓から朝日が差し込んでいるから真っ暗ではなかった。今自分が歩いてきた通路を振り返って誰も居ない事を確認すると、好奇心のままにその通路を進んでみる事にした。ちよつとした泥棒気分で罪悪感もあるけれど好奇心の方が勝ってしまったのだった。

あたしの足の動きに合わせてきしきしと床が鳴る。その音だけが狭い通路に響いていたけれど――その音があたしの物とは別に、もう一つ聞こえてきた瞬間あたしの背筋が凍りついた。

「おや、おはよう。こんなとこまで来てどうしたんだい、紅葉さん？」

怒られる、そう思っていたあたしに通路の先から歩いてきたゲンさんのほほんと挨拶をしてきた。

「あ、その、おはようございます……その、ちょっとこの先には何があるのかなーって……ごめんなさい」

頭を下げて謝ると、ゲンさんは怒る事もせず、そうかそうか、とサザエさんとこの波兵のような返事が返ってきた。

「なに、こっちまで来るのは構わんよ。まあこの先の部屋の中は入らんほうがいいがの。危ないからね。面白いものもないし」

「なんかホルマリン漬けの変なものとかがあったり？」

「いやいや。まあ……良いものではないさね。さ、行こう行こう」

ぽんぽんと肩を叩きつつゲンさんが母屋の方へと歩いていった。

薄暗い通路の奥を少しの間見た後にあたしもゲンさんの後を追う。

「それにしても最近秋子さんに紅葉さんや守風さんが家に来るようになったからこの家も賑やかになったもんだの」

「七緒のお兄さんとかは来ないの？ 確か七人兄弟って聞いたけど」

「んー……連休とかに帰ってきたりするけど、あんまり帰ってこんのう。新五と六花って言う七緒と同じ母親で大学に行ってる双子が時々帰ってくるけれど他は仕事が忙しいからとんと帰ってこないんじゃないよ。ああ、でも正月は帰ってくるって言っとった」

「ほほー。じゃあお正月に来れば会えたりして」

「はは。わしの長男辺りから見れば紅葉さんは自分の娘くらいの年だからお年玉をくれたりするかも知れんの。もちろんわしからもあげるぞい」

「お、やったー。じゃあ着物着て目一杯おめかししてこようかな」  
そうとなればお母さんに着物を出してもらわねば、と考えつつ気

付けばゲンさんの部屋の前に着いていた。そのまま七緒の部屋に戻ろうと思っていると、ゲンさんが嬉しそうにあたしを見ているのに気付く。

「どしたの？」

「いや、七緒に紅葉さんのような良い友達が出来て良かったと思つての。七緒は形から入りたがる頑固者だから魔術師の古い習慣に囚われてしまつてゐるからのう……あまり人と関わろうとしなくてね。それでも頑張つてゐる姿を見てるとどうにも注意し辛くて」

「はは、ゲンさんは親馬鹿だなあ」

「ほっとけい。と言いたところだが、流石に七緒の育て方に関しては失敗と言うか」

「――失敗じゃないよ、別に」

しゅんと肩を落としたゲンさん。しかしゲンさんの子育てが間違つてゐるとも、失敗してゐるともあたしは思つていない。なぜならば――

「そんなゲンさんが好きだからさ、七緒はゲンさんの跡継ぎになれるように頑張つてゐるんだよ。だから胸を張ろうぜお父さん」

ばし、とゲンさんの背中を張ると、きよんとした顔であたしを見ているのに気付いた。はて、と首を傾げてゐると、

「七緒はわしの跡を継ごうとしてゐるんか？」

「え？　そうだけど……そう言つて魔術師の修行を始めたんじゃないの？」

「や、それはもっと小さい頃の話だったし……まさか今の今までそんな事を考えてたんか」

「え？　あー……」

ひよつとしてあんまり言っちゃいけない事だったんだろうか。七緒の秘めた想いの意味で。

「ま、まあその、今言つた事は内密に」

人差し指を唇に当てつつ言う。するとゲンさんも嬉しそうにはにかみながら頷いた。



ゲンさんが自分の部屋の襖を閉じるのを見てからあたしも七緒の部屋に向かって歩き出す。しかしまあ、七緒も大概照れ屋と言うのかなんと言うのか。男の子ってのはそんなものなのだろうか。部屋の前まで来ると七緒とイチが起きたらしく、二人で話をしている声が聞こえてきた。

「おはようっす」

がらりと襖を開けつつ挨拶をする。そこには毛布を体に巻きつけて糞虫状態になっている姫と、寝転がりながらテレビを見ているイチと、着替えの為にシャツとトランクス姿になっている七緒の姿があった。あちゃあ、と思いつつ七緒とイチの視線を一身に受け、

「良い体してまんなあ」

「この痴女め」

なんて突っ込みを七緒から受けるのだった。

## ◇Side 無口七緒

かたん、と言う音にテレビに注力していた視点を窓にずらす。ふっと窓枠の外へ消えていったものは猫の白い尻尾に見えた。父さんも含めてうちの家族は猫好きが多いけど、不思議とこの家は動物を飼っていない。まあさっきの猫のように色んなところから遊びに来るから自分で飼う必要も無いのだけれど。

外は少し曇った寒空が広がっているけれどエアコンからの温風で温められた部屋の中は心地良い温かさに包まれている。そんな室内で僕が起きてからずっと糞虫状態になっている姫ちゃんが布団に包まったままでもぐりと体を起した。桐式とイチは父さんと一緒に出かけてしまっていて今家には僕と姫ちゃんの二人しか居ない。

姫ちゃんがまた寝転がったかと思うと、もぞもぞとその糞を解いていった。中から現れた姫ちゃんが寝癖の立った髪もそのままに眠そうな顔をして僕を見詰めてき、こくと頷くように挨拶をする。

「おはよう」

その挨拶に応えると、姫ちゃんはどうとした感じのまま部屋を出て行く。顔を洗いに行ったんだろう。何回も家に泊まりに来ているから洗面所の場所も分かるだろうしと、僕は視線をテレビに戻して姫ちゃんの帰りを待った。程なくして髪を整えて顔を洗ってきた姫ちゃんが部屋に戻ってくる。寝る前に外していたリボンを髪に付け直しつつ部屋の中をキョロキョロと見た後に僕を見てくる。その動作が桐式とイチを探している事だと気付いて出かけた事を説明した。するとテーブルの上のメモにペンを走らせた。それを読んでもみると、たまにはいっしょに出かけよう、と書いてあった。そう言えば姫ちゃんと二人でどこかに出かけた事が無いと言う事を思いながら、

「じゃあどこに行く？」

と聞くと、嬉しそうにメモに行き先を書いていく。とは言え姫ちゃん達シャドウはこの町から出られないから行き先は必然と遊ぶ場所の多い駅前になる。時計は十二時を回っていたけれど起きてから何も食べていないから空腹はそろそろ限界だった。元々姫ちゃんが起きてからご飯を食べようと思っていたし、丁度良いから外に出てから何か食べようと姫ちゃんに言うのと、すぐに準備を整えて外に出る事になった。

身震いする寒さに晒されて姫ちゃんと二人で体を震わせつつ、自転車を押して門の外に出る。自転車に跨ると姫ちゃんも飛び乗るようにして後ろに乗った。荷台に跨って乗るその姿は主人である桐式を思い出す。腕を僕の体の前に回して掴まってくるのを確認すると自転車のペダルを漕ぎ出した。体が小さい分桐式やイチよりも随分と軽い姫ちゃんだから自転車を漕ぐのはそれほど大変じゃない。

程なくして駅前に到着する。休日と言う事も会って人通りは多いけれど黒い風の事件の所為で心なしかいつもの休日よりも人の姿が少ない気がしないでもない。取りあえず昼食を済まそうとゲームセンターの駐輪場に自転車を止めて姫ちゃんと並んで歩く。ラーメン、牛丼、天丼、ハンバーガーと色んな食べ物屋が並んでいるけれど姫

ちゃんが選んだのはファミレスだった。ランチタイムと言う事で店内には人が多かったけれど一つだけ空いていた禁煙席に座る事が出来、すぐにメニューを開いて注文を決める。僕はカレーで姬ちゃんはハンバーグとエビフライのセット。それと一緒にパフェも頼んでいた。この間も頼んでいたけれど、やっぱり女の子だから甘いものが好きなんだろう。

話す事の出来ない姬ちゃんとの食事は終始静かではあったけれど嬉しそうにご飯を食べている姬ちゃんを見ているとなんだか和んでくる。メインのハンバーグを食べ終えてから運ばれてきたパフェを食べ始める姬ちゃんに、美味しい、と聞くと大きく頷いた。満面の笑みはどことなく桐式に似ていて――

パフェを食べる手を止めた姬ちゃんがメモ帳にペンを走らせる。そこには、一口食べる？ と書かれていた。自分でも分かるほど緩んでいた顔を少し引き締め、大丈夫、と答えると本当に、と言いたそうな顔でパフェに再び向かう。どうやら僕に、と言うより誰かにじっと見詰められていると食べ辛いから姬ちゃんと僕の分のドリンクを取りに行く事にした。戻った頃にはパフェはあと二口で食べ終わると言うほどまで食べられていて、テーブルにはさつき書いた一口食べる、と書かれたページが開かれたメモ帳が置いてあった。

「大丈夫だから食べちゃいな」

そんなに物欲しそうに見えたのかと苦笑しながら言うと、こくと頷いて姬ちゃんがパフェを食べ終えた。

チョコの付いた口を拭いている姬ちゃんからテーブルの上に開かれたままのメモ帳に視線を移す。そこには今日起きてから僕と交わした筆談の内容が書かれている。小さなメモ帳の一ページに無数に書かれた文字の羅列は姬ちゃんが本当はおしゃべりな子なんだと言う事が伺える。実際良くメモを使って話しかけてきたりこの間桐式の家で組み敷かれたりした通り姬ちゃんは割とアグレッシブだった。そのあたりは桐式と似ている所だろう。そんな姬ちゃんのメモ帳は

もう残り数ページと言うほどになっている。僕の知る限りこのメモ帳は五代目だった筈だ。

「……そうだ。姫ちゃん、これからそのデパートに行こうか」

コップを両手で持ってジュースを飲んでいる姫ちゃんの言うと、頷いて了承の意を見せた。それからドリンクと新しく頼んだポテトフライを食べつつメモ帳を使いきる程に二人で話をし終わるとファミレスを出る事にした。

## ◇Side 桐式紅葉

「ほ、ほあああ！？ 俺の育てたピカチュウが……！」

イチの叫びが部屋の中に響き渡る。ハナさんと言うおばあさんとポケモンで対戦していたイチが負けたようだった。

公民館の一室を貸しきって行われる「ジジババがゲームをする会」略してジバゲは傍から見ればじいさんばあさんが集まってゲームをしていると言う、異様な光景でしかないだろう。しかしそんな世間の目――は公民館の中でやっているからそれほど気にならないけど――を気にせずゲームをするジジババ達のゲームに注ぐ情熱は真剣そのものだ。真剣すぎて、孫達の遊び相手になれるように、と言う当初の目的を忘れて完膚なきまでに孫を粉砕してしまう人が出てしまうくらいに。

「やー、ハナさんもこの間孫を泣かせたと言ったのに懲りておらんようだのう。まあその孫も復讐心に燃えてるらしいからこれはこれでアリなのかもしれないがのー」

と、あたしと将棋に勤しむゲンさん。将棋とは言ってもはさみ将棋だ。普通の将棋をやってもあたしじゃゲンさんには勝てぬ。まあはさみ将棋でも勝てないけど。

「もみじー！ ハナちゃん強いよハナちゃん！」

むぎう、とイチが後ろから抱きついてきた。

「そりゃなー。あたしでも勝つのに苦労するもんよ」

「ハナちゃん何のゲームやってもガチだからもう勝てる気がしないよ」

「イチはゲームが下手だからなあ」

言いながらパチリ、と駒を打ち込む。しかしそんなあたしの手に待ったをかけたのは目の前のゲンさんじゃなくて後ろのイチだった。ふむ、と声を漏らしながら十秒ほど考えた後、こしよこしよと耳打ちしてくる。イチの吐息が耳に掛かってこそばゆかった。

「あ、なる……ゲンさん、ちょっと戻していい？」

「だーめ。ここまで手加減しとったのにここからイチが手を貸したらわしゃ勝てんよ。って訳で手出し口出し足出し無用じゃぞ」

腕を組んで盤面を睨みつけているゲンさんが視線を動かす事無く言う、イチは軽く口の端を曲げながら退散した。

「……しかし、例の黒い風とやらはどこに居るんかのう」

パチリ、とゲンさんが駒を動かす。

「うーん……まるで尻尾が掴めないからなあ」

返しのあたしのターン。どうやったって一枚駒が取られてしまう状況になってしまっているその盤面をどうすべきかと思案に暮れる。ここでずっとあたしのターンが出来ればどれだけ楽か。

「まったく、オズワルドの奴ももちっとペルソナになる者の選別をしてくれれば良かったんだが」

「確か高い魔力を持つ人間からランダムって言ったっけ。あたしってそんなに高い魔力があるのかなあ。そんな実感ないし、お父さんもお母さんも普通の人だし……ハッ、まさか突然変異……」

言いつつ、ゲンさんの一番厄介な駒を一つずらしてみる。瞬間ピシッとあたしの額をゲンさんの指が弾いていた。口を尖らせてぶう、と不満を漏らして様子を伺ってみても動じなかったから仕方なく真面目に自分の駒を動かす事にしたけれど、やっぱりあたしの駒が一つ取られてしまうのだった。

「むきう……」

「まだまだよのう。……突然変異って訳じゃないけれど親が普通の

生活を送っていてその子供に突然超能力が芽生えると言う事も少ないのう。まあその場合親とか先祖の方に何かしらの因子があったりするもんじゃが……それでも紅葉さんのポテンシャルは高いんじゃないわうて」

「七緒も？」

あたしの手持ちの駒は残り五枚。もう投了してもええんでねーかい、と言った感じだった。お陰であたしの集中力がお話の方に向く。「然り。とは言え高い魔力を持っていればイコールで有能な魔術師となれる訳じゃないのが現実じゃからの」

「へえ……でも持っていないよりは——」

「うむ、そう言う事じゃて。とは言え紅葉さんにはなるたけこちらの道には来て欲しくはないがの」

「うへえ。まだあたしは何も言っていないのに」

「顔に書いてあるぞい。魔術師になりたいって」

ばれてーら。や、前々から何回も似たような事言ってたけれどもさ。

「あんまり良いもんじゃないぞ、魔術師ってのは。七緒じゃないが普通の人と普通の生活を送ると言うのは難しいからのう」

「……その、ゲンさんの奥さんって——」

「皆わしが魔術師だと言う事は知ったよ。それで良いと、それが良いと言ってわしに付き添ってくれてたんじゃ。だから——」

ゲンさんが腕を組みつつ照れ臭そうに笑いながら俯いた。そんな姿が割とがちりとした体格のゲンさんとのギャップがあって物凄く可愛く見える。

しかし実の息子からも愛妻家と言われるゲンさんはやっぱりその通りの愛妻家らしく、なんだか微笑ましかった。

「でも弟子入りしたら教えてくれたりして」

俯きつつ上目遣いで聞いてみる。けれどゲンさんは浮かない顔をし——

「わしは——教えんよ。オズワルドは元々その道にいたし、七緒は

わしの息子じゃからの。まあ特別扱いと言う訳じゃないが……」

なんともバツの悪そうなゲンさん。あたしにしてみても絶対に何があっても魔術師になりたいと言う事じゃない。それにゲンさんが言うとおり魔術師になると言う事が本当に危ない事なのかも知れないし、七緒もそんな事を言っていた。なんとも困った様子のゲンさんとの間にちよつと気まずい空気が流れ、どうにかその空気を変えようと話題を考えていると、

「ぎゃーん！ やっぱハナちゃんには勝てないよう！！」

なんて叫びながらP S P片手にイチがすっ飛んでくるのだった。自然とあたしはイチにゲームの事を教える事になり、なんともうやむやな形であたしとゲンさんの話が終わるのだった。

### 第三章 無口七緒 その五

◇Side 無口七緒

姬ちゃんとの楽しい一時を終えて帰宅の途についたのは午後三時を回った頃だった。自転車の前籠には荷物が溢れている。その殆どが姬ちゃんの為のプレゼントだった。

家の門の前まで辿り着くと姬ちゃんを降ろして自転車を押して中に入る。自転車を止めて荷物を籠から降ろすと姬ちゃんが持つてくれるような素振りを見せてくれるもののここは年上のお兄さんらしく全部持つて家の中に入ろうとすると、寒空に似つかわしくない温かな風が吹いたのに気付いた。この風が吹いていると言う事は――

「おや、七緒君こんにちは」

開け放たれた門から守風さんがひょっこりと顔を出してくる。

「こんにちは。今日も見回りですか？」

「うん。……今日は紅葉さんとイチは居ないのかな？」

守風さんがお互いのパートナーが居ない僕と姬ちゃんを見つつ聞いてくる。それから二人が父さんと一緒に老人会に行っている事を伝えると、そうなんだ、と言って苦笑を浮かべる。まあ老人がゲームをやり集まるなんて聞けばそんな笑いが出るのも頷ける。

「でもそろそろ帰る時間だから――」

言いつつ、門の外に車が止まったのが目に入った。父さんが戻ってきたのかと思ったけれど、それにしても車が違う。案の定降りてきたのは父さんではなく秋子さんだった。

「こんにちは、ななちゃん。守風さん。ゲンちゃん帰ってる？」

僕らの所まで歩み寄りつつ優しくもどこか翳りのある笑顔で聞てくるその様子に少し疑問符が浮かんだものの、取りあえず守風さんにした説明と同じ事を伝えた。

「あら、三時に帰るって言ったのにねえ」



「どうかしたのですか？」

小さく溜息を吐いた秋子さんに守風さんが問うと、小さな動きで門の外の自分の車に視線を向ける。まるでその動きを誰かに――その車に乗っている人物に気付かれないようにするかのような動きだった。

「うん、あなた達にも関係があるから丁度良いわね。まあ詳しい事はゲンちゃん達が帰ってきてから説明するけれど私達の協力者よ。

ゲンちゃんには今日連れてくる事も説明してるし、何か用事が無ければ先に中へ連れて行ってくれないかしら」

「良いですよ。守風さんは？」

「私も大丈夫。今日は暇だから来ただけだから」

僕らの返事を聞くと秋子さんは微笑して自分の車に戻る。その間に僕は自転車の前籠に入っている荷物を両手に持って家の中に入る準備を整えた。両手に持った荷物に見かねたのか守風さんが苦笑を浮かべて荷物を半分持ってくれる。なんとというか、失礼だから口にはしないけれど守風さんには苦笑が良く似合う気がする。と考えて本当に失礼な事だと自分で自分に突っ込みをいれた。

「はい、お待たせ」

そう言って秋子さんが連れてきたのは、外国人だろう顔立ちで、背は高いが体の線の細い黒髪と黒いスーツ姿の二十代前半程の男と、同じく黒髪で猫毛の癖毛と糸目がぱつと目に付く高校生くらいの女の二人だった。二人ともにこやかに微笑を浮かべて僕達に視線を向けてきている。女の方に至っては小さく手を振っていた。僕と守風さんではなく姫ちゃんに振っているようだった。

「こんにちは。君が七緒君？」

男の方が話しかけてくる。外人に見える顔立ちとは裏腹に流暢な日本語で話すその声は男にしては高く、澄んだ良く通った声だった。「僕はニキータ。ニキータ・ポリソヴィチ・アダム。こっちは僕の弟子で元永桜と言うんだ。君と同年だよ。まあこの子は所謂チユーブだから弟子と言っているいいものかは分からないけれど。まあよ

ろしく」

言って、アダムさんは手を差し出してくる。握手をしようと言う事に気付いてすぐに手を差し出して握った。

「そちらは？」

握った手を離しながらニキータさんが守風さんと姬ちゃんに視線を向けて聞いてきた。

「私は守風といいます」

守風さんが会釈をしながら挨拶をする。

「この子は姫です。今ここに居ない奴の……まあ妹みたいなものです」

と、僕の妹と思われたりするかも知れないと思って喋れない姬ちゃんの変わりに簡単に紹介をする。秋子さんが父さんだけじゃなく僕らにも関係があると言って紹介したのだからこの二人もシャドウの事を知っているのだらうけれど、だからと言ってその事を無闇に話す事は無いだろうと紹介はそこまでにしておいた。

「じゃあこっちへ」

「ななちゃん、私はお茶を用意するから」

二人を連れて玄関に向かおうとすると、秋子さんは勝手口の方へ向かっていく。手にはタッパの入ったビニール袋を持っているあたり何か晩御飯のおかずでも持ってきてくれたのだらう。男二人の家に秋子さんはしょっちゅうおかずを持ってきてくれたり作ってくれたりだけでなく、掃除や洗濯までしてくれているから僕も父さんも凄く助かっていたりする。本当に秋子さんが変人奇人が集まる魔術組織の一員だとは思えない。

家の中に二人を招いて客間へ案内する。その間に僕は荷物を僕の部屋に運ぶ事にし、その後を守風さんと姬ちゃんがついて歩いた。

「七緒君、あのアダムさんと言う男が言っていたチューブって？」

二人が居た手前、聞くことが出来なかったのだらう。この時を待ちわびたとばかりに守風さんが聞いてくる。

「チューブって言うのはパレットでの隠語で、超能力に目覚めれば

かりで身の振り方を知らない人の事を指しているんです。超能力を持っていたてもその使い方が分からない。それを空のチューブに例えているんです。そのチューブにどんな色の絵の具を入れるかはそんな人を保護観察する人間に掛かってるって事ですわね」

「ああ、絵の具のチューブの事か。なるほどなるほど」

組織の名前からして絵を書く時に使うパレットを隠語として使っている組織だから必然他の隠語もそっち方面になっている事が多い。まあ人前で魔術だの超能力だのと言う話をしたらいつの時代だって面倒な事にしかならないから隠語を使った方が色々と面倒が無くていいんだろう。

「アダムさんは外人かな」

「名前からしてロシアの人っぽいですね」

「元永さんは普通の女子高生のようにだったわね」

「ですね。僕と同じ年かな。でもまだ自分の力を制御出来ない超能力者だと言うのなら注意した方が良くも知れないですね。突然暴走するかもしれないですわ」

部屋に着いて荷物を置く。そのまま踵を返して部屋を出て、廊下を歩いて客間を目指しているとその客間へ入っていく秋子さんといれ違いで帰ってきたらしい父さんと桐式とイチの姿が見えた。僕らに気付かず客間へ入った四人の後に続いて部屋に入る。しかし中では――

「……なんとまあ」

そんな苦虫を噛み潰したような顔と声で呟く父さんの姿があった。

「お久しぶりです、マスター無口」

「そうだな」

はあ、と溜息を吐いて父さんが歩き出す。桐式とイチもそんな父さんの様子を見ながら立ち尽くしていたけれど、父さんが座ったのを見計らって座布団の上に座った。

「えっと、ななちゃん達にはまだ話してなかったわね。この二人――と言うかこちらのアダムさんは他の土地で魔術師の管理をして

いらっしやる方で」

「冬畑さん、僕は管理者じゃなくて――」

「ああそうだったわね。管理者の代理で土地の管理をしてらっしやる方で、今回はこの町で起きている事件解決の為の応援にパレットから派遣されてきたの」

「代理で管理？」

秋子さんの言葉に桐式が疑問を口にする。

「事情は違うだろうけど俺達みたいな人の事だよ。管理者に頼まれて町の見回りをするんだ」

それを傍に居たイチが簡単に説明していた。

「でも事件解決って。確かパレットからは応援は来ないんじゃないかなったんですか？」

「ええ。でも例の黒い風の被害が大きすぎた所為で流石のパレットも重い腰を上げたのよ。とは言ってもパレットが動いたのは単純にその被害が大きかっただけと言う事だけじゃなくてね、ヴァイオレットさんも尽力してくれたのよ」

「あの人が？」

この事件の首謀者、オズワルド・アヴァロンの姉、ヴァイオレット・アヴァロン。一ヶ月ほど前にオズワルドを賭けた勝負をした後は会っていない。と言うか泊まっているホテルに宿泊を続けている事は確かだけれど殆ど戻ってきていないと言う事らしい。何をしているのかと思えばそんな事をしていたのか。なるほど、約束どおり事件解決の為に、そして弟の為に尽力しているらしい。

「一応来れたら来る様に言っておいたんだけど昨日まで日本の支部に居たらしいから間に合わないのかしらねえ」

秋子さんが時計を見ながら呟いた。時間は三時を十五分ほど過ぎている。

「まああちらさんもこの事を知っているんだろうし、顔合わせは後にすればいいじゃろう。七緒、わしはアダムと話があるから皆を連れて席を外してくれんかの」

そう言う父さんの顔は少し翳っていた。何か不安な事でもあるんだろうか。僕らを外してまでしたい話に興味はあったけれどこう言う時の父さんの頼みは、僕の父としてではなく魔術師無口源太郎としての頼みである。即ち弟子の僕は不満があっても従わなければならないのだ。

桐式達を連れて客間を出る。取りあえず僕の部屋に集まろうと言うって歩き出すと、何時の間にか客間から出てきていた秋子さんと、アダムさんの連れの元永が後ろを歩いていた。

「ななちゃん、この子も一緒に連れて行ってあげてくれる？ アダムさんがこの町に留まる間この子をこの家で預かって欲しいって言われてね。ゲンちゃんも承諾したから部屋を用意してほしいのよ」

「え？ ……分かりました」

秋子さんに背中を押されて元永が一步步み寄る。そのままふわふわとした猫毛の頭を下げ、

「よろしくー。あたしの事は桜って呼んでね」

と、どこにでも居るような普通の女の子のように挨拶をしてきた。そう言えば初めて口を開いたけれど、声や口調からして快活な印象を受ける。

じゃあ、と皆を連れて僕の部屋に向かった。この家に部屋は余って居るけれど元永の部屋はどこにしようか。やはり男の僕の部屋からは離れたほうがいいんだろうか。そんな事を考えていると、僕の服の裾が何者かに引っ張られる。振り向いてみると秋子さんがそこに居た。僕の前を行っていた皆は秋子さんの事に気付かずそのまま歩いていく。

「どうしたんです？」

「シ。……あのアダムと言う人なんだけれど――漆黒、そう言えば分かるわね？」

瞬間、戦慄を覚える。

「……気をつけます」

「うん、よろしくね」

そう言って秋子さんは客間に戻っていく。元永の部屋をどこにするか、そんな考えの答えは秋子さんからの言葉を聞いた瞬間に決まった。とは言え表立って行動は起せない。元永を見張りつつ、桐式達にも事情を伝えていかなければ――

「それにしても……ったく、なんでそんな奴がこの町に……」  
毒づいても何も変わらない。既に事は動いてしまっているのだから。

桐式達に遅れて自分の部屋に戻る。そこには全員が揃っていて、初めて――まあ当たり前のことではあるが――この部屋に入った元永はきよろきよろと部屋の中を見回していた。それにしても桐式を初め、姫ちゃん、守風さん、元永、イチと、いまだかつて無い男女比だ。まあイチを女と数えていいのかどうかは分からないけれど。

こたつの四辺のそれぞれの定位置とも言える場所に桐式達が座るのを尻目に、まるでまたたびに酔う猫のような落ち着きの無さを見せる元永の視線が僕の本棚に止まると、

「七緒君は漫画を一杯持つてるんだねえ。あ、ゲームも一杯ある」  
などと言いつつ珍しい物を見るような目のまま床に正座で座った。それを見届けてから僕はベッドの上に座る。そこには既にイチも座っていたが、構わずにその隣に座った。僕の珍しい行動にイチが怪訝な表情を浮かべたが、僕がイチ以外に聞こえないように秋子さんから聞いた事をそのままイチに伝えたと全てを察した様子を見せて鋭い目で元永を見据えた。

「ねえねえ、七緒君と紅葉さん？ 二人って高二って聞いたけどほんと？」

元永が細い目を更に細め、微笑を浮かべながら聞いてくる。

「そうそう。元永さんは？」

それに間髪を入れずに桐式が答えた。

「桜でいいって。あたしも高二だから同い年だよ」

「まじでかー！ んじゃあ桜って呼ばせてもらおうかな。あたしも

紅葉で良いから。……ん？ でも暫くこの町にいるんだろ？ 学校は？」

「お休みー。まあ明日終業式だしねえ。一日早い冬休みではあるけど……」

「あー、ひよつとして彼氏とクリスマスが過ごせないとか」

「やや、彼氏なんていないよ。でもまあ今日から居ないって友達に言ったら彼氏と旅行かー！ なんて言われたけどね」

「へえ。結構もてそうだけどなあ。あ、ひよつとしてあのアダムさんって人と……」

「ちーがーうーよー。あの人はただの師匠だから。先生だから。まだ会って二ヶ月くらいしか経ってないしねえ」

「へー。じゃあ今から師匠のその手腕を盗もうってんだ。やっぱ将来的にはあの人の後を継ぐ訳？」

「やー、それが違うんよ。あたしまだ自分の力の使い方が良くわかんなくてさ、暴走してもすぐ抑えられるようについて来いって訳。ロマンもへったくれもないよねえ」

「なるほどなあ。って、暴走するようなもんなのか？」

「いや、変に力を使わなければ大丈夫だよ。見てみる？」

「おー見る見る。……ところで君らはなんでずっと黙ってるんだ？ そう言って桐式は僕らを見詰めて、さもそれが変だとしても言うように言い放つ。」

「……僕らは粛々と話をするタイプなんだ。女同士のマシンガントークに付き合えるほど舌が回らないんだよ」

僕の答えにそうなのか、と言う風な表情を見せるが、こんな時に一番に話に混ざってきそうなイチがベッドの上でじっとしているのが気になるようで暫くの間僕達を見ていた。

「まあいいや。ほら、桜が力を見せてくれるってさ」

「こっから見てるよ」

「んー……？」

やはり僕達の態度に不審な様子を見せる桐式。しかし好奇心旺盛

な姫ちゃんと守風さんが元永の元に詰め寄る。

「さあさご照覧。これがあたしの力だー！」

言って元永が右手をテーブルの上に突き出した。それに釣られるようにイチが腰を浮かせて誰の目にも入らないように手に自分の力で作った何らかの爆弾と思われる物を握った。同時に僕も身構える。しかし僕らが予想した最悪の事態は起きず、元永は手の平にすっぱりと収まる大きさの水色の石のような物があった。

「これは？」

「えっとね、師匠の話だと水を圧縮した結晶なんだって」

「水？」

「そうそう。これをねえ……こう、蛇口を捻るように……とても調整が難し………っうあー!?」

言いながらポタポタとその結晶からこたつの上に置きっぱなしだったコップに水を滴らせていた元永だったけれど、短い悲鳴の後、それこそ水道管のパイプが破裂するかのような勢いで結晶から水が噴出した。コップはすぐに一杯になり、そしてこたつの天板を伝い布団とマットを一気に濡らした。

「わああ! 桜、ストップストップ!!」

「ぎゃあ! ど、どうやって止め……!」

わあああぎゃあぎゃあと騒ぐ桐式と元永。守風さんは拭く物を探し、姫ちゃんは天板の上の水をこれ以上零れないようにと手で遮る。が、天板は四辺ある正方形の形をしている訳で、一辺を遮っても他から零れていくから意味が無い。そもそも姫ちゃんの手だけでは一辺すらも遮る事が出来ていなかった。

「な、七緒も何とかしろよー！」

叫ぶ桐式にどうすべきかとイチと顔を見合わせるが、その次の瞬間部屋の戸が勢い良く開かれ、元永の師匠であるアダムさんが現れた。

「桜、気を落ち着かせるんだ」

「へ、へい!？」



「この際床が濡れるのも仕方ない。とにかく落ち着け。落ち着いて、蛇口を閉める感覚で水を止めろ」

人の部屋だと言うのに、と言う文句はもう遅い。それ位に水害は広がっていた。元永は言われた通りに水に濡れる床も自分の服も気にせずじっと両手の中に納めた結晶を見詰める。僕には元永が何をしているのかは分からなかったけれど、その真剣な面持ちは必死に自分の力を抑えているんだと言う事が見て取れる。それが効したのだろう、手で作った器はすぐに水で一杯になっていたがそこから滴る水の量は少しずつだが確実に減っていった。やがて完全に水が止まると、

「……はあああ……」

と大きな溜息を吐いてすっかり水浸しになってしまった畳の上に座り込む元永。自分の服がもう完全に濡れてしまっているからもうこれ以上濡れるのも気にならないようだ。

「……このほかもの」

ごん、とかなり痛そうな音を立ててアダムさんのゲンコツが元永の頭に落ちた。その音通りの痛みが元永の頭に響いたのだろう、大口を開けて頭を抑えながら畳に伏せて悶絶していた。

「すみません、マスター」

「あー、いいんじゃないよ。七緒、お前の大事なもんが濡れない内に片付けておきなさい」

部屋の外に居た父さんにアダムさんが頭を下げると、父さんが僕に向けてそんな事を言う。言われて部屋を見渡せば――

「あ、ああああ！！！！？」

キャスターが着いたテレビの台座の中に収納してあるゲーム機類は、キャスターの高さによって浸水を免れて被害は無かった。しかし薄い底板しかない本棚の一番下の段に収納されていた本は浸水によって全滅だった。全滅と言わざるを得ない。って言うか紙製品に水って。水って！

「は、ははは……」

「あ、七緒が壊れた」

「そりゃ仕方ないさ。また買えるとは言っても集めた本がこんなになっちゃな」

イチと桐式がまるで他人事のように言ってくる。

「ご、ごめんね七緒君……その、弁償するから……」

頭の痛みが引いたのか僕の姿に同情したのか、元永がおずおずと言ってきた。

「いやいいよ……僕が止めなかったのも悪いんだし……って言うか僕が悪いんだし……はは、元永は何も悪くないさ……僕が悪いんだよ僕が。はは！」

「うわあ、こんな七緒初めてみたよ」

全員からの気の毒な人を見る目を全身に浴び、僕はそのままベツドに倒れこむ。もうどうにでもなれと僕は思っ不貞寝を決め込む事にしたのだった。

「……まったく、制御も出来ないのに力を使うなど言っただろう」  
不貞寝する僕を放りアダムさんが元永に説教を始める。長く続くかと思われたその説教も、

「まあまあ。若気の至りと言う事で今回はここで済ませて。ほらお嬢さん、びしょ濡れじゃなんだし風呂にでも入ってきたらどうかの？」

父さんが間に入ってすぐに終わった。はあい、と肩を落とした元永が返事をする、苦笑を浮かべていた秋子さんが案内を買って出る。方向からして大浴場へと向かったようだ。

「皆も入ってくれば？」

部屋に留まっている桐式達に言う。じゃあ俺も、なんて言ったイチの首根っこは掴んで離さない。

「そうしよかな……ああ、着替え持ってきてないなあ」

桐式がそう呟きつつ姫ちゃんと一緒に元永の後に続く。しかし守風さんは動かずそのまま立っていた。

「……さて、じゃあ桜のことは任せます。では無口さん、また今度」

「ん、そこまで送ろう」

言って、父さんとアダムさんが玄関に向けて歩き出す。僕と守風さんは水浸しになった部屋を見渡し、

「片付けようか」

と苦笑いを浮かべた守風さんと一緒に片付けを始める。イチも面倒そうにしつつも手伝っていた。取りあえず濡れに濡れたこたつ布団は窓枠に引っ掛ける。浸水を免れたテレビ台はそのままに、水を含んでしまった本棚の本を纏める。その作業をした時は流石に溜息を漏らさずにはいられなかった。

「……七緒君、さっき元永さんが力を使う時に妙に警戒をしていたようだけど――」

水を大量に含んだ畳を交換しなければならなくなるだろうと思って部屋の物を全て外に出していると、守風さんが呟くように聞いてくる。イチと目を合わせ、逡巡の後に守風さんにも教えておこうと考えを纏めて話を始める事にした。

「前に守風さんにも話しましたっけ？ パレットでは功績を残した魔術師や超能力者にはそれに応じた称号を色の名前で与えられるって事」

「うーん……初耳だったかな」

守風さんが廊下に出したテーブルをタオルで拭きながら自分の記憶を探る。人が記憶を探る時は視線を右上に向けると言うけれど、確かに守風さんはそうしていた。どうでも良い話ではあるけど。

「それがなにか関係があるの？」

「はい。基本的に超能力者はただ自分の力を使うだけであって功績を残すような事はしないからそう言う称号を貰うような事は無いんですけど、魔術師は言わば研究者ですから、何か功績を残せば称号と共にその研究の後押しをパレットからしてもらえるんです。その称号は色で与えられていて、色の三原色から取られて赤、青、黄色が最高位の称号になって、より良い功績を残した者に原色に近い称号を与えられていくんです」

「へえ。あれ、でも三原色って……えっと、なんだったかな、赤、緑、青じゃなかったっけ」

「それは光の三原色ですね。まあ色の三原色も現代では緑青、赤紫、黄色ですけど、パレットは昔に出来た組織ですから普通に赤、青、黄色を三原色としてるんです。それで、超能力者はさっき言った通り力を使って暴れたりするだけなので称号を貰う事は稀なんですけど——三原色以外に殆ど超能力者の為だけに当与えられる称号があるんです。それが金、銀、銅。それと白と黒。それらは戦闘能力の高さや能力そのものの異質さが認められた者に与えられるんです」話を聞くのに集中しているからだろう、守風さんの手は止まっている。イチにしては既に知っている話だからと、こちらを気にせず片付けをしていた。

「金、銀、銅の称号を与えられた者は基本的に戦闘力を評価されているだけだから余程の事が無ければ警戒する事も無いんですけど——」

「白と黒は警戒しなければならない？」

「はい。白の称号を与えられた者は僕が知る限り今までで一人だけです。その一人は百年ほど前にパレットの支部を一人で潰したとされて今でもパレットから追われている身です」

「……今でも？ 百年前の事件じゃないの？」

「どうにもその白って言うのは人間やめてるらしくて。ただ人間やめてるって言うレベルで言えば黒も同じようなものらしいです」

「と、言うത്？」

守風さんの興味が俄然強まった様子で身を乗り出すようにして続きを促してくる。とは言えその様子は桐式のようにファンタジーに憧れていると言うよりは危険なものの正体をきちんと把握する為、と言う風に見て取れた。そう言う事もあるから守風さんには桐式よりも安心してこう言う話が出る。

「黒の称号を与えられる者と言うのは割と多く居ます。ただその殆どが強すぎる力の制御が出来ずに死んでしまうんだとか。でも逆に

言えば強い力の制御に成功している者と言うのはそれだけで危険視される程に強力な能力を持っていると言えますね」

「さっきの白の称号を貰った人よりも？」

「それは分らないです。黒がパレットを襲ったと言う話も聞かないですし……ただ守風さんやイチのような、下手をすれば二人よりもっと強力な能力を持った能力者達を一人で制した白って言うのは規格外です。もしそんなのと同じ実力を持っているならば一人で反乱を起す事も可能でしょう。それをするメリットが無いからパレットに身を置いている、とも考えられますけどね」

「反乱を起す理由が無いから起さない、か。……それでアダムさんはその称号の何を貰っているのかな？」

話を聞き入る守風さんに乗せられてつい話の本筋から逸れてしまった事に気付くと、一つ咳払いをしてから話を続ける事にする。

「あの人は漆黒の称号を付けられています。さっきも言ったとおり黒の称号を与えられる者と言うのはそれだけで危険視されています。でも僕が警戒しているのはそう言うことではないんです」

「それはどう言う——」

「そこからはわしから話そう」

そう言って話に割り入ったのは父さんだった。実際漆黒の話は父さんから聞かされていた事だし、父さんから聞いたほうが早いだろうと僕は黙る事にする。

「今からそう、十四年ほど前の事かのう。わしは奴と一緒に仕事をした事があったんじゃ。今回のように他の管理地への応援と言う形での。わしと違ってまるで成長——いや、老化か。それをしてないアダムも人間を辞めてるんじゃろうかのう。」

その十四年前の事件なんじゃが——とある魔術師達が寄り集まって悪さをしてての。魔術師と言うのはあまり組織だって動きはしないんじゃが、その者達の利害が一致すれば話は別での、その時は魔術師十名ほどで如何わしい儀式をしていたんじゃよ。当時も小さくニュースになっていたの、知らんとは思うが二十余名からなる集団

失踪事件の犯人がその魔術師達だったんじゃないよ。

魔術と言うのは魔力を使う。魔力はこの世界のどこにでも満ちている。とは言っても世界に満ちた魔力は言わば無色透明の魔力。それを体に取り込み色を着ける事によって初めて自分の魔力として使う事が出来る。しかし一度に取り込める魔力の量と言うのは人によってまちまちで、例えるならコップ一杯しか取り込めない者もいればプール一杯分取り込める者もいる。その魔術師達は魔力の許容量が少ない者達でな、実験に使う為の魔力を効率よく集める為に許容量が少しでも多い者に無理矢理魔力を取り込ませて自分達で使う為の、言わば貯水タンクのように使う為に一般人を集めていたんじゃないよ」

人を人と思わぬ魔術師の所業。それを想像してか守風さんの顔が怒りに強張る。桐式が居ても同じ顔を見せただろう、それだけ二人の正義感が強いんだろうけれど――魔術師と言う輩は他人を物のように使う事を厭わない者も多い。だからこそ僕は桐式達にこちらの世界に足を踏み込んでほしくなかった。

「パレットの調査の結果魔術師が絡んでいる事に気づき、討伐の指令を受けて至急応援に向かったのがわしと奴じやった。その徒党を組んでいた魔術師と言うのは若い連中での、自衛の魔術すら使えない者達で制圧するのは簡単じゃったよ。普通パレットから討伐指令が出されると言う事は首謀者や――犠牲者の生死すら問わず事態を收拾しろと言う事でもある。犠牲者の生死を問わない理由は、魔術師の所業によって自我を崩壊したり化物への変貌を遂げたりして暴走をする場合があるからじゃ。とは言えその時は単純に魔力を体に溜め込むだけに使われていたからそのまま解放しても問題は無いと、魔術師ともども生きたまま保護しとったんじゃないよ」

そこで一旦話を区切る父さん。その理由は簡単で、その続きをこそがアダムさんへの――漆黒の称号を冠する者への不審に繋がるからだった。

「――わしが事後処理の為にアダムに保護した連中の事を頼んで

その場から離れた時じゃった。作業を終えてアダムと合流した時、魔術師も犠牲者達も姿を消していたんじゃよ。魔術師達も犠牲者達も別々の部屋に保護していたんじゃが、どの部屋の中も血の海。そこに立っていたアダムにも大量の返り血が振りかかっていたよ」

「な……じゃあアダムさんがその人達を……？」

「だろう、とわしは踏んでおる。が、当のアダムは突然誰かがやってきて彼らを惨殺し、死体を持ち去ったと言い張っておる。さっきも言ったとおりパレットとしては魔術師達や犠牲者達が生きていようがいまいが事態さえ收拾していれば文句は無い。後に似たような事件も起きなかった所為でアダムの言う闖入者の捜査も殆ど行われずにその事件は終わったんじゃ」

アダムさんが本当の事を言っている可能性も少なくは無い。しかし当事者の父さんがその可能性を完全に否定していると言う事はそれほどまでにアダムさんの言っている事と現場での状況の違いに納得がいかないんだろう。それ故の不信感だった。

「……思うに犯人がアダムだったにせよ違うにせよ、十四年前の事件の犯人は魔力許容量の高い者の体を欲しておるんだと思う。そして今回の事件では高い魔力を持つペルソナとその体その物が魔力で出来ているシャドウがまだ十二人も居る。——そう言う事での、奴には用心して欲しいんじゃ」

ふう、と父さんが溜息を吐いた事で周囲に漂っていた重い空気が和らぎ、話が終わった事を告げる。僕らの警戒の意図が分かった事で守風さんも表情を固くしていた。

「七緒、桜さんはどうじゃった？ 何か不審な事はあったかの」

「僕から見るに典型的なチューブだと思う。アダムさんにどんな意図があるかは分からないけれど元永自身は悪い奴じゃないんじゃないかな」

「あんまり人は疑いたくはないがの、用心に越した事はない。紅葉さんには話すのか？」

父さんの問いに僕は首を横に振る。その僕の答えにイチも守風さ

んも同意する様子で頷いていた。桐式にこの事を伝えればきつと変な事に首を突っ込む。姫ちゃんが超能力を使えるからと言っても相手は漆黒の称号さえ与えられるような人物である。僕らのような戦闘経験の浅い能力者が藪を突けば出てくるのは蛇どころか猛獣かも知れないのだ。

父さんがもう一度溜息を吐くと、廊下の向こうから近付いてくる足音に気付いて振り返った。僕もそっちに視線を向けると、そこには白いワイシャツとジーパン姿の風呂上りの桐式と元永の姿が。姫ちゃんは自分の服を着ている。服が濡れてない事から一度体を霧に戻して服ごと再構成したのだろう。

「それ僕の服……」

「秋子さんが取りあえずこれを着てなさいってさ。七緒は体が小さいからサイズ事態は合うんだけど胸がなー」

言って桐式がパンパンの胸の部分を見下ろした。下着を着けていない上に薄いワイシャツを着込んでいるもんだから――

「ひょー」

なんて言って桐式と元永のワイシャツに透けた白い肌を鼻の下を伸ばしながら嬉しそうに見ているエロ親父に蹴りを入れた。

「親を蹴るな親を。まったく、嫉妬はみつともないぞう」

なんて言いながらでれとした表情のままで自分の部屋に戻る為に父さんが歩き出した。もう歳なんだからそろそろ男を捨てて欲しいもんだけどこの父親に限ってそれはないんだろうなと諦めにもいた心境でその姿を見ていた。

「ああそうだ七緒。今日から秋子さんもこの家に住む事になったぞ」「え？」

「ほら、家にはもう家政婦さんがおらんからのう、秋子さんが家の事を見てくれる事になったんじゃないよ。これから年末に掛けて忙しくなるしそれに男二人だと家事が回らんで」

「ああ、そうなんだ」

「そう言う事での、今日から同じ屋根の下の家族と言う事で、仲良



くやってくれ」

そう言って父さんは歩を進めて部屋に戻った。廊下に取り残された僕は――

「七緒ー、寒いよー」

と、文句を言ってくる桐式達の為に取りあえず畳の修繕を終えるまでの僕の部屋になる空き部屋へ案内した。空き部屋と言っても僕の四つ上となる双子の兄妹の部屋ではあるけれど。中庭に面した場所にある部屋に二人を案内し、エアコンのスイッチを入れる。

「それにしても大きいお風呂だったねえ。旅館に泊まった気分だよ」  
「だろー？ 風呂に入って足を伸ばせるって良いよな」

座布団の上に座る桐式と元永。歳の同じ女同士と言う事が大きいのだろう、すっかりと気が合った様子で仲が良さそうに話をしていった。この様子なら元永に関してはそれほど警戒しなくても良いような気がするけれど、それでもやはり警戒を続ける事にしようと守風さん、イチと話し合う。指し当たって元永の部屋はその動向を伺える隣の部屋にしようと決めると、

「なんだみんなで内緒話して。あたしらには聞かせられない話かッ」

「いや、紅葉と桜の乳首が薄らと見えてるよって話をば」

「ぶっ!!」

桐式の言葉に間髪入れずに答えたイチ。言われて思わず視線がそちらに動く。ワイシャツ越しに素肌が薄らと見えるのだから当然ピンク色をした突起が見える訳であり――それを見た瞬間、守風さんと二人で驚きに噴出してしまった。

「僕は見ると言ったんです。でもななちゃん達が勝手に」

「うるせえバカ野郎!」

べし、とイチの頭を叩く。それから桐式達に目をやると、恥ずかしそうに顔を赤くしつつ胸を隠した元永と――

「……なんと言うか、紅葉さんは体育会系なんだなあ」

顔を赤くした守風さんのそんな呟きもごもつとも言える、恥ずかしそうな素振りすら見せずに胸を隠す事もせずあぐらを掻いて僕

らを見て笑っている桐式の姿があったのだった。

### 第三章 無口七緒 その六

#### ◇Side 桐式紅葉

二学期最後の登校日でありクリスマス。皆、メリクリ！

体育館で行われる終業式では校長の話を真面目に聞く生徒は殆ど居ない。皆連休を心待ちにしてそわそわとしていた。部活がある人は部活に勤しむだろうけれど、あたしは取りあえず今日この日を有意義に過ごそうと、ゲームをした事が無いと言う桜と徹夜で桃鉄をやっていた疲れも忘れてこれからの事に想いを馳せる。

とは言え校長の長い話は退屈で仕方なく、あたしはいつい船を漕いでしまう。まあ寝不足を解消できたと思えば良いだろう。周りの友達に起された事で校長の話が終わった事に気付き、起立の号令に慌てて立つ。ふと七緒を見てみると同じように出遅れて立っていた。まああたしに付き合っただけで徹夜していたから仕方ないだろう。その桜は今日は家で留守番だった。イチが家に残っていたからひよっとしたら二人でどこかに出かけているかも知れない。そう言えば今日出かける前にイチと姫がなにやら真剣な面持ちで話していたのはなんだったんだろう。二人は仲が良いし、浮気をするなどとも言ったんだろうか。その事を聞こうにも今は姫は眠っている様子だし、そも秋子さんのように念の力で話を出来ないからこんな集団の中で姫に声を掛ける事も出来なかった。

終業式は滞りなく終わり、我等が教室に戻る。通知表を渡され、物理が二で後は三と四。四の比率が若干高いと言う無難な成績にほっと肩を撫で下ろしつつ下校時間を迎えた。友達に遊びに誘われたりするけれどそれを断って帰路に着く。七緒は既に教室には居ない。あたしと一緒に居るのが嫌——と言うよりはあたしが七緒と変な関係なように見られるのを嫌がっている、って感じだった。気にする事無いのに。

友達に挨拶をしながら足早に歩いて七緒の背中を探す。殆ど走るような速度で歩いていると、

「廊下は走るな！　まったく、休みだからって浮かれて怪我するなよ桐式」

そんな風に先生に怒られて、謝りながらも小走りで玄関へ向かった。それにしても七緒の姿が見えない。ちよくちよくと足止めを食らっているとはいえ早すぎだろう、と思いつつも中庭に出た所でたっちんと話をしている七緒を見つけたのだった。



一年前、桜舞い散る春――石間高校の中庭では部員勧誘の音が響き渡っていた。そこを桐式紅葉はまるで上京を果たしたおのぼりさんのように目を輝かせて歩いている。バレー部、ソフトボール部、ハンドボール部。さらには柔道部に空手部と、様々な部からの勧誘を受けつつも、保留を言い渡して次の部へと移動する。

「――ねえその君」

そんな中、部員獲得に目を血走らせる者達の群れから外れた場所でどこからか調達してきたのか、学生用の机と椅子に腰掛けて両腕を組んでいる男の声に紅葉が気付く。他の者とは異彩を放つその雰囲気に興味を抱いた紅葉は人垣を掻き分けてその男の元に歩み寄った。

「……君、中学の頃剣道やってなかった？」

椅子に座ったまま睨むように紅葉を見上げるその男と紅葉は見識が無かった。

「なんで知ってるんですか？」

男の言うとおり紅葉は剣道をしていた。しかしそれは警察官である父親から習っている程度であり、その事を知られる程の実績は無かった筈だ、と紅葉は不思議に思っていた。

「はは、俺ほどの男になれば分かるんだよ。君が剣道をやっている

事を。そして——その道で最強を目指している事も」

男が机に手を着き、ゆっくりと立ち上がる。

「俺の名前は立石陽一。卒業する三年に変わって剣道部のキャプテンを務める男だ。これから毎日剣道やろうぜ」

男——立石がずっと手を差し出す。女子の中では比較的背の高い紅葉を優に超える身長と整った顔立ちから紅葉自身も少しだけ立石に魅力を感じていたが——

「あ、すみません。まだ他の部活を見てみたいんで」

そう言って差し出された手は空を切り、立石は前のめりになって思わず机に両手を突く。

「ま、待て！」

立石に背中を向けた紅葉に制止の声が掛けられた。紅葉が振り返る。

「……え？」

何時の間にか机の上に置かれていたそれは——ダンシングフラワ―だった。立石が手を叩く。うねり踊る花。

「こ、これは……」

「さあてねえ……ふふふ……」

立石はその場にしゃがみ込み、足元にあった自分のバッグから何かを取り出して机の上に置いた。

「は、はわわ……！」

紅葉が力なく両手を出し、さながらホラー映画のゾンビのような緩慢な動きで立石の元に近付く。

「我が剣道部に入れば——」

机の上に置いた何かに手を置いたまま、片手でどこからか取り出したサングラスを掛け、その黒いレンズの向こう側からまるで禁断症状に陥ったかのように近付いてくる紅葉を見下ろす。

机の上では、

「ナデナデシター」

と悪魔の囁きが紅葉に向けて放たれていた——

◇Side 無口七緒

「と、言う風にあたしはたつつんの剣道に対する熱意に当てられて入部したんだよ」

「そうそう。桐式は良い掘り出し物だったなあ」

——どこから突っ込んで良いのか分からない。なんとというか、桐式の家のあのダンシングフラワーとファービーは立石先輩から流れてきていたのかって言うのが一番に思いついた。

「どうしたよ、なに黙ってるんだ無口？」

「いや、その突っ込み待ちをしてる二人の笑顔が凄く憎たらしくて」

「ええ？ あたしらそんな顔してるか？」

「人間の恐怖を食べてる時の白面の者みたいな笑顔になってるよ」

「おいおい恐いな桐式。そんな顔してたら無口が引いちやうぜ？」

「や、たつつんがそんな顔してるんだろ？ ほら、七緒が引いちゃってるよ」

「二人ともだよ」

僕の答えにこれは一本取られた、とばかりに自分の額を叩く二人。なんだろうこの息の合った動きは。二人で芸人でもやればいいんじゃないかな。

「じゃああたしらは行くから。正月だからって喉に餅詰まらせんなよたつつん！」

ばつーんと音を響かせて先輩の背中を叩いた桐式はそのまま僕の体を反転させて背中を押して玄関まで走らせた。

「いてーな！ たたく、じゃあな！ 部活来いよ！」

先輩の声に桐式が立ち止まり、振り返ってから大きく手を振った。僕も軽く頭を下げて挨拶をしてから改めて玄関に向かう。わいわいと賑わう下駄箱前で桐式は色んな奴と挨拶をしていた。僕は別段挨拶をする相手が居ないからさっさと靴を履き替えて玄関を出る。少し遅れて桐式が到着した。

「さてさて、一度家に帰って——」

僕の横を歩いていた桐式の動きが止まる。その視線の先には鞍馬先輩がまるで誰かを待つかのように——誰を待っているか、なんて言うのは分かりきっている——駐輪場へと続く道に立っていた。僕の姿を見つけて表情を明るくし、そして桐式の姿を見て暗くする。そんな先輩に、

「……先輩、良いお年を」

年末の挨拶をしてその横を通り過ぎるのだった。先輩は何も言わずに僕を見送る。多分駐輪場へと向かう僕達の背中を見詰めているんだろうけれど、それを確認する為に振り返る様な事は僕はしなかった。

「……じゃああたしは一旦家に帰って着替えてくるから。七緒も帰るんだろ？」

「うん。イチが元永に何をしてるか分からないしね」

それは嘘だった。イチには元永の監視を頼んでいるから正確には元永がイチに何をしているか分からない、が正しい。とは言っても昨日の元永の力の暴走が演技でもなければイチを止められるような能力を元永は持っていないだろうけれど。イチの事は嫌いだけれど——こう言う時はイチの手でも借りなければならぬ。

「おっけ。じゃあ——」

桐式の言葉が止まる。見れば学校内じゃ姿を現さない姬ちゃんが突然現れ、僕を指差しながら必死に桐式に何かを訴えていた。姬ちゃんは一度体を霧に変えてしまうとメモ帳も何もかも持っていないから身振り手振りで話をするしかない。

「え、七緒と一緒に帰りたいのか？」

姬ちゃんのその肉体言語を解析した桐式はそう問い掛けると姬ちゃんはおんぶんと大きく頭を振っていた。

「まあそうだな。そう言えばイチは居ないし……あたしらで七緒の事を守らなきゃならないのか」

「僕は桐式に守られるほど落ちぶれちゃいない」

「はっはっは。まあいいや、帰ろうぜ」

絡み合う自転車のハンドルやらペダルやらを振り解きながらようやく自分の自転車を出し、門まで押して歩く。サドルに跨った桐式と荷台に飛び乗った姫ちゃんの姿を不思議に思う生徒達は多かったが、まあ桐式の知り合いか何かが待ちきれずに学校まで来たと思われたのだろう、特に何かを突っ込まれる事無く僕らは学校の門を抜けて僕の家へと向かう事にした。

そう言えば学校に行く前、なんかイチが姫ちゃんに何かを言い聞かせるような感じで話をしてたけど――ひよっとして僕を守れ、とでも言ってたのだろうか。まったく、どいつもこいつも腹が立つ。

やけに急いでいる桐式の足に合わせて自転車を走らせていたら世界を縮める好タイムを出しつつ家に到着した。それにしても桐式は一日半以上家に帰っていないけれど、本当に桐式の両親は放任主義過ぎる。心配にはならないだろうか。それともそれほどまでに自分の娘を信用していると言う事だろうか。

家に着くなり出迎えたのはイチと元永だった。冬も真っ盛りな寒空の中、庭先でどこからか来ていた猫を撫で回していた。

「おかえりー。あれ、紅葉は家に帰るんじゃないかったの？」

と、元永が駆け寄ってくる。両手を腰の後ろで組み、前かがみになって上目遣いをしてくるこのポーズは何かの流行なんだろうか。僕には良く分からない。

「まあちよつとなー。イチに変なことされなかった？」

「人の胸を触ってきた挙句に小さいとか抜かしたからしばいてやった」

「あー、仲良くやってるんだな、よかった」

今の話を聞いて仲良くやっていると思える桐式の考えが良く分からない。なんだろう、女には女の共通言語的なものがあるんだろうか。

「さて、あたしは一旦帰ろうかな」



「秋子お婆さんがお昼ご飯作るって言ってたけど」

元永が携帯を取り出して時間を見ながら言う。釣られるように僕も携帯を見て時間を確認すると十一時を回ったところだった。

「や、今日は昼に一旦帰るってお母さんに言っているから」

「ふうん。七緒君は食べてくの？」

「そのつもりだったけど……」

イチが猫を持って近付いてきた。猫の脇を両手で抱えて持っているもんだからだらんと胴が伸びている。

「桐式の事を送ってくよ。道中危ないしさ」

「それじゃあたしがこっちに来た意味無いだろ？」

「なら七緒が準備してから紅葉の家に行って、そのまま遊びに行けばいいんじゃないの？」

どこか不機嫌そうにイチが言う。猫が暴れ始めたから放していたけれど、その猫は少し離れた場所で一度僕達に振り返ってから走り去っていく。遠くを走る猫の姿は王蟲か猫バスが走る姿に似ている。「ふーむ。じゃあ七緒はあたしんちで食べてくか？ 多分電話すればお母さんも喜んで作ってくれるだろうし。結構七緒の事気に入ってたみたいだしさ」

けらけらと笑う桐式。なんだか一層イチの不機嫌が悪くなった気がするけど自分も食べに行きたいんだろうか。

「それじゃあそうしようかな。準備してくるよ」

「おっけーい。じゃああたしは秋子さんに挨拶して……あ、ゲンさんは？」

「おじさんなら部屋に居たよ。店番は若い者に頼んだ、ってさ」

「ういうい」

話が纏まったところで四人揃って玄関に向かう。家の中に入り僕とイチはそのまま自分の部屋へ、桐式と元永は秋子さんの所へ向かったようだ。

「元永の様子、どうだった？」

黙ってついて来るイチに聞いてみると、

「特になんにも。やっぱ悪い奴じゃないんじゃないかな、あいつ」  
「なら良いけど。そういうやお前も一緒に来るんだろ？ 準備すれば？」

「いや、俺は良いよ。桜の事見張ってるから二人で行ってこいよ」  
「は？ ……楽しみにしてたじゃないか」

なんだかイチが不機嫌な理由が分かった気がする。

「父さんに見張りは頼んで――」

「いいって言ってんだろ。ったく」

がりがり頭を掻き、不機嫌極まりない様子で部屋を出て行った。  
あんなに機嫌を悪くするなら父さんに頼めば良いのに。

ぱっと服を着替えて準備を整える。それから部屋を出て台所を指して歩いていると、すぐに桐式達の話し声が聞こえてきた。台所の外から中を覗いて見ると、テーブルの上に出されていたから揚げを桐式と元永が二人でそっと手を伸ばしてつまみ食いしようとしている瞬間を目撃してしまった。

「あら、今食べちゃうと後で食べる分がなくなっちゃうわよ？」

と、振り返った拍子にその瞬間を目撃した秋子さんに言われてしまう。

「ごめんなさい」

なんて言って元永が照れ笑いを浮かべた。

「なんか嬉しそうだな」

「うん。あたしさ、小さい頃に両親失くしちゃってるから……こうやって人にご飯作ってもらおうと嬉しくてさ。お母さんがそこにいるみたいで」

元永の言葉に密かに共感を覚える。僕も母さんの事をあまり知らないから母親が居たとしたらこんな感じなのだろう、と秋子さんや――北さんがご飯を作っている姿を見るたびに思ってしまった。  
「あ、そんなしんみりしないで。別にあたしの力で、とかじゃないからね？ ただの事故だから」

「そうなの……今は一人暮らし？」

秋子さんが表情を暗くして聞く。

「うん。中学までは両親と仲が良かった幼馴染のところに居候させてもらいながら新聞配達の手先しててね、その時に溜めたお金で高校に入ってから一人暮らししてるんだ」

「桜は偉いなあ」

「そんなじゃないよ。こうしてられるのもその居候させてもらった家のお陰だね。親戚に引き取られると学校とかが変わるから嫌だ、って駄々捏ねたあたしを引き取ってくれたんだ。その恩に報いようって思ってバイトに励んで少しでも生活費を入れてただけど、それを全部あたしの為に貯金してくれたんだ。一人暮らしするって言った時も引き止めてくれてねえ……」

ほろりとなったらしい元永の糸目から光るものが流れ、慌てて手で拭っていた。

「その家って子供はいないのか？」

「あれ、七緒君いたんだ」

僕が話しかけた所でようやく僕が居た事に気付いた元永が両手を顔の前に挙げて驚いたポーズを取っていた。大げさな奴だな。

「お婆さんの家にはあたしの三つ下の男の子が居るよ。それとお婆さんの知り合いであたし達の姉貴分の人が居てね。しょっちゅう遊びに連れてってもらったよ。あたしがこんな事にならなきゃ冬休みも遊びに連れてってもらう約束だったんだけどさー」

とほほ、と肩を落とした元永。

「でもま、ここに来て紅葉達に会えたのは良かった事だよ」

んね、と僕達に同意を求めた元永にほんとだよ、と応えた桐式。僕は適当に相槌を打っただけで――正直元永の事を信用しきっていないのに当の元永は僕に会えた事を良かったと言ってきているのは少しだけ心を痛める。

「じゃあここにいる間はお婆さんの事をお母さんだと思ってね。さて、張り切ってご飯作っちゃうからね！」

「やった！紅葉達の方まで食べるから安心してね！　って、そう

言えば二人って付き合ってるの？」

「ん？ まあね」

元永の問いに間髪入れずに桐式が答えた。

「何言ってるんだよ。ったく、行くんなら早く行こうぜ桐式」

僕が悪態をつくると、桐式が立ち上がる。その間際元永に向かって小声で、照れてる、と言っていた。何を言っているのやら。

「イチは？」

「さあ。さっき機嫌悪そうに部屋を出てったけど」

「どこにいるんだろ。ゲンさんのところかな。一緒に行かないと遊びにいけないよ」

「……イチは今日は行かないって言ってたけど」

「へ？」

桐式の足が止まって驚きに目を見開いていた。確かに今日を楽しみにしていたイチが来ない、と言うのは驚くだろうけれどそれ以上の何かに桐式が驚いているように見える。

「あ、あー……まあ、イチが行かないって言うんなら行かないんだろうけど……」

ぶつぶつと呟きながら一人で歩いていく桐式。途中の父さんの部屋を覗くと、そこにはイチの姿があった。

「イチ？ ……今日来ないのか？」

父さんと将棋をしていたイチに、顔だけを部屋の中に入れて桐式が尋ねる。すると、

「うん、今日はいいよ。二人で行ってきな」

なんて言う言葉がつまらなさそうな声で返ってきた。

「二人？」

言うのと、部屋の隅で何かを書いている姫ちゃんの姿が見えた。何かを書き終わると僕らに掲げて見せてくる。首から提げられるくらいの小さなホワイトボードには、いつてらっしやい、と書かれていた。

「あれ、それどうしたんだ？」

仮面ライダーの絵で縁取られたそのホワイトボードを見て桐式が疑問符を浮かべる。

「すぐに書いて消してって出来るからメモ帳より使いやすくなったよ。絵柄は姫ちゃんが選んだよ。一日早いクリスマスプレゼントって事で」

「へえ……良かったな姫。って、姫も来ないの？」

こくり、と頷いた姫ちゃん。さっきいつてらっしゃいと書いたままのホワイトボードをずっと掲げていた。

「今日はクリスマスイヴだし、若いもん同士で楽しんできなさい。夜は幾らでも遅くなっていいから」

かんらんかんらと父さんが笑う。イチと姫ちゃんが来なければ遊びに行く意味が半減するじゃないか、と反論をする間もなく、

「ううーん……本当に来ないの？」

なんて桐式に似合わない不安そうな声でイチに問い掛けていた。それでも首を縦に振らないイチに誰からともなく大きな溜息が漏れる。

「じゃー仕方ないか。行こうぜ七緒」

ぽんぽんと肩を叩いてくる桐式。そのまま僕の手を引いて玄関に向けて歩いていった。少しだけ開いたままの父さんの部屋の襖、そこから見えるイチや姫ちゃんに――僕は無意識に手を伸ばしていた。

## ◇Side 桐式紅葉

クリスマスはイエス・キリストの誕生日――なんて言う本当の意味はこの島国日本では浸透せず、今日この日は恋人達の憩いの日となっている。十月四日前後が誕生日な人は不用意に逆算してしまうとなんだかがっかりとしてしまうかも知れないだろう。そして今日が誕生日な人が逆算してしまうと……ううむ、親がはっちゃけた日が分かると言うのは少し悲しくも恥ずかしい。

一旦七緒と一緒にあたしの家に戻って着替えと昼食を済ませる。

事前にお母さんに連絡すると、あたしと七緒の分のお昼ご飯を作  
って待っていてくれた。お母さんはイチが一緒じゃなかった事を少  
しだけ不審に思っていたようだけど、あたしの顔を見詰めてにつこ  
りと微笑むとそれ以降は何も言わずに七緒にもてなしをしていた。  
昼食を済ませてあたしの部屋で少しの間時間を潰すと時間は三時  
を回っていた。カラオケに行く予定ではあったけど今から行って部屋  
を取れるだろうか。

「そう言えば七緒って何か歌歌うの？」

「ん？ ……あんまり。カラオケなんて行った事も無いよ」

「ほほう。つまり七緒の美声を今日は聞ける訳だな」

む、と顔を顰める七緒。人前で歌ったことが無いから恥ずかしい  
んだろうけど、まあそこはあたしがエスコートすれば良いだけの話  
だ。二階のあたしの部屋から一階に降り、リビングでテレビを見て  
いたお母さんに顔を出す。

「んじゃ行ってくるねー」

「今日のご飯は？」

「んー、いいや。今日はお父さん早いんでしょ？ 二人でゆっくり  
しなよ」

「んもう、紅葉ったら。じゃあ七緒ちゃん、紅葉をよろしくね」

にっこりと笑うお母さん。七緒も笑みを浮かべて会釈をしてから  
二人で家を出た。クリスマスに自転車——ってのもロマンが無いと  
半ば無理やり歩きで行く事に。時間が時間だしそろそろあたしらみ  
たいなのが駅前に集まってくる頃合だろう。もしくはもっと遊ぶ場  
所の多い隣の三弦町に行っているだろうけど、あたし達がそこま  
で行ってしまうと姫達が姿を保っていらなくなるからその選択肢  
は無い。まあ今更あたし達の事を誰かに見られたってどうってこと  
ないし、気にせず遊びに行こうと足を早めた。

歩きで駅まで行くとなると少しだけ時間が掛かる。ホワイトクリ  
スマスと言う事にはならなかったけどそれでもかなり冷え込んでい  
て、あまり好きではなかったけれどマフラーを巻いて出てきた事は

正解だったと思った。七緒は厚手のジャンパーを着ている以外にこれと言って防寒をしていないように見える。

「マフラー二人で巻こうか？」

「……首を絞められそうだからいい」

なんて照れる七緒。ふむ、かわいいじゃないか。まあどっちにしても二人で巻くほどあたしのマフラーは長くない。

駅に近付くにつれて駅に向けて歩く人の姿が多くなる。その中には長いマフラーを二人で巻いているカップルの姿も見える。うん、なんだか動き辛そうだし見てて恥ずかしいからやらないで良かった。取りあえず足早にカラオケボックスに向かう。石間駅周辺に一つしかないこのカラオケボックスは休みの前の日なんかは満席になる事も珍しくない。人通りの多さに席が取れるかどうか心配になって少し焦ってきてしまう。そして――

「えー、もう満席ですか……」

カラオケボックスの受付の前で落胆する。ちよいと読みが甘かったか。

「どうしようか」

むう、と唸って考える。男の子と二人でクリスマスを過ごすなんて初めてだからどうすればいいのか分からない。七緒には悪いけど七緒から画期的な案が出るとは思えないし――

「取りあえずデパートにでも行ってなんか見てこようか」

そうやって考えていると、七緒の方からそんな提案が出てきた。

「ん？ 買い物する物でもあるのか？」

「いや、そうじゃなくて……」

口を尖らせながらほったをぼりぼりと掻く七緒。何が言いたいのかなあ、なんて考えつつふと七緒の家を出る前に、七緒が姫にクリスマスプレゼントを買ってあげていた話を思い出した。ひよつとして、と思いつつ、

「あたしにクリスマスプレゼント買ってくれたり？」

って聞いてみると、七緒は眉を顰めて視線を逸らしながら小さく

頷いた。少し顔が赤い。

「なんだよそんなにやけた顔して」

「そんな顔してたか？」

七緒の突っ込みを適当にあしらってからデパートへ向かった。まったく、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに。

地上十二階、地下一階と言う石間町でも一番大きいデパート。普段は地下の食品街に行く程度にしか来ないこのデパートも男の子と来るとなると違った印象が出てくる。あんまり高いものじゃなければ、と言う条件付でなんでも買ってくれるなんて言う七緒の太っ腹な言葉に釣られて色んな店を回ってみる。とは言えあたしはブランド品の服だとか宝石関係には興味が無いし、バッグなんかも今の所欲しい物もない。だからと言って前から欲しかったゲームを買う、なんて言うのもロマンが全く無い。

「姫には何買ってあげたんだ？ あのホテルボードだけ？」

家庭菜園用のプランター売り場をふら付きながら土をじっくりと見ている七緒に聞いてみると、

「色々買ってあげたよ。服とか」

「そっかぁ……うーん。あ、そうだ」

「ん？ 決まった？」

「何か甘い物を食べよう。おやつおやつ。甘い物食べて頭を活性化させれば欲しい物も出てくるさ」

自分の思いつく限り、最大限に可愛い笑顔で言うと、七緒も苦笑を浮かべて頷いた。欲しい物でもあったのか、それとも家庭菜園に興味でも出てきたのか売り場を離れていく七緒が名残惜しそうにしていた。その足でエレベーターに乗り込むと最上階に向かう。レストラン街に行けば何かしら甘味処があるだろうと思うと――

「おお、巨大パフェだよ巨パへ」

「……でかすぎるだろ……食べきれぬ奴いるのかこれ」

昇天ペガサスなら盛りも真青な巨大パフェのディスプレイが目飛び込んできた。



「二人で食べてみるか？」

「胸焼けしそうだからこっちの小さいので十分だよ」

と、隣にある小さな——と言ってもそれでも結構な盛りだけれど——チョコレートパフェを指差した。七緒が手伝ってくれないとなると一人じゃこんなものを食べられない。それならあたしも小さい方にしようか、なんて考えつつ店の中に足を踏み入れた。店員に席を案内されて窓際の席に座る。地上十二階からの見下ろせる遠い世界はなんだか自分がいつもそこを歩いているなんて言う事実を忘れ去られる位に高い場所だった。普段こんな所からこの町を見下ろすなんてないから尚更だ。

「高いところってなんだかわくわくするな！」

「……なんとかとなんとかはなんとかがなんとかか？」

「随分曖昧だな」

正解は、馬鹿と鉄は使い様。違うか。

「それにしてもこんなレストランに来るのは小さい頃以来だよ。なんだか高級レストランな雰囲気があって近寄りがたいよな」

ファミリールレストランと言うよりはフレンチレストランと言った様相の壁紙やら床やら調度品やらがあって場違いな空気に包まれた感じがする。他のお客さんを見てみても上品な服装に身を包んだせれぶーなご婦人方が多かった。定食屋に行くと周りのお客さんに見られているように感じるあの感覚と一緒に感じた。

「まあ甘いもの食べながら欲しい物を考えなよ」

言って、水とおしぼりを持ってきてくれた店員に注文した

「七緒って家庭菜園にでも興味あるのか？」

「なんで？」

水の入ったグラスを口に運ぶ七緒に聞いてみると、その手を止めて聞き返してきた。

「や、さっき熱心に見てたじゃん」

「あー……なんか育ててみようかなって。ミニサボテンとか」

「サボテン？ あれって確か一日に一回か二回くらい霧吹きで水を

しゅっしゅするだけでいいとかって言うけど、それって面白いのかな」

「さあ？　でも熱狂的に好きな人が居るって言うし育ててみれば楽しいかもよ？　ミニって言いつつ大きくなるかもしれないし」

水の話が出てきたところで七緒が思い出したように水を飲んだ。

「ミニサボテンがでっかくなったら意味ないじゃん。まあ買うんだったら少し分けてよ。あたしも育ててみるから」

「サボテンって種から育てるもんなのか？」

「なんか実って言うのか？　あの緑色の。あれを切って土に植えれば大きくなるって聞いた事あるけど」

「じゃあ買ったらな」

「あ、でもなんか育ててみたくなってきた。あれ、クリスマスプレゼントこれでいいんじゃない？」

あたしがそう言った瞬間、ぶっと口に含んでいた水を噴出した七緒。すぐにグラスを持っていないほうの手で口を押えたからあまり被害は大きくならなかったけれど、それでもテーブルが少しだけ水に濡れた。

「あれほど喋っている時に飲み物を口に含むなと言ったのに」

「聞いた覚えはないぞ……」

「そうだった？」

「そうだよ。しかし安い女だな桐式は」

「いやいや、どうせだから長く形に残る物のほうがいいだろ？　サボテンも上手く育てれば花を咲かすって言うし、どっちが先に花を咲かせるか勝負しようぜ」

「じゃあ僕は花が咲く品種を買って、桐式には咲かない品種のサボテンを買ってやるよ」

テーブルの上をおしぼりで拭きながら七緒が笑う。その笑みはギャグ漫画なんかを読んでいる時の感じではなく、やさしげな、ともすれば親が子供に向けたり——恋人同士の間だけで見せるような、相手に親愛の情を持ったような微笑だった。

初めの頃はあたしの言動に笑う事があってもそんな笑みを見せる事は無かった。けれど最近をよく笑ってくれる。七緒はあんまり感情を表に出さないけど、きちんと喜怒哀楽は見せてくれる。分かり難いけど付き合いを深めれば分かりやすい、それが七緒だ。

——いつからだろうか、七緒のそんな表情を見れるのが嬉しく思えたのは。なんて恥ずかしい事を考えている自分に少しだけ照れた。

### 第三章 無口七緒 その七

いつもと変わらない時間に起き、いつもと変わらぬ朝を過ごし、いつもと変わらぬ時間に家を出て、いつもと変わらぬ仕事をこなし、いつもと変わらぬ時間に家に帰る。それが彼の——片山秋人の日常だった。

しかし今は違う。口うるさく、仕事中に家を開けている間に家事をこなしてくれる同居人の存在は彼の生活を大きく変えた。

おはようと言う相手も無くただいまと言う相手も無い。仕事が終わっても精々同僚と酒を飲んでから帰る程度。そんな生活を送っていた秋人にとって守風と言う存在はとても重要になっていた。故に守風が身の危険を承知して悪事を働くシャドウを追って居る事を知り、秋人も同じ事をする事に決めた。元々正義感が強いと言う事もあっただろう。しかしそれ以上に大事な同居人を危険な目に遭っていると言うのに無視が出来なかったのだ。

そんな心優しい主の想いを守風はよく理解していた。だからこそ守風は秋人を守る為にその身を粉にして動いているのだ。お互いが同じ思考をしているからこそ、お互いが同じ行動を取る。故に——

「なに膨れてんだよ」

「今日はクリスマス！ 折角残業も無しに帰ってきたのならこんな日くらい家でゆっくりしていればいいだろうに！」

「イヴなイヴ。まあアレだ、男一人のクリスマスってのも悲しいだろう？」

日も落ちた午後六時、駅の周辺の見回りをしていた守風と仕事を終えて帰宅の途についていた秋人が出会い、そのまま崩し的に二人での見回りとなった。何度言っても見回りを止めないと言う秋人に負けた守風は自分が一緒である事を条件にその行動を許可したのだった。

「はぁ……」

「どうした溜息吐いて」

「お前が言うともものすごい腹が立つ」

「それは失礼」

ぼむ、と秋人が守風の頭を叩いて笑う。守風は叩かれた頭を手で擦りながら不満を隠さない表情を向けるのだった。

仕事帰りの人や終業式を迎えて遊びに繰り出した学生達でごった返す駅前を二人で歩く。着々と被害者を増やしていく黒い風も流石に人通りの多い場所での凶行には及ばないだろうと考えるも、その多岐に渡る殺害状況からどこでどんな凶事が行われるか分かったものではない。そうなればどれだけ人通りが多い場所であろうとも安心は出来なかった。

二人が周囲を警戒しながらバスのロータリーを一周する。

「……あの子、石高の生徒だろ？」

「ん？」

駅前を抜けて商店街の方へと向かう矢先、秋人の視線が学校の制服を着たまま歩く一人の女子生徒に向かった。

「かわいいって言うのか美人と言うのか……俺が学生の頃はあんなの居なかったぜ」

「あー……紅葉さんから話しに聞いた事あるなあ。えっと……く、く……そうだ、鞍馬とか言う石間高校のアイドル扱いされてる女生徒が居るって。その子なんじゃないか？」

「へえ。もてるんだろなあ」

へらへらと笑う秋人と同じように道を行く鞍馬智子に視線を奪われる守風。しかし彼女が何かを探すように顔を動かしてどこかしかへ歩いていくのを見てから二人も視線を前に戻した。

「鞍馬って言えばローズウィップだよな」

「懐かしいな」

他愛ないやり取りをしながら歩き続ける二人。時間はあっという間に過ぎ、七時になったのに気付いたのは秋人の腹の虫が鳴ってからだった。

「ファミレス、天丼、ラーメン」

「ラーメン」

ただそれだけの会話で二人の夕食が決まる。二人の足が目当ての店へと向かって進み始めたその時――

「お、片山じゃないか」

道の先から歩いてきていた、秋人と同じ歳の頃と言った風体の男が声を掛けてくる。

「ん、只野か。おつかれさん。今帰りか？」

「そうそう。これから一人身の奴等で寄り集まって飲みなんだけとお前も来いよ。寂しい部下を労うってんで部長も来るってよ」

言いながら只野は振り返る事をせず親指で背後を指す。その先に秋人が毎日のように会社で見ている顔が何人か居た。

「いや、今日はな……悪い」

そう言っただけで只野が秋人の背後に立つ守風の存在に気付く。

「お、彼女!？」

「いやそういうのでは……」

叫ぶように言う只野に守風は苦笑を浮かべて否定した。その後も暫く守風の顔をじっと見詰めていた只野は突然笑い出し、

「だよなあ。こんな美人が片山の彼女な訳ないよな!」

大きな音を立たせて只野が秋人の背中を叩いた。そんな只野の言葉に一瞬守風の表情が引き攣る。

「おお、片山じゃないか。残業もしないでこんなところほつつき歩いてたのか？」

「あ、牧野部長、お疲れ様です」

そんな秋人達の騒ぎを聞きつけ、離れた場所で他の者達と話をしていた秋人の上司が現れる。秋人は人当たりの良い笑みを見せて挨拶をしたが、ビール腹の膨れた体型と、何よりも秋人に対して不遜な態度を見せたその人物の登場でますます守風の表情が曇った。

「ん? お前、彼女なんか居たのか。女に時間を割くのも良いけどよ、きちんと仕事もしろよ」

それだけ言うとは秋人の返事を聞くことも無く只野を連れて牧野は歩き去っていった。その後姿を睨み続ける守風に、

「そう邪険にすんなよ。あんなでも俺の上司なんだしよ」

「上司だったらあんな事を言っても良いのか！ まったく、秋人は仕事をサボってる訳じゃないだろうに。ふざけてる」

「まーここんとこ部長の誘いとかも断ってるからなあ。目の敵にされてるって訳じゃないだろうけど……ま、気にすんな」

言いながら守風の背中を押すように叩き、歩き出す秋人。それからすぐに見知った顔が前を歩いているのに気付き――

「今日は知り合いに良く会う日だなあ」

と、言いながら片手に荷物を持って歩く七緒と手ぶらで歩く紅葉の元へ歩いていくのだった。

## ◇Side 無口七緒

ジングルベルの曲がうるさくない程度に流れる石間駅前商店街を練り歩く。今年最後のお祭り騒ぎに乗じて色んなところでチキンやらケーキやらの販売が盛んに行われていた。桐式とパフェを食べて以来何も食べていないからそのチキンの香ばしい香りが腹の虫を鳴らす。

桐式の言うとおりにコップ程の大きさのミニサボテンを僕と桐式の方で二つ買い、その足でもう一度デパートの中を見て回った。そうしてサボテンを買ってあげた事が引き金にでもなったのか桐式はぽつぽつと欲しいものが出てきて色んな店で少しずつ小物を買っていった。桐式はあんまり服やら鞆やらに気を使わない奴だと言うのは薄々感付いていたけれど、キーホルダーだとか変なおもちゃだとか、果ては家具に興味を示す辺り自分自身を着飾るよりも身の回りに自分の好きな物を置いていく方が好きなようだった。それなら立石先輩からダンシングフラワーとファービーを貰う条件で剣道部に入ったのも頷ける。

「しっかしまあ、それでも安い女だよな桐式は」

手に持った紙袋の中にはサボテンを初め、桐式が欲しがった小物が入っている。総額で諭吉さんどころか一葉さんを使ってもお釣りが来るほどだった。

「ま、いいじゃんか。しっかし、やっぱカラオケは無理かあ」

むふう、と溜息を吐いた桐式。買い物を終えてから再度カラオケボックスに行ってみるも満員と言われてしまったのだった。

「んー、どうしようか」

「まずは腹ごしらえとか？」

「それもそうだなあ。……そう言えば七緒はどっか行きたいところある？ あたしが全部決めちゃってるし……」

「や……そう言われても僕は――」

友達と遊びに行く、なんて事をした事が無い。あっても小学生の頃の話だ。高校生になった今そんな小さい頃の遊びで桐式が満足する筈も無い。

「ゲーセンに行ってもなあ……折角だしクリスマスっぽい事したいな」

「カラオケってクリスマスっぽいのか？」

桐式の言葉に思わず苦笑しながら答えてみると、今更その事に気付いたらしく桐式も苦笑する。

「まあ冬休み入ったし、遊ぶだけならこれからいつでも出来るからなあ。後でもう一回カラオケ行ってみて、駄目だったら散歩でもしようぜ。寒いけどさ」

二、と笑う桐式に釣られて僕も笑ってしまう。確かに寒いけれど――別に桐式と一緒に散歩するのも悪くない。

時計を見る。六時を少しばかり回った頃だった。どこで夕食にしようかと桐式と話し合う。すると――

「おい」

と片山さんと守風さんが歩いてきた。

「あ、こんばんは」



「よう。デートか？」

にやり、と笑みを浮かべた片山さん。

「いや、違いますよ……」

「違うって、男と女が二人で歩いてりゃデートだろ。それもこんな日に」

「デートは男と女が会う事って辞書にも載ってるんだぜ、七緒」  
「むう」

思わず携帯の辞書機能を使って調べそうになるけれど面倒になってやめた。

「それともあれか、七緒はあたしと恋人同士に見られるのが嫌か？」  
「……」

「だんまりは良くないなあ無口」  
「そうだそうだ、嫌なのか嫌じゃないのか言いやがれー」

けらけらと笑う片山さんと桐式。なんで僕がこんな目に遭わなきゃならないんだと一瞬思ったけどなにやら機嫌が悪そうにして一言も喋らない守風さんの姿が目に入るとそんな考えも無くなった。

「どうしたんです？」

「え？ あ、いやなんでも」

歯切れの悪い返事をする守風さん。思わず片山さんを見ると苦笑を浮かべ、

「こいつの事は気にしないでやってくれ」  
と言うのだった。その後、桐式に話しかける。

「んで、デート中の二人はこれからどっか行くのか？」

「晩御飯をどこかで食べてこようかなって。片山さんは？」

「ああ、俺達もだよ。さて、邪魔しちゃう悪いし行こうぜ守風」  
「え？ あ、ああ……」

そう言って終ぞ話しに加わる事もなく守風さんが片山さんの傍まで寄っていく。

「――守風さん」

「ん？」

その守風さんの背中を呼び止めた。

「その、例のアダムさんの事片山さんには……？」

耳打ちするような距離で桐式達に聞こえないように聞くと、守風さんは小さく首を横に振った。

「あんな事を秋人に喋ったら俺も警戒する、なんて言って聞かないからね、内緒にしているよ」

「それはよかった」

「紅葉さんには？ あと桜さんは？」

「桐式にも話してません。元永も今のところ不審な行動は見せてないですし、今は家でイチと姫ちゃん、それに父さんと一緒に居るから変な事は出来ないと思いますよ」

「え？ イチと姫ちゃん……？ あ、ああ、そうかなるほど。それなら大丈夫そうだね」

と、またしても歯切れの悪い守風さん。さっきから機嫌が悪そうだし片山さんと喧嘩でもしたのだろうか。

「じゃあ私たちはこれで。クリスマスだからって夜遅くまで出歩いていると札の黒い風が出てくるかも知れないから気をつけて」

「まあそうになったらそうだったで目標が達成出来るからいんじゃないかね？」

ぐ、と親指を立てた右手を突き出して言う桐式。

「ばか、姫ちゃん達が居ないんだから今は逃げの一手だよ」

と、僕が言うと、そっか、なんて言って頭を掻いていた。

「まあ気をつけろよ。宿題早く片付けろよ。クリスマスだからってハッスルしすぎるなよ」

そう言って片山さん達は歩いていく。

「はは、ハッスルするなってさ」

「そんな心配するなよ。それより遊んでばっかで宿題忘れるなよ？」

「写させてよ、ななちゃん」

「いやだね」

ちえ、と舌打つが、すぐに笑う桐式。でも冬休みは二週間程度し

かない上に年末年始のイベントがある。もしどうしても宿題が間に合わないと言うのなら――まあ写させてもいいか、なんて思うのだった。



普段は用が無ければ近寄る事も無い石間駅の周りを鞍馬智子は歩いていた。同級生の立石から七緒と紅葉が二人で出かけた事を聞いた彼女は居ても立っていられず石間駅まで追ってきてしまう。その視線は常に七緒の背中を探していた。

――親を魔術師に持つ鞍馬智子は生まれついての魔術師だった。幼少の頃から魔術の修行をし、魔術師となるべくして育った。その事を疑う事も無かったし、疑う必要も無かった。

彼女は……彼女の家は元は別の霊地で魔術師としての研究を行っていた。しかし彼女の家はその地を追いついてしまふのだった。流れに流れ、多くの地脈が集まる霊地であるこの町に辿り着いた彼女達はこの地での研究の許可を貰う為に管理者である無口源太郎の元へ向かうのだった。

師匠であり唯一の肉親となった母と共に無口の屋敷へ赴いた際、やっと魔術師としての修行をし始めたばかりの無口七緒の姿を、もう十年近く経った今も鞍馬智子は鮮明に思い出せた。今のようになく表情で人を寄せ付けないような性格ではなく、無邪気で活発な少年。同年代の、それも魔術を習い始めたばかりで魔術師に大きな尊敬と期待の念を募らせていたその少年が自分を先輩と慕ってくる。兄弟の居ない鞍馬にとって初めはただ可愛い弟が出来たようなものだった。しかし少年七緒の魔術へ向けたひたむきな情熱とその姿に次第に鞍馬は心惹かれていった。その思いはまだ小学生の少女としての、子供らしい恋愛感情だったのだろう。しかしその感情は募り、魔術師としても義理の姉弟としても関係が希薄になり、そして少年だった七緒が青年となって自分の前に立ちただかる壁を知り、次第に周

囲から孤立するようになった後も彼女は七緒の事を思っていた。

しかし鞍馬智子も魔術師だった。七緒が知り、越えられないと悟った壁も七緒が知る何年も前に知っていた。親の期待を受けつつも、自分の限界を知った鞍馬も――周囲から孤立するようになっていった。人との関わりはなるべく避け、ひたすらに魔術の修行に時間を費やす。だがその間も彼女は七緒への想いを募らせていた。重い想いに自身が潰されてしまいそうになり――やがて魔術の道から遠ざかるように、魔術へ向けた想いの全てを七緒に向ける。誰にも打ち明けられない悩み。しかし七緒ならば、同じ道に居る者ならば自分の悩みを理解し、共に同じ道を進む事が出来る――同じ高校へ入学してきた七緒を見た瞬間、鞍馬はそう考え、同時に全ての物から解放されたような感覚に陥り、そして募った想いを打ち明ける。だがその想いも七緒には届かなかった。

積み重なった想いは七緒に袖にされただけでは抜けきらず、やがてはストーキング行為の為に費やされてしまう。決して報われる事の無い行動だったがそれだけでも鞍馬は救われていた。親には、師匠には到底打ち明けられないその悩みの所為で孤立した鞍馬だったが、己の想いに七緒の背中を追い、そして七緒が同じ悩みを抱えている事を察する事で、理解する事で自分は孤立しているが孤独ではないと言う事を知ったのだった。

鞍馬にはそれで十分だった。それだけで立ち直る事が出来た。そうして立ち直った鞍馬はやがてストーキングをやめて魔術の道を再度歩み始める。

だが、自分の事を見る事のない七緒の気持ちに深く理解し、なるべく関わるまいとした鞍馬にとって信じられない事が起きる。いかに壁に突き当たり、もがいていたとは言え鞍馬は七緒の数段前を歩いていた。それは鞍馬自身察していて嫉妬心故に自分の想いが七緒に伝わらなかったのだらうと言う事を理解していた。それだけに高校三年となった秋、自分の周りに現れ始めた七緒の姿に微かな期待を抱いたのだった。

その期待が空回るだろうと言う事は分かっていた。十分に、十二分に理解していた。しかしそれでも――

やがて孤立し、孤独していた七緒の傍に一人の女の姿が見えるようになった。桐式紅葉。石間高校では有名な女だった。友人としても恋人としてもどちらでも七緒の傍に居る――そんな彼女のさやかな願いを紅葉は簡単に叶えていたのだった。怒りに震えない筈が無い。嫉妬に狂わない筈が無い。その負の感情はやがて――

## ◇Side 無口七緒

「今日も僕の家に来るつもりかよ」

「だってお母さんとお父さんを二人っきりにさせたいだろ？」

「……そりゃそうなのかも知れないけどさ、最近僕んちに入り浸りすぎだろ」

「むう……そりゃ嫌なら帰るけどさ……」

夕食を終え、やはり満席だったカラオケボックスを出た後にゲームセンターやらなにやらをハシゴした夜中の十時、僕らは石間公園の中を歩いていた。街灯に照らされ、歩くのに苦労しない公園の中を散歩する人はそこそこに多く、何人かと擦れ違う。擦れ違った人達は僕らを一瞥した後に特に何かを気にするようなことも無く歩き去っていった。そんな人達を見て桐式は、

「あの人達も恋人同士なのかね」

なんて言っていた。達「も」と言う事は複数居るわけである。そう、擦れ違ったのは何れも男女のカップルだった。なんとも気まずい。

「あー、この先ってあたしらが会った場所だよな」

「そう言えばそうだな」

段々と暗がりになり、やがて街灯の無い暗い道に着いた。そこは確かに僕と桐式、そして今はもう居ない刀野郎と出会った場所だった。もう少し離れた場所へ行けば――見ず知らずの他人が死んでい

た場所だ。殺されてしまった人には悪いけれどあまり思い出したくはない。

「もう三ヶ月近くなるんかね」

「そうだな。……でもまだ終わってない」

「だなあ。でもさ、クリスマスに年末年始、これからはあっちだって忙しい毎日だろ。お年玉貰いに実家に帰ったりするんじゃないかな。おせち食べたり紅白見たりさ。その辺は普通の人と同じしょ」  
「相手がお年玉貰うような歳じゃないかもしれないだろ片山さんとか北さんとかみたいなさ」

「あ……まあそうか。でもほら、遊びに行ったりするかもしれないじゃん」

「どうだかね。……白沢はともかく黒い風はまだ姿も見た事も無いんだから断定できないだろ」

ぽつぽつと話しながら暗い道を出て街灯の照らす道に戻った。更に歩いて街灯のすぐ下にあるベンチを見つけた。傍には自販機も置いてある。二人分の飲み物を買ってからベンチに座る事にした。

「この寒いのにコーラって」

と、コーンポタージュの缶を振りながら桐式が毒づく。

「別にいいだろ」

「ま、いいけどさ」

二人並んで缶を傾ける。コーラの炭酸が喉を刺激した。

「あー、そのさ、七緒ってほんとのところで鞍馬先輩の事どう思ってるの?」

「は? なんでいきなり」

「や、ちよっとね。で、あんな美人に好かれてるんだから実は、ってのは無いのか?」

「無いよ。……僕は桐式が思ってるほど寛容な人間じゃないからね」

「えっと、その……やっぱ魔術師絡みって事?」

「……」

桐式の言葉には答えない。

「でもさ、ほら、七緒はずっと魔術の修行してるんだろ？　ならすぐ追いつけるって。鞍間先輩よりもオズワルドなんかよりもさ！」  
まるで僕を励ますように——いや、桐式は励まそうとしているんだろう。そうだ、いつも桐式は僕の事を気に掛けていたんだ。

学校でどんなに良い成績を出しても孤立していた僕に話しかけてきてくれたのは桐式だ。刀野郎——北修一に殺されそうになった僕を守ってくれたのも桐式だ。知られなくなかった事をオズワルドにばらされても変わらず僕と一緒に居てくれたのも桐式だ。

「ほら、元気出せよ。な？」

「別に落ち込んでなんかないよ、僕は」

「……でもさ、オズワルドと戦ってから元気なかったじゃん。最近はどうでもなくなってきたけどさ……」

「……誰だって自分の気にしてる事を誰かに知られるのは嫌だろ」

「そりゃそうだけど……でも七緒は修行して——」

「——そうだな。でも駄目だった」

半分以上は入っているコーラの缶に口を付け、一気に煽る。そのまま缶を握り潰してゴミ入れに投げた。

「今日はもう帰ろう」

「え？　いや、その……」

「送るよ」

ベンチから立ち上がる。

「あ……怒ったんなら、ごめん」

「怒った訳じゃない」

「怒ってるじゃん……」

「怒ってない！」

思わず叫んでしまった。止めることが出来なかった。止まる事が——出来なかった。

「七緒、あたしらはまだ若いんだぜ？　幾らでも時間がある。あたしだって手伝える事があるんなら手伝う。だから——」

「桐式、お前はなんでそんなに僕を気に掛けるんだよ。僕らはただ

の——ただの友達だろう？ 幾らでもって……お前はただの友達に  
どれだけお節介を焼く気なんだよ！」

「ずっとだよ！」

桐式も立ち上がり叫んだ。真剣な眼差しで僕を真っ直ぐに見詰めてきている。真っ直ぐに、視線を外す事無く。

「お節介だ、余計なお世話だ！」

「いいじゃんか、あたしが好きでやってるんだから」

「僕は——嫌なんだよ！ さっき片山さんと一緒に居る時間いたよな、お前と恋人に見られるのが嫌かって。ああ嫌だよ、嫌に決まってる！」

「——なんだよいきなり……あたしはただ……」

「ただなんだよ。ただ僕に同情してたってのか？ 僕がどうしようもない落ち零れだから、それで悩んでるから元気付けようとして今までお節介焼いてたってのか？ これからも余計な世話を焼こうってのかよ！？」

「そんなんじゃない——」

「じゃあどうなんだ！ 桐式はいいよな、努力すれば実力が付いてくる。そうやって剣道で強くなったんだろ？ でも僕はそうじゃない。努力したって実力なんか付いてこなかったんだ！ 修行すればオズワルドに追いつける？ 無理だよ、無理だ！ お前、魔力だけで人を作ってその上に魂と超能力まで与えるってのがどれ程の事か分かってるのか？ 大魔術師なんでもてはやされてる父さんが何十年も掛かって辿り着いた境地に、オズワルドはたかだか二十年で辿り着いたんだぞ！？」 お前に……僕の気持ち分かるかよ……同じ師匠から学んだのにかたや落ち零れ、かたや称号まで与えられるような優等生……今の今まで、この事件の黒幕があいつだって分かるまで——父さんがこの事実を隠してた気持ちも分かるさ。

……良い事教えてやるよ。桐式は努力すれば出来るって言うけどさ、僕はもうそんな努力なんかしてないんだよ。もう一年以上魔術の修行なんかしてない。疲れたんだよ……分かるだろ？ 僕は



桐式が思うほど立派な人間じゃない」

思いの丈を全て吐露してしまった僕を見詰めて桐式は黙っていた。目を伏せて暗い表情を浮かべ、何かを言いたそうに顔を上げるが言葉が出てこずにまた顔を伏せる。

「七緒」

ふと、ここに居ない筈のイチの声がした。振り返ってみる。そこには、武術を習っている僕の記憶を引き継いでいるとは思えない、素人がやるように大きく拳を振り上げているイチの姿があった。

その姿が目に入った瞬間には拳が目と鼻の先にあり――ほんの少し顔を逸らして威力を削ぐ程度の事しか出来なかった。

「ぐ！」

「お前なあ！」

殴られて傾いだ僕の胸倉をイチが掴む。

「紅葉がどんな思いで一緒に居てくれるのかも知らねえで――」

「知るかよ！」

イチの額に全力で頭突きをする。痛みで緩んだ手を振り解いた。見れば桐式の傍にも姫ちゃんが立っていた。

「……そうか、そうかよ。は、お前ら皆お人好しだな。お節介焼きだよ。皆で僕を励まそうとでもしたのか？ 最近様子がおかしかつたもんな。いつから計画してた？ 無駄な事に時間使いやがって……」

「てめえ！」

「うるせえ！」

殴りかかってくるイチの腹に蹴りを打ち込む。咳き込みながら体をぐらつかせ、その体を桐式が駆けつけて支えた。

「お前、桐式の事好きなんだろ？ だったらそのまま行っちゃまえよ。お似合いだよお前らは」

何かを言いたそうにしていた桐式を無視して帰りの歩を進める。

「ごめん、また今度な。姫、紅葉の事頼む」

そんな事を言っただけでイチが歩いてくる足音が続いてきた。今日家か

ら出てきてから今の今までずっとしていたように体を霧に変える事はしなかった。僕への不満を体言しているらしい。でも、そんな事は知らない。思えば守風さんにイチと姫ちゃんの事を話した時に何か腑に落ちないような様子を見せていた。イチや姫ちゃんには出来ないけど姿を消したシャドウの存在を感じ取る能力が守風さんには在ったのかもしれない。つまり二人が隠れて僕達と一緒に居る事とその理由を理解した上で知らない振りをしたんだろう。普段なら感謝をするかもしれないそのお節介も、今はただ憎たらしいだけだった。

### 第三章 無口七緒 その八

◇Side 桐式紅葉

——何も言えなかった。

所詮、あたしがしていた事は相手の事を考えない独りよがりで自分勝手なお節介なんだと思い知る。相手に理解を求めず、相手を理解したつもりで、ただ一緒に居れば何でも出来る、何でもしてやれると確信して突っ走った結果がこれだ。

——好きだ、と言う事も言えなかった。

離れていく七緒とイチの背中を目で追いつける。伸ばした手はもう届かない。二人の背中が見えない距離まで離れると自分の足が悔しさに震えている事に気付いた。剣道の試合だってこんな風に震えた事はない。立っているのも辛くなってさっきまで座っていたベンチに崩れるように腰掛ける。震える自分の手の平を見詰め、やがてその手で膝を抱えた。目じりからは涙が零れていた。

「嫌われたかな」

鼻を吸いながら呟く。姫があたしを気遣うように頭を撫でてくれた。

イチが考えてくれたデートの計画は無駄に終わってしまった。イチが来ないと言うアクシデントもあたしと七緒をくっつけようとするイチの気遣いだったんだろうけれど、その気遣いも無駄にしまった。他のペルソナやシャドウからあたし達を守る為に隠れて付いてきてくれていたと言うのに——

よく考えれば魔術師に関して七緒が酷く劣等感を持っている事に分かる事だったし、イチからもそれとなくそう言う話を聞いていたのに、あたしは七緒に良いように見られたいが為によく考える事もなく七緒を励ましているんだと言う事をアピールするようにあんな話をしてしまった。

「頑張れ、なんて言葉がどれだけ無責任な言葉か分かったてたんだだけだな……」

分かっていたからこそなるべく使わないようにしていた。けど、焦ったあたしはつい口走ってしまった。

自嘲しながら顔を上げる。空にはぽつぽつと星が見える。顔を下ろして心配そうにあたしを見ている姫の頭を撫で、七緒が置きっぱなしにしていった荷物を手に取った。

「帰ろ」

言って立ち上がり、姫の手を取る為に荷物を持っていない方の手を伸ばした。しかし姫はその手を取らない。その目はあたしを見ていなかった。視線の先を追う、そこには――

「桐式」

と、あたしの名を呼ぶのはさつき立ち去ったばかりの七緒だった。七緒は優しいげな笑みを浮かべていた。まるで親愛の意思を見せようとするように。

「さつきは悪かったよ。ごめんな」

黒いマントで身を包んだ七緒があたしに手を差し伸べてきた。でもあたしはその手を取らない。

「どうした？」

「お前誰だ」

荷物をベンチに置く。その代わりにあたしは姫の手を取った。そのまま姫は手袋に変身する。

「……まあバレるか。服が違うからなあ」

「そんなんじゃない。あたしはずっと七緒の事を見てたんだ。七緒はそんな風に笑ったりしない」

手に水の剣を作って握る。あたしは直接見た事はないけど守風の話では白沢のシャドウは女だと言う事だ。なら目の前に居る七緒のような姿をするこいつはもう一人の、黒い風と称される正体も分かなかった最後のシャドウだ。そしてそのシャドウのペルソナを、あたしは遂に確信した。

「お前のペルソナは鞍馬先輩か？」

七緒の姿をした、しかし七緒に似ても似つかない雰囲気を纏わせるその姿は、きっと七緒の事が好きだと言う鞍馬先輩の心が生み出した姿なのだろう。自分のシャドウに初恋の人の名前を付けた北夕子の事を思えば、あたしの心の中そのものと言っても良い姫の姿の事を思えば、目の前の七緒の姿をしている人物のペルソナが先輩だと言うのは容易に想像が付いた。

そう言えば片山さんと初めて会った夜、守風はあたし達を見て酷く機嫌が悪そうにしていた。けどあれはあたし達を――七緒の事を警戒していたんだろう。守風は目の前の七緒の姿をしたシャドウとどこかで出会っていたんだ。と言う事はファミレスを出た後に色々と言われたのは、守風がこいつと会った時間に七緒はどうしていたかを知るためか。その話が終わってから機嫌が直ったから、ずっとあたしと一緒に居たのを知って警戒が解けたのだろう。

「……ご名答、よく分かったな。智子に初めは七緒君、なんて呼ばれてたけど、まあ今はセブンなんて呼ばれてるよ。七繋がりだね。まあ、僕の見た目はともかく中身が七緒と似ても似つかなかったからだろうな。しかし智子がペルソナだって分かってたような言い方だな」

「黒い風の噂が出始めたのが七緒が鞍馬先輩の事を探るのを止めた後で、あたしと七緒が付き合い始めてからだからな。どうせ先輩はもう一度自分の事を見て欲しいからお前を使って派手に動き始めたんだろ？」

「まあな。七緒は智子の事を完全に白だっと思って思い込んでたからあれ以来疑ってる素振りも見せなかったけど。頭が良いってのも考え物だよな、一度こうと決めたら自分で訂正しようとしない」

鞍馬先輩の話を七緒とイチから聞いてから考え付いた推測を、目の前の男は何にも悪びれずに肯定した。

「やりすぎだよお前は……！」

「初めは自分の力の使い方を見る程度だったけどさ、好きな相手が

他の女と一緒に居るのなんて見せ付けられたら誰だって嫉妬するだろう？ 仕方ない事だよ」

「仕方ないだど！？ そんなくだらない理由で何人殺したと思ってるんだよ！」

「お前もくだらない理由で七緒を苦しめたんだろ？ お互い様だよ」

「何が――！」

ぎり、と剣を握り締める。剣を上段に構え敵対の意思を見せた。が、

「待て待て、別に僕は君と戦うつもりはないよ」

「じゃあ何しに来たんだよ」

「いや、智子に言われて二人の事探してたんだけどさ、まあ見つけて後をつけてたら修羅場に発展した上でキミが振られたってなったから、まあ慰めに」

「余計なお世話だ！」

「だろうな。ま、魔術師でもないような奴はさっさと手を引きなよ。お前じゃ役不足だ」

「……役不足ってのは褒め言葉だぜ？」

「そういう意味で言ったんだよ。僕――智子も七緒も魔術師、人の道を外れた存在だ。人として最底辺の存在だよ。そんなのと付き合うよりももっと相応しい相手が居るだろうって事だよ」

セブンと言う名のシャドウがゆっくりと近付いてくる。その間もあたしは構えを解く事はしなかった。それでも近付いてくるセブンから少しずつ離れるようにしながらも警戒し続けると、セブンはあたしの横を通り過ぎてさっきまであたしが座っていたベンチに座る。

「……先輩も傍にいいのか？」

「いや、二人で手分けして探してたから。まだどこかで探してるんじゃないか？」

「なんで連絡を取り合わないんだよ」

「伝える必要もないからな。なんと言うか、今日の事はお前達がデパートに行くって聞いた所為でやってる突発的な事だし、あいつが来

ると面倒な事になりかねないだろ」

そんな事をベンチに座ったまま呟くように言うセブン。その様を見ると七緒がイチを嫌っているように、セブンと鞍馬先輩はお互いの事をあまり良く思っていないような感じに見える。

襲ってくる気配を見せないセブン。上段に上げた手が段々とだるくなってきたのを感じ、牽制する意味を込めてセブンに剣先を突きつけるように中段の構えに切り替えた。

「ひょっとしてお前がやってる事に先輩は絡んでないのか？」

「そんな訳ないだろ、全部あいつがやらせてるんだよ。死んだ奴は殆どが智子に声を掛けてきたりした奴だよ。自分が嫉妬に苦しんでるのにこいつ等は、ってな感じでな。もうあいつは正気じゃないんだ。母親も殺したしな」

「……は？」

「そりゃそうだろ。僕みたいな力を手に入れたんだ、今までの母親に抑圧されてた生活を壊せる力を手に入れたんだよ。だから全部ぶっ壊したんだ。それでも――」

セブンが立ち上がる。それだけの行動にあたしの背筋に冷たいものが流れた。殺意、害意、悪意。その全てがあたしに向けられている。七緒と同じ小さな体格なのにも関わらず、今あたしに向けられているその気迫の所為でセブンの体は何倍にも大きく感じた。

「智子は七緒に嫌われたくないからお前を殺そうとはしなかった。殺したくて殺したくてしかたないのにな。でももうそろそろ限界だよ、お前は挑発しすぎた。まだ七緒に付きまとうようなら、次は殺しに来るからな」

言って、セブンは歩き出す。

「……ひょっとしてお前も七緒の事……」

「当たり前だろ、僕は智子の中から出てきたんだ。七緒の事が好きじゃない筈がない」

振り向かず、足も止めずに言い放つ。そのままただの一度も歩みを止めずにセブンは歩き去っていった。

役不足——セブンの言った言葉が頭を過ぎる。七緒もセブンと同じような事を言っていた。魔術師は人の道を踏み外した存在、だからあたしは七緒と一緒に居ない方が良いと言うセブン。……七緒も同じ事を考えているのだろうか。だから、あんな事を言ったのだろうか——

項垂れるあたしの服の裾を変身を解いた姫が引っ張る。心配そうな表情をして、帰ろう、と声を出せない口を動かしてあたしに伝えてきた。



公園から出たセブンは街灯の光を避けるように暗がりを選んで歩き、来た道に戻っていく。その思考を窺い知れない無表情で歩きながら——その目には暗く燃える炎が灯っていた。セブンの顔が下を向く。補整されたコンクリートの歩道だけが延々と続くその道に、ふとセブンの怒りが込み上げた。

「ツアア!!」

セブンが左の手の平を広げて勢いよく振り上げた。水を掻き分けるような重い感覚と共に振り上げた手からは黒く圧縮された大気が放たれ、コンクリートを大きく抉った。粉碎する破片が舞い上がる中をセブンは進む。手を振り上げた際に捲れ上がった黒いマントの中の服も黒一色に染め上げられていた。頭の前から足の先まで全てが黒く染まっている。暗闇に浮かぶのは肌を晒している顔だけ。まるで幽霊のようだった。

ぎり、と歯を食い縛りながら立ち止まり、傍に立っていた木に手を当てる。怒りに満ちた表情は更なる憎悪に歪み、木を握り潰さんばかりに手に力を込め、力を——黒い風を放つ。一瞬の内にセブンが当たっていた手の周辺からサッカーボール大程に木が抉り、その木片が周囲に飛び散る。殆ど皮一枚で繋がっていた木は傾ぎ、地面に大きな音を立てて倒れた。



セブンが歩みを再開する。人の能力を超えた力で破壊をしてもその怒りが発散する事は無い。その身の内に激しい劣情を抱えながら、セブンは歩き続けた。

# ◇Side 桐式紅葉

「ただいま」

自分の口から出た言葉がまるで自分の言葉じゃないような感覚を覚えつつあたしは自分の家に戻った。リビングに居ればおかえり、と言い返してくれるお母さんとお父さんが何も言わずに二階へ上がろうとするあたしにひょっこりと顔を見せてきたのは、しょんぼりとしたあたしの声が聞こえなかったからだろう。

「どうしたの？ 七緒君とデートじゃなかったの？」

「うん。……もう寝るね、おやすみ」

まるで丸一日みっちり部活で練習をした日のように重い体を引き摺って二階に上がる。体を霧に変えながらあたしを見守ってくれている姫には悪いけれど、もう今日は何もする気が起きない。部屋に入るなり電気も付けずにベッドに倒れこんでしまった。このまま眠ろう、そう思っていると、静かな部屋の外から足音が聞こえてくる。二回ノックされた後に開かれる部屋の扉を開いてお母さんが入ってきた。小さく聞こえてきた溜息の後に部屋の電気が付けられ、ベッドにお母さんが腰掛ける。うつ伏せに眠るあたしの体が少し揺れた。

「どうしたの？ 喧嘩でもしちゃった？」

お母さんが優しく聞いてくる。あまりにも優しい声で、なんだか涙が出そうになってきた。

「うん」

素直に応える。すると、もう一度お母さんが溜息を吐いた。

「どっちが悪いの？」

「あっちが悪い！ ……けどあたしも悪い」

思わず七緒を非難する言葉を吐いてしまい、その瞬間に大きな後

悔が生まれる。結局は悩んでる七緒の気持ちを分かってあげられなかったあたしが悪い。

「そう……あんまり自分を責めないほうがいいわよ？」

「え……でも……」

「あの子、お父さんにそっくり。あ、顔とかじゃないよ？ 若い頃の……って言ってもお母さんがお父さんと出合ったのは高校を出た後だったけど、その頃のお父さんも不器用でねえ」

「七緒は不器用じゃないよ」

「そう？ お母さんにはそう見えただけだねえ」

お母さんの言葉を聞いて口を尖らせながら体を起して顔を見る。

お母さんはにっこりと、優しく笑い掛けていた。

「前にテレビで見たけどね、娘って自分の父親にそっくりな人を好きになるんだって。あの子お父さんにそっくりよ」

ふふ、と昔を思い出しながらお母さんは微笑む。お父さんにそっくり、なんて言われて二人の事を思い出して比べてみるけれど――似てるところなんてあるだろうか。分からなかった。

「お母さんとお父さんってどうやって付き合いましたの？」

「あら、聞きたい？」

こくと頷く。するとお母さんは恥ずかしそうにしながらも話してくれた。

「ほら、お母さんの実家って神社でしょ？ だから高校を出た後家の手伝いで巫女さんやってたのよ。あの時は良く晴れた秋の事だったわねえ、境内の掃除をして集めた枯葉で焚き火してたのよ。そこにね、新米刑事だったお父さんが事件解決の願掛けをしにきたのよ。神社って言えば八百万の神様を祀ってるとは言っても、うちはほら、学力向上が売りだったから初めは大学浪人の人かなって思ったんだけど、後でお父さんが刑事だって知っておかしくてお腹抱えて笑ったものよ」

口を押さえながら笑うお母さん。お父さんは少し抜けてるところがあるからその時の光景が目には浮かぶようだった。

「ふう……でね、お守りを買って帰ろうとしたお父さんにお母さんが一目ぼれしちゃったのよねえ。あんまり必死になってお参りしてるお父さんの姿がなんだか目に焼きついちゃって。お父さんもお母さんの美貌に見惚れてそれから何度も来るようになってね」

突っ込みたい所はあったけどそれは放っておく事にし、ベッドの上に座りなおして話の続きを聞いた。

「そのまま一ヶ月くらいかなあ、告白する事もなくお父さんが何日かに一回お参りに来てその度にちよつとだけお話して。ふふ、お父さんったらしどろもどろでねえ、自惚れてた訳じゃないけど、この人私の事好きなんだなあってすぐに分かったわ。でも自分の気持ちが気付かれてるって事を知らないお父さんがね、ただの願掛けの為に何回も来辛くなってね、その時追ってた事件も解決しちゃったし。だから段々お父さんが来る頻度が減っちゃったから、お母さん何とかしてお父さんに来てもらえるようにって工夫したのよ」

「工夫？」

「そう。ほら、刑事って言ったら張り込みの時の牛乳とあんぱんでしょ？ だから境内で売るようにしたのよ。子供にも来てもらえるように駄菓子とかと一緒にね」

牛乳とあんぱんを持って張り込み、なんて刑事ドラマでしか見た事のない光景だけどお母さん達が若い頃はそれが普通だったんだろうか。でもまあ、好きな人の居る場所でそんな物売り出したら鴨がねぎを背負って来るのは当たり前だろう。そんな予想は大当たりし、

「そしてらお父さん、殆ど毎日来るようになってね。そこら辺で売ってるようなものだったんだけど、ここのあんぱんは天下一品だ！ とか、この牛乳は新鮮で美味しい！ だなんて言ってる。もうおかしくておかしくて」

お母さんは嬉しそうにその時の事を思い出して笑った。

「——でもお父さん奥手だから、結局お母さんから告白したのよ。好きです、付き合ってくださいって。……ねえ紅葉？ 男の人から

……好きな人から求められるのは凄く嬉しい事よ？ でもほら、七緒君って積極的にそう言う風にしてくるタイプじゃ無さそうだし……本当に好きなら自分から行くのも一つの手よ？ きっと、七緒君も紅葉の事を好きなんだから。ね？」

お母さんの言葉に目が丸くなる。何も話していないのにお母さんはあたしと七緒がどう言う風に喧嘩したのかお見通しなようだった。お母さんの手が伸び、あたしの頭を撫でる。

「で、紅葉はどうするの？」

お母さんはそれだけ言うと、何も言えなかったあたしの体をぎゅっと抱き締めてから部屋を出て行った。それから暫くしてベッドの上にあぐらを組んで座り直し、ぽかんと窓の外を見る。三日月が浮かぶ空は雲ひとつなく、実に綺麗だった。

「どうしよつか、姫」

問い掛ける。すると姫があたしの隣に現れて座り、微笑みながら見上げてきた。

「……また会いに行ったら七緒怒るかな」

姫が首を横に振る。

「セブンの奴と七緒会わせたら危ないよな。尻とか」

姫が顔を覆う。声が出せたらキャ、と言う黄色い悲鳴を出していただろう。そんなあたしもベッドの上で格闘する二人の七緒の姿を思い浮かべてしまい――

「もといもとい。尻じゃなくて命が危ないっての。……あたしが守らなきゃな」

ふう、と溜息を吐く。視線を窓の外に戻した。

「んでさ、あたしも七緒に守ってもらうんだ。お姫様抱っことかしてもらったり」

にへへ、と笑う。姫も笑っていた。

よ、っと掛け声を言いながらベッドから飛び降りると、その足で部屋を出る。

「おかーさーーん！ お正月に着てくから着物出してー！」

そう叫びながら一階へ降りると、笑顔でお母さんとお父さんが出迎えてくれたのだった。

# ◇Side 無口七緒

魔術師とは孤立し、孤独であり、孤高な存在である。そんな事を僕は父さんが集めていた魔術師の書物から読み取った。それは古くにあった魔女狩り、異教弾圧から逃れる為に、そして自身の秘術、奥義を他へ漏らさない為に必要な事であると僕は確信し、実行したのだ。事実それは間違っていないだろう、と言う言葉は――僕に他へ漏らす為の秘術や奥義があれば自信を持って言えたのだが。

魔術師としての才能が無い事を自覚してからは魔術の修行と平行して勉強や武道に注力する事になる。そちらならば幾らでも、スポンジが水を吸収するように体得する事ができたからだ。その点に関しては自信が持てた。いや、そうするしか自分と言う存在を保てなかったとも言えた。そしてさらに孤独を深める。孤立すれば魔術師として大成する――焦っていた僕はそう妄信し、藁にも縋る思いで死に物狂いで、自分に出来る事は全てやるつもりで魔術の修行をしてきた。しかしそれも一年前の事――僕は、自分の存在を維持してられる程の、自分の意思を保ってられる程の力はもう無くなってしまったのだった。そんな僕の事を父さんも容認するように、魔術に関する事はあまり言わなくなっていた。その方が、楽だった。

だから――このペルソナとして選ばれ、シャドウと言う名の使い魔を使役する事の出来る一件は僕にとっての最後の機会だった。回り巡ってきた最初で最後の機会だった。これで駄目ならもう魔術師としての道を諦めるしかないと思っていたのだった。だから僕は僕の言う事を聞かないイチが嫌いだった。努力をして得た訳でもない超能力を持っているから、と言う理由もある。しかし、イチが僕のことをどう思っているかなんて分からないけれど僕にとってイチは最後の望みだったのだ。そして孤立を、孤独を、孤高を望んだ僕が最

後の最後で他人を頼らなければならぬその事実が何よりも嫌だった。

”落ちこぼれた平凡だって言うんならそいつの人生を全部見届けて、本当に何もせず何もやらなかった時に言いやがれ!”

いつの日だったか、僕を扱き下ろすオズワルドの言葉に対して桐式はこんな事を言ってくれた。しかし――ハ、笑えて来る。僕はもう魔術師として過ごしてきた七年と言う歳月を、魔術師として生きた人生を――他人に委ねて終わらせようとしている僕はオズワルドの言う通りどうしようもない落ちこぼれなんだ。

桐式と喧嘩別れをしてから五日が経った二十九日。そろそろ仕事納めを迎えて兄さん達が帰ってくる頃だろう。

クリスマスの日以来桐式とは会っていないし、話もしていない。まああんな事を言ってしまったのだから嫌われて当然だろう。イチともまともに話をしていなかったけれどそれはいつもの事だ。桐式が来ない日々が続くと言うのは暇な日が続くと言うのと同じだった。特にやる事もなく、冬休みの宿題を終わらせ、時々守風さんが来る事もあったけど少しだけ話をするだけで帰ってしまった。僕を心配するような表情を見せていた辺り、イチから事情を聞いていたのかも知れない。いや、あの二人は仲が悪いからイチから話を聞いた父さんか秋子さんか元ながから聞いたんだろうか。別にその辺りはどうでもいい。

最近は見回りにも出ていない。完全に守風さんに任せきりだった。しかし不思議な事に黒い風の強行はこの五日間まったく聞こえてこなかった。桐式が言っていた通りに実家にでも帰ってお年玉を貰いに行っているんだろうか。――となれば黒い風は学生なのか。いや、学生じゃなくても実家に帰るだろうし、年末年始は特に警察の警戒が強いから身動きが取りにくいのかかもしれない。でもまあ犯行が止まるのに越した事はないだろう。

そうやって過ごす冬休み六日目の朝、元永による水害テロの修繕

が終わった僕の部屋で寝ていると、

「起きろなっなおー！」

「うぐっ……！」

ベッドで眠っていた僕の体に飛び掛かってくる衝撃と苦痛に目が覚める。そこには双子で同じ大学に二人で行っている兄姉である新五兄と僕の上に跨って乗っかっていた六花姉の姿があった。

「おー、起きたか」

「……これで起きない奴がいるなら見てみたいよ……」

背骨が折れたらどうする、と言う苦情もこの能天気双子には聞かえない。まあ僕と同じように母親譲りの小さな体格なのが幸いして怪我は無かったから良かった。中々僕の上から下りない六花姉を引き摺り落としてベッドから起き上がると、今度は新五兄が僕の頭をアームロックするようにして抱え込んだ。

「こいつこいつう、久しぶりに会ったのにテンション低いなあ」

抱え込んだ頭に開いた手で握りこぶしを作ってぐりぐりと押し付けてきた。朝っぱらからこの二人のテンションに付き合える人もそうは居ないだろうと思う。

「しかもいつちゃんと桜ちゃんみたいな可愛い子と一緒にとか、羨ましいなあ六花？」

「んだね、しんちゃん。羨ましいからこうしてやろう」

六花姉が僕の頭を太鼓を叩くかのようにべしべしと叩いてきていた。いい加減むかついたから新五兄の腹にパンチを食らわしてロックスを解いた。時計を見てみると十時を回っていたから、僕のところに来る前にイチ達と会って話をしていたんだろう。

「ほらほら、俺らの為にみんな朝ごはん待ってくれてるから早く食べに行こうぜ。さっきつまみ食いしてきたけど秋子さんの料理すげー美味しいな！」

「知ってるよ……」

「可愛い女の子と同棲ってだけで羨ましいのにあんなに美味しいご飯を毎日食べられるなんて……これはもう謝罪会見ものだよ」

「いい加減その親父趣味やめろよ六花姉……」

この双子の兄妹は二人揃って女好きだった。新五兄はともかく六花姉が女好きなのはどうかと思うけどまあ彼氏を作った事もあるからただの趣味なんだろう、と心の奥底で不安を残しながらも放っているのだった。

三人で部屋を出ると、味噌汁の香りが鼻を突いてきて腹の虫が鳴った。普段食事はコンビ二弁当で済まして居ると言う双子にとっては久しぶりになる家庭的な朝ごはんに心を躍らせているようだった。二人から今日から他の兄妹達も帰ってくると聞くと、暫くは嫌な事 aussi 思い出さずに過ごせるだろう、と少しだけ胸を撫で下ろすのだった。



「やっと仕事納めか。……もう九時か。最後の最後だからって残業すんじゃないかったなあ。まあ最近是人死に騒動も無いし、休み中は少しくらいはゆっくり過ごせるかな？」

と、秋人が傍らを歩く守風に問う。

「ゆっくり過ごすかどうかはお前の行動次第だろ」

しかし守風は無表情だが突き放すような口調で答えた。クリスマス以来、いや、それ以前から黒い風の凶行はニュース等では報道されていなかったが、しかし守風の機嫌はその日から悪くなる一方だった。仕事の都合で七緒達と会えない秋人は守風から七緒達の動向を聞こうとするもはぐらかすようにしてまともな話を聞けない事から、クリスマスの日に二人に何かあったと秋人は察する。が、二人の事——それも色恋沙汰となれば部外者の自分がどうこうする事は出来ないと半ば放置する事になっていた。だが、同じ立場であろう守風が二人の事で機嫌を悪くしている姿を見ると相当捻れた事情になっているのかと心配にもなっていたのだった。

だがその問題は時間が解決してくれる。そう考えた秋人は守風と



共に見回りを続けていたが、如何せん同居人がいつまでも不機嫌なのはなんとも居心地が悪いのだった。そう言う訳で秋人は仕事納めの今日、守風と共ににか美味しい物を食べようと見回りを取りやめて石間駅へと繰り出してきたのだった。

「イタリア料理なんて初めて食うだろ、お前」

「食った記憶ならある」

「あ、そうか。まあどっちにしても初めてだ、味わって食えよ？」

ふむ、と小さく声を漏らして記憶の中でしか味わっていない料理に期待を膨らませる守風。その表情は若干和らいだように見え、秋人も少しだけ安心する。しかし――

「おうい、片山あ！」

細い路地から車通りの多い大通りへと出てきた秋人達の耳に聞き慣れた声が飛び込んできた。

「よう只野。部長と飲みに行くんじゃないのか？」

「おう！ 今店変えようって出てきたんだよ！」

上機嫌に言う同僚の只野は酒で顔を真っ赤にしている。秋人が視線を動かすとそこには居酒屋があり、そこから出てくる上司の牧野の姿が見える。

「お疲れ様です部長」

「あ？ ああ、片山か。俺の誘いを断って仕事してると思ったら、また女連れか。良い身分だな？」

軽く頭を下げて挨拶をする秋人に牧野は口の端を吊り上げながら言った。その言葉に守風の機嫌はさらに悪くなる。

「片山、仕事終わったんならこれから来い」

続けて牧野は命令口調で言うが、

「すみません、こいつに美味しいメシを食わせてやる約束があるもんで……」

と、秋人は断った。別段秋人は牧野の事を嫌っている訳では無いが先約を優先する秋人の、自分を下に見るようなその姿勢を牧野は嫌っていた。その事を秋人は薄々感付いてはいたが、秋人の生来の

性格はそう簡単に直せるものではなく、言った後でもう少しマシな断り方をすべきだったと反省する。しかし言ってしまったものは仕方ないと少しだけ苦笑を漏らした。

「まあまあ。そっちの子も一緒に連れてくればいいじゃんか、な？  
な？」

そんな二人の仲を取り持とうとするのは只野だった。長い物に巻かれる性質の只野はこうして上司に取り入るのが上手く、秋人はそんな只野を羨ましくも思っていた。

「ふん、俺達と一緒に嫌なんだろう？ 放っておけよ。行くぞ只野」

「ま、まあ部長……ほらあの子美人ですよ？ お酌してもらえばいいじゃないっすか」

「ん？」

只野の言葉に牧野が品定めするように守風を見る。舐めるようなその視線に守風が表情を顰めた。

「まあそうだな。行くぞ、片山」

「いや、その……自分達は……」

牧野の言葉に否定のニュアンスを持たせつつ秋人が呟く。秋人自身は行っても良かったのだが、明らかに機嫌を悪くしている守風の様子にこのまま連れて行けば必ず何かが起こると確信したが故に行きたくなかったのだった。

だがやはり秋人のその反応が牧野は気に入らず、

「は、自分の女が他人に酌をするのが見たくないってか。良い身分だな。お前最近評価低いぞ？」

と、まるで秋人が一方的に悪いかのような言い分で毒付いた。それを黙って聞いていられるほど守風の堪忍袋の緒は頑丈ではなく――

「お前――」

「おいよせ！」

食って掛かろうとする守風を秋人は止めた。だが、  
「何か言いたい事があるのか？ 言っても良いぞ、どうせ迷惑が掛

かるのは片山だ」

と、牧野は挑発した。ただならぬ空気を察した只野は牧野に歩み寄り、次の店に行く事を促す。それに合わせて牧野は歩き出した。

「……守風、機嫌悪いのは分かるけど――」

歩き去ろうとする二人の背中を見てから守風を宥めようとして秋人は振り返る。そこに見えたのは、いつぞやの夜にイチを大きく吹き飛ばしたように足を振り上げた守風の姿だった。

射線上にいない秋人ですら自分の体が大きく傾いってしまう程の突風が何も知らぬ只野と牧野の背中に向けて放たれる。周りを歩く通行人が顔や荷物、衣服を庇いながら小さく悲鳴を上げる。だがその悲鳴は数秒の後――

「き、きゃああああ!!?」

と言う絹を裂くような声へと変わる。

秋人自身顔を庇っていたせいでその瞬間を見る事は出来なかった。だがその耳は捉えていた。急ブレーキを掛ける音と、二人分の、男の断末魔を。

### 第三章 無口七緒 その九

◇Side 桐式紅葉

十二月三十一日大晦日の朝、あたしは家に居た。テレビではおめでたい話の他にも餅を喉に詰まらせて、酒に酔って転んで、と不幸な事件もあった。その内の一つがこの石間町で起きていたと言う事で、一瞬シャドウやペルソナの仕業かと思ったが、ただ酒に酔った二人組みが風に煽られて道路に倒れこんだ、と言う内容だったからただの事故だろうとあたしは密かに連絡を取っていたイチと結論付けてた。やはりと言うのかなんと言うのか――凶行に走っている鞍馬先輩はここ最近まったく動きを見せていない。あたしに正体を知られた事で雲隠れでもしたのだろうか。まあ、事件が起きていない以上そんな事を気にしている余裕はあたしには無い。

「何時頃に着く？」

と、携帯の電話口でイチが聞いてくる。

「もう少しで準備が終わるから……三十分後くらいか、なゝ!？」

着物の気付けをしてきているお母さんがぎゅ、と帯を締め、その所為で変な声が出てしまった。

「お、お母さんきつい……」

「このくらいで良いの。後で解けたらやでしょ？」

「それはそうだけどさ……」

着慣れない着物に抵抗はあったけど、着物で来ればきつと七緒が喜ぶと言うイチの言葉のままに着物で行く事にした。

「でも追い返されたりしないかな」

細かい直しをしているお母さんを尻目に自分でも分かる位に不安の籠った声で聞いてみる。今日七緒の家に行く事も、こうしてイチと連絡を取り合っている事も七緒は知らないのだ。そんな状況であたしが行ったら起こって追い返されても仕方ない。

「大丈夫だって。七緒がなんて言っても今日は俺の友達として家に来るんだしさ。ま、紅葉は心配しなくてもいいって」

「ん……そっか」

ただそれでも七緒に秘密で事を進めていると言うのは気が引けた。「これくらい強引に行かなきゃあいつ動かないしさ、紅葉は気にしなくて大丈夫だよ」

「後で怒られるのはイチだぜ？」

「ふふ、俺は怒られて喜ぶ体質なのだ」

「マゾいなあ」

「ただし気質は普通どころかサドいので怒られたら怒り返すと言う」  
「なるほど」

でもイチが怒り返してるところをあんまり見ないと言う。

「はい、終わり」

ぽん、とお母さんがお尻を叩いてきた。姿見の前でくると回って自分で確認する。うむ、完璧だ。なにを持ってして完璧なのかは着物初心者あたしには分からないけど完璧だ。

「うん、綺麗綺麗。さっすが私の娘ね」

「それを自分で言うかなー」

「ふふーふ。言うはタダよ」

「俺も早く見たいぜ。あ、迎えに行こうか？」

「ん、大丈夫大丈夫。そういや今日はそっちの家族勢ぞろいなんだろう？ もっとおめかしした方がいいかな」

言って姿見に顔を近づけてみた。普段からそんなに濃い化粧をする事は無く、今日も薄化粧だ。

「あんまり化粧しすぎるとけばけばして折角の美人が台無しよ。これでいいのこれで。ね、イチちゃん」

と、携帯の向こうのイチに聞こえるように言ったお母さん。そうそう、と答えるイチの言葉をそのまま伝えると、満足したようにお母さんは片づけを始めた。あたしもハンドバックを手に取り、もう一度姿見を見る。

「じゃあ今から家出るから」

「ん、待ってる」

そう言ってイチが携帯を切るとあたしも携帯を切ってハンドバックにしまった。

「気をつけてね」

「うん。お母さん達もデート、楽しんでね」

「あはは、そうね、楽しんでくる。紅葉もきちんと仲直りしてくるのよ」

にへへ、と苦笑を返し、リビングへ向かう。眠そうな表情をしているお父さんをリビングで見つけ、

「おとーさん」

「ん？」

煙草を口に銜えながらあたしを見上げるお父さんに、あたしは着物姿を見せた。

「おおー」

「どう？」

「若い頃の母さんを見ているようだ」

「あら、じゃあ今の私にはこの着物は似合わないって？」

と、あたしの後ろからじと目でお父さんを睨むお母さんが現れる。いやいや、と苦笑を浮かべるお父さんに、お母さんも意地悪を止めて笑い掛けた。

「じゃ、行ってくる」

「はいはい。気をつけてね」

二人に片手を振りながら玄関に行き、靴を履き替えて外に出た。外に出てから姫に呼びかけ、一緒に行こうと言った物のおねむらしく出てくる気配が無かった。自転車に乗りたいたいのはやまやまだけど着物に自転車なんて合わないにも程がある。お父さんに車で送ってもらおうと言う手もあったけれど今日は歩いて行く事にした。そう言う気分だったのだ。

と、言った物の――

「歩きにくい……」

普段履いてるスニーカーと違い、着物用の履物で歩いている所為でどうにも歩きにくかった。まあその内慣れるだろう。てな訳でぽくてくと歩き続ける。人の気配のしない学校の前を通り、散歩をする人と擦れ違う公園を通り、閑静な住宅街に辿り着く。時折あたしに振り返る人達の視線を背中に浴びてむず痒い気恥ずかしさを感じるもののそれを無視して歩き続けていると、道の先に見慣れた緑色のジャージ姿の人物――守風の姿があった。しかしいつものように軽快なジョギングをしている訳でもなく、どこか疲れたような足取りであたしにも気付かずにこちらへ向かって歩いてきた。

「……守風？」

「え？ あ、ああ……紅葉さん、こんにちは」

微笑む守風。しかしその笑顔にも翳りがあった。明らかに疲れている様子だった。

「どうした？ ひょっとして敵と戦いでもしたのか？」

「いや、違うんだ。まあ、お正月だからね。……あれ、紅葉さん着物……」

と、今更になってあたしの着物姿に気付いて驚くような様子にやはり心配を覚えた。

「よく似合ってるよ。うん、凄く綺麗だ。今から七緒君の所に行くのかな？」

「あ、うん。……守風も行く？」

「いやあ、遠慮しておくよ。帰って秋人の面倒を見なきゃ」

そう言って挨拶もおさなりに守風は歩いて行ってしまった。この道の先には七緒の家がある。あの様子からだとか家に寄る事もせず歩いてきたのだろう。歩き去る守風の背中では、誰かに助けを求めるような、そんな寂しさを漂わせていた。

大丈夫だろうか、と守風の背中を見詰めているとハンドバックの中で携帯が鳴る。何かと思って携帯を見ると、相手はイチだった。時間を見てみればなるほど、家を出てからたっぷり一時間経っ

ている。着慣れない着物に履きなれない履物の所為で予想以上に時間が掛かってたようだ。

「もしもし、ごめん、もう着くよ。今家のすぐ近くだから」

「そっか。……あんまり気負わなくても大丈夫だぜ？ こないだ電話で話した通りあいつは——」

「ん、分かってる。イチの事は信じてるし、七緒の事も信じてる。だからあたしは大丈夫」

「そっか。じゃあ、待ってるから」

ぷつ、と電話が切られる。それを確認してからもう一度守風の歩いていった方を見ると、もうそこに守風の姿は無かった。小さく溜息を吐き、

「そう言えば、いつもの風が吹いていなかったな」

と、守風が起す優しく暖かい風が吹いていなかった事に気付く。そんな事を考えて立ち尽くしていると、あたしの隣に姫が現れた。んん、と両手を上に挙げて背中を伸ばしてからあたしを見上げ、服の裾を引っ張って七緒の家に行こうとせがむ。どうやら今起きた様子で守風の事を見ていなかったようだ。

守風の事は気になるけれど——

「……よし、行こう」

守風が大丈夫だと言うのなら今はそれを信じるしかない。……いや、違うか。守風の大丈夫だと言う言葉を信じて、あたしは自分の事をなんとかしようとしているだけだ。恋は盲目と言う奴だろうか。今まで友達の為なら、と色々な事に首を突っ込んでいたのに、今は友達の事なんて考えている余裕も無い。今朝友達から遊びの誘いを断る事にも何にも罪悪感が沸かない程に、あたしは七緒に嫌われる事を恐れていたのだ。

「我ながらよくもまあこれだけ好きになれたもんだ」

苦笑を浮かべる。目の前には七緒の家の立派な門があった。高鳴る心臓を意識し、門をくぐる。そのまま玄関へ向けて歩き——

「お、来た来た。うわー、着物姿ちようかわいいんですけど。その



柄って寒椿？」

と、玄関の前で話をしていたらしいイチと桜に会った。多分あたしが来るって聞いて出てきたんだろう。

「こんちゃ。元気してるう？　しっかしまだ元旦でもないのに晴れ着で気合入れちゃって」

「せ、せやな」

桜の挨拶に自分でも分かるくらいに引き攣った笑顔を返した。イチは駆け寄ってきた姫を抱き上げてくるくる回っていた。

「緊張しすぎ。ほら、そんなんじゃ七緒君と会ったら話も出来なくなっちゃうよ！」

ぱつーんとあたしの尻を叩いてくる桜。イチと桜が協力してあたしと七緒の仲を取り持ってくれようとしてくれている。そんな二人の想いを受け、

「ようし！」

と掛け声と共にほったたけを叩いて気合を入れた。ひりひりと痛むほっぺとイチ達に後押しされて玄関を抜けて家の中に入る。一家勢揃いしていると言う事で宴会をしているらしく、楽しそうな笑い声が響いてきている。そんな中、

「おおー！　新たな美人発見！」

「着物美人発見！」

と、通路を歩く二人の男女に見つかる。

よく似た顔をしている二人の顔立ちはゲンさんや七緒の面影も見取れる。歳も同じように見えるし、前に七緒が言っていた双子の兄と姉だろうか。

「どちらさま？　七緒の友達？」

「あ、はい。桐式紅葉って言います」

頭を下げながら答えると、ほほう、と二人が顎に手を当てて品定めをするようにあたしの事を見てきた。なんだか目つきがいやらしい。

「この二人はね、七緒君のお兄さんとお姉さんで新五さんと六花さ

ん。二卵性の双子なんだって」

あたしの後に入ってきた桜が目の中の二人の代わりに紹介をしてきた。

「二卵性……」

たしか一卵性と違って顔や性格がそっくりだったりする事は無いと言うけれど……なんだか似たもの同士な気がするのはいのちのせいだろうか。

「まあ、入って入って。美味しい料理と美味しいお酒があるから！  
って言うか紅葉ちゃん綺麗だねー！ お姉さんの彼女にならない？」

六花さんからのいきなりの告白に心臓が高鳴る。七緒もこんな風に積極的だったらなあ。なんて言う事を心の中で思ってみる。

宴会場となっている居間へ全員で向かう。どんちゃん騒ぎが近付くにつれ、そこに七緒が居るんだと考えて緊張が込み上げてきた。今になって服の乱れが無いかが気になりつつも先導する双子は足を止める事も無く、宴会場へと辿り着いてしまったのだった。

「えっと——太一兄さんとお嫁さんの春香さんに二人の子供の祐一さん。こっちが双海姉さんと旦那さんの瞬大さんと楓さんと真治さん。で、こちらは三汐姉さんと四郎兄さんにお嫁さんの紀子さん。こっちは新五兄と六花姉。覚えた？」

「えっと……ま、まあ大体は」

長いテーブルを三つ並べて座る無口家の面々。それを順に紹介してくれた七緒。子供が帰ってくる、とは聞いてたけど、そう言えばゲンさんの子供となればそれなりの歳になるわけで、そうなれば結婚して子供が居てもおかしくない訳で、そうなればこんな映画で見たような事になるのもおかしくない訳で。ってか自分がこんな大家族を紹介されるなんて事を体験するとは思ってもよらなかった。

「んじゃま、かんぱーい」

長男の……確か太一さんが音頭を取り、乾杯をする。が、隣に座

る七緒は紹介を終えたところからむっとりとして不機嫌だった。凄く空気が重いです。

「紅葉ちゃん、って言ったかしら。お酒はいける口？」

と、長女の双海さんがお酒を勧めてくる。流石にゲンさんの店が酒屋なだけに色んなお酒が用意されていた。

「あ、少しだけなら」

コップにビールを注がれる。お父さんとたまに少しだけ飲む位だからあんまり飲めないけどコップ一杯位なら余裕だ。勧められるままにぐい、とビールを飲み干した。

そして即座に注がれるビール。それを飲み干すと、

「おお、もみちゃん良い飲みっぷり！」

新五さんが日本酒の瓶を片手に近付いてくる。

「着物美人は飲みっぷりも違うねえ！ ほら、もう一杯もう一杯！」

コップに並々と注がれる日本酒。ビールならまだしも日本酒は———と思いつつも飲み始める。しかしやはり一気にはいけなかった。

「おかわり？」

「や、だいじょぶです」

瓶を向けてくる新五さんからさつとコップを引く。このままじゃいつまでも飲まされそうだ。

「いやあ、七緒もこんな美人な子達に囲まれて幸せよねえ？ 桜ちゃんにイチちゃんに紅葉ちゃんに姫ちゃん。さてさて、七緒はどの子は本命なのお？」

三汐さんが七緒の後ろまで歩くと、背中から抱き付いて囁くように言った。それに大して七緒は困った様子を見せ、

「みんなただの友達だよ……」

と呟いた。またまた、と言いながら鼻息を漏らして七緒の頬をぐりぐりと指で押す三汐さんを、二人の様子に気付いた娘の楓さんが引き剥がす。

「もうななちゃん困ってるでしょ。それにななちゃんはおたしのお婿さんなんだから変な事聞かないでよ！」

なんて言ってたけどこれは宣戦布告と見て良いのだろうか。まあ酒の席で酔った上での発言らしいから良しとしよう。

「よいしょ」

なんて言いながら割烹着姿の秋子さんが席に着く。テーブルの上の料理を秋子さんが一人で用意したと考えると重労働にも見えるけれど当の秋子さんは凄く充実したような表情を見せていた。いつも一人だったと言うし、いつも家事を楽しそうにしているのを見ると、家族に囲まれていると言う環境が好きなんだろう。

普段ならあたしも目の前のご馳走に箸を運びつつ、お酒を少し飲みながら皆と楽しく話をしているんだろうけれども今日はそれが目的じゃあない。さっきから一度として目を合わせようとしないう七緒と話をしたくとも七緒は歳の離れた兄弟相手に鬱陶しそうにしつとも楽しそうに話をしていた。

もう無理矢理にでも七緒を連れ出して話をしようか、なんて事を新五さんと六花さんに囲まれながら考えていると、

「七緒君、紅葉、人生ゲームやろっ」

宴会場の隣の部屋で人生ゲームのボードを広げ、手招きしてくる桜の助け舟が出されたのだった。

「あ、やるやる」

「俺も！」

「あたしも！」

見事な演技でごくごく自然に双子から抜け出——す事は出来なかったが、まあきっかけは出来た。と思ったのに。

「や、僕はいい」

七緒はなんて事を言っただけで混ざってくる事は無かった。

「なんだー付き合い悪いぞ七緒」

新五さんが文句を言うが、それでも七緒は混ざろうとしなかった。渋々あたし達はゲームを始める。折角助け舟を出してくれた桜も苦笑を浮かべていた。それでもゲームを言った建前、双子を交えてゲームを始めるのだけど身が入らない。ちよくちよくと七緒の

方を見ていると――

「ねえねえ、紅葉ちゃんって七緒と付き合ってるの？」

六花さんが盤上の駒を進めながら聞いてくると、目を見開いて驚いてしまう。

「なんか喧嘩したっぽい？」

今度は新五さんが聞いてきた。

「う……その、付き合ってる訳じゃないけど……喧嘩はしちゃいました」

「あらら。あいつもばかだねー、こんな美人と喧嘩しちゃって」

「いやいやお兄ちゃん、喧嘩するほど、って言うじゃん」

「なんだってー。いやあ、こんな彼女が居て七緒は幸せもんだなあ」

「あや、その、まだ付き合ってる訳じゃなくて」

「ああ、これからか」

「そこに行くまでにまず仲直りだよお兄ちゃん」

なるほど、と新五さんが腕を組みながら頷いた。それから七緒の方に向き、

「七緒！ こっちに来るんだ！ 急いで、しかし慌てず素早く！」

言われ、七緒が明らかに嫌そうな顔をしてこっちを見る。なんと言うかただ眉を顰めるとかじゃなくてあからさまな嫌悪の表情だった。多分、この呼びかけにあたしが関係してる事に気付いているんだろう。少し離れた場所で話をしていたイチと姫もこっちに気付いて静かに見守っている。

そうして動こうとしない七緒の様子を見て双子が立ち上がる。まるで捕まった宇宙人のように両腕を取られて連れて来られた七緒は、不機嫌そうに目を細めてあたし達を見てきた。

「オラァ！」

バシ、と七緒の尻を叩いた六花さん。

「なんだよ……」

「いや別に何でも無いよ」

「なんでもないなら叩くなよ。じゃあ戻るから」

バシ、と七緒の尻を蹴った六花さん。

「だから……」

「今のは何でもなく無いよ」

何時の間にかあたしの後ろに立っていた新五さんがあたしの手を取り立たせる。そのまま七緒と向き合うと、

「さ、行った行った！」

六花さんが七緒を、新五さんがあたしの背中を押して宴会場から押し出された。宴会場の皆がきよとした表情であたし達を見ている中、

「んじゃ」

と言って双子が宴会場の襖を閉じてしまうのだった。冬の寒さに包まれる廊下に立ち尽くすあたし達。七緒が肩を落としながら一つ大きな溜息を吐き、そのまま頭を掻きつつ上げ、

「取りあえず僕の部屋に行こう」

やっぱりあたしに目を合わせる事無くそう言って歩き始めた。ともに話を出来るんだろうか、と言う不安から助けを求めるように顔を動かすも、騒がしい声のする宴会場への道は閉ざされている。あたしは覚悟を決めて七緒の後を追うのだった。ただ唯一の救いは――七緒が、数歩歩いたところで動かないあたしの事を待っていてくれた事だった。



一年の最後の日。締めくくり。大晦日。一年間に起こった事を思い返し、清算し、翌年に想いを馳せる日。

師走と言う言葉に表されるような慌しさは一見すると感じられず、通り魔騒ぎも落ち着いた石間町は一時ののんびりとした時間が流れていた。だが――

「……ただいま」

日を背に受けながら守風が玄関の扉を開くと、暖房も電気も付け

ず肌寒い部屋の中で両手を枕にして仰向けに寝そべる秋人の姿があった。傍から見ればくつろいでいるようにも見えるだろう。しかし守風が部屋の電気を付けると、秋人は無気力に何かを思うような表情で虚空を眺めていた。その姿はくつろいでいるとはいいがたいものだった。

秋人は守風の姿を見ることもせず、時折身じろぎするだけで何もしない。そんな秋人の姿を見ているのが辛いのか、守風はダイニングのテーブルに腰掛けて目を伏せている。やがて時間は過ぎ昼食時に差し掛かると守風は思い出したかのように立ち上がって昼食を作り始めた。一人身の秋人は大晦日であっても御節などを作るような事はない。それは守風も同じであり、昼食は冷蔵庫にある食材を使った簡単な物で用意された。テーブルに並ぶ二人分の食事。それを秋人が気付いていない筈も無いが、しかし部屋から出てくる気配は無かった。

守風が目を伏せて小さく深呼吸をしてから秋人の居る部屋へと歩く。

「昼、出来たぞ？」

守風の声に秋人が一瞬視線を傾けるが、すぐに逸らされる。二人の間に重い空気が押し掛かる。作った昼食が冷めるほどの時間が経った頃、

「秋人、何か食べないと。……ろくに食べてないじゃないか」

言い辛そうに守風が口を開く。しかし秋人は答えずに無視した。

「……秋人」

それでも守風は食い下がる。しかし――

「――うるせえ」

ぎり、と歯を噛み締めて秋人は呟き、体を起した。数日間の不摂生な生活の所為か頬が若干こけている。

「でも何か食べないと……」

「うるせえって言ってんだよ！」

噛み付くように叫んだ秋人に守風が身を引く。

「……あれは私がやった事だ。秋人が気にする事じゃない」

「は！ ……お前がやった事は俺がやった事だろうがよ」

秋人の上司と同僚の死を二人が話したのは事件が起きたクリスマスの日以来初めての事だった。その間に言わずに考えていた事、それが堰を切ったように秋人の口から溢れ出る。

「でも——」

「でもクソもあるか！ お前が感じた怒りと憎しみは結局俺が感じてる事と同じなんだよ。俺だってあの二人をどうにかしてやりたいてって思っただよ！ ……超能力を持った奴が犯罪に走るのも当たり前だよな。お前はただ風を起しただけだ。それだけで事故死を装って嫌な奴を殺せるんだからな。こんな力持ってりゃ誰だって悪用する」

「でもお前はそんな事しない！ あれは私が勝手にやっただけの事だろう！？」

「そりゃ俺がお前のような力を持ってないからだ。俺が力を持てれば同じ事をしてただろうよ」

「そんな事は無い！ お前はそんな不正をするような奴じゃあ——」  
「お前、あの後警察に何も言わなかったよな？ 今もそうだ。自首する事も無くのうのうとしてる。自分の保身の為に何も言わないんだろ？ お前が何も言わないから俺は気の狂った変人扱いしかされねえ！ お前が実際に力を見せなかったら俺はただの変人でしかないんだよ。お前は自分の保身しか考えてないんだよ！」

「ち、違——」

「違わねえよ！ 違うって言うんならなんで何も言わないんだよ！？」

何も言い返せず立ち尽くし顔を伏せた守風を、座った状態で体を起しただけの秋人が睨みつける。寝不足から赤く充血し、隈の出来た目は言葉のままに狂人にでもなったかのような圧力を放っている。その姿勢のまま二人は動かず手を、体を震わせる守風の伏せた目から一滴の涙が零れた頃、ようやく秋人は立ち上がり着の身着のま



まで家を出る。守風はその後を追う事も出来ず——ただただ、その場に立ち尽くす事しか出来なかった。

### 第三章 無口七緒 その十

◇Side 桐式紅葉

「――なんで来たんだよ」

暖房を付けたばかりでまだ暖まりきらない七緒の部屋の中、ベッドに腰掛ける七緒が長い沈黙の後に小さな声でそう呟いた。

あたしはあたしで何を言われても強気で行こう、とまるで戦国武将のように堂々と胸を張って正座していたのだけれど、七緒の語感が、なんと言うか物凄く切り出しにくそうな、ともすればどう言えば聞く人間に不快感を与えないように言えるかと考えた末の発言だった感じなのに拍子抜けしてしまう。あたしの思い違いだとは思えない。それくらいには七緒の事を見てきたつもりだ。ただまあ、それでも言葉が見つからなかったのかつつけんどんな感じにはなっていたけど。

「友達のところに年末年始の挨拶に来るのは当然だろ？」

「僕は絶交したつもりだぞ」

「そんな事言われたつもりない」

「じゃあ今言う。もう桐式とは絶交――」

ばん、と大きな音が部屋の中に響いた。その音が自分がテーブルを叩いて出た音だと言うのに気付いたのは、叩いた手が鈍く痛くなってきた頃だった。七緒は苦い顔をして目を逸らしている。あたしも何も言えずにただ部屋の中を見渡していた。

部屋の中が沈黙に包まれる。さっきと同じに七緒は何かを言いたそうに言葉を選んでいる様子だった。あたしも何かを言いたかったけど何を言いたいのかが分からない。

「桐式――」

金魚のように口を開いては閉じる、と言う事を何度かしてから七緒が切り出す。

「この間も言っただろ、僕は桐式が思うほど凄い人間じゃない。むしろ最低の人間だよ。そんな僕と付き合ってた何が楽しいんだよ。もう十分だろ？ 魔術を習いたいんなら父さんに言えば良いじゃないか……」

俯き、悲痛な声で七緒はそう言った。自分が最低だなんてどの口が言えるんだろうか。誰だって落ち込む時はある。誰だって挫折する時はある。でも――

「でも七緒はまだ頑張ってるじゃんか。諦めきれてないじゃんか。ゲンさんの跡取りになるんだろ？ だから今も頑張ってるんだろ？ あたしももう無責任に頑張れなんて言わないよ。だから七緒の手伝いをさせてくれよ」

「だから！」

七緒が怒りに任せて立ち上がる。目じりに涙を溜めたその瞳は真っ直ぐにあたしを見詰めていた。

「もう無理なんだよ……！ 僕はもう！ ……桐式はなんだってそんなに僕に突っかかってくるんだよ。迷惑なんだよ！」

震えるほどに強く握った手で七緒が涙を拭う。あたしがどれだけ七緒の心を抉っているか、それはあたしにはもう計り知れない。でもそれでもあたしは自分の気持ちを伝えたい。どうしても伝えたかった。だから――

「好きな人を手伝いたいって思うのは変なのか？ 好きな人が悩んでたら助けてやりたいって思うのは変なのか？ あたしは！ あたしは七緒が好きだから一緒に居るんだよ！ 一緒に居たいんだよ！――」

七緒の目が大きく開かれる。でもそれも束の間――

「だったら尚更じゃないか。僕の事を好きだって言ってくれる人を僕は守る事が出来ないんだ。だから――もう僕の事は放っておいてくれよ」

あたしの横を通り部屋を出ようとする七緒。未だに震えているその腕を、あたしは逃すまいと捕まえた。でもすぐに力任せに振り解

かれてしまう。

「待てよ！」

「もう家に来ないでくれ。僕に近付かないでくれ！」

「なんでそんな事言うんだよ！ そんなにあたしの事が嫌いなのか！？」

「ッ……—僕だって男だ！ 僕にだってプライドくらいあるんだよ！ 他人に、女に守られてばかりでいられるか！」

あたしを睨み、叫ぶ。しかし、しかし——

「……それだけかよ」

「それだけだよ。分かっただろ？ 僕は自分勝手な奴なんだよ。桐式に好かれるような人間じゃない」

「……………」

「言いたい事は全部言ったのか？ だったら帰れよ」

突き放すように言い、部屋を出て行くこうとする七緒。あたしは無意識に手を伸ばす。逃がすまいと、まだ全てを話していないと——まだ全てを聞いていないと。

伸ばした手は一度は空を切るが、もう一度、全力で伸ばした手は七緒が部屋の戸に手を掛けたと同時に服の裾を掴む事が出来た。立ち止まるも振り返る事をしない七緒にあたしは——

「うそつき」

「は？」

七緒が振り返る。

「あたしは自分の本音を話したんだ。全部じゃないにしても話したんだ。だったら七緒も話せ。じゃないと、不公平だ」

顔だけをあたしに向けていた七緒が小さく舌を打ってから裾を掴むあたしの手を払って振り返る。そして、

「さっきも言っただろう。迷惑なんだ。それにお前が傍に居ると——……僕は自分が小さく見える。だから」

言葉を紡ごうと口を開く。でも七緒の口からは最後の一言はついに出てこない。二人で睨み合うような形で向き合って立つ。どちら

も目を逸らさない。まるで目を逸らした方が負けとでも言うかのよう  
に、ただ二人で見詰め合ったまま立っていた。

目の前の七緒の顔を射抜くほどに見詰める。遠くで聞こえてくる  
宴会の音もう耳には入ってこない。そうしていると――不意に、  
部屋の戸が開いた。そこに立っていたのはイチだった。

「よう」

と、片手を挙げて言ってくる。戸の方を向いて立っていたあたし  
には一連の動作が全て見えていたけれど、戸に対して背中を向けて  
いた七緒にはその、挙げた片手を握り締めて殴りかかろうとする動  
作は見えていなかっただろう。

でも、七緒は振り向き様にまるで殴りかかってきているのが分か  
っているかのようにその拳を受け止めた。

「――またお節介かよ。好きだな、ほんと」

「ああ好きだね。お前みたいなへそ曲がりをぶん殴るのは」

イチがもう片方の手で殴りかかる。しかしそれも受け止められ、  
そのまま部屋の中に引き釣りこむように投げ転ばす。受身を取れな  
いように投げられたのか背中を打ったイチが痛そうに顔をゆがめて  
いた。

「ハ、これだけの事が出来て女一人守れないとか抜かすのかよ。こ  
れだけ出来りゃ町の不良なんか一捻りじゃねえか」

痛みを堪えて立ち上がるイチが皮肉たっぷりに言い放つ。

「……そんな事を言いたくて盗み聞きしてたのか？ 暇人だな」

「俺は暇じゃねえよ。お前のへそ曲がりを治すのに走り回ってんだ。  
知らぬは本人だけってな」

口調こそ冷静に聞こえるけれど、感情をまったく表していないそ  
の表情は普段から笑っているイメージのあるイチには似合わない。  
ともすれば怒りが伝わってくるには十分だった。

「……俺もお前も不器用だよな。なまじ変な人生送ってた所為でど  
うやって本音を出せば良いのかわかんねえ。なあ、好きだって言わ  
れてどう思ったよ？ 嬉しかったろ？ 相思相愛だって知って嬉し

かったんだろ？ だったらその気持ちを伝えろよ！ たまには本音で話せ！ 自分も好きだ、って言うくらい出来ねえのかよこの玉無し野郎！」

イチが叫ぶ。その叫びを聞いて七緒は無表情だった。目を瞑り、顔を少し伏せ、思い出したように戸を後ろ手に閉め――

「だからなんなんだよ。僕だって自分のプライドを守るくらいの事はする。女に守られてばかりでいられるか！」

「そんなんじゃないだろ！？ お前はただ紅葉を守りたいだけだ！

紅葉がお前の事を守ろうとして死ぬかも知れないのが嫌なんだろ？ 自分はそれを指を咥えて黙って見てるしか出来ないとか思ってるだけなんだろ？ そんなのお前の勝手な妄想じゃねえか！」

イチが七緒の襟を掴み上げて怒鳴りつけた。イチは本当に怒っている。あたしの為に――そして何よりも七緒の為に。

クリスマスの日に七緒と喧嘩別れしてから、あたしはイチと何度も連絡を取っていた。今イチが言った事も電話口で聞いていた。七緒はあたしの事を大事に思ってるからこそ突き放したいんだと。だからこそあたしは尚更決意を固めて今日この日に和解する為に七緒に会いに来た。

「お前に……僕の何が分かるって言うんだよ……！」

七緒は言う。その声は――震えていた。

イチの手を振り払い、押し倒してその上に跨った。同じ記憶を持つペルソナとシャドウでも体が男と女ではいかに七緒の体が小さいとは言えイチでは力負けしてしまう。

「分かるさ。俺はお前で、お前は俺なんだから」

イチが七緒を見上げて小さく呟いた。

「違う。お前と僕は違う……！」

七緒が腕を振り上げ――イチを殴った。あたしはそれを止める事も出来ず、ただ目を背けただけだった。

「同じだ。ペルソナとシャドウは同じ存在なんだよ」

「違う！」

もう一度、七緒は殴った。

「お前は俺を羨んでるだけだ。たかだか超能力が使えるからってだけでだ。それで俺を拒んでる。俺を嫌ってる。それだけだ。それだけで、俺とお前が同じものだって認めない」

「そりゃそうだ。もとから僕とお前は違うんだからな」

「紅葉は自分と姫が同じだって知ってるぜ？ 片山さんだって多分知ってる。他の奴等は知らねえけど、そいつ等は単にその事実を知らないだけだろ。まともにシャドウと話もしてなさそうだしな。でもお前は気付いてんだよ。気付いてて知らない振りしてるんだよ。そりゃ嫌だろうな、この俺が言った事が全部自分の本音だって思えば。俺が紅葉の事を好きだって言ってるのも、そのままお前が紅葉の事を好きだって言ってるのと同じだもんな！？」

ガツ、とイチの顔に拳が打ち込まれる。

「お前、いつまでそんな事してるつもりだよ。沈黙は金ってか？ 黙ってるだけじゃ何も伝えられねえだろうがよ」

七緒が拳を振り下ろす。

「お前は魔術師になって、人の道を踏み外してるんだって思い込んで、魔術師の世界に居るからただの人間の世界には居られないんだって思い込んで——それでも、お前は普通の人間で居たいって思ってるんだろう？」

何度も、イチの顔を殴る。まぶたが切れて血が流れてきていた。

「毎回毎回テストで一問間違えて、自分は完璧じゃないってアピールして——お前はいつまでそんな遠回しな事するつもりだよ。人の輪に入りたいならお前から入りに行けば良いんだよ！ パパさんだってそうしてるだろうが！ お前は——お前はもっと人を頼れよ！」

七緒が一際力を込めて振り下ろした手を、イチが受け止める。体を捻って七緒を自分の上からどかし、立ち上がった。殴られた顔は腫れ、流れ出た血が服を濡らす。あたしは知らずに涙で滲んだ目でそんな様子を見続け、そんなあたしに気付いたイチは苦笑を浮かべた後、その体を魔力の霧へと変えると、その場にイチが着ていた服

が落ちる。そしてイチがまたもとの体に戻ると顔の怪我は綺麗サッパリなくなっていた。

「七緒、お前に一つ選択肢をやるよ。そうだな……今夜、除夜の鐘が鳴る頃に俺は町の中で爆弾をばら撒く。何人死ぬかな? ——お前はそれを止めてみる。じゃあな」

言うだけ言って脱ぎ捨てられた服から携帯を取り出し、部屋の戸を開けて玄関に向けて歩いていった。あたしはイチを止める為にその後を追おうと部屋を飛び出す。しかし——部屋の外に居たらしい姫があたしの前に立ちはだかって止めた。あたしを見上げる姫は大粒の涙を流し、でも気丈に、大丈夫だから、とでも言うかのようにあたしを見詰めてきていた。

イチの背中を目で追う。イチは、ただの一度も振り返らなかった。イチの姿が見えなくなったのと入れ違いに桜と秋子さんがこちらに向かって歩いてくる。

「……大丈夫?」

桜が心配そうに言ってきた。

「ん、ちょっと大丈夫じゃないかも」

緊張が解けたのか、言葉と共に涙が零れてきた。それを手で拭う。「聞こえてた?」

「ううん、大丈夫。七緒君は?」

言われて後ろを振り返る。そこにはあたし達に背中を向けて放心したように部屋の天井を見詰めている七緒の姿があった。

その後姿を暫く見詰めた後、

「秋子さん、着物脱がせられる?」

秋子さんは優しい笑顔で頷く。

「桜、着替え貸してくんない?」

桜は、胸が小さいかもよ、と苦笑する。

「——七緒、ちょっと着替えてくるから」

返事はない。あたしはそのまま戸を閉めて秋子さんに連れられて別の部屋に行く。桜は着替えを取りに自分の部屋へ向かっていった。



◇

さて、とイチは嘆息する。イチのデフォルトの服装であるタンクトップとホットパンツと言う薄着は刺す様な寒さを与えるが、イチはそれを気にしていない風に歩いていた。

自分用に、と源太郎が買った携帯を見るとまだ時間は昼の十二時を少し回った程だった。まだ約束の時間には十二時間以上あり、流石に暇を持て余してしまう。携帯を仕舞おうとする矢先、着信が入った。画面には家、と出ている。

「ま、七緒じゃないだろうな」

呟き、電話に出た。しかし何も言ってこない。七緒なのか？ と、イチは思うがすぐに思い直し、「姫？」

と尋ねる。すると受話器を持ったまま頷くような気配が伝わってきた。イチが小さく溜息を吐く。安堵に、安心に。

◇

暖房の効いた部屋の中、あたしは七緒と二人で並んで座っていた。秋子さんに着物を脱がせてもらい、桜から借りて着た服は確かに胸がきつい。

七緒もあたしも何も喋らず、ベッドの上で一人分の間を空けてずっと座っている。もう時間は一時を過ぎていた。

七緒は怒っている様子は無かったけれど、だからと言って落ち着いているようでもなかった。ただもの悲しい目で部屋の中を見ているだけだ。

天井に視線を移していた七緒がゆっくりと顔を下げて床を見る。桜の力が暴走した一件があり、床には真新しい畳が敷かれている。あたしも七緒もそんな畳をぼうと見詰めていると、ふと七緒が両手

を撫でているのに気付いた。

「……手、痛むのか？」

イチを殴った手からは薄らと血が滲んでいた。イチや姫は一瞬で傷を治せるけれどあたし達そうもいかない。

「まあ」

七緒が小さく返事をした。それから一分ほどの間を置いて、

「――自分を殴ったんだ。殴った痛みと殴られた痛みで二倍痛いよ」  
言い辛そうに、でも何かを決心したようにそう呟いた。

「七緒……？」

七緒の手から顔に視線を移す。あたしの方を見はしなかったけれど、自分の決意を言葉にしようとする様子がその横顔から感じ取れた。

「分かってたさ。あいつが言ってた事は全部分かってた。あいつは僕で、僕はあるつだ。シャドウとペルソナ、自分の本音と本音を自分の外に出さない為の仮面。それが僕とあいつの関係だから。」

僕はさ、魔術師としての修行を始めてから友達付き合いを全部無くしたんだ。その浮いた時間を全部魔術の修行と武術の修行と勉強に費やした。魔術師になったら人の世の常識から外れるから、一人で生きていかなきゃいけない術を身に付けなきゃいけないって思ってたんだ。だから、他人と関わるのをやめた。

初めはそれでもよかったんだ。魔術の修行だって上手く行かなかったけど、初めだからそんなもんだって父さんに言われたし自分でもそう思ってたから、焦る事も無かった。でもそれから何年も経って、全然上達しなくて、焦って、自分の力不足を痛感して――」

七緒が天を仰ぐ。あたしはそんな七緒の独白を大人しく聞いている事にした。

「そんな風に焦ってるから普段の態度にも出てたんだろうね。百点を取り続けて先生とか周りの人に褒められたりしたんだけど、僕はそんなの当然だって返したんだ。こんなテストで百点を取れないほうがおかしいって。もう余裕が無かったんだよ。昔の本を読んで魔

術師は孤立する存在だって思い込んで、もっと周りの人間を遠ざけていったんだ。先生だって自分が作ったテストに対して自分の生徒がそんな事言っただけから怒っちゃってさ、僕が百点を取り続けるもんだからある時のテストでそれこそ学者が解くような問題を一間だけ入れたんだよ。流石の僕もそれは解けなかった。悔しかったよ。今までずっと百点だったし、何よりテスト如きでつまずくなんて、って感じできさ。でも、その時の先生とか周りの人の反応がいつもと違ってさ……無口でも間違えるんだ、って感じでほっとしたような顔をしてたよ。残念だったな、って慰めるような感じで話しかけてくる奴もいた。それからかな……僕がテストで毎回一間だけ間違えるようにしたのは。そうすれば皆が自分の事を気にしてくれるって、そんな風に思ってた」

はは、と乾いた笑いを浮かべた後、深い溜息を吐いて七緒は続ける。

「僕は結局人の世に未練を残してたんだ。未練たらたらだよ。そもそも本当に魔術師を目指すんなら学校だって行く必要は無かったんだから。そんな事をしてても結局何も変わらなかったしさ。僕が一間だけわざと間違えてるって事はすぐにばれてたし。……イチの言うとおりでしょ。そんな遠回りな事をしないで僕から話しかけに行けばよかったんだ。人と一緒に居たいんなら、自分から人の輪に入りに行けば良かったんだ。それに気付くには遅すぎたんだよ。僕がイチに嫉妬してたのは超能力を使ってるからなんて事だけじゃない。——あんな風に簡単に他人と仲良くなれる性格が羨ましかったんだ。イチは、僕が思い描く理想の自分だったんだ。眩しかったんだよ。羨ましかったんだ——」

ぐ、と痛むだろう拳を握り締める七緒。その拳の上にぽつりと涙の雫が落ちていた。あたしはそんな七緒の横に寄り——

「今からイチのようになるのは難しいだろうけど——でも、なれない訳じゃない。今からでも遅くない」

そっと、語りかけた。

「大丈夫、あたしがついてるから」

「……なんだかこそばゆいな」

七緒が苦笑を浮かべ、

「まだ、やり直せるかな」

諦めきれない様子で呟く。

「魔術師になる事を？ それとも、普通の男の子になる事？」

「……両方」

「二兎追うものは、って言うけど、それを実現してる人もいるしなあ」

ゲンさんを思い出す。七緒も同じらしく、二人で顔を見合わせて笑ってしまった。

「あたしはいつでも傍に居るぜ？ 頑張れ、なんて言わない。だからさ、何か困った事があったら言ってくれよ。あたしに出来る範囲で力になるから」

そっと七緒の手にあたしの手を置く。七緒はあたしの手を――ぎこちない動きで優しく握ってきた。

「なあ、なんで僕の事を、その……」

言い辛そうに口をもごもごとさせている七緒。顔を背けてはいたけど耳まで真っ赤になっているのがすぐに分かった。それでも――イチに言われたからか、七緒は自分の言葉であたしに本音で話そうとしているらしく、

「好きになっただ……？」

弱弱しい声で自信なさげに聞いてきた。この期に及んでまだあたしが七緒の事を好きだと言ったのが夢か何かだとも思っているのかも知れない。まあそんなところも可愛い訳で。

「怒らない？」

そんなあたしも苦笑を浮かべ、最大限可愛い笑顔を見せて聞いている。

「……怒らないよ。桐式が僕を怒らせるような事をわざと言う事は無いだろうし……それに今は腹を割って話してるんだ。ちょっとや

そつとじゃ怒らない」

「なんだか後が恐いな」

「まあ、大丈夫だよ。怒らない」

七緒が微笑み、ベッドの上であぐらを掻いてあたしの体ごと向けてくる。それに習ってあたしも同じように座り直して七緒と対面した。

「……七緒と知り合う前までは七緒は学校じゃ結構高嶺の花って言うか、腫れ物って訳じゃないけど……まあとにかくそう言う感じの存在だったんだ。文武両道だけど人付き合い悪いから誰も七緒の私生活の事なんか知らないし。ただあたしは逆にそう言う七緒だから気になってたんだよな。お知り合いになったらあわよくば勉強も教えてもらえるとかそう言う下心もあったけど、まあその時のあたしは単に恐いもの見たさみたいなの、好奇心で七緒に話しかけてたんだ。意地になってたってのもあるかもな。話しかけても素っ気無い返事しかなかったし。その辺本人の感想としてはどうだった？」

小首を傾げ、実は前々から結構気になっていたこの際だから聞いてみる。すると七緒は苦笑しつつも少し考えた後に口を開いた。

「まあ、嬉しかったよ。さっきも言ったとおり人恋しかったからさ。僕なんかに何回も話し掛けてくれる、って。桐式が僕に近付いてくる度に話し掛けてくれないかな、なんて思ってたんだ。まあそういう度に家に帰ってから自虐してたんだけどさ。そんなんで魔術師になれるのか、って」

そっか、とあたしは笑いながらも安心に胸を撫で下ろした。それから少しだけ考え、話を続ける。

「でさ、実際七緒と付き合うようになってからはかなり考えが変わったんだよな。……本当に怒らない？」

改めて聞くと、

「え、今までの話が僕の怒る所じゃなかったのか？」

なんて言って笑いながら驚きつつも、再度怒らないと約束してくれた。

「……七緒はさ、高嶺の花なんかじゃなかったんだ。あたしと同じで、怒る時は怒るし笑う時は笑う。落ち込むときは落ち込むし……壁にぶつかって、足搔いて足搔いて挫折して、それでも諦められなくて……今までが超人みたいに思ってた分七緒のそう言う人間らしい部分が見れて、知れて、ぐっと親近感が沸いたんだ。同情したって訳じゃないと思う。ただ、そんな風に悩んでる七緒を助けてやりたくて、それで段々好きになったんだ」

自分の顔が熱くなっているのを感じる。恥ずかしいけれど目を逸らす事は出来ない。今あたしは、要は七緒の弱い部分に惹かれたんだと言った様なものだ。ここで目を逸らすなんて出来なかった。

七緒も目を逸らさない。ただじっとあたしを見詰め、そして――  
「それでいいのか？ 僕は、本当につまらない人間だぞ？ 楽しい事なんて何も出来ないし……桐式の事を守ってやる事だって出来ない。僕は……僕は――」

そんな七緒の言葉にあたしは苦笑する。

「魔術師ってロマンチストじゃないとなれないのかね」

なんて言葉を、クリスマススの日にセブンと話をした事を思い出しながら呟いた。

「なあ七緒。さっきイチだって言ってたろ、七緒なら町の不良程度一捻りだって」

「でも魔術師が襲ってきたら――」

「ゲームだってさ、ボス相手に主人公は何人も徒党を組んで敵と戦うんだ。ボスってのはそれくらい強いだろ？ そんなの相手に一人で立ち回ろうとする考えがまず悪い。あたしだってイチみたいなのにいきなり襲われたら姫と一緒に居たって一目散に逃げるよ。でも二人なら、あたしと七緒が二人で居れば倒せるかも知れないだろ？

それにさ――」

ふう、と溜息を吐いて一度言葉を区切る。それから咳払いをし、  
「あたしは七緒と一緒に居て楽しいんだ。趣味が合って、話してて楽しくて、一緒に居て落ち着いて。それで誰にも言えないような共

通の秘密があつて……人を好きになるなんてこの程度の事で十分なんじゃないか？ 少なくともあたしはそれで十分だと思う。むしろ七緒が物凄い魔術師だったら憧れこそするだろうけど好きになる事は無かつたと思う。

——完璧な存在よりさ、少し穴がある人の方が好かれるんだよ」少し申し訳ない気持ちを持ちながらも、それでもあたしの思う七緒の全てをぶつけた。そうしないと後で後悔するだろうし、そう、七緒が言ったように今は腹を割って話をしているんだ。嘘を言っても何も得をしない。

「そっか」

と、七緒は呟く。素っ気無い返事だったけれど——その表情は嬉しそうだった。

「……嬉しいよ。ありがとう」

と、恥ずかしそうに言う。

「なんだか初めて人として認められたような感じがする」

「そりゃ言いすぎだろ」

「……僕にとってはそれくらいの事なんだ。今まで人に好きだなんて言われた事なかったしさ」

目を伏せ、昔を思い出し——そして昔の自分に別れを告げるように顔を上げ、姿勢を直す。

「桐式」

真っ直ぐに七緒はあたしを見詰めてきた。

「イチを止めたい。僕を手伝って欲しい。今の僕にイチを止める術が無いんだ——桐式しか頼れる人が居ない」

真っ直ぐに、あたしの助力を請う。

「危ないから、とかは言わないのか？」

「桐式は僕が守る。だから桐式は僕を守って欲しい。情けないけど、今の僕にはこうする事しか出来ない」

「そか」

真摯な眼差しで見詰める七緒に、あたしは微笑む。

「うん、分かった。イチを止めに行こう」

七緒がこくりと頷く。そして立ち上がるうとするけれど――

「その前に」

「ん？」

「まだ返事を聞いていない訳だけど？」

「う……！」

野郎、この反応からするとわざと何も言わなかったな。

「……まずは、あたしを好きになった理由から聞こうか」

目を細めて七緒を睨むように見た。七緒は目を泳がせてから暫くして観念したように、溜息を吐いた。

「初めは、その……まあさっき言ったとおりに学校で話しかけてきてくれて気になってただけだったんだ。えと、その、片思い……の域までは行つてなかったと思う。でも一緒に行動するようになって……」

言葉を選ぶように、理由を探すように、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。暫く言葉に詰まるように何も言わない時間が続いた。初めは恥ずかしくて口に出せないのかと思ったけれど、その表情は考えた末に何かに気付いたような、そんな感じだった。

「どした？」

「いや」

はは、と苦笑する七緒。

「桐式と一緒に居て、遊んで、遊びに行つて――楽しかったんだ。一緒にゲームして、一緒に話をして、楽しかった。一緒に居て落ち着いたんだ。僕の悩みを話す事はしなかったけど、少しでも共感して、それでも傍に居てくれて――嬉しかったんだ。だから、好きになった。僕は桐式の事を好きになったんだ」

と――晴れ晴れとした顔で言った。そう、結局一緒に居て楽しいと言う事、人を好きになる理由なんてその程度の事で良いんだと言う事に気付いたように、七緒はあたしにだけ見せてくれるような、家族にだって見せないような笑顔を見せてくれたのだ。



「桐式、僕は君が好きだ。だから、付き合ってください」

そう言って七緒はベッドの上で土下座をする。そんな七緒にあたしは――

「おう。じゃあ今日から恋人同士だ」

なんて尊大な言葉を照れ隠しに言うのだった。

### 第三章 無口七緒 その十一

その年の大晦日の夜はとにかく冷えた。雪が降る、とまではいいないが、タンクトップとホットパンツと言う姿で歩くイチを見る者が驚きを通り越して一種の異常者を見るような目で見てくる程には、その寒さが異常であるのを伝えてくる。イチはその視線を一身に受け、さして気にする風もなく歩き続ける。

昼前に家を飛び出たイチはそのまま町中を歩き続け、空が赤くなる頃にやっと町の半分程を踏破していた。その目的は多々あれど、一番には一人のシャドウを探す事だった。そして半日掛けてやっと石間駅から少し外れた線路沿いの道に目的の人物を見つける事が出来た。

緑色のジャージに身を包んだポニーテイル姿の守風と少しやつれたようにも見える片山秋人。その二人の姿を見つけて足早に歩み寄った。イチと同じように何かを探しながら歩いていた秋人はすぐにイチの事を見つけたが、秋人の後ろで俯き加減に歩いていた守風はイチが傍まで歩いてくるまでその存在に気付かなかった。しかしイチの事に――いや、イチが一人で居る事に気付くと一瞬怪訝な表情を浮かべた後に慌てた様子で秋人の前に出る。

「よ」

イチが片手を挙げて二人に挨拶をした。

「……寒くないのか？」

秋人が表情を変えずに問う。イチはそれを無視し、

「二人で何してんだ？ 殺しちゃった二人の弔いか？」

イチが不敵に笑いながら二人を、特にイチの事を見て言い放った。守風の顔が青ざめたる。秋人は無表情に、真摯にその言葉を受け止めていた。

「なんで知ってる……！」

「いや、俺たちみたいなのがいるこの時期に突風で倒れて事故死、

なんて言うのもな。風って聞いてまあ吹っかけてみた訳だけど凶星か」

青ざめていた守風の表情が一気に紅潮する。

「なんだなんだ、口では悪い事はするな、なんて言ってた癖に自分は事故を装って人殺しか？ いい趣味だな。今までに何人殺したよ」  
守風がわなわなと握り締めた手を震わせるが、やがてその手を解き、

「そうだな。私だって一時の気の迷いで人を殺したくもなるさ。どうする？ 私を捕まえるか？」

開き直ったように守風は笑い、イチの事を見下して言った。その尊大な態度にイチは眉を顰め、秋人は大きな音を立てて舌を打つ。

秋人が守風を押し退けるようにしてイチの前に立つ。隈の出来た目で睨むようにして見られると、流石のイチも一瞬たじろいだ。

「一人でこんな所歩いてなにしてたんだ、イチ？」

「いや、散歩を兼ねてその人殺しをからかいに」

そうか、と秋人が肩を落とし、そして次の瞬間、イチの腹目掛けて足が振り上げられた。一瞬早くその動作に気付くとイチは飛び退いて蹴りを避ける。

「なんだよ」

「からかいに來られて怒らない奴はいないだろ？」

「その言い方だと片山さんが殺したようにも聞こえるぜ？」

秋人が一瞬体を固め、小さく息を漏らす。

「そうだ、俺が殺したんだよ。あいつらは俺の上司と同僚でな、普段からウザかったんだ。てめえは命令するだけなのに失敗は全部俺の所為にしたりよ。本当に、殺してやりたいと思った事は何度もあった。そこにコイツが出てきたんだ、事故に見せかけて殺してやった訳だよ」

くしゃ、と守風の頭を押さえつけるようにして秋人が言い放った。表情は変わらずイチをその隈の出来た目で睨みつけていた。秋人の言葉にイチは腕を組み、ふうん、と息を漏らす。

「で？ 片山さんはそんな辛そうな顔して何してんだよ」

自分よりも頭一つ背の高い秋人を見下すように顔を上げるイチの言葉に秋人は言葉を詰まらせた。

「……お前こそ何をしにきた。七緒君はどうしたんだ」

秋人に代わって守風が問い詰める。

「あの馬鹿とはもう手を切った。もうちっとしたらさ、新年明けましておめでとう、なんて言って馬鹿面見せてる奴等にしこたま爆弾投げつけようと思ってるわけ。で、それまでの暇つぶしにお前をからかいに来たんだよ」

「……なんだと？」

「聞こえなかったのか？ 俺は除夜の鐘が鳴る頃に爆弾をばら撒くって言ってるんだ」

「――――」

守風が絶句する。イチがそんな事をする筈がない。七緒がそんな事を許す筈がない。しかし目の前に居るイチはそれを実行するような雰囲気を纏わせていた。自暴自棄になっているのではない。冷静に有限実行するような様子に見て取れたのだ。

「そんな事聞いて私が放って置くと思ってるのか？」

「人殺しが何言ってるんだよ。今更正義の味方発言されても困るぜ？」

組んでいた腕を解き、小馬鹿にするように守風を指差したイチ。

その言葉に守風が表情を顰め、目を瞑り――そして目を開いた瞬間、その体を風として走り出す。

七緒との組み手では見せた事のない、自身の能力である風の勢いを伴った飛び蹴り。それが真正面からイチへと繰り出された。冷めた表情で体を振って守風の飛び蹴りを避け、次の攻撃に備える為に振り返ったイチの視界には、目の前まで迫る守風の姿があった。左足で放たれる回し蹴り、それをイチが的確に防御する。右腕に走る鈍痛を無視し、イチの左拳が守風の顔面に向けて打たれる。ボクシングのジャブにも似た、ただ当てるためだけの拳は守風の視線を一瞬遮り、その合間に間合いを詰めたイチを見逃す。イチが両の手を

胸の前で揃え、中国拳法の震脚に似た足運びでコンクリートの地面を穿ち、大地から得る力を全身のバネを利用して両手に集め――守風の胸目掛けて放つ。

骨を碎き、内臓を抉る一撃が守風の胸から背中を突き抜けた。痛い、なんて考える余裕は目の前に投げ込まれた手の平に収まる程に小さい玉を見た瞬間に掻き消える。両腕で顔を隠して防御し、同時に風を起して玉を遠くへ飛ばそうとするも一瞬遅く、その玉は小さな破裂音を響かせて爆発した。直撃したとしても少々肉を抉る程度だろうその爆弾は守風の両腕に軽い火傷を負わせる程度の被害で終わる。

腕と胸、二つの箇所から脳に伝わってくる痛みは守風の頭をパニックにさせる。シャドウとペルソナは生み出された時点でお互いの記憶を共有する。それはつまり培ってきた経験や技術も共有すると言う事だ。女の体となり多少筋力が落ちたとしても七緒とイチは体術的にはそれほど違いがない筈であり、守風は七緒との組み手では勝ちこそしなかったものの、本気を出せば勝てるつもりで居た。しかし本気でイチを倒そうとして繰り出した攻撃は決定打にはならず、七緒が組み手で見せていたようなものとは明らかに違うイチの動きは的確に、正確に自分に穿たれている。予想とはまるで違うイチの動きに、たった一合しか打ち合っていないにも関わらず敗北を予感する。守風は無意識に歯を噛み締めていた。

「本気を出していないのは自分だけだった、とでも考えてる顔だな」自分の心を見透かされたようなイチの言葉に守風は更に焦った。もしイチが本気で殺すつもりならばさっきの攻防で既に自分は死んでいたと、背中に嫌な汗が流れる。

「俺の爆弾は七緒の破壊衝動と同じだ。持って生まれた超能力に、自分に無いものを持つ他人に対して生まれる劣等感の表れだ。だから、相手が人なら何でも壊せる。あいつはお前が思ってるほど真っ当な人間じゃないんだぜ？」

イチが手の平を広げる。すると指と指の間に先程守風に投げた物

と同じ大きさの玉が四つ現れた。

「で、モノは相談なんだけど片山さん」

先程の攻防で守風との初めの立ち位置が入れ替わったイチが背後に居る秋人に問い掛ける。

「もし罪滅ぼしに何かしたい、って考えてるなら——この堅物と手を切って俺と組まない？　そうすりゃ俺も馬鹿げた事を止めるけど。やる理由も無かったし」

全てを見透かしたようなイチの言葉に、初めて秋人が驚きに表情を変えた。

「何を言ってるんだイチ！　秋人、耳を貸すな！」

守風が慌てて声を荒げ、その身を魔力の霧として秋人の下へと戻り、秋人の目の前で体を再構築する。現れた姿は——

「ぶっ！？　……な、なんだよその恰好……！」

イチが思わず噴出しながら笑う。

大きく正義と描かれた刺繍のされた白の特攻服に身を包み、オーラルバック気味に整えられた金髪と、明らかに守風と秋人のイメージに似合わない服装へと変わった守風にイチは込み上げてくる笑いを我慢できない。そんなイチの態度に苛立ちを隠さずに振り返った守風はその顔に色付きサングラスをし、はだけた胸元にサラシを巻きつけていたり、数十年前に居たであろう不良や暴走族を彷彿とさせる恰好であり、更にイチの笑いを誘う。

「っ、だから嫌なんだこの恰好は！！　……そんな事はいい。秋人！　イチの言葉に耳を貸すな。お前は何も悪い事をしていないんだ！　お前は罪滅ぼしなんて——」

守風が言葉を詰まらせ、秋人の傍から一步、二歩と後ずさる。その様子に気付いたイチが笑うのをやめ、二人に見入った。

胸に手を当てて信じられないと言った表情を見せた守風の頭に秋人はそっと手を置く。

「いつかはこうなる、それが早まったただけだ。力を使わなければ何日かはそのまま居られるんだろ？　俺の勝手で悪いけどよ、これ

でお別れだ」

言って秋人が守風から手を離し、イチの方へと歩いて行った。

「なんで——！」

歩いていく秋人の背中に守風が詰め寄る。しかしその間にイチが割って入った。

「いいねえ、正義漢ってのは分かりやすい。あんたがその気なら俺は全力でサポートするよ。事故だったとしても人を殺した事実には耐えられなかったってとこだろ？　だったら俺が罪滅ぼしをさせてやる。片山さん以上の悪人をとっ捕まえてぶっ飛ばしてぶっ壊してぶっ殺して、それから死のうぜ」

見透かされていた。全て、全てを見透かされていた。守風が涙を流す。イチとは生理的に受け付けない間柄ではあった。しかしそれが故に、お互いがお互いの事を理解していたとも言える。

イチは知っていた。守風が事故を装って人を殺すような者ではないと。それはつまり秋人も同様であると。となれば本当に一時の気の迷い、そして突発的な怒りによる八つ当たり。それが不幸にも相手の命を奪い——その罪滅ぼしをしたいと秋人が願っている事を見透かしていた。

「不器用だよな、あんた。で、お前はどのような訳さ」

イチの言葉が守風の頭の中に響く。どうするか、などと言う言葉に答えは出ない。出せない。胸に当てた手は何も伝えてこない。オズワルドによって秋人から生み出された数ヶ月、確かにあった秋人との繋がりが完全になくなっていた。自身をこの世界に留めて置く為に、ペルソナから——秋人から送られてきていた魔力が完全に途絶えていたのだった。

「行かせるか——」

ぎり、と噛み砕くほどに強く歯を噛み締める。

「秋人、お前は何もやっていないんだ。罪滅ぼしをするのは私だ。

お前は、お前はただいつも通りにしていればいいんだ。お前は変わる必要はないんだ——！」

守風が秋人に向けて走り出す。しかし守風がイチの横を通り過ぎようとした瞬間、その足を掬って倒し、動けぬように背中を踏みつけた。

「片山さん、行きなよ。もし本当に悪い奴を捕まえて自分が死のうとでも思ってるならさ、さっき駅前のゲーセンに白沢って奴が居たからそいつをどうにかすりゃいい。また自分のシャドウに身売りさせてんだろうからそいつが戻ってくる前だったら片山さんでもどうにか出来るでしょ」

守風がイチの足の下で足搔く。そんな様子を見ていた秋人は顔を顰め、

「守風——もう、俺の事は放っておいてくれ。こんなやり方が卑怯だってのは分かるけどよ、お前はもう何に悩む事もしないで、あと少しの命を自分の為に使ってくれ」

自身の半身とも言える守風に死の宣告をし、しかし死までの時間を自分の為に使って欲しいと言うあまりにも身勝手な言葉。しかしそれ以上の、イチには分からない二人だけにしか伝わらない対話に、守風は大粒の涙を流して去って行く秋人の背中をただただ見詰めていたのだった。

悔しさに、悲しさに守風が泣きじゃくる。イチは既に足を離していたが守風は秋人の後を追おうとする意志は見せなかった。秋人の姿が見えなくなった頃——守風はようやく泣き止み、

「どうするよ」

イチの言葉に対し、

「秋人を止める。たとえ私が消えても」

守風が立ち上がる。その目には強い決意が宿っていた。

「片山さんはそれを望んでいないぜ？」

「七緒君だってお前のこの行動を望んでいないだろう」

「まあそうだろうな。でもよ、俺は七緒に変わってほしいんだ。世界は広い事を知って欲しい」

「私は秋人になんて変わってほしくない。たった一人でも、自分がこの世



界に必要とされてる人間だって知って欲しいんだ」

イチが守風の前に立ち塞がる。

「なんでお前は一人でここに居る。黒い風の噂が流れる前ならともかく、お前は七緒君を守れないような行動は一切しなかっただろうに」

「七緒の為さ」

「白沢武人は本当に居るのか？ 居るのを知っててなんで放置した」

「さあ？ 全部嘘だし」

「結局お前は何がしたいんだ」

「お前と同じだ。俺は七緒を助けない」

イチが構え、守風が応える。

「賭けをしようぜ。俺が勝ったらお前は俺の言う事を聞け。お前が勝ったら、まあお前が生きてる間だけお前の言う事を聞いてやる」

「——お前は、何をしに私の所に来たんだ？」

イチの言葉を肯定するような意思を見せ、その上で問う。

「なんだろうな——ま、最後の別れを言いにも来たんじゃねえか？」

イチは笑った。その言葉が消え行く事が確定している守風に向けられたものか、それとも自分に言い聞かせる為に言った言葉なのか。それが分からずに、イチはただただ屈託無く笑った。

## ◇Side 無口七緒

イチを探しに行く準備を整え、僕の部屋に桐式と二人で居ると——「ごめん」

思い出したように——と言うか、ある事を思い出して僕は言う。もちろんそれを言われた本人、桐式は何の事か分からずに首を傾げていた。しかし元永の服を借りて着ている所為で色んな所がぱっつんぱっつんになって目のやり場に困る。

「なにが？」

「いや、クリスマスの日にさ、酷い事言ったなって。だからごめん」  
あの日以来、ずっと言わなきゃと思っていた事だった。でも言う機会が来るだなんて思っても居なかった。これはまあ、イチと桐式に感謝と言う所だろうか。

「ああ、あれな。すごくショックだったぜ？ 本気で泣いちゃったし。ま、今日は一言も嫌いだとかなんだとか言わなかったから許す」  
にか、と笑う桐式。なんだか恥ずかしくてその顔を真っ直ぐに見ていられなかった。

「まあ……一応言葉は選んでたから……」

自分でも言葉の最後の方で声が小さくなっているのに気付きながらも、面と向かってはつきりと言えるほど僕の勇氣は高まっていな  
い訳で。そして何を言っているのか聞き取れなかったらしい桐式に  
聞き返されたら、

「なんでもない」

と言うしかない訳で。

「なんだか聞いているこっちが恥ずかしくなるんだけど」

ガラリ、と音を立てて僕の部屋の戸が開かれ、元永が現れる。い  
つから聞いてた、なんて言う僕の言葉は口から出る前に、

「あたしも恥ずかしいんだから立ち聞きなんかするなよー」

と、桐式が代弁するようにして言ったお陰で飲み込むこととなっ  
た。

もう家を出ようと思っていた矢先に現れた元永に何しに来たのか、  
と問おうとするが、先程とは違う動きやすそうな服装からも一緒に  
来ようとしているのは明白だった。

「よし、どこから行こうか」

「いやいやいや、元永は家で待ってろよ」

「なんでさ」

不満そうにする元永。ここでなんでなんて言われる筋合いなんか  
無いんだが。

「元永が来たって何も出来ないだろ？」

「え、それを七緒君が言う？」

元永の言葉が僕の胸に突き刺さる。確かに、イチが居ない僕に出来る事なんて元永とさして変わらない。とは言っても、だ。

「これは僕の問題だからな。僕の問題に他人は――」

言いつつ隣の桐式の存在に気付き、口を尖らせて頭を掻く。

「まあ、あたしは無関係じゃないからな。イチを連れ戻しに行く義理はあるぜ」

「まあそう言う事で」

ふむ、と元永が腕を組んで頭を傾げる。

「とは言ってもなあ」

「まあまあ、桜ちゃんは家にいなさいな」

ぽん、と元永の後ろから秋子さんが現れる。

「今回の事に限っては私達は手を出さないほうが良いわよ。ね？」

「でもいっちゃんどこに行ったか分るの？」

「そりゃまあ」

自分の事だしね、と大見得を切って、僕は元永を言い聞かせて桐式と姫ちゃんと三人で家を出た。そして――

「なあ七緒」

「なに」

「今何時だ」

言われて空を見上げる。もう日は落ちきり、携帯を開いて時計を見てみれば夜の七時を過ぎていた。イチが行きそうな場所を重点的に探していたけれど、イチは僕から離れて行動する事は殆ど無かった。だからイチが一人で行きそうな所なんて知らなかったのだ。

「何が自分の事だろう。全然見つからないじゃんか」

「いや、こんな筈は無かったんだ。これはイチの陰謀だ」

「そういうのいいから」

ぐうの音も出ないとはこの事。しかしイチの馬鹿野郎はどこに行ったのだろうか。

イチは除夜の鐘が鳴る頃に爆弾をばら撒く、なんて言っていた。

イチは本気でやるかも知れない。でもそれは本心じゃない。最後の最後に僕に止めるチャンスを与えるだろう。人気が多く特定しやすい場所——となれば近場の神社だろうか。イチが行ける場所、つまりシャドウが存在しているこの町の結界の中となると、神社は一箇所しかない。最終的にはそこに行けばイチと会えるだろう。とは言えそれは最後の手段だ。そこで失敗してしまえば参拝客に大勢の犠牲者が出るだろう。最終的にイチがどうするつもりなのかは分からない。でも最善を尽くさなければ最悪の事態が起こるかも知れない。そう、イチはその状況を作り出している。僕に最後の機会を与えたのだ。魔術師として、この町の管理者になる者として暴走した魔術師を止める為に動くか、それともただの人に戻って知らぬ存ぜぬで過ごすか。もちろん答えは決まってる。だからこうして動いている。その結果イチをこの手で殺してしまう事になるかも知れないけれど、この先も魔術師を目指し父さんの跡を継いでこの町の管理者となるのならこの程度の事を自分で何とか出来なければやっていけないのだ。

「七緒？」

突然桐式が話しかけてくる。

「どうした？」

「いや、七緒が急に黙ったから。イチの事考えてたのか？」

「ん、まあ」

はは、と桐式は笑う。

「自分の事、って言いながら僕はイチの事を分かってないんだってさ」

「そんなもんだろ。自分の事を全部分かった奴ってのは悟りを開いた人の事を言うんじゃないか？」

「違う」

そう考えれば悟りを開ける人の偉大さがよく分かる。僕は自分の事なんて小指の先程も分かっていないのだ。

「とにかく探さない」と

桐式が姿勢を正して歩みを速める。――それと同時に、温かな風が僕らの肌を撫でる。久しく感じていなかった、守風さんの風だ。桐式と二人で周りを見る。年越しを前にして道を歩いている人は少ない。それでも普通の通行人の姿がちらほらと見れる中――明らかに場違いながら何度も感じた守風さんの風を放つ乱れた金髪と白いボロボロの特攻服姿の不審者が僕らの法へと歩いてきていた。……目を合わせない方が良いんだろうか。

「あれ、守風……？」

桐式も不安そうに僕に同意を求めてくる。歩いてくる特攻服姿の不審者は、近付けば近付くほど守風さんの面影がはっきりと見えてくる。やばい、笑いが込み上げてきた。

「や、やあ、二人とも」

苦笑を浮かべてどう見てもレディースとしか言えない守風さんっぽい人が話しかけてきた。

「え、本当に守風？」

「まあ……」

「金髪だし、その服が……」

「こんな恰好で出歩けないから髪を染めて服も着替えてたんだよ。……七緒君、さっきイチにも笑われたんだから笑わないでくれないかな。流石に落ち込む」

失敬。

「……イチと会ってたんですか？」

「まあね。お陰で一張羅がボロボロだ」

一張羅なんて言ってる辺り実は気に入ってるんじゃないだろうか。それにボロボロなのは服だけじゃない。体の至る所に怪我が――それも火傷の跡が見える。ひよっとしたらイチと戦ったのかもしれない。いや、かも、じゃないきっと戦ったんだろう。

「――イチは何をして、どこにいるんですか？」

ひよっとしたら二人が戦った末に――そう思った僕に返ってきた言葉は僕の想像を否定するようなものだった。

「……夜の十一時、私達が始めて会った場所で待っていると伝えてくれ、って言ってた。その時間までは何もしないし——……」

守風さんが言葉を切り、そして飲み込む。その先でイチが何を言ったのかは当然ながら守風さんしか知らない。守風さんの表情が柔らくなる。まるでやるべき事を全てやりきったような、安堵の表情に見えた。

ふと守風さんの体を見る。今までテレビの中でしか見たことが無いようなその恰好がいつい気になってしまったと言う事もある。でもそれ以上に希薄になっていく守風さんの体に気が付いたからだ。「守風さん!？」

思わず声を上げ、守風さんの手を取る。その手は指の先から——霧となって消えていっていた。

「もうお別れなんだ。だからイチの伝言を伝える以上に……さよならを言いたかったんだ。良かったよ、消える前に会えて」

笑顔で守風さんは言った。目じりから涙が零れ落ちる。

「……二人にお願いがあるんだ」

「お願いって、そんな事より——」

「いや、聞いて欲しい。最後の、頼みだから」

キッ、とした表情で僕達を見詰めてくる守風さんに言葉を失くす。

「秋人を止めて欲しい。テレビで見てないかな、突風で転んで二人が事故死したってニュース。その犯人は私なんだ」

「え!？」

「もちろんわざとやったわけじゃない。でも私も秋人も、確かにあの二人に憎しみと殺意はあったんだ。秋人もそれが分かっていたからこそ自分を責めた。責め続けた。……七緒君、魔術師が起した事は公には出来ないしされない。私達シャドウのやった事も。そうだよね? だから秋人は人として裁かれる為に最後の二人のペルソナを——特に黒い風の主を探しだして殺すつもりなんだ。魔術師でもペルソナでもなく、片山秋人として人を殺せばその罪を裁いてもらえる。今その為に秋人は動いてる。だから秋人を止めて欲しい。私

ではもう無理だから」

そう言っている間にも守風さんの体はどんどん消えていく。僕達は何も言えなかった。絶句していた。でも――

「分かった」

桐式は何とか搾り出したような声でそう答えた。たった一言、しかし満足のいく言葉を聞き、守風さんはもう一度僕達に笑顔を見せた。よかったと、安堵の声を漏らした。

「守風さん……」

「七緒君、あんまり悲しい顔をしないでほしいな。私も悲しくなってしまう。――私は秋人になんて欲しくなかった。シャドウやペルソナなんていうものに首を突っ込んで欲しくなかった。辛い事もある。悲しい事もある。それでも秋人は社会人としての歯車の一つだから。小さくても代わりの聞かない、たった一つの歯車だから。信頼してくれる人だって大勢居るから――変な事に首を突っ込んでほしくなかった。自分は世界にとって必要な存在だって事を知ってほしかったから私は守り続けてきたんだ。そんな身勝手な理由だけで私の変わりに二人が秋人を助けて欲しい。守って欲しいんだ」

「そうは言っても！」

思わず声を荒げてしまう僕を桐式が止める。僕の肩を捕まえた桐式の手は、震えていた。

「……二人は、仲直りしたのかな？」

「え？」

突然の質問に思わず疑問の声を上げてしまう。

「イチが気に掛けていたんだ」

「……うん、大丈夫。って言うかまあ、恋人同士になりました」

質問に答えた桐式の、にへ、と笑う様子が僕の背中から感じ取れた。それを聞いて守風さんは更に満足げに笑い、

「そうか――おめでとう。それじゃあ、さようなら」

深く、深く――守風さんが頭を下げた。次に顔を上げた時には笑顔ながら両目にたつぷりと涙を溜めていて、それを隠すように守風

さんは僕達の言葉も聞かずに振り返って歩いて行ってしまった。僕達はその背中にさようなら、と声を掛ける。守風さんは振り返る事も無く、右手を一瞬上げ――もう肘の辺りまで消えているのに気付くともまだ消えていない左手を挙げ直して歩き去っていった。僕達はその背中を見詰めている事しか出来なかった。最後の最後まで、見ていることしか出来なかった。



### 第三章 無口七緒 その十二

「風が――」

十二月三十一日。一年の最後の日に秋人の周りに吹いていた風は暖かかった。いや、秋人が守風と出会い過ぎた数ヶ月、彼の周りで冷たい風が吹く事は無かった。まるでいつでも誰かが見守ってくれているかのような温かさに包まれていた。しかしその風がぴたりと止む。それは――

「守風……」

血走った目で獲物を探していた秋人の表情が曇る。胸に当てられた手は微かに震えている。短い期間共にした最も自分に近く、そして一番遠い存在の消滅が秋人には痛いほどに、辛いほどに伝わってきた。

秋人が隠れるように路地裏へと入り込む。表通りからは見えない奥まった場所まで進んで誰も居ない事を確認し、壁に背を預け、そして静かに涙を流した。声は出さず、ただただ涙を流し続けた。

「お前は……」

零れる言葉は今この場に居ない守風に向けて。

「お節介すぎるんだよ……！」

◇Side 無口七緒

今年ももう残り二時間を残す頃、もう何度目になるのか、僕と桐式は携帯で片山さんへの電話とメールを繰り返していた。しかしただの一度も電話が繋がる事も無く、メールが返信される事は無かった。守風さんと会い、別れてから既に三時間、片山さんが行きそうな場所は捜し尽くした。いや、守風さんとならともかく僕達は片山さんとの付き合いは短い。比較的会う事の多かった駅の周辺を探す以外では探す場所を知らない。黒い風を探しているとは言っていた

けど――

「……桐式」

更に一時間、十一時を――イチが指定した時間を前にして僕達は足を止めた。

「イチの所に行くのか？」

桐式の言葉に何も言わずに答えた。イチはこの事を、僕達が片山さんを探し出せない事を想定して守風さんに時間と場所の伝言をさせたんだろう。逆を言えばこの時間までは何もしないから何が何でも探し出せと。結局与えられた時間に片山さんを探し出す事が出来なかった事をイチにどやされそうな気もするが四の五の言っていない。

「桐式、片山さんを頼む」

桐式は小さく頷く。石間駅の程近い場所で僕達は別れ、僕は足早にイチの居る石間公園を目指した。時間には間に合うかどうかと言った時間だろうか。

もう何時間も片山さんを捜し歩いていて体はくたびれていたけれど遅れる訳にはいかない。イチは言った、僕に選択肢を与えると。人として生きるか魔術師として生きるかを。もし時間に間に合わないければイチは躊躇いなく凶行に及ぶだろう。魔術師として生きる事を決意した僕はそれを止めなければならない。止めなければ大惨事が起こるからだ。将来父さんの跡を継いでこの街の管理者になるのならこの程度の事は対処出来なければいけないのだ。

呼吸は荒く足は重い。しかし走るのを止めず、何とか十一時を回る前に公園に辿り着く事が出来た。北さんと刀野郎――北修一が死に、守風さんと出会い、オズワルドと再会しヴァイオレットさんと対峙したこの場所は僕にとっても感慨深い場所だ。イチがこの場所を指定したのも単に人の目に触れにくいと言う事だけの理由ではないだろう。

そしてそんな事を考えて息を整えながら歩く僕の前にイチは現れた。枯葉の上にあぐらで座っていたイチ。家を出て行った時には無

かった汚れが服に付いているのは守風さんと争った跡だろうか。服がボロボロだった守風さんと比べると服の汚れ以外に目立った変化が見られない。まさかとは思うけれどイチは守風さんを圧倒したんだろうか。

イチが立ち上がって尻に付いた枯葉と砂利を払った。

「よう」

まるで僕らの間に何事も無かったかのようにイチが気軽に挨拶をしてくる。

——不意に僕は違和感に気付く。胸に手を当て痛いほどに握り締め、その違和感の正体に気付き——

「……守風さんと会ったよ」

「みたいだな」

この時間にここに居る時点で守風さんと会っている事は予想出来ただろう。イチが少し安心したように見えるのは守風さんの事を想ったからだろうか。

「……紅葉とはどうしたんだ？」

「お陰さまでね。今は片山さんを探しに行ってもらってる」

「そうか」

片山さんの事がまだ片付いていない事に一抹の不安を覚えたのか、少しでも表情を曇らせながらも——それでも桐式と和解した事を、自分の計画通りに事が運んでいる事を知ってイチは更に安堵したようだった。

「——お前は どうするつもりなんだ？」

「お前は どうしたい？」

僕の質問にイチは質問で返してくる。それに僕は咄嗟に答える事が出来なかった。幾らイチと僕の間を関係を理解したとしても、納得したとしても——もう一度僕の為に手助けをしてくれなんてすぐに見える訳は無いし、そもそもイチにもうその気はないのが分かっていた。

「イチ——」

胸に手を当てる。

唇を噛み締める。

目を伏せ、顔を伏せ。

「お前、もう――」

自分とイチとの間に繋がっていたものが――この町に張られたオズワルドの結界によって生み出され、僕とイチとの間に繋がられていたペルソナとシャドウとの間に交わされた契約とも言えるものの、魔力の供給ラインがこの公園に入った時点で断たれていた。それも恐らくイチの手で。

僕にはそんな事をする術がない。もちろんそのラインを繋ぐ事もある。イチなら出来るのかも知れないけれどそのつもりならそもそも魔力の供給を断つ事なんかしないだろう。つまり、イチはもう僕の元へ戻ってくるつもりはない。

「……三発だ」

イチが手の平を広げ、指の間に三つの爆弾を作り出した。

「俺にはもう三発分の爆弾を作るくらいの魔力しかないからな。これを凌げればお前の勝ちだ」

イチは勝ち誇ったように言った。イチが言う三発分の爆弾を作る魔力しか残っていない、と言う言葉を額面どおりに受け取るのは危険だ。切り札は最後まで持つもの。そして切り札を出すならば奥の手を持っておくもの。それが定石だ。ならばイチが何かを隠していると考えるべき――だが。

「七緒、俺を止めてしろ」

恐らくイチが本気で戦えば僕なんか一蹴されるだろう。戦いは相性だけれど僕とイチは体術的には同じ事が出来る。ならば僕に出来ない事を出来るイチが必然的に有利になるのは当然だし、守風さんとの戦いを受傷で勝ったと考えれば僕に勝ち目がないのは火を見るより明らかだ。

だからイチは条件を提示した。たった三発の武器、それを凌げばその爆弾で他人を襲う事も出来ず、僕にも勝機が訪れる。だからこ

そイチはあえて僕に自分の状況を教えた。ならば僕に取れる戦術は一つ。

「……どうした、たった三発だぜ？ 奪うなりなんなりしに来いよ」イチが挑発する。しかし僕は動かない。冷静に考え、冷徹に行動する。それこそが僕がするべき最良の行動で、それをする事が出来るのならばそれが僕の最大の武器となるのだ。だからこそ今僕がすべきは、ただ動かずに様子を見る事だった。

僕——ペルソナからの魔力供給が無ければシャドウは自分の体を保てなくなる。ましてや補給される事のない自分の中の魔力を使い爆弾を作り出したのだ、数分、数秒後にでも体を保てなくなつて霧散してしまう事もありえる。ならばそれを待てば良い。イチが痺れを切らして僕に攻撃を仕掛けるか、この公園を出て暴れ出そうとするまでは僕はただ動かずに見張っていればいい。

「——ご名答」

僕の考えを察し、イチが笑った。

「僕にお前を倒せるとは思えないしな」

イチの言葉に表情を変えずに答える。

「とは言え——」

イチがホットパンツのポケットに爆弾を二つ仕舞い、身構える。

「お前には修羅場を経験してもらわなきゃな。もう俺は——」

野球の投球フォームでイチが爆弾を投げつけてきた。閃光手榴弾、催涙弾、破片手榴弾、地雷、機雷、やろうと思えばミサイルだって作れるとイチは言った。今投げつけてきたのは何なのか——考える前に僕は大きく横に飛ぶ。結局投擲型の爆弾ならば爆心地から離れられればそれほど脅威ではない。

——はず、だった。

イチが投げた爆弾は僕が居た場所を通り過ぎ、そして次の攻撃を警戒してイチを睨みつけていた僕の背後から、轟音と共に爆弾が迫ってきた。

「っ!？」

イチは言った。やろうと思えばミサイルだって作れると。そして作った。僕の知るミサイルの形とはまるで違う野球ボールのようなミサイルを。熱感知なのかなんなのか、一体どう言う機構で僕に向けて方向を変えてきたのかは分からない。と言うか魔術師と言うのはそう言う常識から外れた者の事を言う。何を感知して、なんて考えるならばこちらも更なる非常識を行使して相手を倒す方が早い。そんなものが僕にあればの話だけれど。

曲がる筈がない物が曲がった、と言う驚きもあり僕にはその場に伏せる以外の回避行動を取る事が出来なかった。しかしミサイルは僕の頭上を通過し、三メートルほど離れた場所で爆発した。爆風と爆音で体の芯まで振動が響く。破片式の手榴弾のように爆発と共に破片が飛んでくる事が無かったのが幸いという所か。

「奥の手発動、ってね」

立ち上がる僕を待っていたようにイチが立てた人差し指の上でもう一つの爆弾をくるくると回していた。奥の手があるのなら切り札を、切り札があるのなら奥の手を隠すのが定石。ならば今イチが手にしているのは今の物と同じ爆弾なのかそれとも――

「行くぜえええ！」

イチは投球フォームを取り、そして今度は上空へ爆弾を放り投げる。それを見て僕はイチへ向けて全速で走る。

爆弾にせよなんにせよ爆発物を扱う者の常として自分の近くでは爆発させる事が出来ないと言う弱点がある。確かにイチは地雷を作る事も出来るし、以前ヴァイオレットさんと戦った時に見せた指向性のある火炎放射機のようなものも作り出せる。接近戦を挑む事も間違いなのかも知れないけれど、奥の手、切り札を見せたなら、最終兵器を用意するはずだ。となれば最後の一個は僕が逃げて、こうして接近戦を挑まれても対処できるものだろう。となれば二発目の爆弾にはまだまだ対処のしようがあるはず。それが投げられた今、中途半端な距離で突っ立っている事自体が危ない。僕自身実戦経験が多い訳じゃない。こんな状況でどう行動するかなんて言うのはそ

の時の気分次第だ、流石に自分の事とは言えイチだって読みきれないだろう。だから僕は接近戦を挑んで制す事に賭けた。

僕の接近に対して面白く無さそうに口の端を吊り上げながらイチは距離を取る。それに合わせて僕は強く踏み込む。だが――逃げたイチが今しがた自分が居た場所の足元に視線を注ぎ、そして上空に一瞬だけ視線を移動させたのを見た瞬間、背中に走った悪寒に操られるように僕は横に飛んだ。次いで上空での火花が破裂するような爆発音。さらに――夜の闇に紛れて正確な形を見ることは出来なかったけれど、針のような物がイチが立っていた場所に降り注ぐ音と共に地面が爆炎と共にはじけ飛ぶ。

「この嘘つき野郎」

「失敬失敬」

一定方向に針を打ち出す爆弾に、恐らく少しの衝撃でも爆発するような地雷。三つと言った筈の爆弾に四つ目を用意しておき、それを使って確実に僕を殺しにきたんだろう。目は口以上に物を言う、イチの視線に気付かなければ本当に死んでいた。イチが面白く無さそうにしていたのは自分の読みが当たってしまったから、と言ったところか。

「これが真正正銘、最後の一発だ。嘘じゃない。その代わり――読み間違えれば今度こそ死ぬぜ？」

イチが最後の爆弾を取り出す。姿形は前の二つと変わらない。が、イチの言う事が確かならこれこそが奥の手以上切り札以上の最終兵器。初めからそれを使わなかった理由はやはり僕を試していると言う訳か。それにしても読み間違えたら、と言う事は何かしらの対処法があると言う事か。先の二発の爆弾は後手にしか動けなかったけれど――さて、対処できるのだろうか。

「さあどうする。逃げるか、その場に留まるか、それとも殴りに来るか」

地雷がもう仕掛けられていないと言う保証はない。最後の爆弾がより追尾性能の高いミサイルじゃないとはい切り切れない。こちらが

何かしら行動すると読んでその場所へのピンポイント攻撃と言う手もあるにはある。なんにせよイチがどういった爆弾を作れるのかを把握し切れていない僕には必勝の行動がない。

——今になってもう少しイチと話をしておけばよかったと後悔する。

「……ん？」

「ん？」

僕が発した疑問の言葉にイチも同じような声を発した。そんなイチの疑問を無視し——僕は以前、桐式と会ったばかりの頃に、一度腹を割って話した方が良く、と言われたのを思い出す。まあこう言う意味ではなかったんだろうけれど、桐式はあの頃からもう既に僕達の関係を心配してくれていたんだろう。まったく頭が下がる。

「まあいい」

一度大きく溜息を吐き、身構えた。自分の顔が自然に笑っていたのに気付く。こんな命の賭かった局面で笑えるのも桐式のお陰と言う事だろうか。

「さて、続けるか」

最後の爆弾で手遊びをしていたイチが投球体勢を見せた。それと同時に——僕は走り出す。地雷の心配はしない。逃げるにせよ立ち向かうにせよ留まるにせよ、読み違えれば僕は死ぬ。ならば爆弾使いを相手にする定石、接近戦を挑むしかない。そして僕はその判断に賭けたのだ。

## ◇Side 桐式紅葉

七緒と別れ、今年も残す所あと三十分となった。段々と神社へと向かう人の数が増え人通りが多くなった事であたしは片山さんを見つける事がより困難になっていた。そもそも何時間も二人で探していたのを今更一人で見つけられるんだったら都合の良い話でもある。



片山さんの行きそうな場所が分からない、とあたし達は駅の近くを重点的に探していて、今もそうしている。片山さんの探している黒い風——鞍間先輩の事もあたしは知らない。多分片山さんも知らないだろうから探しようが無い筈だ。鞍間先輩だって片山さんの事を知らないだろう。となれば先輩の気まぐれで誰かを襲い始めた時に片山さんがその場に居ない事を祈るだけだけれど——

「待て待て、その前に先輩がそんな事をするのを止めないと」  
ぱん、と両頬を叩いて気合をいれる。

何度も通った道を通って片山さんを探す。大晦日と言う事もあって普段は閉まっているような店も幾つか開いているところもある。その所為で人通りが多くやはり探し辛い。

鞍間先輩の犯行現場もちりぢりばらばら。場所を絞るような事も出来ないからやっぱり足で探すしかない。何をするにも手掛かり足掛かりがないのでは動きたくても動けない。でも動かなければならないのが非常に疲れる。

大きく溜息を吐き近くに見つけた自動販売機でコーンポタージュを買う。缶を何度も振ってからプルタブを開けると突然姫が現れる。誰かに見られてないかと慌てて周囲を伺うけれど誰も見ていない様子で安心する。

「どした？ 飲みたいの？」

あたしの問いに姫は大きく首を横に振った。その後にはぶんぶんと腕を振りながら道の先を指差す。片山さんを見つけたのかと思ったけれど、そこに居たのは片山さんでも鞍馬先輩でも無く、今残るあたし達が何とかしなければならぬペルソナの片割れ、白沢だった。白沢はシャドウに援助交際をさせているだけ、と言う事と探しても見つからないと言う事で殆ど放置していた事もあってこのまま放置して片山さんを探しての方が良いか、とも思っただけ——

「守風に白沢の顔を教えたよなあ……片山さんも知ってるのかな」  
そう考えると片山さんが白沢に接触しないとも限らない。ひょっとしたら会っているのかも知れない。

「よし」

コンポタを一気に飲み干すと寒さで冷え切った体が少しだけ温かくなった。缶の底に残ったコーンの粒がもったいないと感じながらも缶をゴミ箱に放り込んで姫と一緒に走り出す。白沢は遠くから見ても分かるような苛立ちを隠さない足取りでゲームセンターへ入っていく。ここを根城にでもしているのだろうか、そう言えば最近行っていない。

姫と二人でゲーセンの中へ入る。一年の最後を仲間と遊んで過ごそうと言うのだろう、ビデオゲームの対戦台しかない小さなゲームセンターの中には閉店間際だと言うのに十人近い人で賑わっていた。そんな集団には目も向けずに一人で格闘ゲームをしている白沢が一人、あたしの事に気付かずに遊んでいた。暇を潰しているように見えただけ、コンピューターに負けた瞬間台を思い切り叩いている。辺り気分転換に来て転換出来ないでいる感じだった。

「……おい」

「あ!？」

怒りと苛立ちを顕わにして振り返る白沢。

「当店は台パンを禁止しておりますが」

クラスが違うと言う事もあるし白沢自身人付き合いが良い訳じゃない事もある。あたしと白沢はそんなに親しくはない。でも顔は知られているようで、白沢はあたしの事を見ると一瞬だけ表情を和らげる。

「……誰だっけおめえ」

そう呟いた白沢があたしの横の姫に気付いた瞬間――

「な? あ!？」

外へ駆け出す白沢。店の自動ドアを抜けて外に出て、店の外からあたし達の事を睨みつける。その傍らには女の子としか言いようがない子が立っていた。店内の客と店員があたしの事を見ているのは気にせず、外に出る。

「ここじゃなんだからさ、ちょっとこっち来いよ」

言って店のすぐ横にある裏路地を指差す。

「うるせえ！ お前、確かあいつが言ってた……き、桐式とか言う奴だろ！？」

「あいつ……？」

誰に聞いたんだろうか。あたしを見て気付いたと言うよりは姫を見て姫がシャドウだと言う事に気付いたと言う感じだし、単に話しだけを聞いたと言った様子だった。

「お前ら、な、なんなんだよ！ 俺は好きにやってるだけで……！」  
半狂乱に叫ぶ白沢はまるで以前に誰かと戦って負けたかのような感じだった。ひよっとしたらヴァイオレットさんか守風とでも戦ったんだろうか。それでボロ負けでもない限りはこんな感じにはならないような気もするけれど。

「……今お前の事をどうこうしたい訳でもしろうと思ってる訳でもないからさ、話聞いてくれよ。片山っておじさん見なかった？」

「あ？ 誰だよそいつは！」

「んー……知らないのか」

がっくりと肩を落とす。

「な、なんなんだよお前は！ 何しに来たんだよ！？」

「や、だから片山さんに会ってないかなって。今は忙しいからお前を相手にするつもりはないけどさ、ごたごたが片付いたら挨拶しに来るから。その子を使ってなんか酷い事してるようだけども、あたしとしてもそれは許せないからまだ続けてるようだったら容赦なくいくからな？」

びし、と言い放ってあたしは姫の手を引いてその場を離れる。が

「俺に……俺に命令するんじゃないやねえよ……！」

小さく、そして怒気を孕んだ声であたしに言う。

「テメエも鞍馬もあの糞女も！ なんでどいつもこいつも俺のやる事に文句付けるんだよ！ ああ！？」

白沢が傍らの女の子の首根っこを掴み——自分の前に乱暴に立た

せる。痛そうに表情を歪めた女の子だけれど、それでも健気に何を言われたでもなくあたし達をきつく睨みつけ、

「……桐式？　って、そいつ白沢——っ、危ない！」

路地裏から突如現れた片山さんに硬い道路に押し倒される。次いでゲーセンの壁が激しく燃え上がった。

「は、走れ桐式！」

「え？」

怪我の確認をする事もせず片山さんに連れられるままに走り出す。そして一瞬遅れてあたし達の後ろの地面が燃え上がった。

「な、なんだよあれ！？」

「守風から聞いてなかったのかよ？　あいつ、見た物を燃やす能力を使うんだよ！！」

「ええ！？　あたしそんなの聞いてない！」

片山さんに連れられて走るあたしを白沢は追ってきた。逆上した所為か追い詰めて殺すつもりらしい。いや、痛めつける程度のつもりなんだろうけれどナイフで刺せば当たり所によっては大怪我どころか死ぬ可能性だってある。それをあんな力でやられたら燃え尽きて死んでしまう。足首だけ残して死ぬ自然発火現象を自分の体で再現なんかしたくない！

「こっちだ！」

片山さんがあたしの手を引いて路地裏へと入っていく。姫は既に手袋に姿を変えていて一緒に走ってはいないけれど子供の足ではその方がいい。とは言っても片山さんの足は早くあたしの足では並走も出来ない。足がもつれて倒れそうになるのを必死に堪えて走り続けるしかなかった。

「どこだ！？　くそ、ぶっ殺してやる！！」

叫ぶ白沢の声が路地裏に響いた。片山さんと二人で物陰に隠れて様子を伺うも、見たものを燃やすパイロキネシスなんて物を相手にあたし達で勝てるとは思えない。ピンチだった。

見つからずにこのまま帰ってくれば良いとは思うけれど、ああ

いう手合いは見つからないからと言って諦めるとは思えない。

「……でもまあ片山さんが見つかってよかった。どこに隠れてたんですか？」

小さな声で呟くように聞いてみる。すると片山さんは壁に背を預けて荒い呼吸をしながら、

「守風が消えてからずっと座り込んでたよ。は、自分で繋がりを断ったのにな、笑えるよ」

まるで独り言を言うかのように囁いた片山さん。少し離れた場所に設置された街灯に照らされたその目は赤く腫れていた。

「守風が消えたって……」

「あいつは——シャドウは元々俺たちから生まれたからな、消えれば戻ってくるみたいだ。それまでの記憶も何もかもと一緒に持ってた。イチと戦って負けたのも、最後にお前達に会いに行つたのも、俺の事をどう言う風に想って守ってくれてたかも、全部伝わってきた」

思い出したのか、片山さんが涙を流した。それを気付かれまいと目を擦りながら上を向く。

「俺は人を殺した。同僚と、上司をな。事故ではあったけどその原因を作ったのは俺なんだ。だから罪を裁かれなくきゃならねえ。けどよ、俺は隠したんだ、その事実を。言っても頭がおかしいって思われるだけだって言う事で結局俺も自分がした事を公にしようとはしなかった。守風が隠したからだだけじゃないんだよ……結局保身を考えてたんだ。今の生活を変えなくなかったんだ。変わりたくなかったんだよ俺は」

「……だからって人を殺して罪を裁かれようとするのは」

「間違いだつてのは分かってる。……殺人を犯して逃亡生活する奴は常に罪の意識に囚われるって言うけどよ、その通りなんだよな。あの二人の事を夢に見るし、幻覚も見えたし幻聴も聞こえた。頭がおかしくなりそうなんだよ。だから——」

突如、片山さんが言葉を切ってあたしの体を引き寄せる。次いで

傍にあった青いポリバケツが激しく燃え上がった。

「あんなんでも殺せば罪になるかね？」

片山さんの視線の先には荒い呼吸をする白沢とそのシャドウが立っている。

笑っているようにも迷っているようにも見える表情で片山さんが  
眩き、燃え上がるポリバケツや傍に置いてあったゴミ袋を蹴り上げ  
て走り出す。白沢のシャドウが放った力はそのゴミに当たり、何と  
かあたし達の逃げる時間を作る事が出来た。

奥まった道に入り、更に奥へ奥へと逃げる。

「つつりゃ！」

姫が水の剣を作り、あたしはそれを背後へ放り投げた。姫が剣の  
形に押し固めていた水が形を崩し、鉄砲水を思わせる大量の水が路  
地に流れ込む。遠くから白沢の驚く声が聞こえ、あたし達はそのま  
ま走る。

「桐式、お前はそのまま逃げろ」

「え？」

言って片山さんが立ち止まる。

「片山さんは！？」

「あいつをここで殺す」

「なんで！？」

「やらなきゃやられるだろうが。お前が手を汚す必要は無い！」

「片山さんだって！……こんなの、現実逃避してるだけじゃない  
か！」

ぶち、と堪忍袋の緒が切れるのが分かった。

「どいつもこいつも好き勝手な事言って！」

気付けばあたしは拳を振り上げて片山さんに殴りかかっていた。  
頬を押さえてよろける片山さんを睨みつけてあたしは更に続ける。

「なんで殺されるかも知れないからって殺す必要があるんだよ！」

逃げればいいじゃんか！」

「逃げたっていつかは——」

「うるせえ馬鹿野郎！ そんなヤケクソに付き合わされる身にもなれ！」

がつ、ともう一度殴る。

「こっちがどれだけ心配したか……それなのに死にたがりみたいに死に行こうとしてさ、なんなんだよあんたは！」

八つ当たり気味にもう一度水の剣を白沢の居る方の道へ向けて投げ、同時に片山さんの手を引いて逆の方へ走り出す。

「だったらなんだ！ お前は俺に一生人を殺した罪を背負って生きろって言うのかよ！？」

「生きろよ！ 事故だったんだろ？ 殺したくて殺したんじゃないんだろう！？」

「ふざけんな！ それで俺の気が済むかよ！」

「じゃあなんだ、あたしも殺すか！？ あたしだって直接じゃないけど人を殺したんだ。殺してみろよ！」

片山さんが手を振り解き立ち止まる。あたしも息を荒げながら立ち止まり、にらみ合った。

「守風の記憶があるってんなら知ってるだろ？ あたし達は北さんっておばさんを追い詰めて殺したんだ」

「そいつは人を殺して回ってたんだろが、お前は悪くない」

「だったら片山さんだって。ただの事故だったんだ。何も悪くない」「それで納得出来るかよ！」

「納得できないんだったらその二人の分も精一杯生きて償えよ！」

あんたの仕事仲間だったんだろ？ 嫌いだったとしてもさ、その人達の為にやってあげられる事は幾らでもあるだろう！？」

「知ったような事を言うんじゃないやねえよ！ 上っ面だけの説教なんてごめんなんだよ！」

「じゃあどうすれば良いんだよ！ あたしは片山さんに生きてて欲しいんだ！ それが守風の最後の願いなんだよ！」

「そんなの俺の問題だ、お前がどうこうするようなもんじゃねえ！」  
「どんな気持ちで守風が片山さんを守ろうとしてたか知ってたんだろ

！？ 自分の問題だつて言うんなら守風の気持ちを汲んでやれよ！」  
「っ……！」

片山さんが齒を噛み締め、あたしを睨みつける。守風がどんな気持ちだったかをあたし達なんかとは比べ物にならない位に、その全てを知っているからこそ片山さんは守風の事を出されると即座に反論できなくなるんだろう。

あたしが言っていることは確かに上辺だけの中身の無い優等生の説教なんだろう。でも守風がどんな気持ちで片山さんの事を守ってきたかを少しでも知っているから、あたしは守風の最後の言葉を守りたい。

「あたしは片山さんとは付き合いが短いよ。でも守風とはそれなりに付き合いがある。守風はさ、結構怒る奴だったけど間違った事で怒った事は無いよ。守風が二人を殺したって言うのも、その二人が守風の事を怒らせたんだろ？」

「……ああ、そうだよ。でもそれが人を殺して良いって理由にはならないだろ」

「そうだよ。でも殺したんだつたら——その罪を償いたいって言うんだつたら、もっと方法があるだろ……」

「……お前はどうかやって償うんだよ」

「あたしは——まだ分からないよ。けど北さんの事を忘れる事はしない。あたしはあたしがした事をずっと背負って生きる」

「俺はお前ほど強くないんだよ」

酷く小さな声で片山さんは呟く。あたしが言っている事はただの理想論なのだろうか。確かにあたしと片山さんの事情は違う。でも……

突然片山さんの手があたしに伸びる。肩を掴んだ片山さんの手がそのまま自分の胸の中にあたしを抱え込み、地面に押し倒した。

「っ、ぐあ——！」

頭を胸に押し付けるようにして抱き込まれている所為で何も見えなかったけれど——肉の焼ける匂いが微かに臭ってくる。



「てめえ……！」

片山さんがあたしを放しながら立ち上がる。表通りに続く道の先には先回りしてきたらしい白沢が立っていた。自分のシャドウを盾にするようにして、そしてそのシャドウも引け腰になりながらも敵意を剥き出しにした目であたし達を睨んでいる。もう身を隠す場所は無く、見た物を燃やす能力を持つ白沢のシャドウを相手にするにはどうしようもない状況だった。

「ぶっ殺してやる……！」

血走った目で睨む白沢があたし達を睨んで言った。

「逃げる」

片山さんが呟く。あたしを守るようにして立つ片山さんの背中では酷く焼け爛れていた。

「やれ！」

「逃げる……！」

白沢の声と片山さんの声が重なる。顔を両腕で隠しながら突進する片山さん。しかしその腕は即座に燃え上がり、苦しみを堪えるようなくぐもった声が聞こえてくる。

「くそ！」

思わずあたしは水の剣を片山さんの頭上に投げる。すぐに剣は水になり片山さんに降り注いだ。

「糞野郎！」

びしょ濡れの片山さんは足を止めない。火傷を負った腕を振り上げ殴りかかろうとした瞬間、白沢は自分のシャドウを文字通りに盾にした。片山さんの拳は小さな女の子の顔面を打ち、白沢はその隙を突いて片山さんを蹴り上げる。

だが片山さんは怯まない。白沢の髪を掴み、引き寄せ、頭突きを食らわす。怯んだ白沢を押し倒して顔面に拳を叩き込み――

「片山さん危ない！」

白沢のシャドウが顔を抑えながら立ち上がり、片山さんを睨んでいる。助けに入ろうと走り出していたあたしももう間に合わず――

しかし、シャドウの炎が片山さんを焼く前に、黒く長い鎖のような物がシャドウに迫った。

シャドウが間一髪で避けるものの鎖は肩を深く抉り、建物の壁を穿つ。

「な、なんだ……!？」

驚きながらも鎖が飛んできた方向を見る。こちらに向けて走り寄ってくる人影の姿が見えた。夜の闇の所為で一瞬誰か分からなかったけれど、近付くにつれて見えてきたその姿は桜と一緒にこの事件の解決に現れたアダムさんだった。アダムさんは中空に拳大の黒い玉を浮かせ、その先からさっき白沢のシャドウに向けて放たれた黒い鎖が伸びていた。

「大丈夫かい？」

言ってアダムさんは更に三つの黒い玉を作り出す。怯えた様子を見せるシャドウがそれでも健気に、まるで白沢を守るようにあたし達を睨みつけ、まずはアダムさんから倒そうとするようにして視線を固定する。

「そいつ、見た物を――」

あたしが言い切るよりも先に、アダムさんは中空に浮かべた四つの玉からそれぞれ鎖を伸ばし、シャドウの攻撃よりも早く攻撃を仕掛けた。

瞬間戦慄する。北さんの時もヴァイオレットさんの時も、あたしは正面からでも戦えると思っていた。実際二人の攻撃が見えないと言う事も無かったし、あたしには姫がいる。どうにだって出来ると確信していた。でもアダムさんは違う。鞭のように振るわれた二本の鎖がシャドウの腕を、建物の壁を、コンクリートの地面を瞬きほどの間も無く切り裂いて破壊する。そんな武器の質の違いと言うのもあるだろう。でも――あたしは目の前の能力の正体も知らない敵に攻撃をしつつ、残った二本の鎖で、明後日の方向から突然放たれた黒い風の奇襲にまで対応出来ない。傍から見えていたあたしにすら気づかなかった攻撃になんか対応出来るはずも無い。秋子さんか

らアダムさんはあたし達のような半端な能力なんかじゃない、戦う為の能力を戦う為だけに洗練した戦闘員だと聞いた事を思い出した。

「これはこれは……！」

あたしも噂でしか聞いた事が無い黒い風。セブンと会った時にセブンはその攻撃を見せなかったけれど、確かに黒い風としか言いようが無いものだった。そんなあたしですら見た事がない攻撃による奇襲にも対応したと言うのにアダムさんは酷く焦った表情を見せている。見ればセブンの一撃を受けた鎖の一本が砕けていた。そしてそのセブンは確かに攻撃をしてきたのだけれど、その姿を見せていない。表通りで驚きでざわめいている通行人に紛れているのか、どこにも見当たらなかった。そして――

「逃げよう、えっと、桐式さん？」

セブンのどこから放たれたかも分からない攻撃が迫る。黒い風、黒い壁、黒い衝撃波。闇に溶け込んでいて街灯に照らされてなければ見るのも難しいその攻撃をアダムさんは避け、建物の壁を破壊して貫通する。アダムさんはあたしを抱えてあたし達が来た道を戻るように走ろうとする。

「ま、待って！ 片山さんが！」

「カタヤマ――どっちだい！？」

アダムさんが立ち止まって振り返ると、そこには白沢の上で馬乗りになったままで呆然とアダムさんの戦いを見ていた片山さんと、腕を断ち切られながらも白沢を助ける為に青ざめた顔で片山さんを睨みつけるシャドウが居た。片山さんの事を指差したあたしを見た瞬間、アダムさんは四本の鎖を伸ばす。二本は片山さんの体に絡み付いて自分の方へを引きつけ、二本は何時の間にか迫っていたセブンの攻撃を防いでいた。セブンの攻撃を防いだ二本の鎖は砕け、そして数瞬の間を置いて迫る二発目の攻撃を鎖の大元である黒い玉の一つで受ける。大きな音を立てて砕けた黒い玉を――アダムさんは明らかな怒りの籠った表情で睨みつけていた。そして暴れ

る片山さんを鎖でスマキにし、その細い体のどこにそれだけの力があるのかあたしを肩に担いで路地裏の奥へ奥へと走っていった。

### 第三章 無口七緒 その十三

#### ◇Side 無口七緒

触れずとも肌を焼く程の熱量を持つ炎の固まりが身を屈めて走る僕の頭上と背中を掠め、背後で轟音と共に着弾する。踏み込む足を一瞬でも躊躇したら間違いなくその炎に僕の身は焼かれていただろう。その事実思わず顔が引き攣った。

まるで戦争映画の中にでも紛れ込んだようなその状況を一番楽しんでるのは目の前で僕を待ち構えるイチだった。いや、楽しんでいるというよりは喜んでいると言った方がいいのか。

イチが投げた最後の爆弾はまさに奥の手、切り札、最終兵器。僕が全力でイチに向けて駆け寄りなければどの場所に居ても直撃していたであろう絨毯爆撃をする、クラスター爆弾のようなものだった。爆弾使いを相手にするには接近戦。それを信じた僕の読みは正しく――いや、イチがその気ならば僕の接近すら許さなかっただろう。これはイチが僕の為に用意した唯一つの、たった一つの、唯一無二の穴だった。三つの爆弾、三つの試練。それをクリアした僕の為にイチはただ笑って抵抗する様子も見せず両手を広げて僕の拳を受け入れようとしていた。

強く、深く踏み込み僕はイチに向けて拳を振り上げ――そして盛大に空振る。そのまま二歩、三歩と走ってきた勢いを殺しながら進み、立ち止まった。

「……どうして殴らないんだよ」

「殴る必要もないし、自分を殴る趣味もない」

そんな会話の後、僕とイチの間にあった重い緊張が解けると途端に僕の足に力が入らなくなり思わず膝を突いて四つん這いになってしまう。イチはそんな僕を見下ろしてからその場に尻餅を付き、枯葉の上に寝転がる。僕は一度イチと同じように仰向けになり、上半

身だけを起した。

「お前は不器用だな」

思わず自虐めいた事を言ってしまう、その後で後悔するように顔をしかめてしまうと、イチが笑う。

「どうだ、やれそうか？」

イチが軽い口調で言った。魔術師として大成する事、管理者としてこの町を守る事、人として桐式を守り抜く事。その全てに対して僕は明確な答えを用意出来なかった。だから――

「大丈夫だろ」

自分に言い聞かせるように、自分に言い聞かす。

「なら安心だ」

僕もイチもお互いを見ていない。それでも僕が言った事にイチが笑っている事が手に取るように分かった。

「紅葉とはどうなんだよ。キスでもしたのか？」

「さあな」

はぐらかすものの、何も無かった事は分かっているだろう。僕をからかっているだけだ。

「ほんと、不器用だよな僕らは」

く、とイチが笑う。そんなイチの体が、存在が段々と薄れているのに気付いた。ついに体を保つ魔力も無くなりかけてきたようだった。

――それと同時に、僕の中にイチの記憶が流れ込んでくる。元々一つだった者が別れ、そしてまた一つに戻る。たったそれだけのことなのだけれど、イチは厄介な記憶まで持って戻ってきた。

「僕はさ」

イチが虚ろな口調で話し始める。意識が混濁する。もう僕がイチなのかイチが僕なのか――

「周りの人間が羨ましかった」

「そうだな、羨ましかった」

「他愛ない世間話で盛り上がって、暑い寒いって言うだけの非生産

的な話を話して、好きだ嫌いだって話で時間を潰して。そんな奴等が羨ましくて仕方なかった。なんであんな風に仲良くなれるんだろうって思ってた仕方なかった」

「……そうだな」

「僕はそんなお前の羨望が生んだ存在なんだ」

「らしいな」

「僕はお前がなりたかったものだ」

「そうか」

「僕になれるか？」

「……難しいなあ」

「だろうな」

はは、とイチは笑った。

思い返せば、イチはずっと僕を守っていてくれた。北さんの時もヴァイオレットさんの時もイチは何よりも僕の身を案じてくれていた。自分の想いを抑え込んで僕と桐式の仲を取り持ってくれた。黒い風の凶行が始まってからは僕から離れて行動するような事はしなくなった。

どれだけ軽口を叩き、僕の不機嫌を買おうとも、常に僕を守ってくれたのはイチだった。常に僕の事を想ってくれたのはイチだった。

「どうだ」

イチが体を起こす。

「きちんとお前の使い魔してただろ？」

見栄を切って言い放ったイチ。何の事はない、使い魔は主人を守るモノ。イチはその本分を忠実に実行し、僕はそれを認めようとしていなかった訳だ。

「――七緒」

体を起し、ぽん、と僕の肩に置かれた手は微かに手の輪郭を残しているだけであり、消失するのも時間の問題だった。それは手だけではなく、イチの全身もだった。守風さんや北修一のように怪我をしていない所為か消失は体全体で緩やかに、一斉に始まっているら

しい。

「紅葉の事、僕の分まで守ってやれよ」

そんな事は言われなくても分かっていた。僕が言いたい事もイチが言いたい事もお互いが分かっている。今の僕達の間では言葉なんかは必要ない。それでも言葉にしなくてはならなかった。それは同じ人を好きになった同士だから。自分に、言い聞かせる為に言葉にせざるを得なかったのだ。

「分かっている」

だから僕も言葉で返す。必要は無くても、言葉で返した。

イチは何も言わない。何も言わず、何も残さず——言いたい事を全部僕の中に残して消えていった。霧のように、煙のように、まるで初めからいなかったかのように。

空を見上げる。雲ひとつ無い空には幾つかの星が瞬いていた。

「ほんと、不器用だな僕は」

言って、携帯が鳴り始めたのに気付く。携帯を手にとってみると一通のメールが入っていて、

「……よかった」

桐式からのメールに心底安心し、重い腰を上げて歩き出した。



石間町にたった一つの神社の程近く、アパートに囲まれた錆び付いたジャングルジムと滑り台だけがある小さな公園のベンチに桐式は座っていた。隣には眠っている姫ちゃんがいるだけで他には誰も居ない。

コーンポタージュの缶を両手で握りながらぼう、と空を見上げている桐式は、お待たせ、と僕が声を掛けるまで僕に気付かなかった。

「……イチは？」

「まあ、なるようになった」

そっか、と桐式は寂しそうに笑う。姫ちゃんを挟んでベンチに座



ると、桐式が上着のポケットから自分が飲んでいるのと同じ缶を僕に手渡してくれる。

「……冷たいな」

「こんな寒空に女の子二人を待たせるからだ」

「それは……ごめん」

言い訳のしようもなく、渡されたコーンポタージュを飲んでみる。喉に流れ込む冷たく甘いこの味もありだな、なんて思いつつ、さっきまでの桐式のように僕も空を仰ぐ。

「片山さんは？」

「さっきゲンさんと秋子さんが連れてった。腕に火傷してたけどそんなに酷いものじゃないから秋子さんの治療でもすぐに治るって。片山さん自身も病院に行って事が大きくなるのは嫌だって言ってたからそれでいいってさ。暫くは治療の為に七緒の家で泊まってもらうって」

「そっか。って、火傷？」

桐式のメールには片山さんを見つけた事とこの公園で待ってる事しか書いてなかったから詳しい事は分からない。

「……白沢の奴を見つけてさ。まあ片山さんの事聞いたついでに釘を刺したんだけど……あいつのシャドウがパイロキネシス使う奴でさ、それで片山さんの両腕が火傷したんだ」

「自然発火能力か。大丈夫なのかよ」

「うん。まあ最初はあたしも驚いたけど、力自体はそんなに強いもんじゃないみたい。ちよっと肌が焼けるくらい」

まあ確かに強力な力だって言うのならもっと慌てている。当事者の桐式が言うのだから大丈夫だろう。

「それと……まあこれは後でいいか」

頬を掻きながら桐式が口籠る。何かと思っていたが、ぽて、と僕の膝に頭を乗せてきた姫ちゃんの寝顔を見たらどうでもよくなった。

「はあ……一緒に初詣行こうかと思ったけど疲れちゃったなあ」

「明日にしようぜ。僕も疲れた」

今日はいろいろとあった。本当に――疲れた。そんな事を思っていると、

「あ、除夜の鐘」

桐式の言葉通りに町全体に響き渡る除夜の鐘が鳴り始めた。

人間の煩悩を打ち消す百八の鐘の音は以前までに聞いていたよりもどこか感慨深い音に聞こえてくる。

そこで、ふと思い出した。

「桐式」

僕の問い掛けに少し眠たそうな目をしながら桐式が僕を見る。

「イチがさ、その、消える前に桐式と姫ちゃんに伝えて欲しい事があるって言ってたんだ」

イチが消えた。その事実を口にするのは少しだけ辛かったけれど、いずれは桐式にも話さなければならぬ事だったし、それ以上にイチが桐式に伝えたい事がある事は本場で、僕もそれを伝えたいのは同じだった。桐式もそんな僕の気持ちを知って表情を引き締めていた。

膝の上の姫ちゃんを優しく起す。寝ぼけ眼の姫ちゃんと桐式の前に立ち、

「――あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします」

二人に向けて深く頭を下げる。僕とイチ、一人に戻った二人からの新年の挨拶に桐式はきょとんとした表情を見せた後に笑みを見せ、「こちらこそ、よろしくお願いします」

桐式と姫ちゃんも立ち上がって頭を下げるのだった。

◇

目を覚ますと、そこは秋人の知らない天井だった。いや、確かに見覚えはあるのだが両腕の火傷の痛みで朦朧とした意識は正確にその天井を記憶していなかったのだった。

布団の中から抜き出した両腕には真っ白な包帯が巻かれていた。傍にあった自分の携帯を取って開いてみると一月一日の十一時と表示されている。徐々に昨夜の事を思い出し、その時に負った火傷だと言うのに殆ど痛まないと言うのに気づくと改めて魔術の力と言うものに感心する。

体を起してみると、全身に鉛を付けたような倦怠感が襲う。火傷の治療は出来たが、流石に疲労の回復は出来ないようだ小さく溜息を吐いた。

窓の外から見る光景は当然普段秋人が見るものではない。

暫く窓の外を見ていた秋人は、やがて飽きたように視線を逸らして布団の上に倒れる。目を瞑ってみると、別の部屋から宴会をしているような声が聞こえた。その声をBGMに秋人は守風の事を思い出す。

自分を守ってくれた守風は死んだ。いや、己の下へと帰ってきた。守風の全ての記憶をもう一度思い返した秋人は自分の目じりから涙が零れたのに気付く。

昨夜は確かに自暴自棄になっていた節もある。しかしそれでも自分の意思の籠った行動で二人の人間が死に至った事実は確かなのだ。それをおいそれと忘れる事は出来ない。その事実から目を逸らして生きていく事は出来ない。

しかし――

「どうすりゃいいんだろうかなあ、守風」

包帯を巻かれた右腕を伸ばす。その手で掴めるものは何も無かった。



その日、七緒は少しかり晴れ晴れとした気分で家の宴会に加わっていた。体の疲れはあるが、それすらも忘れられるほどだった。イチの事で悲しみ、そして心配をしてきている紅葉達に多少の

後ろめたさはあるものの、七緒からしてみればイチは死んだ訳では無い。むしろ自分が今まで見てこなかったもの、目を逸らしていたものをイチのお陰で全て受け入れたという事実は七緒の心に押し掛かる不安をいくらか払ってくれたのだった。

そんな七緒の様子を知ってか知らずか、いつしか紅葉と姫、桜もそれほど気負わずに素直に宴会を楽しむようになっていった。

朝の寒さも和らぎ、外出するにも良い頃合になった頃、準備をする為に各々が部屋に戻っていく。紅葉も家から着てきた着物に着替える為に秋子と共に部屋を出て行く。

それから暫くしてちらほらと準備を終えた面々が宴会場に戻ってきた頃、桜と新五、六花の双子と共に福笑いをしていた七緒が準備をすると言って部屋を出て行った。しかし七緒は自分の部屋へは向かわず、真っ直ぐに源太郎の部屋へと向かう。襖の外から声を掛け、源太郎の応えを聞いてから部屋の中へと入る。

入り口に立って口籠る七緒。不審に首を傾げる源太郎が声を掛けようと口を開くと――

「父さん」

決意を固めたように七緒は口を開き、

「僕をもう一度、一から鍛えて欲しいんだ。その、武術の事と……魔術の事」

顔を耳まで赤くして父であり、師でもある源太郎にその言葉を伝えようと、源太郎は深く頷き、ニカ、と笑った。

### 第三章 二人のシャドウ

秋に入ったばかりの肌寒い風が窓を叩く音を聞きながら、その日、イチは生まれた。いや、無口七緒と言う人物から分けられた。その瞬間、イチは自分と言う存在が何者でこれから何をしなければいけないのかを知る。それはシャドウとペルソナと言うシステムを作ったオズワルドが生み出されたシャドウに対して唯一与えたものだった。

その事を理解し終わり、目の前の事に注意を向けた。そこには全裸で浴室内に立つ七緒の姿。時間にして十秒にも満たない事であるが、七緒は突然目の前に現れ自分のすべき事を確認する為に立ち尽くしていたイチに驚いて指一本動かす事も出来ないでいた。イチはそんな自分自身とも言える七緒の頭の先からつま先まで見た後、

「まったくときめかねえ」

思った事をそのまま口にする。その言葉に釣られるように、「誰だよお前は！」

慌てて自分の股間を手で隠しながら七緒は叫んだのだった。



じりり、と甲高い音で目覚まし時計が起床時間を告げる。寝足りないと言う気分に関われながらも目覚ましを止め、片山秋人は体を起した。秋の寒気が体を襲い、エアコンのスイッチを入れる。そこでふと、鼻に付くみそ汁の香りに気が付いた。なにやら料理をする音も聞こえてくる。

アパートでの一人暮らし故に隣の部屋で料理でもしているんだろう、と結論付けて秋人は自分の朝食を作る為に台所へ歩いていく。そして、

「ああ、その、おはよう」

オールバックにした長い金髪が目につく女が朝食の準備をしているのに気付く。身を包んでいた赤いジャージは秋人が部屋着にしているものだった。

「……昨日酒飲んだっけか……」

首を傾げる。しかしそんな記憶はなく、そもそも酒を飲んだからと見知らない女を連れ込むような事をする筈が無いと、秋人は確信していた。が、目の前の光景はどう考えても現実のものであった。夢ではない。

「まあその……とりあえず朝ごはんを食べて落ち着こう。それから色々説明するから」

言って、台所に立つ女はテーブルに朝食を並べ始めた。玉子焼きにソーセージにみそ汁。普段自分が作っているのとまったく変わらない料理。それを秋人は言われるままに口に運んだ。味にも変わりがなかった。まるで自分が作ったかのようなだった。

普段通りの時間に起きた事と、朝食を作る為に使う時間が無くなった事もあり時間に余裕がある秋人は、気まずそうにする女から事情の説明を受ける。まるで昔の自分を思い出すような髪型の女の言葉、秋人は何一つ疑う事をしなかった。重要な事を隠している事を含め、秋人はその女、後に守風と、秋人を守る風と言う意味の名を名乗る事になる女の事を、自分自身だと言う事に一目見た時から気付いていたのだった。

◇

イチと守風、二人が出会ってからそれほど時間を置かず、紅葉とそのシャドウ、姫を連れた四人で夜の見回りをする事になった。

しかし見回りとは名ばかり――イチも守風も、お互いが信用に足る人物かどうかの品定めをする為の行動だった。そこに紅葉が加わったのは、単に守風と会った時に居合わせてしまっただけと言う偶然である。自ら見回りと食事に誘った守風にしてみればイチと同時に

に本人の本質を見極める良い機会だと思ったのだろうが、イチにしてみれば戦闘になってしまった際に守りきらなくてはならない足手纏いが付いてきてしまったようなものだ。

まだこの時点では七緒に――イチに紅葉に対しての明確な好意は無かったが、それでもただ一人、自分に対して友人のように接してくれた人であると言う認識はあった。七緒こそ気付いていなかっただろうが、七緒の奥底に秘めた想いの顕現でもあるイチにとってみれば紅葉はその時点でも大事な人物なのだ。

イチは遠回しに守風のペルソナの事を聞きだす。しかし守風はそれに答えない。守風自身七緒も紅葉も敵になる相手ではないと半ば確信していたが、それでも秋人の事を教える事による危険の増加は否めない。故に守風はイチの問いには答えず、七緒や紅葉に対して自分が知っている以上の事を聞こうとはしなかった。そしてそれをイチは察していた。

お互いがお互いを牽制しあうその様は傍から見れば敵対した者同士の実行に見えるだろう。実際回りの人間からは仲が悪いように見えていた。しかし二人には、二人の間には敵対心以外に、共通の思想を持った仲間と言う感情も芽生えていたのだろう。しかしそれは周りの人間にも、本人達にも分かってはいなかった。



守風は嘆いていた。クリスマスを迎え、益々冷え込んできた冬の風は自身の体を、心を抉るようだった。

若かりし頃の秋人をイメージして作られたからか、守風は怒りの感情の起伏が激しい一面がある。しかしそれは世の中の悪に対しての怒りであり、守風は自分が募らせる怒りの感情が間違っていると思った事は一度としてなかった。しかし――その怒りを明確な敵意として吐き出してしまった事に、守風は激しい後悔をしていたのだ。いや、もう後悔は遅い。既に二人の命を奪ってしまった以上、

取り返しなとつかない。

秋人が怒っているのは単に怒りに任せた行動を守風が取ったからと言う事ではない。守風が自身から分けられて生み出された瞬間にその本質を見抜いた秋人にとって、守風が抱えた怒りは自分の怒りである事は分かりきっていた事だった。そしてそれはつまり、自分が守風と同様、上司と同僚の二人に対して敵意を持っている事に他ならない。だからこそ行動に移すならば自分でなければならなかった。守風がやってしまったのは、守風にやらせてしまったのは、自分が罪の意識から逃げる為の逃走でしかなかったのだった。警察に駆け込み守風の事を全て話す事も出来ない。それにそれをしたところで自身が罪に問われる事は無い。死なせてしまった二人が突風に煽られて車道に飛び出し、轢かれてしまった事実は多くの目撃証言があるのだ。どれだけ説明したところで――守風自身が秋人を守る為に自分の事を警察に話さなかった時点で、やはり秋人が錯乱したと取られるだけになるだろう。

お互いがお互いを守る為に、お互いがお互いを傷つける。二人は、どうしようもなく不器用なのだった。

――そして二人の目の前に、イチは現れた。



「姫？」

家を出た後に携帯に掛けられた電話の先で、姫が頷く。その反応にイチは安堵した。七緒に、紅葉に、姫に。自分を知る全ての者に嫌われようと、憎まれようと七緒を変えるために悪事に手を染める決意をしたイチにとって、その電話は唯一の救いであった。

「……ごめんな、変な事になって。それと、ありがとう」

電話の先で姫がどう言う反応をしているかは分からなかったが、それでも姫が自分を責めているような気配は無かった。

「俺も姫もさ……いつかは消えちゃうんだろうけど……」



頬に熱いものが流れているのに気付く。電話の先でも鼻を吸って泣いている様子が伝わってくる。

「俺は七緒の為にやれる事をやるよ。だからさ、俺が居なくなったら二人の事頼むな」

言って、電話を切った。一方的な願いではあったが、姫ならば守ってくれるだろうと確信していた。そしてそれ以上会話を続けていればそれこそ声を出して泣いてしまいそうだった。

ぐ、と携帯を握り締めイチは歩き出す。これからは心を鬼にしなければならぬ。鬼となり、あらゆる覚悟を七緒に決めさせなければならぬ。そしてその決意は、未だに自分を心配してくれている姫によって固いものとなった。

これからは迷うような事はないだろう、そう心に刻み、イチは唯一の繋がりとなるであろう携帯を投げ捨てた。



イチの攻撃は徹底したものだ。風による走力補助も足場である地面のいたる場所を破壊され、ともに走る事が出来ない道にされては効果も半減する。その上で自分を巻き込まぬように指向性を持たせた爆弾を周囲に浮かせたイチに対し、守風は攻め入る事が出来ない。黒い風――鞍馬智子を主人とするセブンのように風を飛ばして武器とする事の出来ない守風にとって近寄る事すら出来ない相手にはどうする事も出来ないのだ。

守風が近付けば爆発するような爆弾で守りを固め、まるで遊ぶかのように守風に向けて爆弾を放り投げてくるイチ。仮に近づく事に成功したとしても先の攻防で技術的な殴り合いではイチには勝てない事を守風は知っている。ヴァイオレット以外のシャドウの能力を知る守風は、少なくとも自分が知り、そして戦ったシャドウの中で一番やり辛く、強い相手であると評価する。単純にイチの能力は破壊だけを目的とした場合、全てのシャドウの力を上回っていたよう

にさえ感じていた。

「……まだやるのかよ」

そう呟いたのは、度重なる爆撃に体の至る所に火傷と怪我を負った頃だった。

力を使えば使うほど自身の消滅を早める守風に対し、イチは七緒から供給される魔力によってほぼ無制限に戦う事が出来る。例えば致命傷に至るような負傷をしたとしても、イチは七緒の元へと帰ればその傷を癒せる。そしてそれをする事が出来ない守風は強硬手段を取ってでもイチを倒し、秋人の元に向かうと言う選択肢はあり得ず、いかにして消耗を抑えてイチを倒すかと言う道しかなかった。

「——ん……？」

負傷する事でこれ以上の消耗をする訳には行かない、と考えるようになったからか、守風はいくらかクリアになった頭の中でふと気付く。

「どうした？ 俺の事なんか無視して片山さんのところに行けば、なんて事思いついたのか？」

にやり、とイチは笑った。そしてイチが戦闘前にやけに自分を挑発していた事も思い出す。

常識的に考えれば——力を使って走る守風の走力は並みの人間では到底追いつけない。そればかりは能力的にも技術的にも勝るイチに守風が勝っている部分だった。

「……お前わざと……！」

「まーな」

守風は怒ると目の前の事しか見えなくなる自分に嫌気が差した。それで今までどれだけの失敗をしてしまったか。

「……もう、いい」

守風の体から一気に力が抜ける。これ以上戦っても勝ち目は無いと悟ったのだ。

「ん、俺の言う事聞く気になったか？」

「……そうだよ」

イチが言った、駅前に白沢武人が居ると言う話が嘘である以上秋人が今でもその場に居るとは思えない。今更行っても遅い。

「ただし――」

「片山さんを助けて欲しいってんだろ？ 分かってるよ」

イチはバツが悪そうに守風に近付く。

「その代わりお前も俺の言う事ちゃんと聞けよ？」

「何をすればいいんだよ」

「伝言だよ。……夜の十一時に、ほら、守風と初めて会った場所あるだろ？ そこで待ってるからって。それと片山さんの事教えてやれよ。時間までは俺は何もしないから探して説教たれてやれって」  
「……初めからそのつもりだったのか？」

「成り行きだよ。俺だってこんな展開になるだなんて思って無かった。それにさ、俺だって消えるまでの間に色々と思いつく時間が欲しいんだよ」

言って、イチは頭を掻きながら守風に背を向けた。

「お前、まさか……」

「俺はお前と違って七緒が変わって欲しいんだ。あいつは自分の殻に閉じこもってばかりで世界を知らないからな。まあ俺の目的の為に前最後の時間を使わせるのは忍びないけど――」

「いやいい。どっちにしろ私にそんな資格は無いんだ。――なんか、お前の事勘違いしてたよ」

守風の言葉に思わずイチが振り返る。

「なんだろうな、お前は七緒君の事なんかどうでもいいって感じに振舞ってたように見えて……」

「なんだよ、お前そんな事で俺の事嫌ってたのかよ」

「それだけじゃない。紅葉さんに抱きつくわ、その、胸を揉んだりするわ！」

「羨ましかっただろ」

「んな訳あるか！」

怒った守風が怒鳴るも、イチは素知らぬ顔だった。

「いやいや、俺ら体は女だけど中身が男だからな、羨ましくないはず無いだろ。ってかお前紅葉の事好きだろ？」

「んが!？」

守風の顔がボツ、と音がしそうな程に赤くなった。その反応だけで凶星を突かれたと言う事が分かる程だった。

「あーやっぱり。どうせ組み手をしに来たのだって紅葉に会いに来る為の方便だろ」

「んん……! う、うるさい! 私はもう行くからな!」

イチが爆破した所為で散らばったコンクリートの破片をイチに向けて蹴り飛ばす。それをさっとかわし、

「ところでそのイタイ服装はなんなんだ？」

守風が怪我の治癒の為に一度体を再構築した際に纏った特攻服のような服装を指摘する。

「しし知るか! 秋人に聞け!!」

明らかに動揺したように叫びながら守風は走り出した。その言葉の裏に、知りたいのなら秋人を助けろ、と言う懇願にも似た真意を察しながらもイチは軽く微笑み、

「じゃあな。楽しかったぜ」

もう豆粒ほどにしか見えない距離まで走っていつてしまった守風の背中に呟いた。



風の力を受けて走る守風。しかし走れば走るほど自身を構成する為の魔力が減っていく。先のイチとの戦闘の所為もあり、もう数分と保たないほどに魔力は消耗していた。

だがそれでも走るのを止めない。たとえ風の力を使わなくとも精々十数分だけ生き永らえる事が出来る程度だった。どちらにしても多くの場所に行ける訳でもなく、守風は七緒の家を目指す以外に心当たりが無い。しかしその判断は功を成し、かくして守風は

イチとの約束を守る事が出来たのだった。

イチに頼まれた事と、自分の願いを二人に伝える。イチの真意は話さない。二人の様子から見ても、イチの考えは二人に気付かれてるように見えたからだ。

全てを伝え終え——守風はその場を去った。二人ならば秋人を止めてくれるだと確信した守風にもう悔いは無かった。あるとするならば——

「まあ、俺なんかが入り込む余地はなかったなあ」

消えかけた手を空に向ける。透けた手の平から小さな星がちらほらと見えていた。

守風は紅葉に好意を寄せていた。悪を許せないと言う理由から七緒達に協力していたが、心の隅には紅葉と会う事が出来るからと言う理由もあっただろう。しかし気恥ずかしさが先行した為にまともな状態だった事を思い出し、結局自分もただの人間なのか、と守風は苦笑する。

そして魔力が無くなり、もはや人としての形を保っている事すら出来なくなると、

「……まあそう言うわけだ、お前は紅葉さんの事を好きになったりするなよ、秋人」

最後の最後に守風は秋人の事を、自分自身の事を想い、その身と想いと記憶を主の元へと返した。

## 人物紹介（三章までのネタバレあり）

### ◇ペルソナ

無口 なく ななお 七緒

主人公。十七歳、高校二年生。魔術師である無口源太郎の息子で弟子。引きこもりがちと言う訳ではないが、魔術師としての自分を確立する為に他人との接触を持つとうとはしない。が、桐式紅葉やイチとの出会いで心を開くようになった。

桐式 きりしき 紅葉 もみじ

ヒロイン。十七歳、高校二年生。剣道部。一人で不良数十人を一人で倒した事で一躍有名人になった。人と関わろうとしない七緒を気に掛けたりする面倒見の良い姉御肌。魔術師である七緒と出会い、興味本位と正義感から七緒と共に活動するようになった。

ヴァイオレット・アヴァロン

二十六歳。魔術師であり、この事件の首謀者オズワルド・アヴァロンの姉。魔力探知により魔術師や魔術が発動された場所を探し当てる能力と治癒魔術を持ち、その力でオズワルドを探しに来たことでこの事件に巻き込まれる。

片山 かたやま 秋人 あきひと

二十八歳。普通のサラリーマンであったが、ペルソナとして選ばれてしまう。

鞍馬 くらま 智子 ちこ

十八歳、高校三年生。魔術師。七緒達の先輩であり、その美貌故に学校のアイドルではあるのだがそれ以上に紅葉の活躍が響き渡り、

下級生達にはあまり存在を知られていない。七緒以上の魔術師ではあるのだが、ペルソナとなってからは凶行に走り始める。

白沢 武人  
しらさわ たけひと

十七歳、高校二年生。七緒と紅葉の同級生だが、他人と関わろうとしないだけでなく自分が必要な場合は無理矢理にでも他人を連れ出すという性格もあり、紅葉ですら諦めたほどに協調性が無い。

北 夕子  
きた ゆうこ

四十七歳。無口家の元家政婦。夫の死により家政婦をやめたのだが、その死は自分のシャドウによる凶行だった。

◇シャドウ

一 いち

無口七緒のシャドウ。七緒の嫉妬や破壊衝動などの想いを受けて生まれたのだが、同時に七緒が更生してほしいと表に裏に行動する。様々な種類の爆弾を作り出す事が出来る能力を持つ。

姫  
ひめ

桐式紅葉のシャドウ。自分自身、水を操る事も出来るが、手袋に変身する事で紅葉の意味でも水を様々な形に操る事が出来るようになる。

ジョン・スミス

ヴァイオレット・アヴァロンのシャドウ。ヴァイオレット以上の治癒能力を有しているものの、それ以外の能力に特に秀でた部分は無い。

守風  
かみかぜ

片山秋人のシャドウ。秋人が高校生時代に行ってきた正義の心を受けて生まれた。昔の自分に対する憧れを抱いている秋人に対し、今のままで居て欲しいと、この事件に対して秋人を巻き込まぬように戦っていた。

#### セブン

鞍馬智子のシャドウ。七緒に好意を寄せる智子の想いを受けて生まれた故に、七緒と同じ姿を持つ。強力な威力を秘めた黒い風を放つ。

#### 名無し

白沢武人のシャドウ。名前すら付けられず、白沢の命令によって援助交際をさせられている。視界に入ったものに対して発火させる能力を持つ。

#### 北 修一きた しゅういち

北夕子のシャドウ。夕子の潜在意識の中で憎んでいた夫を殺し、以後は夕子の為に世話を焼き続けるも、そんな自分すらも憎みストレス発散の為に辻斬り行為をしていた。

#### ◇その他

#### 無口 源太郎なく げんたろう

六十八歳。魔術師。歳に似合わぬ若々しさを持つ大魔術師。

#### 冬畑 秋子ふゆはた あきこ

五十二歳。魔術師。この事件を解決する為にパレットから派遣されてきた治癒魔術を扱う魔術師。

#### 元永 桜もとなが さくら



十七歳、高校二年生。チューブ。突如として超能力に目覚めてしまい、アダムに保護された少女。事件解決の為の応援にアダムが石間町にやってきた際に連れて来られた。

ニキータ・ポリソヴィチ・アダム  
超能力者。事件解決の為にパレットから派遣される。

オズワルド・アヴァロン

二十歳。魔術師。この事件の黒幕。ある条件を元にペルソナとシヤドウを生み出す。相手の思考や、その土地に残る思念を読み取る能力を持つ。

桐式 仁慈

四十二歳。刑事。紅葉の父親。北修一とセブンの起す殺人事件を追う刑事。娘に甘い。

桐式 菖蒲

三十九歳。主婦。紅葉の母親。七緒と紅葉の間を陰ながら応援する。代々神社の神官を務める家系の生まれ。

## 第四章 片山秋人 その一

◇Side 無口七緒

その日、父さんの部屋の中は非常に重く苦しい空気が漂っていた。その渦中に居るのは不摂生と言える細い体に冷や汗を掻いている男、オズワルド・アヴァロンと、その姉、ヴァイオレット・アヴァロンだった。

父さんはもちろんの事、僕、桐式、姫ちゃん、片山さん、秋子さんに元永。オズワルドの実験に関わり、そして今も尚巻き込まれ続けている面々が怒りや呆れと言った表情を浮かべながらオズワルドを取り囲んでいる。僕らの怒りの矛先は明らかにオズワルドなのだが、そのオズワルドを守るようにヴァイオレットさんが神妙な面持ちで佇んでいた。

「おい、何か言う事ないのかよ」

ずい、と歩み出たのは桐式だった。手に握る竹刀は道場に置いてあるのを借した物だ。

「はは、そのなんだ、お土産の八つ橋をあげよう」

瞬間、桐式の持つ竹刀が良い音をさせてオズワルドの頭を打った。ぎゃん、と言う情けない声を出してオズワルドが頭を押さえて体を仰け反らせる。

「残念だったな、京都土産であたしのご機嫌を取るんだったら湯葉を買ってくるべきだった」

「随分渋いな」

「だって美味しいんだぜ」

ふふん、と僕に笑いかけてくる桐式だけど、すぐに表情を強張らせてオズワルドを見据えた。しかしその前にヴァイオレットさんが立ちはだかる。

「オズワルドも反省してる事だし、もう勘弁してやってくれないか

な？」

苦笑を浮かべてヴァイオレットさんが弟を庇う。その様子にその場に居た面々が大きく深く溜息を吐いた。

元日から一夜明け、一月二日の今日。ヴァイオレットさんはオズワルドを半ば強制連行のような形で引き連れて僕らの前へ現れた。曰く、

「京都で遊んでいたのをひっ捕まえてきた」と言う事だった。

以前僕らと戦い、その時にも言い聞かせるから、と言ってヴァイオレットさんはオズワルドを連れて行ったのだけれど、それから一週間も経たない間にオズワルドはヴァイオレットさんの所から脱走、行き先も告げずに遊び歩いていたんだとか。その事実を言えばオズワルドの立場が無くなる――ヴァイオレットさんが心配した所で僕からしてみれば初めからあの馬鹿に立場は無い――との事で黙っていたらしく、元永とアダムさんが来る時に立会いに来れなかったのも事件の收拾の為に動いていただけではないらしい。まあ、それでも何の手掛かりも無い状態で日本どころか海外にまで行きそうな人一人を探して見つけたのは流石と言って良いんだろう。隠しておけば誰も疑わないだろうに、オズワルドが逃げた事も結局は言ってしまうあたりヴァイオレットさんは本当に良い人なのだけれど、こんな姉が居ながらなんで弟がこんな風になるんだろうか。いや、まあヴァイオレットさんが甘やかしすぎた所為なのは明らかだけれど。「まあ、オズワルドには言っても聞かんからのう。とりあえず事態の收拾に協力する事を約束さえしてくればワシはもうどうでもいいよ」

はあ、と大きな溜息を吐いて言ったのは父さんだった。

「そう言えば僕が破門された時もそんな感じでしたね」

と、オズワルド。

……破門？

「そうだよ七緒。僕は破門されたんだ。君の兄弟子ではあるが――

まあ我が師匠からしてみれば身内にも話したくない恥ずかしい弟子  
って事さ」

それで父さんは僕にオズワルドの事を話さなかったのだろうか、  
と父さんを見てみると、なにやら難しい顔をしていた。

「さんざんおべっかを使って必要な事だけ教わって、その上でワシ  
の研究資料を根こそぎ持っていったようなのを弟子とは呼ばん」

父さんにしては珍しく一方的に怒っているその様子を見ると、な  
るほど、話すらしたくない相手だったのだろうと言う予想が付いた。

「まあそれも昔の話さ。今は今の話をしよう」

「どの口が言いやがる」

開き直ったオズワルドに桐式の竹刀が振り下ろされたが、その竹  
刀をヴァイオレットさんの手が止めた。素手で竹刀を止めるのは痛  
くない筈が無いけれど、ヴァイオレットさんは凄まじいと言える治  
癒魔術を使える。その程度の痛みなど一瞬で消えるのだろう。

「まあオズ君の言うとおり、今は状況の整理をしましょう」

そう言うって場を納めようとしたのは秋子さんだった。ぱんぱんと  
両手を叩いて皆の注目を集めると、咳払いをして話を始める。

「まずは今残っていてすぐに対処しなければならぬ相手、鞍馬智  
子さんとそのシャドウ——セブンの動向から整理しましょう」

秋子さんが父さんの使っているノートパソコンを僕らに向けてく  
る。画面には今現在分かっている事を箇条書きして書かれていた画  
面が映っている。秋子さんは自前のパソコンも持っているらしく、  
携帯の使い方だって怪しい僕からしたら秋子さんの歳でパソコンを  
自由自在に使っているのを見るとなんだか出遅れているような気が  
して焦る。

「セブンは紅葉ちゃんに忠告しに来ただけだったのよね？」

秋子さんが桐式を見据えながら再度確認した。

クリスマスの日、僕と別れた後に桐式は鞍間先輩のシャドウに会  
ったと言う事をついさっき僕らは聞いた。情報を伝えてくるのが遅  
かったけれど——まあそれは僕の所為だから何も言えなかった。

「うん、あんまりこそこそ嗅ぎ回る様だったら、ってさ」

「無口と同じ姿なんだよな、そいつ」

腕を組みながら片山さんが溜息交じりに補足する。桐式は実際に、片山さんは守風さんの記憶を通してそのシャドウを見たらしく、その姿は僕と瓜二つなんだとか。その理由は考えればすぐに思いつくけれど――なんとも迷惑な話だ。犯行時に姿を見られていなかったからいいとして、見られていたら僕が犯人に間違われてしまいかねない。

「鞍間先輩は母親を殺したって言ってた。それ以外にも色々あって……かなり不味い精神状態なんじゃないかな。それこそ人を殺して回るほかに」

「でも最近は派手な動きは無かったんでしょ？」

桐式の言葉にヴァイオレットさんが質問を挟んだ。

「それは、アダムさんのお陰なんじゃないかな。昨日だって間一髪のところでは片山さんを助けてくれたんですよね？」

父さんが危険視する漆黒の称号を持つアダムさんだけど、今のところ変な動きは見せない。と言うよりは今どこで何をしているのかが分からないのだが、少なくとも昨日は片山さんを助ける為に動いてくれていたらしい。しかし父さんと秋子さんが片山さんを連れて戻った際に一人でどこかに行ってしまったとかなんとか。今も鞍馬先輩を探しているんだろうか。

「最近シャドウの被害が出なかったのは師匠のお陰なのかな。やる事はやってるんだねえ」

うんうんと元永が満足そうに頷いた。

「何を人事みたいに……」

「だって人事なんだもん」

ぷー、と元永が口を尖らせた。

「あたしは何にもお手伝いできないし、そろそろ帰らないといけな  
いしー」

残念そうに呟く元永。冬休みだからと言って高校生の女子がそう

長らく家を空けられる訳も無く、明日には帰らなければならないと言う話だった。と言うのもアダムさんの予想だとそれくらいには事態が収拾するだろうと言う事だったらしい。

「事件が解決しなかったらあたし一人で帰るからなあ。力が暴走しちゃったらどうしょ」

ううむ、と唸る元永に桐式が笑いながら大丈夫、なんて慰めている。が、それに対して難しい顔をしているのは父さんと秋子さんだった。

「……桜さん」

父さんが重い口調で元永を呼ぶ。

「申し訳ないんだけど、桜ちゃんはもう少しここに居てもらう事になるわ」

父さんの言葉が続けるように秋子さんが言った。当然元永のみならず、その場に居る全員が驚いたような表情を見せる。

「え、ど、どう言う事ですか？」

「……この事件を解決する為にパレットが寄越した応援は四名。アダムさんは一足早く桜ちゃんと一緒に来て……他の三名は大晦日前後に到着したって言う連絡はあったけれど今は連絡が付かない状態になってるわ。一番遅い人でも昨日のお昼前には連絡があったのだけれど、それ以降はまったく連絡が付かないの」

「それって、アダムさんみたいに独自に捜査してるんじゃ」

「かもしれないけれど、少なくとも彼とは日に一度は連絡が取れるわ。けど他の三人とは連絡そのものが取れないの」

「え、じゃあまさかセブンってシャドウに……」

元永が呟き、自分を帰す事が出来ないという理由を思い浮かべて絶句した。しかし秋子さんはそんな元永の想像を否定するように言葉が続ける。

「色々あったし、七緒君達には情報を伝えるのが遅れちゃったけれど……実はね、応援が来たって言う情報はアダムさんに逐一伝えであるの。同士討ちを避ける為にね。それで……」

秋子さんが言葉を濁して真っ直ぐに元永を見据える。何かを察したように元永が息を呑んだ。

「初めに来た人は最初の連絡の後、もう一度だけ連絡があったのよ。アダムさんと一度会うって。その直後から連絡が付かないわ」

「え、それってどう言う……」

元永が動揺を見せる。アダムさんの不審を父さんから聞いている僕らからしたら秋子さんが何を言いたいのかは分かるのだけれど、それを知らない元永は何事かという様子を見せていた。

「つまり三人の応援をアダムが殺害したんじゃないのかとパレットは疑っておるんじゃないよ。そして桜さんも同じように疑われておる。いや、ワシらは桜さんが何かを出来たとは思っておらんよ。殆ど誰かと一緒に居たか、この家にいたからの」

「え、でもそんなの……師匠は凄い良い人なんだよ？」

「ん……それは……」

言い淀む父さん。流石にお前の師匠は殺人者だ、なんて言えないだろう。

「でも……逆に言えばセブンってシャドウが殺してるとは考えられないんですか？」

まるで助け舟を出すかのように片山さんが意見を出す。

「セブンが他の三人を殺し、それでアダムさんが追い続けているとか。昨日俺を助けた時も偶然居合わせたんじゃないかってセブンを追っていたら俺達が居たって事も……」

「そうだな、その線も捨てられない。けど少なくとも秋子さんは昨日も今日もアダムからそう言った話は聞いていない。ワシからもそう言う話をしていないし……その話題を意図的に避けてると言うよりは、本人自身偶然だったから弁解する余地も無いと言う感じだのう。それに他の三人の話題も一度として聞いてない」

父さんが溜息交じりに言う。確かにセブンを追っていたら片山さん達と遭遇したと言うのならそう言う説明があって然るべきだろう。でも偶然セブンとアダムさんが居合わせてしまったと言うのなら、

聞かれでもしなければ自分からそんな話はしないかも知れない。本人がそう思っているのなら、こっちもそう思っていると思うのが筋だろう。応援の三人に関しては言わずもがな。自分が疑われる事になるだろう話題を、自分から持ち出す理由はない。

「ん……そっかあ」

自分が信頼し、自分を助けてくれている人が疑われている。そう聞かされて冷静に居られるとは思えないけれど、思いの外元永は僕達がアダムさんを疑っていると言う事実を受け入れているようだった。

「まあ、仕方ないか。疑いを晴らせるのは師匠だけだしねえ。あたしも疑われないようにしないと、か」

「……大丈夫か？」

「だいじょびだいじょび。……てことは解決するまでは帰れないのか……」

とほほ、と悲しむように項垂れる元永。

「そうね、でも桜ちゃんはずぐに帰れるようになると思うわ。多分近いうちに犯人は分かると思うから」

「え、目星……は付いてるんだろうけど、だれが犯人だったのは分かっているの？」

秋子さんがそうね、と言いながら小さく頷いた。父さんの話からすればアダムさんが一番に疑わしいのは明らかだけれどまだ確証が無いのだろう。

「そう言うことなの。ごめんね、桜ちゃん」

最後に秋子さんが謝るものの、元永はそれほど気にした風もなく笑った。とは言えやはり慣れない場所での慣れない生活が続ける事を思っただけ表情を曇らせた。

それからは父さんと秋子さんでこれからの方針を決め、オズワルドへの注意と協力を約束させて会議はお開きとなる。家族が寝ている朝早くに始めた会議だったけれど、思いの外時間が掛かっている欠食児童の双子やらが台所で昨日の残り物をつまんで話をしていた。



エサを待つ雛鳥よろしくピーピー鳴き始めた双子に言われるままに秋子さんが食事の準備を始める。しかし秋子さんはとても嬉しそうで、それなら良いかと父さんと二人で苦笑を浮かべる。

他の皆も起き始め、また宴会を始めそうな雰囲気になってくると、父さんと二人でお酒を運んでくる事になった。父さんの表の職業が酒屋だからだろうか、うちの家族は酒好きが多い。酒好きが多い所為か、宴会好きでもあった。だからこんな風に家族が集まってくると連日宴会が始まり、酒の量も増えるのだった。

秋子さんが作った料理を皆が宴会場となっている居間へと運んでいる中、僕と父さんがケースに入った瓶ビールを運ぶ。腕を伸ばしてケースを持ち上げ、がに股でガシャガシャと音をさせながら歩いていると、

「随分衰えたのう」

と、笑いながら腕の力でケースを腹の前まで持ち上げて普通に歩いている父さんが笑った。

「ん……」

以前ならもっと楽に運べたこのケースも、今では持ち上げるだけでも辛いものがある。毎日欠かさずに筋トレをしていても、それを数ヶ月もサボれば当然筋肉は衰える。

「まあ、せめて体はびしっと鍛えないとな」

「うん、まあ、せめて体は前のようにしたい」

魔術も、と言わないのは僕には出来る事と出来ない事がある事を理解し、納得してるからだ。とは言え魔術師として大成したいのも事実。今はその為の体作りをするのが優先だ。健全な肉体に健全な魂を。まず体を鍛え、そして魔術を極める。子供の頃に何度となく聞いたそんな教えを、僕はもう一度再確認すると共に父さんから学ぶのだ。

そんな決意をとりあえず心の奥に押し込み、年齢を重ねてもそれを感じさせない鍛えられた父さんの背中を追いつながら僕は歩いていくのだった。



巻き起こるは黒き竜巻。黒を纏うセブンと、黒を名乗るアダームの攻撃は打ち合い、混ざり合い、周囲の物を根こそぎ破壊する竜巻となった。

鞍馬智子の家は非常に大きく、無口家とも引けを取らないほどである。外界との接触を拒むように周囲を塀で囲み、そして敷地内の庭には木々が鬱蒼としていた。まるで手入れをしていないその庭は塀以上に外との接触を拒否しているようにも思えた。

そんな鞍馬家で二人は戦う。セブンの爆弾のような黒い風が、アダームの鞭のように繰り出された黒い鎖が木々を薙ぎ倒す。その一部は家に倒れ、壁を破壊するほどだった。

それだけの破壊を伴う戦いだ、しかし二人の戦いはアダームに大きな分があった。逃げ回るセブンを追うアダーム。その行く手を遮るのはセブンの風よりも、その敷地内に仕掛けられた多くの罠によるものだった。魔術師の本拠地には多くの罠が仕掛けられている。それを踏まえてアダームは乗り込み、そして苦戦しつつもセブンを追い詰める。セブンは自身の能力だけではアダームを御し得ず、仕掛けた罠を使って反撃の機会を伺うしか出来ない。

アダームが周囲に展開する黒い球は五つ。それぞれから伸びた細い鎖が鞭となり、剣となってセブンを襲う。幾重もの攻撃を避け続けたセブンだが、全てを避ける事は出来ずその左腕を絶つ。くぐもった声で唸るセブンにアダームは距離を詰め――そして切断した筈の左腕から放たれた風によって、アダームの展開した黒球の一つを破壊した。

「……厳しいな」

その二人の戦いに苦言を漏らしたのは家の中で様子を伺っていた智子だった。

魔力で構成されるシャドウはその力を使う為に自分を構成する魔

力を使う。ペルソナとの間に魔力の供給ラインがあればその都度魔力の補充が出来るが、どちらにしてもペルソナの魔力が尽きればそれ以上の戦闘は出来なくなる。無論体の修復に使う為の魔力もペルソナから供給されるものだ。この戦いでセブンは既に三度の致命傷を受けているが、その傷を智子の魔力によって修復している。魔力の高い者がペルソナに選ばれているとは言え、智子にとってもこれ以上の魔力の消費は厳しいものだった。

智子がセブンとアダームの位置を見て敷地内のトラップを発動させる。地が弾け、木の枝がアダームを襲う。しかしその攻撃はアダームの鎖によって防がれる。そんな事をもう何度と繰り返していた。「……チッ」

舌打ちは智子と、そしてアダームから。焦れているのはアダームも同じだった。

アダームの操る五つの黒球の内一つから伸びる鎖が智子の隠れる家に向けて放たれる。

「きゃあ！」

壁が碎かれ、天井が崩れる。慌てて頭を庇った智子だが、瓦礫は智子に当ることは無かった。倒れた木や牽制程度に放たれるアダームの攻撃でボロボロになった家。崩れた壁の影からは智子の母だった者の死体が覗いていた。

「……お母さん」

封印していた部屋から覗く母の死体を見て智子は覚悟を決める。

智子が崩れた壁から家の外に出る。同時にセブンが放った風が地面を抉り、巻き上がった大量の土砂が智子に降り注ぐ。顔を庇った智子が次に目を開けると、

「ッ……！」

目の前にはアダームの鎖を見に受けて立つセブンの姿があった。引き抜かれた鎖にセブンの体が傾ぐがその次の瞬間、四本の鎖がセブンの体をずたずたに切り刻む。

「まるでサイコロステーキ」

呟いた智子。目の前には智子の言葉通りの体になったセブンが居たが、しかしその体は魔力の霧となって智子の元へと戻っていった。「霊子化か。死ぬ程の攻撃を食らわせてもそうすればまだ生きられる。便利だね」

「そうですね」

「覚悟を決めたのかい？」

「……」

アダムが智子の目の前に立ち、黒球を向ける。

「あの」

「ん？」

「名前は？」

町を歩けば振り向かれ、声を掛けられる端正な智子の顔がアダムを見上げる。吸い込まれそうな黒い瞳がアダムをしつかりと見据えていた。

「何故そんな事を？」

「名前を聞かないと不便じゃないですか。これから色々と」

「……君はこれから死ぬんだよ？」

「それなんです……え、と、私を殺す人の名前くらい知りたいじゃないですか」

そんな言葉を聞いてアダムが溜息交じりに苦笑した。

「ニキータ・ポリソヴィチ・アダム。これで満足かい？」

「ロシアの方、ですか」

智子の目の色が黄金に変わる。

「えっと、確かロシアではファーストネームが一番初めに来るのでしたっけ。……それで、今夜はサイコロステーキにしようと思うのですが、どうでしょう。ニキータさん？」

アダムの動きが一瞬止まる。それ故に自分の首の後ろに伸ばされた智子の腕を振り払う事が出来ず、引き寄せられて急速に近付いてくる智子の顔から逃げる事が出来なかった。

ガチ、とお互いの歯が当るような口付け。すぐに離れた二人の顔

だが、

「いたた……ふう、何とか成功したあ」

黒球から伸びる鎖が智子を襲う寸前、そのままの状態で呆然と立ち尽くすアダームの前で、智子は戦闘が終了したと言う風に自分の口を押さえていた。

### ◇Side 無口七緒

ぶっちゅううう、と音がしそうなほどの口付けが、酒に酔った新吾兄と六花姉を襲う。その相手はヴァイオレットさんだった。他にも犠牲になった人は多く、と言うかこの家に今居る人全員が犠牲になっている。発端となったのは酒は飲めないと言うヴァイオレットさんに少しだけと言って酒を勧めた長男の太一兄さんが原因だった。「姉上は酒が飲めないんじゃない。気分が高まったり酒を飲んだりすると誰彼構わずキスをして回るから飲まないんだ」

と言うのはオズワルドの談。まるで生気まで吸われたようにげっそりとしているのはヴァイオレットさんにキスをされたからだ。欧米なら家族でも挨拶でキスをするくらいは良くあると聞くけど、どうにもオズワルドは必要以上にヴァイオレットさんとの間で姉弟の血縁を守っているらしく、それを破られた事で非常に落ち込んでいる。

「あたしもななちゃんとキスするー!」

と、襲い掛かってきた楓ちゃんにチョップを叩き込んで沈める。しかし敵は増え、

「あたしの七緒に手を出すなー!」

なんて言って桐式が飛び掛かってきた。そして姫ちゃんも同じように飛んできて、楓ちゃんは僕に這い寄ってくる。三人に抱きつかれて身動きが取れなくなり、

「楓さん、あたし七緒の彼女なんだけど!」

「ななちゃんはあたしのお婿さんですう!」

と、僕の頭の上で二人がぎゃあぎゃあと叫び始め、ここぞとばかりに姫ちゃんがあぐらをかいた僕の足の上に納まっていた。家族からの黄色い声を受け流しながら目の前の料理を姫ちゃんと二人で分けながら食べる。

「七緒はもてるなあ。あ、楓、今僕は彼女募集中なんだけどどうだい？」

「外人はパスだよパス」

僕の隣に座るオズワルドの頭をべしべしと叩く楓ちゃん。

「差別だ」

「知らない知らない。はははは！ ドラムマニアー！」

笑いながら打楽器の如くオズワルドの頭に平手が叩き込まれた。酔った上での発言なんだろうけれど、毎回楓ちゃんには好きだの結婚するだのと言う事を言われているから困る。

「何を嬉しそうに！」

と、桐式が楓ちゃんと同じように僕の頭を連打し始めた。

「酔いすぎ」

その手を止め、強引に隣に座らせる。

「ひゅーひゅー！」

なんて言って新吾兄が煽ってくるのを無視する。

こんな感じで二日の夜も更けていく。会社もあり、そろそろ家に戻らなければならぬ人達も居て、家族全員勢ぞろいなのは今日で最後だった。家族が揃うのは楽しい。去年も一昨年もそれ以前も。お正月、ゴールデンウィーク、夏休み。集まれる時は集まるのが我が家の暗黙のルールーいや、そんな厳格なものじゃない。会いたいから、騒ぎたいから。会えるから、騒げるから集まる。ただそれだけだ。

そんな家族が毎年毎回、僕を気に掛けてくれたのは気付いていた。確かに去年までの僕は腐っていた。不貞腐れていた。でも今年はずう。まだまだ悩む事はあるだろうけれど、イチの存在が、桐式が存在が僕を変えた。そんな心変わりを皆がそれとなく察したの

だろう、いつもとは違って心配そうに気を掛けるのではなく、背中を押してくれるように気を掛けてくれているのが分かった。

「はは、何を恥ずかしい事を考えているのか」

「うるせ」

人の心の中を勝手に読んでいるオズワルドの頭を叩く。そう言えはこいつが横に居ると考えている事がばれてしまうのだった。

「ま、君じゃ僕のようににはなれないだろうけど頑張りたまえ」

ははは、と笑うオズワルドの頭をもう一度引っ叩く。

来るもの拒まず、去るもの追いまくる。そんな家族との楽しい一時は夜更けと共に解散となった。次に会うのは五月の連休か、なんて事を話しながら父さんは太一兄さんや双海姉さんと別れを惜しむようにお酒を飲んでいる。仕事で特に忙しく会いに来る暇が無い長男長女との酒宴をする父さんを見ながら僕は部屋に戻る事にした。そんな僕の後ろを桐式と姫ちゃん、そして楓ちゃんがついてくるが、

「こら、七緒が迷惑してるでしょうが！」

なんて言って三汐姉さんが楓ちゃんの首根っこを捕まえて連れて行ってしまった。

「あ、あたしの目が黒い内は変な事させないからー！」

なんて叫ぶ楓ちゃんに、

「変な事ってなんだろうな、七緒？」

と、桐式はニタリと笑いながら聞いてくる。僕はそれに答えず自分の部屋へ向かった。

僕はあんまり酒に強くないけれど、今日は場の雰囲気もあって少し飲みすぎてしまった。桐式も同じで、お互い顔が赤い。そんな状態で部屋に戻り、なんともそわそわした空気の中、ゲームを始める事にした。

もはや定位置となった僕の膝の上に座る姫ちゃんとその隣に座る桐式で始めた桃鉄がそれなりに佳境に入ったころ、部屋の戸が叩かれる。どうぞ、と言って入ってきたのはヴァイオレットさんと片山

さんだった。

「お、桃鉄。俺も混ぜてくれよ」

なんて言って笑う片山さん。もう一度設定をしておいて初めから始める。四人用だったから一人あぶれるけれど、ヴァイオレットさんは見てると言って他の四人で始める事になった。

「……片山さん、腕の火傷はもう大丈夫なんですか？」

桐式がちらちらと片山さんの腕を見ながら聞いた。

「ああ、全然痛まないよ。すげーな、魔術って」

「ヴァイオレットさんが治したんですか？」

「私じゃないよ」

ゲームが珍しいのか、真っ直ぐに画面を見詰めながらヴァイオレットさんが答えた。

「これくらいの怪我を治すなら私の力よりも秋子の魔術の方が良い」

「何か違いがあるのか？」

当事者でもある片山さんが興味深そうに首だけを後ろに振り向かせて聞いた。ある情報筋によると二人は歳が近く、なんだか良い雰囲気だったとか何とか。そのまま結婚すれば自分に対する干渉が減って良いとか何とか。誰なんだろう、その情報筋は。

「私の力は本人の生命エネルギーを無理矢理集めて治癒に使うような感じでね、大怪我であればあるほど寿命が縮まる。まあ、簡単に説明すれば電池を二本使わなければ動かないものを一本の電池で動かそうとするようなものだよ。秋子のは自然治癒力を高めるものだからね、あちらのほうが健康には良い」

「へえ、そりゃ大変だ」

「だろう？」

と、ある情報筋じゃなくてもわかる程に良い雰囲気の二人の会話に割り込むように、

「って、僕ヴァイオレットさんに大怪我を治してもらったんですけど……」

刀野郎、北修一に刺された傷の事を思い出しながら聞く。



「あのまま死ぬよりはマシだろう？」

しかしヴァイオレットさんは悪びれた様子も無く言い放った。酒に酔ったオズワルドが零した、姉上は太く短く生きる女だ、という言葉の意味を理解できた気がした。

「まあ、これ以上私に助けられなくてはダメだ、大怪我をしない事だ」

「肝に銘じておきます」

逆を言えば、寿命が短くなろうとも私は怪我を治すぞ、と言う脅迫をされた気分。助けて貰う筈なのに脅迫とはこれいかに。

「それにしても応援に来たのがニキータとは、きな臭いな」

僕と片山さんでボンビーの押し付け合戦をしている所に、ぽつりとヴァイオレットさんが呟いた。

「アダムさんの事知ってるんですか？」

「噂程度にな。あんまり良い噂は聞かないよ」

「どんな噂なんだ？」

ううん、と唸りながら考えるヴァイオレットさん。酒に酔っているからか、赤い顔はどこかの空な感じで口調もぼうとしているようだった。そう言えば片山さんは顔を赤くしていない。酒に強いんだろうか。

「パレットが制定する称号の制度は知ってる？」

全員がゲームをする手を止めてヴァイオレットさんに向き直る。

「確かアダムさんって黒の称号を与えられてて、危険視されてるんだっけ」

桐式が記憶を探りながら答えると、ヴァイオレットさんは小さく頷いた。

「正確には漆黒ね。……絵の具で黒の色を作る方法、知ってる？」

ヴァイオレットさんが小首を傾げながら桐式に問うと、少し悩んだ後で、

「あ、RGBだ」

「そっちは光の三原色ね。色の三原色の場合は黄色と緑、そして赤。その三つを混ぜると黒の色を作り出せるの」

「それが？」

ふむ、と言葉を選ぶヴァイオレットさんに代わり、僕が答える。

「黒って言うのはつまり、あらゆる要素を含む力を持った超能力者の事なんだ。以前にはパレットに記録されている超能力を数十種類発揮させたって事例もある。でもそれを制御出来なくて暴走して、何十人って言う犠牲を出した事実もある。だから黒の称号を与えられた人って言うのはそれだけで危険視されるんだ」

「そう、そう言うこと」

「じゃあアダムさんも？」

「黒と漆黒は違うよ。偽りの黒、偽者の黒。黒より黒いものはなし。故に、ニキータは黒以上の危険視はされていない。でも偽りとは言え黒の称号を与えられたのには意味があるんだろうね」

ヴァイオレットさんの物言いはその真実を知らないと言う様子だった。

「黒ではないけど、黒に近い性質がある？」

もう話は終わりとばかりにヴァイオレットさんはぶつぶつと呟きながら一人の世界を作り始めた。

「つまり……どう言うことだってばよ」

「アダムさんを深く信用するな、って事だろ」

魔術師は縦にも横にもそれほど強い繋がりはない。自分の事を極力隠し、誰かと敵対した時に自分の出来る事が知られるのを防ぐのだ。称号を与えらる言う事はパレットから危険因子とみなされるか、パレットに対して何らかの功績を残すかである訳で、ある意味では危険因子であると言う首輪を付けられるのと同じでもある。

それも踏まえて桐式の問いにすぐに答える。それから暫く、無言でゲームを進める。一番初めに口を開いたのは片山さんだった。

「明日から見回りを再開するか。白沢はともかく、鞍馬って奴もいつまでも大人しくしてるとは限らないしな」

「片山さんも見回りをするんですか？」

「俺と無口にどれぐらいの差がある？」

それはつまり、僕と片山さんは現時点ではシャドウと戦うような力が無いと言う事だ。それでも見回りをしようとするのは、ヴァイオレットさんと言う本業の魔術師が来た事で意味を成さない。しかしそれでも、

「僕はこの街の管理者の息子ですから」

そう、僕には理由があった。

「俺はこの街に住む住人だぜ？ 身の安全は自分で確保する義務がある。知り合いの安全もな」

そして、片山さんにも理由があった。

「……安心しろよ、俺だって守風との一件があるんだ、命を粗末にしようとしてる訳じゃない。自棄になってる訳じゃねえよ」

ぽん、と片山さんが僕の頭を叩く。片山さんと守風さんの一件、イチと僕の一件。この事件において片山さんと僕は似通った境遇であると言えるだろう。でも――

「心配すんなって。……さて、もう夜も遅いな。俺は寝るよ」

まるで逃げるように――片山さんはヴァイオレットさんの腕を取って部屋を出て行ってしまった。部屋に残された僕らは、とりあえずそのままゲームを進める。抜けた片山さんの番は姫ちゃんがやっていた。

「あたしらも寝ようか？」

「……だな」

言って、桐式がゲームの電源を切った。姫ちゃんを立たせてベッドで寝る用意をし、

「おいなんで二人がベッドに寝るんだよ」

「え、何布団敷いてくれんの？」

「違うよ、部屋用意してあるんだからそっちで寝ろって」

「あたしら恋人だぜ？」

「あのな……」

じゃあなんで姫ちゃんまで、って事じゃなくて。

「家族が居るんだから……」

「家族が居なけりゃいいのか？」

「そうじゃなくて」

「じゃあどうなんだよう」

ぶーぶーと口を尖らせる桐式。同じように姫ちゃんも怒っていた。こう言う関係になるまでの――この事件が起きる前の、僕がほんの少し気になっていた時に見ていた桐式からは想像できないような、その、可愛らしい仕草にどうにも表情が緩む。しかしまあ、それを差し置いて昨日今日の桐式と姫ちゃんの視線が恐いのである。

「とにかく、部屋に戻れって」

「やだー！」

「……じゃあ分かったよ、僕が下で寝るから」

大きく溜息を吐いて電気を消してから床に寝転ぶ。客は来ず、それも十分な数の客室もあるこの家なのだからわざわざ余分な布団を部屋に用意してる筈は無く、布団は敷かずにもそのまま寝転ぶしかなかった。ホットカーペットのお陰でそこまで寒くはないが、毛布だけでも持ってくれば良いかと思った矢先、まずは姫ちゃんが。そして桐式が毛布と掛け布団を持って僕の横に寝てきた。

「……分かった、降参だよ……」

溜息を一つ。僕はのそりと起き上がり、仕方なくベッドに横になった。その後を二人が続く。カルガモの親子かと突っ込みたくなる。

「と、思いながらも実は嬉しいなちゃんだった」

「勝手なモノログを入れるな」

そして三人川の字になって狭苦しいベッドの上で寝る――事など出来ず、二人分の静かな寝息をBGMにどぎまぎしながら長い夜を過ごすのだった。

## 第四章 片山秋人 その二

「なんだこれ」

と、白沢は毒づく。

もはや廃墟と言うしかない穴だらけの鞍馬邸の中、隙間風に晒された中でその家の主、智子と白沢、そしてアダームの三人は食事をしていた。

「隙間風ってレベルじゃねえだろこれ……」

作りたての料理は冬の夜風に晒されてすぐに冷めていた。

「文句を言うなら食べないで頂戴」

言いつつ、自らが作った料理を不味そうに食べる智子。そんな二人の間でアダームは何も言わずに食事を進める。

折れた足をガムテープで止めた椅子に半身で腰掛け、端を逆手に持ってサイコロステーキを突き刺して食べる白沢。スーパールの安売りセールで買われたその肉はしかし、貧乏舌の二人の口には合っていた。冷めてさえいなければ、だが。しかし、

「不味いなあ」

真っ直ぐに不満を漏らしたのはアダームだった。

「全部食べているくせに……」

「食事は全ての資本だよ」

親しげに話すアダームと智子の二人を行儀の悪い態度で肉を噛みながら白沢が睨みつける。

「まったく、紳士な方だと思ったら……」

「人を見かけで判断してはいけないなあ。そう思うだろ、武人君」  
笑い掛けるアダームは、白沢が一番見たくない物を自分越しに見せるようにしてその目を向けさせる。柔和なその笑顔はしかし、どこか精気が感じられず白沢はすぐに目を逸らしてしまう。

「……人の死体と、そいつを殺した奴と、さらにそいつを殺そうとした奴が居る中でメシを食うとか訳わかんねえよ」

「じゃあ食べなければいいじゃない」

ぴし、と言い放った智子に白沢は何も言い返さなかった。

「大体私が居候の君に食事を用意する義理なんてないの」

「金なら渡してんだろうが！」

「あんな不潔な事をして稼いだお金なんて使っていないわよ！」

「なら返せ！」

「くれたのなら貰うわよ！」

テーブルに身を乗り出して怒鳴る二人を尻目にアダムは自分の食器を片付け始めた。

辛うじて調理場として使えるキッチンの流し台に食器を置き、戻ってきた頃には二人は苛立ちを隠さないまま目も合わさずに向かい合って座っていた。

「つたく、学校じゃ大人しい奴だったのによ……」

「ん、智子の口ぶりじゃ他人に興味が無いって感じだったけど、中々どうして、智子の事は見てみたいだねえ」

テーブルに頬杖を付いていた白沢の頭がガクッと落ちる。その後でアダムを睨むようにして顔を上げたが言葉が出ず、ただ赤い顔を晒して金魚のように口をパクパクとさせていた。

「青春だねえ」

「変な事言わないで。それと私、君の事なんか興味ないから。ただ七緒君達に攻められた時の戦力に出来るようにする為に助けただけなんだから勘違いしないでよね」

「おお、これがジャパニーズツンデレだね」

確かに言葉だけ聞けばアダムの言うようなツンデレに聞こえなくは無いが、明らかにその気の無い、真実だけを告げるような口調の言葉は確実に白沢の心を砕く。

当人同士の間では完全に決着が付いたその恋模様を、しかしアダムは勘違いをしたまま、

「いやあ、青春だねえ」

等と言って、自分が倒した木に崩されつつもその木に支えられて

何とか本来の役目を果たせそうな階段を上りつつ、その支えの木が崩れ、役目を全うした階段と共にアダムは階段の中腹から階下へ落ちるのだった。

# ◇Side 無口七緒

「どうした無口、疲れてそうだな」

ニヤニヤと笑いながら僕を見る片山さん。明らかに勘違いしていた。

「まあ色々」

「どうせ手出し出来ずに生殺しで一日眠れなかったんだろ」

……勘違いしていなかった。反論すら出来ずに僕は黙る。

「七緒のばか！ 意気地なし！」

なんて言って笑いながら煽ってくる桐式は無視した。僕の煽り耐性にもそろそろ限界を感じてきた。

一人、また一人と家に帰っていく兄さん達を見送り、僕達三人は家を出た。まだ帰るつもりが無いらしい双子がついてこようとしたけれど、それを断りつつ家を出るのは至難の業だった。どれ位至難だったかと言うと、昔僕はあの二人に苛められていたのを思い出したくらいに滅茶苦茶な感じだったと言う感じだ。人にはトラウマが一つや二つ、必ずしもあるものなのである。

「さて、どこから攻めようか」

桐式がぐ、と背筋を伸ばしながら聞いてきた。昨晚ずっと眠れなかった僕と違って桐式はぐっすりと眠れていた。そして起きた時にはいつも以上に元気だったのはなんでだろうか。

「とりあえず……白沢の家に行ってみるか。居なかったらゲーセンかね」

僕よりも頭二つ分は背の高い片山さんが先行する。

石間町にたった一つしかないゲームセンターに行く事になったけれど、僕らは遊びに行くわけじゃない。新年も三日経ち、僕らの正

月休みは終わったと言う風に、残るペルソナ、白沢と鞍馬先輩を探しに行く事になった。こちらでも人手が増えた事で僕達三人は白沢の行方を、オズワルドとヴァイオレットさんは鞍間先輩の行方を追う事になった。この布陣なのは一番にオズワルドと一緒に行きたくないと言う事もあるけれど、それ以上に僕達だけでは鞍間先輩と対峙した時に対処しきれないだろうという理由からだった。もちろん探索中に先輩に会う可能性も無くは無いし、イチと守風さんを失った僕達で白沢を押さえられるかと言う不安もある。その事で秋子さんとヴァイオレットさんに心配されたけれど、

「七緒はワシの跡を継ぐ。これくらいの危険、今から経験させておくべきだろうて」

と、神妙な面持ちで言い放ち、僕が異論を挟む間も無く探索に加わる事の許可が下りたのだった。その父さんの様子を見ていた桐式の感想は、なんだか英断って感じ、との事。まったくもって同感であるが、以前よりも厳しく僕に接しようと言う意思の表れなのかも知れないと、少し嬉しくもあったりする。

しかしまあ僕が無理をすれば首を突っ込もうとするのが桐式で、そんな僕らを放っておけないのが片山さんなのである。シャドウとペルソナは表裏一体であるが故に、守風さんの責任感の強さは片山さんと共有しているものなのだと再認識する事となった。

「それはそうと」

僕が呟くように言うと、片山さんと桐式が僕を見た。

「あの、片山さん」

「なんだ？」

「その……」

この言葉を口にして良いのかどうか悩みつつ、しかし好奇心に負けてぽろっと口から言葉が零れてくる。

「守風さんのあの恰好ってなんだったんですか？」

あの恰好とは、もちろん金髪オールバックの特攻服姿の事だ。それに一瞬で気付いたらしく片山さんは動きを止め、桐式は僕と同じ



ように好奇心に目を輝かせていた。

ゆっくりと首だけを回して僕らを見てくるその動作は錆び付いた人形の首を回したような印象を持たせる。

「なあ無口。世界には知らない方が良い事がある」

「知っていても損は無い事もありますよ」

「お前らその楽しそうな顔やめろ」

ふい、と首を元に戻し、片山さんは歩き出す。僕と桐式は特に打ち合わせをしたわけも無く、片山さんの左右の位置に付く。

「俺を挟んだところでひっくり返って全部話し出す訳ないぞ」

「でも話したいんでしよう？」

桐式が満面の笑みで言った。目がキラキラしている。

「……僕らは諦めませんよ」

僕にしてみれば守風さんからおあずけを喰らったままなのでなんとも気持悪い日々が続いているのだ、ここで諦めてはいられない。

「なんでそんなに知りたいんだよ……」

「あの品行方正な守風がなんでデフォであんな恰好なのかなーって。乙女の純粋な疑問に答えてくださいよおー」

「乙女は人の過去を聞こうだなんて思わないぜ」

「またまたあ」

つんつんと桐式が片山さんの脇腹を突付き、変な声を出しながら体をくねらせる。

「おせーてくださいいよー」

「お、おまえらなあ……」

あんまりにもしつこい桐式に観念したらしく、ぶつぶつと文句を言いつつ片山さんが語り始めた。

「昔な……高校時代に不良やってたんだよ俺は」

「ああ、やっぱり」

片山さんの言葉に率直な意見をした桐式。話の腰を折られた事で難しい顔を見せた片山さんが言葉を濁らせるが、それでも聞きだそうとする桐式に負けて話を続ける。

「不良つつつてもな、そんなワルじゃなかったんだぜ？ 弱気を助け強気を挫くってな。本当に悪い連中からは疎まれてたけど、結構人気者だったんだぜ。まあ口下手であんまり気軽に話せる相手は居なかったけどな」

「……でもなんであんな恰好を？」

僕の質問は片山さんの核心を突いたようで、完全に黙ってしまった。しかし僕には片山さんが黙った理由が分かる。痛いほどに分かる。うん、若気の至りって怖い。

「……つまり、どういうことだってばよ？」

「格好つけてたんだよ。多分守風さんのあの恰好は昔の片山さんと同じだったんだと思う」

こそそそと桐式が耳打ちしてくるのに対し、私見で答える。

イチは僕のなりたかった姿。それは精神的な事だけじゃなく、見た目の事も含めてだ。まあ、意識して無かったとは言え青髪で巨乳なんて言うのが僕の理想の姿だと言うのは少なからずショックではあるけど。そんなペルソナとシャドウの関係を考えると、片山さんは恐らく昔の自分と言うものに憧れがあるのだろう。しがらみに囚われず、自由に自分の正義を行う。その姿に憧れを持たないはずが無い。憧れてなければそんな行動を起さなかった筈だ。そんな想いが守風さんの姿となったんだろう。まあ守風さんも片山さんと同じであの恰好は若き日の過ちと言う風に思っていたらしいけれど。

「あんまり触れない方がいい問題みたいだな」

「そうだね。もう遅いけど」

はあ、と大きな溜息を吐く片山さんの後姿を見ながら僕は言った。これで今夜からはぐっすりと眠――らせてくれるんだろうか、と言う別の問題を思い、片山さんの過去を掘り下げる事への罪悪感は薄らぐのだった。



人通りを避け、人目を避け、人そのものを避け。そんな僻地とも言える場所に鞍馬智子の家はあった。

無口の家と同じほどの敷地面積を誇るその家は、周囲を無人の工場跡や雑木林に囲まれ明らかに孤立している。しかしその家の前に立つヴァイオレットとオズワルドの姉弟はそれを不自然とは思っていなかった。魔術師とはそういうものだと言う事を骨身に染みて知っているからだ。

そのような場所に家があるのだから激しい戦闘があったとしても騒ぎにならないだろう。それは家を取り囲む壁や敷地内の木々、そして家屋そのものが破壊されているのに何の騒ぎにもなっていない事からも伺えた。

「これは……まずい事になってますよ姉上」

人の思考を、その地で起きた人の意思が通った行動を読み取る事の出来るオズワルドが鞍馬邸で起きた事を察知した。

「ニキータ・ボリソヴィチ・アダームは鞍馬智子の手に渡った。魔術的な催眠を受けているようです。そして白沢武人、奴も智子と共に行動していますよ」

「……漆黒も大したことないな」

「彼女のシャドウ、セブンとの交戦では終始ニキータが押していた。油断して捕まったのですよ」

「なるほど。白沢は？」

「ニキータと智子との戦闘の後に合流し、今朝方家を出ました。――で、ニキータが一人ここに残っています」

周囲の状況を読み終えた後、冷や汗を流し、オズワルドは引き攣った表情でヴァイオレットに顔を向けた。ふむ、と嘆息するヴァイオレットの背後にアダームの姿を見たのはその時だった。

伸びる三条の鎖がヴァイオレットの体を穿つ。口中から血を吐き出したが、それだけだった。

「は！」

執事服に身を包むジョンが現れ、手に持つ鞭を振るう。その鞭は

鎖が伸びてくる先、アダームの体を打った。

「ちい！」

顔を狙って振るわれた鞭を手で受けたアダームはヴァイオレットに伸びる鎖を操り寸断した。したのだが――ヴァイオレットは衣服こそ鎖によって裂かれていたがその身に傷はただの一つも付いていなかった。

「下がってなさいオズワルド！」

ヴァイオレットがコートを翻し、隠し持っていた拳銃を抜き躊躇無く引き金を引く。一瞬にして全弾を撃ち尽くすがその弾は全て黒球と鎖によって弾かれる。

「これが漆黒？ 本当に、大した事の無い」

ヴァイオレットは居直り、空になった銃のマガジンを交換しながら溜息を吐く。背後を見るとオズワルドの姿は既に無い。

「ジョン、オズワルドを」

「いくらなんでも漆黒を相手にヴァイオレット様一人を残す訳にはいきません。弟様は下がりましたし新たな敵の接近を察知して逃げるのは得意でしょう。私が行く必要は――」

言葉の途中で敵がいつまでも待つ訳が無く、ヴァイオレットとジョンの二人の体に黒い鎖が突き刺さる。

「……例え格下とは言え油断してはいけませんよ」

キツ、と睨みつけるジョンの目は、怒りの表情を浮かべて体を震わせるアダームの姿が映っていた。三つの黒球から伸びる三つの鎖が二人の体をずたずたに引き裂くが、傷を負った先から魔術による治癒が始まりただの一撃も致命傷とならない。

「何を怒っているんだい？」

言いつつ、ヴァイオレットが銃弾を放つがやはり黒球によって弾かれる。

「――二度と――」

アダームは低く重い、呪いのような声を絞り出す。そして全力で背後に飛び退き、さらに黒球を掴むと同時にその鎖を建物や電柱、

木々に絡み付けて自身を引き寄せて移動していく。その速さは凄まじく車でも持ち出さない限りは追いつけないほどだった。ヴァイオレットは逃げ去るアダムに向けて三発の銃弾を放つが、効果はなぐこれ以上の戦闘は意味が無いと判断して拳銃を仕舞う。

「この程度か。と言うよりは相性勝ちかな」

「確かに強力な力ではありましたが、ただの物理攻撃であるのなら私達の敵ではありませんね」

「あれだけで漆黒の称号を与えられたとは思えないけれど……まあこれで逃げたつてのは私達を倒す術が無いって事を露呈したつて事でいいのかしら。えらく良い引き際ね」

「彼は最後になんと言ったのでしょうか」

「ああ、あれね」

破れた服を見て気を落とし、そして遠く離れた工場跡の陰で様子を伺っていたオズワルドの事を見つけてからヴァイオレットは大きく溜息を吐き、

「二度と漆黒と呼ぶな、だって。与えられた称号に不満を持つ者は多いと言う事ね」

髪を掻き揚げながら弟の元へ歩く。歩きながら何度か背後を振り返るものの人の気配は無い。

「引き際が良いというよりは――」

死を恐怖しているのか。そんな呟きは冬の風が掻き消した。

## ◇Side 無口七緒

それは不幸と言う言葉が一番しっくりとくるだろう。

鞍間先輩と白沢の間でなんらかの協力関係があるのは、以前から先輩が白沢の事を助けている事からも推測出来ていた。とは言え桐式から伝え聞く白沢の性格上、常に二人で行動しているとは思えず、だからこそ僕らは二組に別れて先輩と白沢の事を探していた訳で。しかしそんな僕らの予想を裏切り、不幸にも先輩と白沢の二人組が

僕らの前に現れてしまった。

場所は白沢のアパートの前。新築の真新しい壁が目立つそのアパートの階段を下りてくる先輩と白沢。白沢の手には大きな鞆が握られていて、これから旅行にでも行くのかと言うような様子だった。

僕らと先輩達の目が合う。その瞬間、先輩は顔を真っ赤にして表情を驚きで歪め、何故か後ろに居た白沢を突き飛ばしてから階段を下りてきた。

「な、七緒君、どうしたの？」

いつも僕に向けて挨拶をしてくる時の消え入りそうな声で先輩は聞いてくる。まるで僕が先輩の事を、先輩がしてきた事を知らないとも思っているかのような様子だった。

「べ、別に白沢君の家で泊まってた訳じゃないよ？ そんなんじゃないから……」

焦っているような様子で先輩は続ける。そんな先輩の前に桐式は立った。

「そんなぶりっこしたって意味無いぜ、先輩」

ふん、と大きな胸を張る桐式。戦闘の準備は整っていると言う事だろう、その手には既に手袋の姿になっている姫ちゃんがいた。

「……セブンからは喧嘩別れしたって聞いたけど」

「喧嘩の後ってのは燃えるもんだぜ」

挑発する桐式の言葉に一瞬で先輩の表情が変わる。

「で、先輩はどうしたんだよ。七緒が取られたから白沢に鞍替え——」

「違う！」

瞬間、目の前を黒い風と大量の水が弾ける。僕は実物を見るのは初めてだけれど、それはまさに噂通りに黒い風と呼ぶしかないものだった。

桐式が両手で顔を庇ったままの体勢で一步、二歩と下がる。その様子を見ると、桐式が自分の意思で体を守ったと言うよりは姫ちゃんがいち早く攻撃に気付いて桐式を守ったと言う感じだった。

「……白沢君、私は買い物して帰るから」

「は!？」

明らかに不機嫌に、でもどこか悲しそうに僕を見た後、先輩はそう言っただけで歩いて行ってしまった。階段で立ち尽くしていた白沢は歩き去って行く先輩の後姿と僕らを交互に見て、尚も立ち尽くす。いや、それ以外の行動を取れるほど白沢はこう言う状況に慣れていないのだろう。

「……さ、流石にあたしただけで先輩をどうこう、ってのは無理かなあ……」

黒い風を受け、完全に萎縮してしまっている桐式が引き攣った笑いを浮かべながら言う。町の不良相手なら僕一人でも何とかなる。ブランクはあれど片山さんだって対処法は知っているだろうし、守風だって学校の不良十数人を一人で伸した経験がある。けれど先輩はそんなのとは格が違う。明らかに人を殺す為の攻撃を人を殺す為に放った。北修一のような刺せば死ぬというような明確な殺傷能力には見えなくとも、イチと同等の破壊力を持った能力であるのは誰の目にも明らかだった。

「じゃあまづは――」

立ち尽くす白沢に僕らの視線が注ぐ。それでやっと危機が自分に振りかかっている事に気付いたのか、慌てた様子で白沢は臨戦態勢を取り、そして傍らに小柄な少女を従えた。



「なんで止めたんだ」

白沢のアパートから早足で逃げるように立ち去った智子の頭の中にセブンの声が響く。

「今ならあの女を殺せただろう」

「殺してどうするのよ」

「今更人道でも説こうってのか? もう遅いだろ。別れた訳でも無

さそうだったし、七緒を手に入れたいならあいつ殺して――」

立ち止まる智子。右手を振りかぶり、誰も居ない空間に突如として現れたセブンの頬に強烈な平手を打った。

「っ……！」

驚きと痛みを目を白黒させて打たれた頬を押さえるセブン。目尻に涙を浮かべた智子は荒い呼吸を整えてから歩き出し、

「それで七緒君が私に振り向いてくれるならとっくにそうしてる……！」

悲痛な声で呟く。

「僕はお前の深層意識の表れなんだろう。だったら僕がしたいことはお前がしたいことのはずだ」

「あなたと私じゃやりたいことの優先順位が違うのよ」

「だとしたらやっぱり桐式紅葉を殺したいって思ってるんじゃないか」

「それで済む問題じゃないでしょう!？」

叫ぶ智子の声は人通りの無い住宅街に木霊す。人が居なかったとは言え大声を出した気恥ずかしさもあり、智子は歩く速度を速めた。

「じゃあなんだ、智子は自分の幸せをないがしろにしてあの二人の幸せを望むのかよ」

「魔術師は自分の幸せなんて望まない」

「じゃあ七緒はどうなんだよ」

「彼は魔術師じゃなかったのよ。だから、桐式さんと一緒にいるべき」

零れる涙がその言葉が真意でないと言う事を伝えるが、しかし嘘だとしてもそんな言葉を吐く己の主になセブンは表情を歪め、大きく舌を打つ。

「お前がその気ならそれでも良い。それとな、お前のお陰で色々やりやすくなったけど、さっきみたいな事はするな」

声を掛けようと目も合わせない智子を見やりつつ、セブンは打たれた頬に手を当て、そしてその身を魔力の霧へと変えた。





白沢武人が震える足で一步、また一步と階段を下りてくる。その行動は勇敢と言う訳ではなく、単純に下がっても逃げ場が無いと言う事を判断したからだった。

盾にするように従えた、名も与えられていないシャドウの少女は主人と同じく怯えた表情で七緒達を睨みつけている。それはつまり攻撃を開始できると言う事でもあった。

「……二人とも下がれ」

そう言ったのは秋人だった。

「片山さん！」

心配する紅葉の声は秋人の身を心配するというよりは、自暴自棄になって白沢を殺そうとしていた大晦日の夜の事を思い出している。配をしている風であった。それに気付いた秋人は視線は白沢とそのシャドウに合わせたまま、心配するな、と微笑む。

「今は割と頭がすっきりしてるからな、もう心配するな。大人として子供を危険な目に合わせる訳にいかないんだよ」

言い放った秋人だが、しかしその言葉が全て本意だとは紅葉には思えなかった。同じように心配し、止めようとする七緒の制止も振り払い秋人は上着を脱ぎながら歩き続ける。

「なんなんだよお前らは！」

叫んだのは白沢だった。階段を降り切り、しかし目の前の秋人、そして七緒と紅葉の存在からそれ以上動く事が出来ない。

「お前を潰しに来たんだよ」

「俺がお前らに何をしたいって言うんだよ！？」

「人を燃やそうとしたのはどこのどいつだバカ」

ぶち、と白沢が切れる。

「るっせえな！ てめえらが人の事追い回すからだろうが！」

「たかがそれだけで人を殺そうとするバカを放っておけるかってん

だよ」

ぎり、と齒嚙みする白沢。そして自分の前に立つシャドウに合図を送り、シャドウは目に力を込め、目前の秋人に向けて放つ。目で見たものを燃やすパイロキネシスの能力を持つそのシャドウ。故に対峙した場合は何よりもまずその視界から消える事が一番の対処法だが――秋人は身を隠す事もせず、脱いだ上着を目の前で翻す。瞬間、その上着が発火した。

「つと」

燃えた上着を何度か叩き、火を消す。上着には焦げ目こそ付いていたがそれほど損傷が無かった。

「な……」

一番驚いていたのは白沢だったが、同じようにぼかんと口を開けて七緒と紅葉も驚いていた。

「お前の力なんてこんなもんだよ。力を手に入れたからってはいでんじゃねえよガキが」

少女のシャドウの力は確かに見たものを発火する能力だった。しかしそれは銃弾と同じで、直線上に何かしらの障害物があればそれに阻まれてしまう。そしてそれ以上に、ただの一撃ではその炎は人を死に至らせるまでは行かないと言う事を秋人は身を持って理解していた。その力を使う白沢以上に秋人は理解していたのだった。

恐怖に駆られた白沢はシャドウに命じて何度も炎を打たせる。しかし秋人は上着を使って炎を防御し続けた。気付けば上着はボロボロになり、しかし秋人と白沢の距離は手を伸ばせば掴めるほどの距離になっていた。

秋人が源太郎から借り受けた伸縮式の特殊警棒を取り出して構え、ボロボロになった上着をシャドウに被せて横に蹴り飛ばす。

警棒を振り上げ、それに釣られるように白沢は頭を庇って両手を挙げる。しかし警棒は振り下ろされず、逆に跳ね上がった秋人の足が白沢の腹を穿った。

「が、あ……っ!？」

立ってられない痛みに体を傾げて頭が下がり、そこへ容赦なく警棒が振り下ろされた。一瞬にして意識が飛び白沢が倒れる。

「あ、あ……」

被せられた秋人の上着を握り締め、白沢のシャドウが青ざめた顔を見せたまま少しずつ下がる。呆氣に取られていた七緒と紅葉だが、その様子を見て我に返りシャドウを捕らえようと走りだした。

「うわあ！」

踵を返して全速力で走り出すシャドウ。時折振り返って炎を放つがパニックに陥ったその照準は定まらず、数発の炎の内一発が七緒の腕に当たるだけでそれ以外は道路や家の壁を焦がす程度であった。しかしそれでも二人の足を止めるには十分であり、程なくして七緒達はシャドウを取り逃がしてしまう。

「大丈夫か？」

紅葉が七緒の腕を取って見るが、発火した瞬間に炎を消した事もあって服が焦げ、肌が多少赤くなっているだけで大事は無かった。

「……片山さん、喧嘩慣れしてたなあ」

もう姿の見えないシャドウの走り去っていった方向を見ながら七緒が呟く。

「なんか心配したあたしがばかみたい」

「だな」

はは、と笑いながらアパートの前で白沢を担ごうとしている片山の元へと戻る二人。

「目立つからとっとと帰るか」

「秋子さんに連絡してみます。車出してくれるかも」

「ゲンさんは？」

「どうだろうなあ、今の時間だと挨拶に来る人とかが来てるだろうから動けないかも」

七緒が携帯で秋子に連絡を取り、すぐに迎えに来てくれる事となると、秋人は白沢を適当な場所に降ろした。

「それにしても不味い事になった」

七緒が腕を組みながら溜息を吐く。

「なんで？」

「こいつのシャドウが逃げたからね。せめて霊子化しててくれるんなら父さんなりヴァイオレットさんなりが引き摺りだしてくれただけれど……」

「どう言う事さ？」

うん、と七緒は考えを整理してから話し始める。

「前にヴァイオレットさんのジョンとイチが戦った時に体を霊子に戻して僕の所に戻ってこようとしたイチをジョンが止めたの見てない？　引き籠もっただけならああ言う事も出来るから、出来るならシャドウを生け捕りにしたかった」

まあ僕には出来ないけど、と少し拗ねたように言った七緒を紅葉は苦笑いを浮かべて慰める。

「でもあいつ捕まえてどうするんだ？」

二人の様子に微笑を浮かべながら秋人が聞いた。

「……言い方は悪いですけど、ようはシャドウを殺してしまえばペルソナは今まで通りに戻る。でもペルソナを捕まえたってペルソナ自身を殺さない限りはシャドウは死なない。だから彼女が逃げたのが不味いんです」

なるほど、と秋人が納得して頷く。

「でもまあこうして白沢を捕まえられたのは幸いでしたね」

「だな。あとはあの鞍馬って奴だけだ。あっちはまあ、流石に俺らだけじゃどうにも出来ないから……ヴァイオレットに頼もうぜ」

秋人が苦笑しつつも陰のない笑顔で言うと、釣られて七緒達も笑う。

「でも……片山さんが立ち直ってよかった」

「ん？」

ひとしきり笑うと紅葉が安心したように言う。

「大晦日の時の片山さん、なんか見てられないくらい追い詰められてたし……」

「ああ、まあなあ。でもま、立ち直った訳じゃないぜ、開き直ったんだ。守風が俺の為に色々苦心してくれたからな、人を殺した事実とは変わらないけど、その分の罪を背負って生きて、償おうってな」  
だからお前らを手伝ってる、とどこか寂しげに秋人が言う。と紅葉もなんとも言えない表情で笑う。

それからあまり喋る事も無く、三人で秋子の車を待ち、家へと戻った。

## 第四章 片山秋人 その三

◇Side 桐式紅葉

立ち直ったのではなく、開き直った。

あたしが話を振ったのだけれど、正直言葉が出なかった。なんて言えば良いのかが分からなかった。

片山さんは時間を置いた事で落ち着いただけで大晦日のあの夜から変わっていないんじゃないか。まだ自分の罪を償う為に悪人を殺して死のうとしているんじゃないかと思えてしまう。

片山さんが少しだけ語った過去の話を見ても、片山さんは正義の人なんだと思う。例えその行いが正義じゃなくとも、少なくとも片山さんは自分の想う正義を守ろうと守ろうとしているのだろう。

そんな片山さんに何を言えば良いのか。なんて言ってやればいいのか。片山さんのような経験を積んでいない、片山さんが言うように大人に守られているだけの子供であるあたしには分からなかった。そんな事を思いながら秋子さんの車は七緒の家に着した。

「じゃ、私と秋人君でこの子を家に運ぶから」

と、秋子さんが言っただけの家の前で車を止めた。

「それじゃなちゃん、しっかり挨拶してくるのよ」

ほほほ、と意味深に笑う秋子さん。片山さんは片山さんで頑張っているよ、と七緒の背中を叩いていた。難しい顔をしている七緒が車を降り、あたしもそれに続く。

「なんかあったのか？」

駐車場へと走っていく車を見送り、七緒に聞いてみる。

「聞いてなかったのか？ 今桐式の両親が家に来てるんだってさ」

「へ？」

車の中でその話をしていたんだろうか。片山さんの事で頭が一杯で話を聞いていなかったみたいだ。

「確か父さんって桐式のおじさんの警察学校時代の柔道の講師だったんだっけ」

「そうそう。色々お世話になったらしいよ。お母さんの神社にお神酒をお供えしに来たりして、お母さんの相談役になってももらったりしたんだって」

主に学校の勉強の事で。その頃は学生だったらしいし。

「父さんって無駄に顔が広いよな」

「それだけゲンさんがいろんな人から好かれてるって事じゃん」

「そりゃそうだけどさ……」

むう、と眉間に皺を寄せて考え込む七緒。そんな七緒がおかしくつつい笑ってしまう。

「まあまあ、中に入ろうぜ。お父さん達が待ってるぜ」

うむう、とさらに眉間に皺が寄る七緒の背中を押して家に押入れた。そう言えば七緒との正式なお付き合いをしてから初めてあたしの両親と会う訳で。なるほどなるほど秋子さんと片山さんの反応が伺える。

まああたしも恥ずかしいけど逐一メールで報告してるから事情が伝わってる分七緒よりは心構えが出来ている。覚悟完了である。

そんな訳で、出迎えに来た双子に飲まされて完全に出来上がったいた桜を適当にあしらい、ゲンさんと話しているお父さん達の居る居間へと向かった。そこではお酒を飲んで上機嫌になっている三人の姿が。テーブルの上にはビールやら日本酒やらの瓶が何本も開けられている。

「おお、七緒君！俺あね、君になら紅葉を任せらるると思うてるんらよ！」

あたし達の姿を見るや否や、そんなにお酒に強くないのに結構な量を飲んでいられるらしいお父さんが早速七緒に絡んできた。

「だがな、だがね。変な事だけあしちゃいかん！例えばあ……」

難しい顔をして考え込むお父さん。そして何を言おうとしたのか忘れたのか、がはははと笑い始めた。

「まあとにかく娘をよろしくお願いします」

「あたしからもお願いね」

にっこりとお母さんが笑って言った。お母さんはお父さんと違ってお酒に滅法強く、今もお父さんと同じくらいの量を飲んでいるように見えるけれど、顔を少し赤くしているだけで酔っ払っている様子は無かった。

「その、がんばります……」

と、酒も飲んでいないのに七緒は顔を真っ赤にして答える。

「あんまりはしゃぎすぎて在学中に腹を大きくしたりしないでくれよ？」

ゲンさんが釘を刺してくる。まあなんと言うか、そんな可能性は無くもないのだろうけれど――

「大丈夫だよゲンさん。七緒にそんな甲斐性ないから。昨日だって一緒のベッドに寝たけど手だって握ってこなかったんだぜ」

ぶふ、と噴出したのは七緒と、廊下で話を盗み聞きしていたらしい桜と双子から。

ああ、と可愛そうな視線が七緒に注がれる。顔どころか耳まで真っ赤にした七緒があたしを食って掛かりそうなほどに睨みつけてくる。

「その、がんば……がんばります……！」

ぶふふ、と廊下から噴出す声が三つ。それを聞いて恥ずかしさもあって七緒は逃げるようにそこから立ち去り、居間の戸を開けたとたんに蜘蛛の子を散らす勢いで逃げ出した三人を追いかけていった。「まああんな奥手な子じゃが、よろしく頼むよ紅葉さん」

「ん、なんとかその気にしてみせるぜ」

あたしの言葉に、その事じゃないんだがなあ、なんて言って苦笑したゲンさん。でも、それでも、

「七緒には紅葉さんくらい強引な子の方がいいんじゃないかなあ」

なんて言って喜ぶように笑っていた。それからがんばって、と言うお母さん達に手を振ってから遠くで桜達をいじめているらしい七



緒の所へ行く事にした。

◇

「本当に、紅葉さんには感謝してもしたりんよ」

紅葉が居間から出て行った後、日本酒を傾けながら源太郎が呟く。

「しかしまあ、ひ弱な仁慈ちゃんも十何年の月日でこうも立派な刑事になるとうのう」

「それは言わないで下さいよ」

仁慈が照れ隠しに酒を飲む。これの繰り返しで酒に弱い仁慈がどんどん酔っていくのであった。

「……あれだけ可愛い子供がいるんじゃないあ今のこの町の事を思うと心配じゃろう？」

源太郎の言葉に酔いが覚めたように仁慈が真剣な面持ちになる。

「警察官殺しに正体不明の連続殺人。二つとも何の手掛かりがない。長物の方はその後の犯行はありませんけど、連続殺人の方は三ヶ月にも渡って続いている。最近はずっと止まりましたけどいつまた始まるか……」

仁慈のグラスを握る手が強まる。その表情は正義に燃えるが故に、のさばる悪に対して何も出来ない歯痒さと怒りに満ちたものだった。事の経緯、そして結末を知っている源太郎はしかしその事を言えない。言えば魔術に対して知識も力も持たない仁慈を巻き込んでしまうと痛む心を抑えて隠し通す。

「……折角の休みにこんな話をさせてすまんの。今はゆっくりと酒を飲もうじゃないか。な」

言って、グラスを持ち上げる。それから仁慈も小さく溜息を吐いてから、

「このままじゃ俺吐きますよ？」

と、グラスを空にした。

既に紅葉を巻き込んでいるのに。その事を想い、しかしそれすら

も打ち明けられない事を心の中で謝り、許されぬと分かっているが  
ら源太郎は仁慈と酒を交わす。

◇

無口家の住人でも立ち寄らない離れ。そこには源太郎と七緒の研究室があった。魔術師である二人だけが入れる場所。魔術師としての城。そこに白沢武人は連れられてきた。

七緒の研究室の扉を開き、電気を付ける。煌々と照らす電球は掃除のされていない、埃の積もった部屋の中を照らし出した。

「……掃除だなあ」

半笑いを浮かべた七緒だが、ここに来た理由は本格的に魔術師としての修行と研究を再開する為ではない。埃まみれになるだろうと言う事を知りつつ七緒は気を失ったままの白沢を部屋の中に放り込んだ。

「さて」

ほう、と溜息を吐き、ヴァイオレットが部屋の中に入る。両手両足を縛られ仰向けに寝転がされている白沢の横で腰を屈め、手を翳す。短く唱えた呪文の後、傷の癒えた白沢がゆっくりと目を覚ました。

「あ……？　ここは……」

ぼんやりとした頭で白沢は部屋の中を見渡す。見た事のないその光景と、自分を見下ろす七緒達の存在から段々と目が冴え、自分の置かれた状況を理解し始めた。

「てめ——」

起き上がろうとするが縛られた手足の所為で起き上がれない。

「おはよう白沢武人君。私の事は覚えているかな？」

ヴァイオレットが襟首を掴んで引き寄せる。

「あんたは……なんでこんな事しやがるんだよ。俺は別にあんたらに迷惑掛けるような事してねえだろうが！」

「まあね」

ブロンドの髪を掻き揚げ、ヴァイオレットが白沢に顔を近づけた。「別に私としては君がシャドウの力を使って暴れない限りは、放っておいてもいいと思ってる。で、君は私に放っておかれるほど大人しいのかな？」

有無を言わずに威圧し、そして手を離す。受身も取れない白沢は勢いのまま後頭部を床に打ち付けた。

「そうだね、これから三日間、君のシャドウを見つけて殺す事が出来なかったら君を殺す事にしよう。まあ君のシャドウを処理するのなら君を殺すのが一番手っ取り早いんだが、まだ死にたくはないだろう？ もし助かりたいのならどんな方法でもいい、彼女をここに呼びなさい。分かった？」

言って、立ち上がったヴァイオレットは冷徹に見下ろしながら煙草を取り出して火を付ける。その間白沢は後頭部の痛みを感じながらも敵意むき出しでヴァイオレットを睨みつけていた。

「分かったね？」

そしてヴァイオレットはその白沢に向けて煙草の煙を吹きかけ、その額で火を揉み消した。熱さと痛みで表情が強張るが、それでも白沢は睨み続けていた。揉み消した煙草を手握り、ヴァイオレットは七緒を促して部屋の外に出る。扉が閉められると、その扉の前にヴァイオレットのシャドウ、ジョン・スミスが現れた。

「……まるで悪役だなあ」

部屋の外で一部始終を見ていた紅葉が悪態じみた態度で言う。しかしヴァイオレットは何も答えず難しい表情を浮かべながら歩いていく。

「ヴァイオレットさん？」

紅葉の態度に七緒が注意するような視線を向けながらヴァイオレットの様子に首を傾げて呼びかける。しかしそれすらも無視して暫く無言で歩き、外の空気が流れてくる母屋と離れの間にある通路で立ち止まると、

「ううん、気持悪い……」

そう言って窓から顔を出して大きく深呼吸した。

「煙草ダメなのよね……」

「え、ダメなのになんで吸ったんですか？」

「ああやって威圧する時に効果的でしょ？　なんか悪役っぽいじゃない」

肺の中の空気を全て取り替えようとするかのように深呼吸していたヴァイオレットが紅葉を見据えて言った。

「恋人の初キスを取られたからって嫉妬は見苦しいね」

「なにおう！」

息を巻く紅葉を七緒が制す。その二人の事を楽しそうに眺め、ヴァイオレットは居直った。

「さて、白沢武人はどう動くかしら」

「動けるんですか？」

「動けないでしょうね。彼、魔術師じゃないし。私だってジョンとテレパシーなんか使えないもの」

「じゃあどうするんだよお」

まるで文句を言うかのように紅葉が言うと、

「足で探すしかないでしょう？」

当然と言うかのようにヴァイオレットは返した。それには紅葉も反論できず、黙ってしまった。

「まあ、私は魔力の痕跡で後を追えるし、オズワールドも居るから……って、そうだ、あの子に一つ確認取らなきゃ」

よし、と不快な気分を一新してヴァイオレットは両頬を叩いた。

「魔力の痕跡……それでオズワールドを探しあてたんですか。……確認って？」

「うん。……今残ってるシャドウって私のジョンと紅葉の姫、白沢の……名無しちゃんに鞍馬智子のセブンなんだけど、後一人居る筈なのよね」

「え!？」

紅葉が声を上げて驚く。紅葉ほどではなかったものの七緒も驚いていた。

「私の勘違いならいいんだけど……もしあれをオズワルド自身が生み出したんだとしたら悪趣味にも程があるわ」

「それは魔力を感知して気付いたんですか？」

「そうそう。オズワルドを見つけた時にちらっと聞いたんだけどあの子は知らないって言ってて、直接確認に連れて行こうと思ったら逃げて……」

がつくりと肩を落とすヴァイオレット。その姿から、姉として家族として守ってはいいても、その行動そのものには悩んでいるんだろうと、ヴァイオレットの苦労を七緒と紅葉は窺い知った。

「名無しちゃんを探すついでにオズワルドと一緒に確認とってくるから、とりあえず二人は白沢を見張ってて。とは言ってもジョンが居るから大丈夫だろうけれど」

ヴァイオレットが手をひらひらとさせながら歩いていく。

「ジョンさん一人で大丈夫なんですか？」

その背中に七緒が問い掛けると、

「治癒能力ってのはね、本気を出せば眠気も疲れも回復出来るのよ」  
そう言って振り返りもせずに歩き去った。

七緒と紅葉が顔を見合わせ、一人で見張りをしているジョンの事を思い、苦笑する。



夜は更け、夕食時になると七緒と紅葉の二人は食事の載ったトレイ二人分をジョンと白沢の居る部屋へと運ぶ。白沢は怒りに満ちた表情で二人を睨みつけるが両手足を縛られたままの彼にはそれ以上の事は出来ない。額の火傷が消えているのはジョンによるものだった。

「後は私が」

そう言って自分と白沢の食事を受け取ると、ジョンは二人を部屋の外に出した。通路を歩いて母屋に戻り、食事の準備が終えている居間へと戻った。

一人、また一人と自分の家へと帰っていく無口家の住人。今では七緒の双子の兄妹だけが残っているだけであつた。

「や、ライバルが帰ってくれてあたしは安心だよ」

と、言いながら紅葉が席に着くが、七緒は紅葉の言葉を無視しつつもその隣に座る。

「楓さん、あたしに紅葉の事見張るように言つてたよ」

二人の目の前に桜が座り、その両隣を双子が挟んだ。

「時に七緒達、離れの方にちよくちよく行つてみたいだけどなかあんの？」

「ん、まあちよつと」

テーブルに並べられたから揚げを摘みながら新吾が聞くと、七緒は曖昧に答える。ふうん、と新吾が興味無さそうに答えると、その話題はそれで終わり、源太郎と秋子、秋人が席に着いたことで夕食が始まる。

笑い、怒り、和やかで騒がしい食事が終わると各々部屋へと戻る。夜は深まる。幸福に包まれた家と、それを憎々しげに遠巻きに見る者達を巻き込んで。

## ◇Side 無口七緒

「あ、冬休みの宿題！」

そう言って叫んだのは僕のベッドの上で漫画を読んでいた桐式だった。風呂上りに大きいワイシャツだけを着込んで居ると言う姿で、明らかに僕を挑……からかっている。

「そう言えばそんなのあつたな」

僕はと言うと、机に向かって魔術書を読んでいた。研究室が使われているから仕方なくここで魔術の勉強をしておいたのであり、

断じて目のやり場に困って部屋に置いたままだった魔術書を読んでいる訳ではない。

「七緒は終わったのかよ」

「まあ大体」

桐式と喧嘩している間に終わらせた、と言う事は言わないでおく。きつと怒るから。

「まーじかー。そろそろ始めないと終わらないなあ」

「なんなら今日帰ったら？　って言うか長居しすぎ。おじさんたち心配するだろ」

と、言いつつ桐式の方を見ているものの、すぐに目を逸らした。

「んー、明日でいいかなあ。風呂入っちゃったし」

のそ、と衣擦れの音をさせながらベッドから桐式が降りてくるのを背中を感じる。と言うか降りてきた桐式が僕の背中から抱き付いてきたせいで音とかでなく体温とかで桐式の事を感じてしまった。

「これなに書いてあるんだよ……読めんよ」

「まあハウツー本みたいなもんだよ。……でさ、離れてくれないか」  
「んー、やだねー」

はふう、と耳に息を吹き掛けてくる桐式。全身に鳥肌が立ったのも束の間、そのまま耳たぶを唇で噛んできたのだった。

「や、やめろ！」

ぎゅう、と全力で抱き締めてくる桐式。やはり剣道をやっているだけあって腕力は強く、簡単にはその腕を振り払う事は出来ない。

「七緒はかーいーなー」

酔っ払ってるんじゃないのかと思うけれど今日はシラフだ。そんな桐式の手が僕の寝巻の隙間を縫って中に入ってくる。全身の怖気にも似た何かが止まらず、頭に血が上って顔が完全に赤くなっている。もう目の前の魔術書に集中なんて出来ず――突如、頭の中にアラームが鳴り響く。これは別段桐式に対して貞操の危機を感じているから、なんてもものじゃない。実際に鳴り響いている。恐らく僕と父さんにだけ。

桐式の腕を全力で振り払い立ち上がる。その勢いで桐式は後ろに倒れてしまった。

「怒った？」

へへ、と笑う桐式。乱れた服のあちこちから健康的な白い肌が覗いていたけれど、今はそんな事を気にしている時じゃない。部屋の電気を消し、その辺りにあった僕の服を適当に取って桐式に投げた。

「どったのさ」

「着替えて。誰かが家の中に侵入してきてる」

「え？」

驚きながらも桐式は暗闇の中で僕の服を着る。背格好は同じくらい――なんて見栄を張りたいけど、桐式の背は僕より高い――だから僕の服でも着れるはずだけど、暗闇に目が慣れていないからそれを確認する術は無い。

手探りで携帯を探し出して父さんに電話を掛ける。二回目のコール音の後、父さんが神妙な声で電話に出た。

「どうする、父さん」

僕の問いに少しだけ考えた後、

「まずは様子を見てくれ。ワシは計都を起してくる」

それだけ言って電話を切った。電話口から移動をしているような音が聞こえていたから、既に行動を開始しているようだった。僕も電話をしながらベッドの下からある物を取り出す。

「桐式はここで――」

待ってろ。そう言おうとして言葉を飲み込む。そして、

「僕と一緒に来てくれ。泥棒かなにかかも知れないけど、今の状況でその可能性は低い。多分鞍馬先輩か白沢のシャドウが来たんだと思う」

共に戦うと、共に戦おうと言う約束を守る為に桐式の手を取った。暗くてよく見えなかったけれど、桐式は笑いながら頷いていた。

カーテンを開けて部屋の窓から外を見る。家の敷地の外にある街灯に照らされた庭に不審な影は無かったが、突如、その街灯が消え



る。舌を打ち、桐式を連れて玄関まで走った。玄関に向かうまでの間の部屋には元永や双子達が居るけれど電気は消えている。

「寝てるのかな」

桐式が聞いてきたけれど、僕はそれに首を振った。

「父さんの魔術でね、こう言う不測の事態が起こると、家の中に居る人に催眠を掛けて、安全な離れまで避難させるんだ。夢遊病みたいな感じだよ」

「そんな事が出来るんだ」

「うん。不審な侵入方法をしてきた相手を感じ取ると僕と父さんの頭の中にだけ警報がなるような魔術を家に仕掛けてあるんだ。それで侵入者を感じ取れた」

「不審な侵入方法って？」

「正門以外から入ってくるのか」

「じゃあ正門から入ってきたら……」

「まあ、そこがこの魔術の欠点だね。でも泥棒対策にはなる」

玄関に辿り着き、靴を履いて玄関の戸に手を掛ける。街灯の明りが見える事からも、消されたのは僕の部屋の前の街灯だけらしい。

と言う事は僕を狙ってきたんだろうか——となれば侵入者は鞍馬先輩か。

戸を少しだけ開き、外に誰も居ない事を確認する。桐式も既に水の剣を持って臨戦態勢を整えていた。

「……七緒、その凶悪なものなんだ」

周囲を警戒しながら僕の部屋の前まで移動する間、桐式が言う。

「若かりし日の過ち」

その問いに僕は答える。桐式が聞いてきたのは、僕が持っているマシエットの事だった。

「これくらい必要だろ、って思ってたけどこんなの持ち歩いてられないからな……」

小型のナイフよりリーチに優れるとは言え、持ち歩いていれば間違いない警官に止められる。そんな大型ナイフを今使わずいつ使う。

そう考えればそれほど過ちだとは思えなくなってきた。

母屋をぐるっと囲むように木々が生える庭に行く僕ら。街灯に照らされている中を動くのは相手に自分の位置を発見しやすくなる訳で、侵入者が僕の部屋の前だけ街灯を消したのはこうして近付いてくる僕らに見つからず、逆に僕らを見つけやすくする為だったのかもしれない。そうなればもう少し接近手段を考えればよかったか、と思うものの――幸運にも僕らは、侵入者に見つかる前に侵入者を見つける事が出来た。

街灯の消された僕の部屋の前に佇む三つの人影。一つの影は部屋の中に首を突っ込んで中を見てるようだった。見ようによっては壁から人の体が生えているようにも見える。しかし窓の鍵は閉めているはずだ。ガラスを割ったんだろうか。

「どうする」

家の影に隠れて様子を伺う僕に桐式が小声で聞いてくる。

「……魔術師の工房に限らず、大事な物がある施設にはそれ相応の備えがあるんだよ」

僕は家の壁を触り、手先に集中する。

「親のすねかじり、って感じなのが否めないけれど、僕はこの家の中でならいっぱしの魔術師を名乗れるくらいには、魔術が使える」

そう、僕の魔術師としての七年の歳月は全てが無駄だった訳ではない。確かに僕自身が魔術を使う事は出来ないけれど、父さんが構築した魔術を代行して発動したり、共有したりする事は出来る。

「零、零、三。敵侵入、起動」

指先に魔力を集め、魔術を起動させる。それに合わせ、庭の至る所から地面を掘り返すような音が聞こえてきた。

「な、何――」

驚いて声を上げようとした桐式の口を手で塞ぐ。

「あれは父さんの魔術の副産物でね、人形だよ」

ヒトガタの、しかし人間ではないその人形達が地面の中から這い出し、異形じみた動きでゆっくりと侵入者達へと向かう。

「僕には起動とある程度の行動を命令するくらいしか出来ないけどね、父さんも父さんで動いてるし、これで十分」

侵入者へと近付いていく人形はカタカタと奇怪な音を立てながら――ジャキ、と音を立ててその両腕から無数の刃を出した。次いでそれまでの緩慢な動きからは想像も出来ないほどの凄まじい勢いで跳ぶ。

侵入者達の驚く声がある中、跳んだ人形達の内一体が突如として燃え上がる。木で出来た人形は激しく燃え上がるが――しかしそれだけで止まりはせず、尚も人形は迫った。その炎に照らし出された侵入者は、白沢のシャドウ、アダムさん、そしていつも鏡で見る、僕自身と同じ顔――セブンだ。

人形は無機質に三人に迫り、凶悪な武器と化した両腕を振るう。僕は家の壁に手を付き、

「零、一、三。集合、散開」

人形達へ命令を送った。瞬間、火を付けられた人形に他の人形が集まり、その火を自分達の体へと移して散開し、三人を取り囲んだ。炎が周囲を照らし、状況をより良く見えるようになる。

「とりあえずこれでいくらか――」

言ったのも束の間、セブンの風が一体の人形を穿つ。バラバラになる体と共に火は消えてしまった。

次いでアダムさんは周囲に浮かべた黒球から伸ばした鎖で同じように人形をバラバラにする。その二人によって人形達は瞬く間に破壊され、そして――

「七緒君、出てきなよ」

僕と同じ声で、僕の部屋に向けて風を放ったセブン。部屋は一瞬にして破壊されてしまう。その風の余波で破壊された人形達の体にくすぶっていた炎が消されてしまった。

「家も家族も全部壊されなきゃダメか？」

そう言ってセブンは手を家の中に翳した。

「あいつ……！」

飛び出そうとする桐式を押し留める。

「なんで……家が壊されちゃうだろ!？」

「大丈夫だよ。皆は離れにある地下室に避難してるだろうし、家はまた建て直せる。今僕らが出て行っても遠くから狙い撃ちされるだけだ」

悔しそうにする桐式の手を強く握り、自分にも桐式にも言い聞かせる。生まれた時から住んでいた家を壊されているんだ、僕だって怒らない訳じゃないけれど、それで殺されてしまっただけは意味が無い。そんな僕的心情を知ってか知らずか、セブンはそれ以上の攻撃を家にはせず、

「早く出て来いよ。こっちは苛ついてるんだ」

と、言葉どおり苛ついた声で叫んだ。

そんな声を聞きながら僕らは一番手近な窓から家の中に入る。中には鍵を開けてくれた秋子さんが居た。

「大丈夫だった？ こっちの方で凄い音がしたから……」

「僕の部屋が壊されたみたいで……とりあえずあいつらに近付くには外からじゃ狙い撃ちされるだけだから中から行かないと。秋子さんは離れに避難しててください」

でも、と洩る秋子さんを説得し、離れに向かわせる。ヴァイオレットさんが戻ってないこの状況でも治癒魔術を使える秋子さんが居ればある程度の無茶も出来る。だからこそ離れで避難してもらおうべきだ。

家の通路を歩いて僕の部屋の方へと向かう。セブンの風は僕の部屋を貫通して向かいの部屋まで被害をもたらしたらしく、遠目にそれを見ただけでも僕の部屋が酷い有様になっているだろうと言うのは用意に想像できた。ふつつつと頭に血が上ってくるけれど、その怒りを何とか抑えて歩く。

壊れた部屋の入り口の壁に背を付け、ほんの少し顔を出して外を見てみると、暗がりではあったけれどそこに人影が見えた。このまま部屋を突っ切って襲い掛かる事も出来るけれど、僕の攻撃が当た

るのとあいつらの攻撃が始まるのとどちらが早いかを考えれば分の悪い賭けなのは明白だった。

「なあ、姫の水を盾にしたらどうか。昼間はそれで防げたし」

「……それは最終手段だな。今は父さんが来るのを待とう」

確かにそれで何とかなりそうだけれども、何とかなりそう程度の策で桐式と姫ちゃんを危険に晒す訳には行かない。こうなればここが父さんと僕の砦である事を生かして堅実で確実な策を取るのが一番だろう。

「一、一、九。起動、集合」

壁に手を当て、敷地内全ての人形へ起動の命令を送る。これで時間稼ぎにはなるだろう。

程なくして外からは人形達が出す奇怪な音が聞こえてきた。しかしそれと同じくして、人形達が次々と破壊されていく音も聞こえる。「やっぱり父さんじゃないから上手く使いこなせないか……」

小さく溜息を吐くが、それで状況が変わる訳も無い。

「アダムさんって操られてるんだろ？　ぶっ飛ばす訳にはいかないなあ」

「今は非常事態だからな、そうも言ってもらえないよ」

人形が破壊されていく中、しかし次第に圧されているのかセブンとアダムさんが家の中に逃げ込むようにして入ってきた。しかしそれはこちらにとっても好都合。内へ入れば入るほど、魔術師は自分の研究資料を守る為により強固に警備を強める。

「六、六、六。迎撃せよ、迎撃せよ」

がご、と音を立てて部屋天井が崩れる。現れたのは三面六臂の人形。その六つの腕全てに凶器を持ち、頭上から侵入者に襲い掛かる。

魔術師である鞍馬先輩のシャドウのセブンならば家の中へ入ると言う事がどうなるかを知っているだろう。だから庭に居たのだろうが、それでもどんな襲撃が来るかも分からない状況で現れた天井からの人形の襲撃に一瞬反応が遅れ、その腕に無数の傷を負う。

その瞬間を狙い僕は部屋の中に踏み入り、一瞬の躊躇いもあったがマシエットを振るった。剣先を重くする事でその重量で枝木を寸断する為に作られた山刀。技術も力もなく強力な攻撃を放てるこの武器は体の小さい僕にはうってつけた。

ともすれば人を簡単に殺し得るその一撃はアダムさんの黒球によって防がれる。金属を殴ったような音と衝撃が手に走り、少しだけ手が痺れる。マシエットは重さで切るものであるが故に、手の痺れも相まって二撃目を振るうのに一瞬の隙が出来てしまった。その隙を逃さず、アダムさんは防御に使った物とは別の黒球を動かし、僕への攻撃を始める。しかしその攻撃は僕の背後から水の剣を振るった桐式と、天井から降りてきた人形によって防がれる。

僕や人形の攻撃よりも桐式の水の剣は重いらしく、黒球はまるでバットで打たれた野球ボールの如く部屋の壁を突き抜けて隣の部屋まで飛んでいった。

マシエットを握り直し、足元を狙って振る。足を引いて避けるアダムさんは黒球を弾丸のようにして僕を襲わせた。顔面を狙ったその攻撃を腕で防御する。思わず声が出てしまう程に重い攻撃だったけれど骨は折れていないようだった。続く二撃目は人形が防ぎ、

「七緒！」

桐式が叫ぶと、まるでアダムさんを囚にするようにして部屋の外まで退避していたセブンがこちらに手を翳していたのが見えた。

十二畳の部屋を半壊させるほどの威力を持つ攻撃。それを防ぐ術も止める術も無い。

「くっそ！」

マシエットを放り投げ、無我夢中に桐式の体を抱えて通路の方へと飛ぶ。

「……！！」

襲い来る衝撃に備えて体に入力するが、しかしいつまで経ってもその衝撃は来ない。代わりに人形とアダムさんが戦っているらしい音と、

「無口、立て！」

部屋の外、倒れ伏すセブンを足で踏み付けながら片山さんが立っていた。手に持つ警棒からはセブンの血が付いていたけれど、それは魔力となって滴り落ちるよりも早く霧散する。

「てめえ……！」

踏まれながらも片山さんを睨みつけるセブンの頭を片山さんは容赦なく蹴り飛ばした。

「武器を使うんならそんな刃物より、こう言うの方がいいぜ。これで叩いたところで相手は簡単に死なないからな」

言って、セブンが気絶した事を確認してから片山さんがアダムさんに襲い掛かる。話に聞いていた鎖による攻撃は接近戦では殆ど使えず、脅威とはなりえない。桐式と一緒に僕らも片山さんに加勢するも——桐式が隣の部屋に飛ばした黒球が凄まじい勢いで鎖を伸ばして攻撃してきた。

その一撃を僕らは間一髪で避けるが、避けられなかった人形の胴体を貫き、そのままバラバラにしてしまう。自身の周りに二つ、そして遠くから一つ。三つの黒球で遠距離も近距離もカバーするその配置に僕らは動けなくなった。

「恐いね。実に恐い」

言って、顔の汗を拭うようにして手を当てたアダムさん。それから僕らに攻撃を仕掛けようと動き始め——

「六、零、一。追撃、追撃」

壁に手を当て、人形に命令を送る。するとバラバラにされて倒れた人形が動き、その体の中に隠された仕込み銃から銃弾が放たれる。銃弾はアダムさんの足を貫通し、その姿勢を崩した。

「今だ——！」

叫ぶ僕に対し、

「無口、逆だ今のうちに逃げろ！」

アダムさんに一番近い場所に居た片山さんがその腹に前蹴りを食らわせた後、セブンの倒れている方向へ向けて走り出した。その

行動に一瞬遅れて黒い鎖がアダムさんの周囲を無差別に攻撃し始める。人形は今度こそ完全に破壊され、体のあちこちに隠されていた武器も壊されてしまった。このまま勢いに任せて突っ込んでいたらその攻撃に巻き込まれてやられていただろう。やはり片山さんは僕らとは踏んだ場数が違うらしい。逃げるついでにもう一度セブンの頭を蹴っ飛ばしていたし。

「行こう桐式」

「あ、うん」

桐式の手を取ってその場を離れる。片山さんが様子見ではなく退避をしたと言う事は――父さんの準備が整ったと言う事だろう。

「これから危なくなるから下がってないと」

「どう言う事？」

「父さんの秘密兵器が来るんだ」

言うや否や――それは来た。人ながら人とは思えない雰囲気醸し出し、さながら幽霊か、もしくは映画に出てくるようなひたすら主人公を追い続けるロボットのような不気味さを持った人形、計都。それが父さんの秘密兵器だった。

「……もちろん秘密兵器を出したんだから」

「まあ、最終兵器もある訳だ。とりあえず逃げよう、巻き込まれる」  
以前、同じように家に襲撃を掛けてきた魔術師に対する父さんの防衛戦を見た事が僕は一度だけある。家の外に配置した人形兵――僕の簡易的な命令じゃなく、父さんが的確な命令を出したものをいとも容易く打ち砕き、家の中にまで侵入してきたその敵に対し、計都で迎撃した。その結果は、子供の僕には刺激が強すぎたものだ。まさに動く要塞。映画のターミネーターに出てくるアンドロイド――液体金属の方。T-1000とか言ったっけ――のように体を自由自在に変化させ、切り付け、撃ち抜き、爆破し、完膚なきまでに叩き潰して磨り潰してこの世から肉片も血の一滴も残さず消したあの計都。その光景はもろに僕のトラウマだった。

「あいつが出てきたならもう大丈夫だよ。とりあえず父さんと合流



しよう」

代わりにアダムさんは――しかしそんな事を考えている余裕は無い。あいつが出てきた以上考えても仕方ないのだ。

「……七緒」

姬ちゃんが変身した手袋ごと握った桐式の手を取って走り出すと、桐式は不安そうに呟く。

「どうした？」

アダムさんの事を想って悲観したのかと思って振り向くが――  
「白沢のシャドウ、どこ行った？」

計都が僕の部屋ごとアダムさんを消し炭にしようと重機関銃を  
斉射し始めた轟音を聞きながら、

「しまった――！！」

離れから遠い僕の部屋の前でセブンとアダムさんが陣取っていた事がただの囨と足止めだった事に気付き、全速力で僕らは白沢の居る離れへと走り出した。

## 第四章 片山秋人 その四

ぐにやり、と不気味な変態を開始する計都。両腕が本来の人の形から大きく変わり始め、その体を支える二本の足が火をつけた蠟燭のように溶け始め床に広がっていく。それに対してアダムは目を離す事が出来ない。計都の両腕が機関銃の形になり、床に溶け広がった自身の体が周囲の物を巻き込みながら元の足の形に戻ると、計都は両腕をアダムに向ける。

瞬間、アダムは三つの黒球を動かす。

唸りを上げる機関銃。計都の周囲にある物を取り込み、弾丸として放つそれは七緒の部屋もろともアダムの体を粉碎した。自身の体に取り込んだ物を弾丸として放った計都が最早人が暮らす為の場所には使えなくなってしまうた部屋を見渡す。かつてアダムであった物が部屋中に散らばる中、計都の目には壊された壁の外で倒れていたセブンの姿を確認する事は出来なかった。

アダムが守ったのか、意識が戻った事で自力で逃げたのか。それを確かめる為にも計都は歩き出すが――部屋の中ほどに差し掛かると、突如体の向きを変えて背後に向けて歩き出した。

七緒の部屋の向かいの戸を超え、さらにその先の中庭を越えて一直線に向かった先は離れであった。創造主である源太郎が呼び戻したのだが――その様子を見ていた者が一人。

アダムが放った黒球が何時の間にか部屋の中に戻り、右に左に暫く漂った後、細く長い黒い糸のような物を散乱したアダムの体に伸ばし始めた。肉片、血。かつてニキータ・ボリソヴィチ・アダムを構成していたものの全てをその糸が吸い取るようにして本体の黒球へと取り込むと、黒球が膨らみ、形を変え、ほんの少しの時間を掛けて人の形を取り始める。

「――ッ、ハア……！」

真っ黒な塗装を施したマネキンのようなだったそれが、文字通り息

を吹き返して床に膝を突く。やがて表面に髪や肌、そして服までもが作られ、

「……まったく、油断した」

その場に尻餅をつきながらアダムが再生する。

「残りは二つ、か。どうせ死ぬならこれくらいされないと割に合わない」

言って、部屋の外から二つの黒球がアダムの元へと飛んできた。「まあ、今回ばかりは死んでよかったというべきか。マスター無口に感謝だな」

アダムが立ち上がる。計都が行った先と、自分が入ってきた部屋の壁を見比べ、しばしの逡巡の後にアダムは部屋の中を歩き、計都の後を追った。



燃える人形。燃える家。アダムとセブンを囿にし、離れの七緒の研究室に現れた名も無いシャドウは目に映るもの全てに対して己の力を使った。

白沢を守る為に戦うジョンも体に火を放たれるが、しかし自身の治癒能力で怯む程度の効果しかない。しかし治癒能力以外の特化した能力を持たないジョンはそれでも足を止められてしまう。だが自分自身を盾として部屋の外から現れた侵入者を止める為にジョンは少しづつ歩を進めた。それに対してシャドウは炎を放ちながら少しづつ下がるしか出来ない。

隙を見てジョンの後ろで源太郎が人形をけしかけ、それによりシャドウはさらに後退する事を余儀なくされる。

しかしその状況を打破したのは、七緒の研究室の外から放たれたセブンの風だった。研究室の壁を破壊し、さらに数秒の間を置いてから通路に見えたジョンに向けて風を放つ。避け切れないジョンの右半身が四散するが、それも治癒能力によって再生する。しかしそ

の合間の数秒、その時間でセブンは研究室の中へと侵入し白沢の両手足を縛る縄を切り、立たせる。

「逃げるぞ！」

セブンが通路に居るシャドウに向けて叫ぶと、白沢を引き摺るようにして連れ出して走り出した。セブンと対峙していたシャドウはその身を魔力に変えて白沢の元へと戻る。セブンと白沢の逃走経路を塞ぐようにして源太郎が二体の人形を動かすが、その内一体に対してセブンが風を放って破壊した。しかしもう一体はそのまま攻撃を続け、凶器と化した両腕をセブンに振るう。咄嗟に左腕で防御したセブンだが、その腕が切り落とされてしまう。ぼとり、と音を立って落ちた腕に振り返る事もなくセブンは走り、追走を始めた人形に向け切り落とされた筈の左腕に向けて風を放つ。そのまま外の塀に向けて走り、風を放って塀を破壊した。敷地の外へ飛び出した二人は――

「お、おい！」

外出から戻ってきていたヴァイオレットとオズワルドの二人と鉢合わせした。

体を再構築して現れる白沢のシャドウ。二人に向けて風を放とうとするセブン。それに対してヴァイオレットはオズワルドを抱え込んで押し倒して盾となり、二人の攻撃をその身に受けた。

「か、は――！」

風の直撃を受けたヴァイオレットの体は腹から寸断され、背中では炎によって焼かれた。その傷も魔術による治癒ですぐに再生を始めるが――

「は、いい気味だ！」

上半身だけになったヴァイオレットに向かい、半日近く両足を縛られていたせいでふら付いている白沢が叫ぶ。戦う力など持たないオズワルドは自分に覆い被さって気絶する姉の軽さを感じながらその場に座っているしかできない。そんなオズワルドの上のヴァイオレットの襟首を掴んで白沢が持ち上げ、

「こいつ……こんなんでも生きてるのかよ。気持悪い」

毒づきながら白沢はヴァイオレットを抱えて歩き出した。

「そんなの持っていてどうするんだよ」

セブンが迷惑そうな顔を見せながら白沢を見ると、その視界に闇討ちを仕掛けようとする秋人の姿が映る。

「っ！」

手を翳して風を放つセブン。その風を体勢を低くして避ける秋人。セブンはその手を迫る秋人に向け続ける。覚悟を決めた秋人が全力で駆け続けるがセブンから風が放たれる事はなかった。焦った表情を見せたセブンを見て、秋人はその手に握る警棒を振り上げた。

「止めろ！！」

ぴたり、と秋人の手が止まる。警棒はセブンの頭に当たるか当たらないかの位置でなんとか止まっていた。

声のした方向に秋人の顔が向く。そこには破壊した塀の破片を握り服にヴァイオレットの血肉が付いたオズワルドの首元に押し当てている白沢のシャドウの姿があった。

「……そいつの命一つでこいつを殺せるなら安いもんだけどな」

秋人が表情を強張らせながら言うが、秋人の体にはセブンの手が当てられていた。もう一度警棒で攻撃するには振り上げなければならぬ。しかしその間に自分は殺される。それを察して秋人は手下ろした。

「お前らついてくんなよ」

言いながら残るは両膝から先を再生するまでに至ったヴァイオレットを抱えた白沢が少しずつ下がる。シャドウはオズワルドを人質として立たせようとするが、オズワルドの高い身長の前に背の低いシャドウの持つ塀の破片を急所に押し当て続ける事など出来ず――様子を伺っていた七緒と紅葉が飛び出す。七緒はヴァイオレットを抱える白沢に。紅葉はオズワルドを睨みつけるシャドウに向けて各々が持つ武器を振るう。しかし二人の前に二条の黒い鎖が現れる。鎖に二人は足を止めざるをえなくなり、塀の上から飛び降りてきた

アダームに秋人は蹴り飛ばされ、そのままアダームはセブンを抱えて走り出した。

「武人君、行くよ」

言って、アダームは黒球で威嚇をしながらその場を走り抜けると同時にヴァイオレットとオズワールドを鎖で絡めとる。

「んにゃろ！」

それに対して紅葉は強く踏み込み、オズワールドを絡め取った鎖に向けて水の剣を振り下ろした。硬い金属音がすると鎖は断ち切られてオズワールドが地面に転がる。

アダームは小さく舌を打つが、そのままセブンとヴァイオレットを抱えて走る。その後を白沢が続き、シャドウが炎を放ちながら七緒達の足を止めて逃げ去った。

蹴り飛ばされた秋人に七緒が歩み寄って手を貸して立たせる。その足で今度はオズワールドの元へと歩き、

「……姉上」

魔力で象られていたのか、アダームの鎖は霧散していたが鎖から解放されたオズワールドは道路に寝転がったままで姉の事を呼んでいた。ヴァイオレットの体だけでは防ぎ切れなかったのだろう、その腹にはセブンの攻撃の余波により、ヴァイオレットの物とは別の血がにじみ出ていた。

「やられたのう」

家の中に戻った七緒達が怪我をしたオズワールドを秋子に預けた後、源太郎と合流すると源太郎はそう呟いた。

「計都は？」

源太郎の指示の下で動いていた秋人が尋ねると、源太郎が大きく溜息を吐いて背後を指差した。そこには外に居る人形達とは毛色の違う壊れた人形が倒れていた。

「ニキータの奴を計都が殺したと思ったのだが……どうにも奴は生きてたらしい」

「うん、アダームさんなら外で僕らの邪魔をしてきた。それでヴァ

イオレットさんが連れ去られて……」

「そうか……」

腑に落ちないと言う風に首を傾げる源太郎。しかしどれだけ考え込もうとも現実起きたことは変わらないと、頭を切り替えて顔を上げた。

「まあいい、今日は休みなさい。疲れたろう？」

「でもヴァイオレットさんが」

「休みなさい。どの道ワシ等は正面切ってニキータと戦えるような力を持ってない。ヴァイオレットさんは治癒魔術を使えるし、すぐに殺されてしまう事もないじやろう。と言うより、ワシらにはそう願うしか今は方法がない」

白沢のシャドウによって付けられた離れの火は既に消されていたが、そこでの研究などはもう出来そうになかった。しかし源太郎はその離れの奥へと歩いていく。

「ゲンさん」

その背中に紅葉が問い掛ける。

「魔術師って、何をしたいんだ……？」

その言葉に源太郎も七緒も口を噤み、咄嗟に答えられない。しかしそれでも答えようとした源太郎は、

「何かを、したいんじゃないよ」

それだけ言って離れの奥の地下室への階段を下りていった。



全壊してしまった自分の部屋の前に立ち、七緒は大きく肩を落としてから秋子に治療を受けているオズワルドの所へと向かう。

部屋の中に入るとオズワルドの怪我の処置は終わり、静かな寝息を立てて眠っていた。ジョンがその傍らで正座をし、オズワルドの様子を目を逸らす事無く見ている。

「……大変だったわね」

秋子が優しく声を掛けると、二人が小さく頷く。それから秋子が隣の部屋に移動して二人分の茶の用意をした。

「なあ桐式、なんでさっきあんな事聞いたんだ？」

秋子の茶の誘いを受けた二人が畳に敷かれた座布団の上に座ると、七緒が恐る恐る聞く。

「だって……あたしはゲンさんがどんな目的があって魔術師をやっているのか知らないけど、計都だっけ、あんなのまで作って殺し合いしてるじゃないか」

「あれは父さんの魔術の研究の副産物だよ」

「それでも……オズワールドもさ、何か目的があってこんなことしてるんだろ？」

「……実験、らしいわ。魔術師の研究には膨大な魔力が必要不可欠だから、それを得る為に実験してるみたい。前にななちゃんが話したの覚えてる？ ペルソナを通してシャドウに流れ込む魔力がこの結界の中に充満してて、それを最後に集める為の術だって。でも実験だから——」

「集めて何をする、ってのを考えてないらしい。魔力なんてのは金と一緒にあればあるほどいいけれど、なんの目的もなしにこんな事をしてるのは許されないな」

七緒と秋子が大きく溜息を吐いて眠るオズワールドを見据えた。

「……それでこんな事件が起きてるんだろ。おかしいよ」

「そうだよ。魔術師ってのは頭のおかしい奴になるんだ」

「それじゃゲンさんと秋子さんもおかしいって言ってるみたいだぞ」

秋子を擁護するように紅葉が言うと、しかし秋子は苦笑しながら七緒の言葉を肯定する。

「魔術師なんてそういうものよ」

「え？」

「私はね、魔術師になる前までは看護婦だったの。あ、今は看護士って言うのよね。……目の前で沢山の人が死んでいったわ。それを許せなかった。でも私なんかが許せなくても、人は死んでいく。そ



れでも許せなくて、諦められなくて……そして私は魔術に出会った。ほんと、死ぬ気で、必死で魔術を学んだわ。でもね、魔術の治療は人間社会では使えないの」

自分の分の茶飲みを握り締め、秋子は淡々と自分の過去を語る。

「当然でしょう？ 手術が必要な患者が手術もせずに治る。そんな事が起き続ければ問題が起こる。手を翳せば傷が治るなんて言う事を普通の人間はやっちゃいけないのよ」

「でも……それでも秋子さんは……」

「うん、諦められなかったの。実際に私の力で生きる事が出来た人も大勢いるわ。その事を間違ってるなんて思っていない」

屹然と言い放った秋子の表情は曇り一つない笑顔だった。その顔を見て紅葉の表情も少しだけ綻ぶ。

「魔術師って言うのは、普通の人間が目の前に現れた超えられない壁をどうにかして越えようとして、それでも越えられなくて、でも諦められなかった人達になるものなんだよ。父さんもそう」

「ゲンさんも？」

「そうじゃとも」

七緒の言葉に割って入り、源太郎が現れる。

「元永達は？」

「部屋に戻したよ。……ワシはな、紅葉さん。ワシは……死んでいった大切な人達をどうにかして生き返らせたくて魔術師になったんじゃないよ」

秋子が源太郎の分の茶を淹れると、源太郎は話をしながら座る。

「初めは母親。次に父親。ワシは一人っ子で、家族が居なくなつて、それは悲しんだ。その時には既に一人目の妻と結婚して子供もいたが、なんとかして両親を蘇らせようと魔術師になったんじゃ。妻もそれを手伝ってくれた。でもその妻も死んだ。……太一と双海の二人も悲しかっただろうに、自分が悲しむよりもワシを慰めるのに一生懸命で……それくらいに当時のワシは精神的にやられていたらしい。それから必死で魔術の研究をしたが駄目だった。つ

いこの間までの七緒のように壁にぶつかってのう、自暴自棄にもな  
ったよ」

源太郎の独白に七緒が口を尖らせながら不満そうに、しかし溜息  
を吐きながら話を邪魔する事もなく静かに続きを聞く。

「そんな時に二人目の妻と出会い、子を儲け、一度は魔術を、生命  
の蘇生を諦めて人としての道を歩んだんじゃが……その妻も死んだ。  
そして傷心のワシを慰め続けてくれたのが七緒の母親でな……三回  
目の結婚をして、そして三人目の妻も死んだ。悲しんだよ。神を呪  
ったよ。だからこそ諦めていた事を、死んだ者を蘇らせる方法をま  
た探した。しかしまあそれでその方法が見つかるでもなしに、外の  
人形達や計都のような人を超えた人形を作る事は出来ても人間その  
ものは出来なかった。いや、器は出来ても、そこに魂を込める事が  
出来なかったんじゃよ」

独白を終え、ぬるくなつた茶を飲んで溜息を吐く。自分の苦悩と  
後悔に塗れた、しかし嬉しい事も楽しい事もあった人生を思い返す  
源太郎の表情は苦くも楽しそうではあった。その源太郎を見る紅葉  
はしかし、難しい顔をしていた。

「桐式、今でも僕は桐式に魔術師に関わって欲しいとは思ってない。  
魔術師は必死なんだ。父さんや秋子さんのように他人の為に他人を  
傷つけるなんてザラなんだ」

紅葉の顔を見て七緒が呟いた。言葉を探すようなその口調に紅葉  
は小さく微笑む。

「七緒は魔術師になって何をするつもりだったんだ？」

「僕は……前にも言ったように、その……」

口籠る七緒。七緒は紅葉から源太郎に今尚魔術師になろうとして  
いる理由が伝えられている事を知らない。そして源太郎が喜びのあ  
まりに秋子にもその事を話してしまっている事など到底知る由も無  
い。それ故に気恥ずかしさで七緒は小さな声で何かを言ったのだが、  
それを辛うじて聞くことが出来たのは隣に座っていた紅葉だけだっ  
た。

「鞍馬先輩が言ってたよ。あたしは七緒の恋人になるのは役不足だ  
って」

「……それは合ってるかもね」

「そうかな。あたしは七緒が人の犠牲を気にせずに自分の目的だけを果たそうとしてるんじゃないかってさ、ゲンさんを喜ばせる為に魔術師を目指して、それでゲンさんの目的を達成しようとしてるんだっ  
たら——あたしは七緒を支え続けるつもりだよ。だから鞍馬先輩み  
たいな他人の犠牲を厭わない相手とだったら戦う。ゲンさんの人形  
が出来た過程だって知ったし、もう何も恐い事はないね」

「ん、なんじゃ、紅葉さんはワシを疑ってたのか」

「まーちよっとね」

へっへっへ、と笑った紅葉。しかし七緒は腕を組み、顔を赤くし  
ていて——

「あ」

紅葉が自分が失言した事を思い出すと、

「あー……実はな七緒。前に紅葉さんから、その、まあ聞いてたん  
じゃよ」

「っの、バカ！」

七緒の平手が空を切る。一足早く危険を察知していた紅葉は既に  
その場から逃げ出していた。

「ははは……まあ、頑張れ七緒」

源太郎の言葉が追い打ちとなり、七緒は浮き足立って部屋の外へ  
逃げて行った紅葉を追いかけていく。

そんな七緒の後姿を眺め——

「いい子ね、ななちゃんは」

「自慢の息子じゃよ。あれほどの照れ屋だとは最近初めて知ったが  
のう」

かっかっか、と笑った源太郎。その表情は心の底から嬉しそうで  
あった。

◇

深い夜の闇の中、白沢武人は一人、ヴァイオレットを抱えて歩いていた。吹き飛ばされた下半身は既に再生し、しかし衣服までは再生出来ずにその白い素肌が露出したままだった。

正月と言う事もあって浮かれて飲みすぎる者は多くとも、下半身裸で男に抱き抱えられて連れられる女と言う姿は一種異様な光景でもあり、しかし面倒に巻き込まれる事を嫌う者達は白沢とヴァイオレットに好奇の視線を向けながらも無視を決め込んでいた。しかし――

「その君！」

と、自転車に乗ってパトロールをしていた二人組みの警官に止められる。自転車を降りて歩み寄ってくる二人の内、壮齢の警官が白沢とヴァイオレットを交互に見渡し、

「一体どうし――」

言葉もそのままに、警官の顔面が燃え上がる。

悲鳴を上げてその場で転がりまわり、何とか火を消そうとする。

その光景をもう一人の若い警官が呆然と眺め、しかし我に返った瞬間に警棒を取り出して言葉にならない言葉で白沢に対して何事かを叫ぶ。

「うるせえな……！」

そして若い警官の体中から炎が巻き起こった。叫び、倒れる警官。その後も二人の警官の体は幾度となく燃え上がり――通り掛かった通行人の悲鳴により我に帰った白沢は自分のシャドウにも手伝わせてその場から逃げ出した。

「くそ……くそ……この女さえ居なけりゃ……！！」

燃え上がる二人の警官が目くらましになったのか、ヴァイオレットを連れ去る二人の姿はあまり注目されず、二人は人通りの少ない路地へと逃げ込む事が出来た。物陰に放るようにしてヴァイオレットを寝かせると――

「このくそが！」

白沢は全力で自分のシャドウを殴る。

「なんでお前の力はそんなに弱いんだよ！ 人一人も殺せねえ奴が……てめえの所為で滅茶苦茶だ！」

倒れたシャドウを蹴り飛ばし、踏みつけ——荒い呼吸でその暴力を止めた時、シャドウは全身から血を流し、あらゆる場所の骨が折れ、立つ事も出来ない状態だった。

「う……ああ……！」

呻き声を上げてシャドウは白沢を、自分の主人を、自分自身を見る。そしてその身を霊子化し、魔力に変え、白沢の元へと戻って傷を癒す。

荒い呼吸のままヴァイオレットの元に戻る白沢。そして横たわるヴァイオレットを運ぼうと腕を伸ばすと、路地の外からする声と足音に気付いて咄嗟に身を隠す。

「おいどうしたんだ」

物陰から顔を出して外の様子を見る白沢。そこからは制服に身を包む警官と、その警官に話しかけていたどこかで飲んでいたかのよう顔に顔を赤くした夫婦と思しき男女が見えた。

「あ、桐式さん！ それが……すぐそこで警官が火を付けられたと通報があつて」

そんな短いやり取りの後に血相を変えて三人ともが走り去っていく。それを見届けてから白沢はヴァイオレットを抱え上げ、

「桐式……？ あいつの親か？」

そんな事を呟きながら白沢はその場を立ち去った。

## ◇Side 桐式紅葉

——とは言ったものの、あたしの心中は穏やかではない。

漫画やゲームでは魔術師なんてのは相手を倒す為の魔術を覚えて使うものだ。それが普通だ。それが普通だった。でも、それがどれ

だけおぞましい事か、やっと分かった。

北夕子と北修一。あの二人の死をあたしは未だに冗談のように感じていた。守風の死。それは結局のところあたしには他人事だった。でも――セブン達の襲撃から二日経ち、その間にも新吾さんと六花さんが帰っていく間、ただの一度も、ほんの一瞬も破壊された家に対して疑問を持たなかった事に怖気すら感じた。ゲンさんの魔術による催眠でその辺りの疑問を一切持てなくしてしまったと言うらしい。

破壊された塀も七緒の部屋もゲンさんの作った人形が突貫工事で直している。一步間違えばあたし達はその部屋の中で部屋の中の物と同じように木っ端微塵にされて居たのかもしれない。

そして攫われたヴァイオレット。体を二つに寸断され、それでも生きていたヴァイオレットは今どうしているのか。

そんな非常識を見て、あたしはようやく現実に起きている事に気付いたのかも知れない。

ただそれは――鞍馬先輩の異常をより身近に感じたとも言える。

「オズワルド、いい加減にしろよ」

そんな一月四日の早朝、あたしの迷いすらも読まれているのかと思うものの、あたしは片山さんに詰め寄られているオズワルドの前で立っていた。

「だから言っているだろう。姉上ならよほどの事が無い限りは死なないから放っておいていいって。そのシャドウが生きてるのが何よりの証拠じゃないか」

そう言っただけオズワルドは不貞寝を決め込むようにして布団の中にもぐりこんでしまった。そんな事をこの二日間続けているのだった。呆れて物も言えない片山さんは舌打ちをしながら部屋を出て行く。あたしもその後が続いた。仕えるべき主人が未だ見つからないジョンは――それがヴァイオレットの意味なんだろう、この二日間オズワルドの面倒を見ていた。

「自分の姉が攫われてるって言うのに……あいつしか探し出せない

のにな。何考えてるんだ」

ぶつぶつと文句を言い続ける片山さん。本気で怒っているその後姿に中々声を掛けられない。

片山さんが何故オズワールドを頼っているかと言うと、オズワールドはその地で起きた事をその地を行き交う人の記憶を通して知る事が出来るからだ。ただでさえヴァイオレットを抱えて行っているのだから何かしらを思っているだろう。その思いが記憶になって残り、ヴァイオレットのところまでの案内になるはずなのだけれど、それをオズワールドがしようとしめない。まるで拗ねているような様子にも見える。ヴァイオレットがオズワールドに聞きたい事があると言っていたけれどその辺の事が関係しているんだろうか。

「はぁ……今日も足で探すしかないか」

「そうっすねえ」

応援としてパレットから送られてきた人達とまったく連絡が取れない今、もうその人達は居ないものと考えているゲンさんと秋子さん。ゲンさんもこの街に居る魔術師達に呼びかけて協力を仰いだらしいけれど、自分自身の為に魔術を極めるのが魔術師、と言った七緒の言葉通り、協力してくれる魔術師は居なかったらしい。この街は霊地として見てそこまで強い場所ではないらしく、あまり多くの魔術師は居ないらしい。それでもその魔術師達がただの一人も協力しようとしないう言う辺り、ゲンさんや秋子さんが特殊な魔術師なのだと言うのが分かった。

「んん、いい匂いだなあ」

片山さんの言葉で鼻に付くみそ汁の香りに気付く。

「朝ごはん、まだかな。そう言えば桐式はずっとここに居るけど家は大丈夫なのか？」

「あはは、流石にそろそろ帰らないとなあ。お母さんは心配……してないんすけどね」

まあ、新学期に向けての準備、みたいな？　ここに居ると宿題にも手が付かないし。いや、見回りのせいで、とかじゃなくてついっ

い七緒とか桜とかと遊んじゃうからで。

「あ、片山さんは仕事は？」

「サボリだ。上司二人の死に際に居たからな、落ち着くまで休ませてくれって頼んだ。まあ、それでも会社ってのは回ってくんだろうぜ？」

「……それって……」

「心配すんなって。流石に何日も休んでたら仕事も溜まりまくりだ。これから俺はあの二人の分の仕事もしなけりゃならんからな、さっさとこの事件片付けて復帰しなけりゃならんのだよ」

ははは、と笑う片山さん。どこか無理をしている風にも見えるけれど、そうしてでも自分が死ぬ以外の方法で自分の罪を償おうとしている風にも見える。片山さんも色々と悩んでいるんだろう。それもそうだ、守風さんとの事も、片山さんの上司と同僚の事もつい最近の事なんだし。

「なあ桐式」

「はい？」

「七緒の事好きか？」

「そりゃもちろん」

「ずっと支えてやれるくらい好きか？」

「そりゃ、もちろん」

なんでこんな事を聞いてくるんだろう、と思いつつもあたしは胸を張って言った。七緒はゲンさんの為に魔術師の勉強をしているけれど、だからと言って他の他人を見捨てるような人では無い事は確かだ。じゃなければ今あたしは七緒の傍には居ない。ゲンさんも秋子さんもこの事件の收拾の為に動いてくれている。だから、あたしはそんな七緒達の事を知らん振りをして、人事のようにして、素知らぬ顔でいつも通りの生活に戻る事は出来ない。

七緒はまだあたしに魔術師に関わって欲しくはないらしいけれど、もう遅い。だから――七緒達が道を間違えず、いや、外れていたとしても真っ当に道を進んでくれているのなら、あたしは最大限皆を



支えていくし、さらに道を外そうと言うのならあたしはどんな事をしてもそれを止める。それがあたしの決意だ。

「ならいいさ。さて、そろそろメシも出来ただろうし無口の事呼んできてくれよ。その後はヴァイオレットを探しに行こうぜ」

あたしの答えに満足したようにして片山さんは笑った。

それにしても片山さん、なにやら必死である。

「片山さん」

「ん？」

背筋を伸ばしていた片山さんと呼びかけると、体を捻りながら振り返った。

「ヴァイオレットの事好きなんです？」

ヴァイオレットと片山さんが何となく仲が良いのは周知の事実だった。一日にも満たない時間しか会っていない筈だけれど、恋心なんてのに時間は関係ないのである。

「さーな。ま、いい奴だよ。可愛いしさ」

ニカ、と笑った片山さん。そしてそのまま秋子さんが朝食の準備をしている台所へ向かっていった。うーむ。

「なんとも言えない反応だなあ」

そんな事を思いつつ、あたしは道場の方に向かう。片山さんの言う可愛いは見えた目より内面の事なんだろうけれど、少なくともあたしの目でヴァイオレットが可愛いとは思えない。

途中七緒の部屋を覗くと、ほぼ完全に直っている部屋を目の当たりにする。これは今日辺りからまたこの部屋で過ごせるんじゃないか、と思ったけれど折角集めた漫画やらなにやらが完全に吹き飛ばされている心の傷は思いの外大きいらしく、その思い出の残る部屋に戻りたくない七緒は呟いていた。それを思い出して苦笑し、道場の戸を開けると、そこには姫を背中に乗せて腕立て伏せをしている七緒の姿があった。滴る汗が道場の床に小さな水溜りを作っている。

「七緒、朝ごはんだって」

「ん。後十回で五百回行くから……」

五百回すげーなんて思いつつ、腕立てをする七緒を見詰める。小さな体を支える筋肉。しかしそれは数ヶ月のサボリによって相当衰えたらしく、七緒は絶賛リハビリ中だった。

「がんばるねえ」

「まあ、桐式を守る為だから」

きゅん、と胸が高鳴る。あたしを守る為に――そんな事をストリートに言われたらそりゃ女の子だもの、胸も高鳴るさ。

「終わり、っと。僕は汗流してから行くから」

「なんなら背中流そうか？」

汗で濡れたシャツはうっすらと七緒の体を浮き彫りにする。サボったとは言ったけれどそれなりに筋トレはしていたのだろう、あまり衰えているとは思えない体つきでもある。

そんな感想を抱いているあたしに七緒は難しい顔をして、

「ま、まあいつかは……」

なんて事を恥ずかしそうに言っていた。ううむ、その照れ屋っぷりが可愛いんだけど、あたしとしては色々とおあずけ食らってるようなものだとも早い所気付いてほしいものだ。

## 第四章 片山秋人 その五

◇Side 無口七緒

セブン達の襲撃のあった日の翌日、僕は片山さんに喧嘩を売った。なんて言うか聞こえが悪い。つまりは手合わせをお願いしたのだった。なんと言うか、街の不良程度なら——なんて言う事をイチが言っていたけれどこのところの片山さんの戦上手っぷりを見ていると、そうは思えなくなってきた。片山さんも少し考えた後に無理をしない程度で、と言う条件で受けてくれた。

そんな訳でプロテクターを着けて道場に二人で向かい合う。窓の外から差し込む朝日が床に反射して眩しい。

「ルールとかは？」

片山さんが聞いてくる。

「いえ、特には。まあ先にまいったって言った方の負けで」

「そっか。……でもいいのか？ 俺は……」

何かを言い掛けて、

「まあいいか」

そう呟いて片山さんが構える。何かの武術の構えではなく、喧嘩慣れた者がするような構え。長い年月を掛けて精錬され、完成された武術の構えではない故に隙がところどころに見える。だからと言って簡単に攻めにいける訳では無い。晒された隙は、どこか僕を誘っているようにも見えた。買い被りすぎだろうか。

手始めに様子見の前蹴りを打つ。背が低い僕が打てる最長の攻撃。隙が少ない前蹴りとは言え蹴りはその放った足を取られる危険性がある。逆に言えばそれを出来るような相手ならば、攻め方を変えなければならぬ。そうして繰り出した僕の蹴りを見た片山さんは——僕の伸び切る前の蹴りに合わせ、なんと軸足に向けて蹴りを放ってくる。リーチの差があるからこそ出来る行動とはいえ凄い動体視

力と判断力だった。

「っ！」

あまりにも予想外の攻撃に僕は反応しきる事が出来ず足を払われ  
て転んでしまう。

受身を取って床を転がる僕に片山さんは容赦なく踏みつけるよう  
な蹴りを打ってきた。何度かその蹴りを転がってかわし、バク転の  
要領で立ち上がる。そんな僕に向けて迫った片山さんは右腕を大き  
く振り上げて全力で殴りかかろうとしていた。しかし——その攻撃  
を僕は左手でいなして右手を小さく上げる。腰を落とし、左足を踏  
み込む。体の正中線へ向けての正拳突き。それを見てから片山さん  
は左手で腹を庇う。が、問題は無い。さらに僕は右足を踏み込み、  
防御に回していた左腕と正拳を放とうとしていた右腕を腹の前で合  
わせ、片山さんを押し出すような動きで、片山さんの左手ごと、そ  
れこそ腕を折る勢いで攻撃を放ち——寸止めをした。

「……まいった」

苦笑しつつ片山さんが降参する。

「止めなきゃ折れてたか？」

「多分」

そっか、と小さく溜息を吐く。

「まあ、こんなもんだ」

「さっき何を言いかけたんです？」

「俺は寸止めなんか出来ないぞ、ってな。まあこうなると思ったか  
ら言わなかったけどよ」

笑い、そして片山さんがその場に座った。僕もそれにならって座  
る。

「なんか悩んでるのか？」

「ん……まあ少しだけ」

「……別にお前は自分が何も出来ないとか、そんな風に悩む必要は  
ないぞ？」

人生経験の差なのか、的確に僕の悩みを言い当てた片山さん。

考えてみれば北さんと戦った時から僕は負け続けた。ヴァイオレットさんにも勝てないし、セブンになんて手も足も出ない。見られるだけで勝負が付いてしまうような白沢のシャドウを相手にした場合なんて片山さんのような対処法を思いつくとも思えない。正直、超能力を持つシャドウ相手に僕が勝てるとは思えなかった。

でも片山さんは違う。敵わない相手と戦う為に、どうにかして勝つ方法を探して、そして勝った。そんな姿勢を見て僕は片山さんに憧れ——羨んだのは言うまでもない。

「俺らみたいなのが誰かを守ろうとする時はよ」

悩み、落ち込む僕に片山さんが諭すように呟く。

「体張るしかないだろ。だけど当たって碎けるのはナシだぜ？ お前は桐式を守って、守って、最後まで守りきらなきゃなんねえんだからな」

「……それは、分かってます」

「ならやる事は決まってるだろ」

「そう、ですね」

じゃあおしまいだ、と片山さんは僕の肩を軽く叩いてから立ち上がった。

僕がやる事——腹減ったと言って道場を出て行く片山さんの背中を見ながら、考える。右手を握って開き、手の平を眺めた。その手で左腕を触る。いつもは服で隠しているけれど、その腕は筋肉質で見る人が見れば鍛えていると分かるものだろう。

「まあ、これしかないか」

全てをやるうとは思わず、まずは何か一つを出来るように集中するんだ——そんな、いつの日かオズワルドに言われた事を思い出す。そして僕がやるべき事は一つ、桐式を守る事。他の事は今は二の次だ。だから——

「七緒、朝ごはんだって」

一朝一夕で何かが出来る訳じゃない。七年間も魔術師として才能が開花しなかったのだからそれは身に染みて分かっている。けれど

人を守る術はなにも魔術だけじゃない。鍛えた体は嘘をつかない。無理をせず、無茶をせず、しかし得られる力は得る。その為にはさらに体を鍛えなければならぬ。と、姫ちゃんに重しになってもらい、量を増やした筋トレの最中に桐式は現れた。

「ん。後十回で五百回行くから……」

「がんばるねえ」

笑う桐式。気恥ずかしさは残るけれど、それでも言葉にしないでいいのなら僕は正直に言える。桐式の笑顔は凄く可愛い。どちらかと言えば美人に譬えられる桐式だけど、その笑顔は少女のように可愛かった。なんて事をふと考えてしまうとオズワールドに心を読まれた時に恥ずかしい思いをしそうだと、後で反省する。

「まあ、桐式を守る為だから」

嘘偽りの無い言葉を返す。満足そうに、桐式は笑った。



朝の鍛錬を終え、食事を済まし、オズワールドの説得が失敗し、そして探索へ。桐式のツテで白沢の友人関係からその居場所を探ろうとしたが、白沢との連絡が付かないらしくやはり行方は分からない。家にも帰っていないのは何度か家に行ってみて確認している。

探索魔術なんてのもあるにはあるけれど当然僕に使う事は出来ず、父さんも秋子さんも専門外だった。足で探すにはこの石間町は広すぎる。

何の収穫も無いまま昼を迎え、段々と日が傾き、そして夜になる。それでも、手掛かり一つ見つからなかった。

時間が経つにつれてヴァイオレットさんの命の危険は増す。オズワールドは余程の事が無い限り死なないなんて言っていたけど、僕もそうは思うけど、それでも危険は残る。片山さんもそれを危惧してか、目に見えて焦っている様子が分かった。

別行動している父さんと秋子さんからの連絡を受け、しかし手掛

かりが無い事で、今まで白沢を見かけた場所を中心に何度も探した場所をもう一度探す事にした。

駅前のゲームセンターから白沢の家、そして鞍馬先輩の家へと向かう途中で片山さんが呟いた。その言葉に僕と桐式は軽く頷くだけで何も言わない。いや、言えないだけだ。何も言える事が無い。

鞍間先輩の家は目立ったものがない石間町の中でもさらに何も無い、人目から離れた場所にある。その道中は街灯があるものの薄暗く、道を知らなければまず家には辿り着けない。

「……何の進展も無いってのは苛つくな。それにこの道なんか通り魔出そうで怖いぜ」

なんて言って桐式が僕の手を握ってきた。まあ嬉しくない訳は無いが唐突すぎるだろう。

とは言え通り魔が出そうと言う桐式の意見は尤もだ。そんな事を想起させる雰囲気漂っている。それを見越してその場所に家を建てたのだろうか、とは言え魔術師と言えど現代社会に生きているならその場所に住むのは色々不便だろうとも思う。だが――誰の視線も気にせず、大手を振って敵対者を叩くには絶好の場所だろう。特にセブンと言う自衛以上の力を手に入れた先輩としては。

「無口、桐式」

片山さんが片手で僕らを制して前を見据える。街灯の明りでぼんやりと見える黒いシルエット、それが少しずつ近づいてくる。誰も居ない道路の街灯の真下に居た僕らの近くまでその影が寄ってくると、そこで初めて、まるで生き写しのような、いつも鏡で見る僕自身姿が見えた。

ドッペルゲンガーに会うと死ぬ、そんな都市伝説を思い出す。僕の家を襲撃してきた時には正面切って対峙した事はなかったけど、こうして直接見合ってみるとそんな事を思ってしまう。

僕の生き写し――セブンが何も言わずに右手をこちらに向けた。その狙いは、桐式だった。

話を聞くに手の平から力を射出するようなタイプの攻撃らしく、

それを知っていれば見るだけで攻撃出来る白沢のシャドウよりは対処しやすい。とは言え威力が段違いだからそうも言っていられない。

「気張れよ無口……！」

セブンが憎々しげな表情で桐式を睨み、かすかに右手を動かした瞬間――その手から黒い風が放たれた。繋いだままの桐式の手を引き、横に飛ぶ。

「桐式を狙うあたり、嫉妬かよ。女々しいな」

片山さんが警棒を片手にセブンに詰め寄る。僕もその後を追い、桐式も手に水の剣を握って駆け出した。

振りかざした警棒。一瞬遅れてセブンが右手を片山さんに向ける。放たれる黒い風、それが警棒に当たる。

「んお!？」

風に警棒が弾かれ、片山さんが体勢を崩す。見れば警棒は無残に弾け飛んでいた。

倒れる片山さんにセブンは一瞬目を向け――

「クソ！」

追撃を避ける為に慌てて道路を転がる片山さんを尻目に、セブンは桐式に狙いを定めて右手を翳した。

片山さんに攻撃を仕掛けるんだろう、そう考えて動いていた僕と桐式はセブンのその行動に一瞬思考が止まり――放たれた黒い風に対処する事が出来ず、桐式は小さく悲鳴を上げながら両手で顔を庇う。

「桐式ッッ!!」

最悪を想定して叫ぶ。振り返る事が恐かったが、それでも振り返ざるを得ない。桐式の無事を確かめずにはいられない。たとえそれが絶望的であっても――しかし、そうして振り返った僕の顔に、体に、大量の水が掛かって桐式の事を確認するのが一瞬遅れる。次いで重いものが地面に落ちる音――顔を拭いて目を開くと、僕と同じ様に大量の水を全身に浴びた桐式の姿と、苦しそうな表情を見せて倒れている姫ちゃんの姿があった。



「しつこい……!」

僕に聞こえるほどに、もう噛み砕いているんじゃないかと言うほどに歯を噛み締め、セブンは一歩進み出て桐式に向けたままの右手をさらに突き出す。

「やめろ!!」

振り返り様、セブンの右手を払うように蹴りを放つ。それを右手を引いて避けたセブンが、今度は左手を突き出して風を放った。

「やめ——」

空振りした蹴りを空中で翻し、セブンの頭を穿つ。しかし放たれた風は止まる事は無く、無防備の桐式に真っ直ぐ飛ぶ。今度こそ駄目か——そう思うが、

「うわあああ!!」

叫ぶ桐式。そして凄まじい暴風が僕とセブン、そしてようやく立ち上がった片山さんの体を叩く。体勢を崩して倒れる僕の目に、目に見えるほどの凄まじい魔力の壁で自分を守った桐式の姿を見た。

「何が——」

慌てて立ち上がる。が、同時に桐式の足元で倒れていた姫ちゃんがその体を霧に変えているのを見た。

「何で死なないんだお前は!」

セブンが叫び、三度、桐式に攻撃を仕掛けようとする。だがもうそれを許す訳には行かない。上半身だけを起していたセブンに向けて渾身の回し蹴りをその顔面に打ち込んだ。仰向けに倒れたセブンの横腹を蹴り上げる。骨が折れる感触が足に伝わってきた。見れば蹴り飛ばした顔からも鼻血が垂れている。——それでも、セブンは体を起してただただ桐式のみを睨みつけていた。もう一度、攻撃をするつもりなのは火を見るより明らかだった。

一瞬躊躇する。しかし——これはもう喧嘩でも戦いでもない。殺し合いだ。セブンの体を足で蹴りつけてもう一度倒し、そして、もう片方の足をセブンの首目掛け全力で振り下ろす。

——嫌な音が聞こえ、嫌な感触が足に伝わってくる。

「……無口、不可抗力だ」

体の埃を払いながら片山さんが僕の心象を察したように声を掛けてくれた。震える手を押さえ、桐式に歩み寄る。

「あ……姫が、あたしのこと守ってくれて……」

水浸しの桐式が両手で自分の体を抱き、震える声で言った。

「姫ちゃんは……?」

「う、だ、大丈夫……今はあたしの中で休んでるだけ……」

死を直面したからだろう、姫ちゃんが無事と分かっているけど桐式は恐怖に震えていた。片山さんが目で合図を送ってくる。僕は口をへの字に曲げながらも、合図されるがままに桐式の事を抱き寄せた。濡れた体は僕自身濡れている事からも気にならない。

ぽんぽんと安心させるように背中を叩いてやると、桐式がほっと溜息を吐いた。

「……二回目の攻撃、どうやって防いだんだ?」

片山さんがぼつりと呟くと、

「分から——」

桐式は分からない、と言おうとしたのだろう。しかし途中で言葉を切り、桐式が僕を突き放して反対方向に自分も飛んだ。次いで、僕達が居た場所に黒い風が凄まじい轟音と共に過ぎ去る。

「なんで——」

確かに殺した筈だ、と、僕は恐る恐る振り返った。そこには首を明後日の方向に曲げながらも、それでも目だけは桐式の事を睨みつけるセブンの姿があった。

「この程度で死ぬるかよ……そいつを殺すまでは……」

セブンの首が持ち上がる。段々とその首が正しい位置に戻っていく。修復していく。直っていく。治っている——

「どう言うことだよ……シャドウってのはこう簡単に怪我を治せるものなのかよ?」

「そんなはず——と、とにかく今は逃げましょう!」

ああ、と片山さんが慌てて走り出す。僕も桐式を立ち上がらせて

走った。背後から黒い風が迫る。連射できないのかしないのか――散発に放たれる風を数回避ける。

体は男でも内面は女。オズワルドの作ったこのルールはきちんとセブンにも適用されているんだろう、鍛えている僕や桐式、そして体格にも恵まれている片山さんよりもセブンの足はひ弱そうな鞍馬先輩の見た目どおりに遅く、段々と距離を離す事が出来る。はずだったか、放たれた黒い風を避ける為に桐式の足がもつれて倒れてしまう。すぐに抱き上げるようにして立たせるが、セブンはその隙を逃さずに距離を詰めて手を翳した。

「こっちだ！」

片山さんが桐式を抱き上げる僕ごと体を抱え込んで細い路地に引き込んだ。そのすぐの後、黒い風がコンクリートの道路に直撃し、多数の破片を撒き散らす。

「つたく、この辺の地理には詳しくないのによ……！」

そう呟いて片山さんは僕らを前にして走らせた。背後からはセブンが追走し、放つ風を片山さんは近くのポリバケツを蹴り飛ばして盾にして防いだ。

「あいつの風、何かに当てればその場で爆発するみたいだな！」

そうして気付いた事を僕らに聞こえるようにして叫んだ。

だがそれが分かったところで何度も攻撃を防ぎながら距離を詰めるほど盾になるようなものは転がっていなかった。そうして逃げていると――運悪く、僕達は裏路地の終着点、袋小路の中へと辿り着いてしまった。捨てられた金属製のロッカーの陰に身を隠す。そんな物で風を防げる訳ではないが、かと言って正面から向かえ撃つわけにはいかないだろう。

「……シャドウとペルソナの間に魔力を供給するパイプがあります。それを強化して、離れていても怪我を治せるようにしたのかもしれないです」

息を整えながらセブンが折れた首を治していた理屈を考え、呟いた。その真偽は確かではないけれど、魔術師としての力量がある先

輩ならそれくらいは出来るのかも知れない。

「厄介だな」

「はい」

荒い呼吸が二つ、僕の傍で聞こえる。そしてもう一つ——この袋小路の入り口であり出口でもある場所から聞こえてきた。陰から顔を出してセブンの様子を伺う。視線は僕らの隠れるロッカーに向いたまま、その場に座り込んで酷く乱れた呼吸を整えていた。やはり体力面では僕らに分があるようだった。

「攻めてこないな」

「その方が助かります」

父さんと秋子さんに今の状況をメールで送る。警察には——通報しなかった。多分警察の方が早く到着するだろうけど、それで被害者が増えるだけでは意味が無い。セブンが呼吸を整える間に助けが間に合うとは思えないけど——それでもやらないよりはマシだろう。桐式も僕も、そして片山さんも命の危機を感じていたのだろう、誰も喋らない。終わりがいつ来るのか、そんなことばかり考えてしまう。桐式も同じ様子で僕の手を握ってきた。その桐式に、

「大丈夫」

なんて根拠の無い事を言って傍に転がっていた鉄パイプを握り締める。

「あいつ、動かないな」

僕らの呼吸はとくに落ち着いている。体力が無いと言ってもセブンも同じだろう。だがそれでも動かない。

「……なあ、こんな話知ってるか？」

片山さんが視線をセブンに向けたまままで聞いてくる。

「自分が強盗で、忍び込んだ家の住人が慌ててクローゼットの中に隠れるんだ。そいつをどうするかって話なんだが、無口ならどうする？」

「……すぐにダンスから引っ張り出しますけどね」

だよな、と片山さんが軽く笑う。

「それ知ってる。……クローゼットから出るまで、その前に座って待って言う答えを殺人者はするんだったっけ」

桐式が小さく呟いた。

「ああ、まさにその状況って感じだな。まあ、そうしてくれると助けが間に合うかも知れないからいいけどな」

そんな軽口を叩くが、しかし焦りは募るばかりだ。

一分、五分、十分——膠着状態は続く。もう何時間も経っているように感じるのはセブンの手に僕らの命が握られているからだろう。セブンの様子を覗き見る。怒りに染まった目をして僕らを睨んでいた。

「はは、桐式は罪な女だな」

「あたしのせいだよ……」

片山さんの言葉に桐式が愚痴る。

「それにしても、さっきまではあれだけ桐式の事狙ってたのにな。じっくりたっぷり捌ってやろうって……と……」

言葉の途中で片山さんが何かに気づいたように表情を強張らせた。何事かとセブンを見るが、特に動きがあったようには見えない。

「どうしたんですか？」

「……この間、あいつらが襲ってきた時にあいつが確実に俺を殺せる状況があったんだ。さっき無口が言ってたように鞍馬が居なくても怪我を治せるんだって言うんなら尚更躊躇しなくてもいい状況だな」

「……それって」

「あいつ、あの風を連射できないんじゃないか？」

言われてふと思い返す。確かに連発で撃ってきた事はなかったように思える。

「でも連射できないからって飛び出すのは自殺行為ですよ？」

「ああ、そう言うことじゃない。……ようは弾切れしたんじゃないかって事だ」

その一言でピンときた。飛び道具を使う場合に常に付きまとう問

題、それは弾だ。撃った弾を回収できるのならまだしも、セブンの攻撃はそういうものではない。それにあの風の破壊力を考えれば相当量の魔力を使うだろう。仮に鞍間先輩からの魔力供給量が強化されて増えたとしても、元々は自分の中に蓄えた魔力を使って力を使うのがシャドウだ。自分の体を維持するだけの魔力を残し力を使つたとするならば、その回復に時間は掛かるだろう。つまり今は――

「俺達が時間を貰ったんじゃないくて、あいつが確実に俺達を殺す為に力を蓄える時間を与えてたのかもな……」

片山さんが悔しそうに歯を噛み締めた。それと同時に、まるでこちらの様子が分かっていたかのようにセブンが立ち上がった。

「……いよいよ、か」

片山さんが壊れて外れていたロッカーの戸を拾い上げる。

「ちょ、片山さん!？」

桐式が声を荒げた。

「いいか、俺が盾になる。さっきまでの様子からしてこの距離なら二、三発は撃たれるかも知れないけど――」

「片山さん!！」

桐式の言葉に、片山さんが大きく溜息を吐いた。

「俺に出来る事はこれくらいしかないんだよ」

「だからって……そんな特攻するような事しないじゃんか!」

「じゃあ三人揃って死ぬか? まあ無口は見逃してくれるかも知れないけどな」

「もう少し待てばゲンさんが――」

「あっちが待ってくれないんだよ」

セブンが首を回し、それから僕らを睨みつけ、一歩踏み出した。

「七緒からも言ってくれよ!」

片山さんがやろうとしている事は言わずとも分かった。自分を盾にして、どうにかこの場を切り抜けようとしているんだろう。セブンの風が何かに当たればその場で爆発するからと言って、片山さんの持つロッカーの戸が金属製だからと言って、何発もの攻撃を防ぎ

きれるとは思えない。確実に取り返しの付かない事になるのは目に  
見えている。だから――

「……僕は桐式を守る。最後まで。だから、片山さんが駄目だった  
ら桐式は僕を盾にしてでもあいつから逃げるんだ」

ぐ、と鉄パイプと繋いだままの桐式の手を握った。

「そんな……」

「……俺が死ぬしかないだろ、この面子じゃ」

「なんで……なんで!？」

「俺が生き残るより、お前らを生かした方が世の為になる。生き残  
るのはおっさんより若者だろ、普通は」

「そんな訳ないだろ!　なんでそんな事言うんだよ!!」

「だったらお前が死ぬのか?　お前が死んで、俺達を生かそうって  
のか?　嫌だね、そんな事は。守風の惚れた女を死なせられるか。

準備はいいな無口。ジェットストリームアタックだ、ただし俺を踏  
み台にするのはお前だからな!」

片山さんが動いた。もうこれ以上待てないと。間髪入れず反論も  
聞かず別れの言葉すら言わず――頼りない盾一枚持って走りだして  
しまった。

桐式は泣きそうな顔をしていた。でも、僕も行かなければならな  
い。片山さんを踏み台にして、片山さんの屍を超えて、僕は桐式を  
守らなきゃならない。

左手で桐式を引っ張り、右手で鉄パイプを握り締める。首の骨を  
折っても死ななかったけれど、少しの時間は稼げる。その時間を桐  
式の逃げる時間に当てなければならぬ。必死の覚悟で挑まなけれ  
ばならない――

「ああああああ!!」

片山さんが叫んだ。恐怖に叫んだ。死の恐怖に叫ばずにはいられ  
なかっただろう。

セブンが風を放つ。黒い風が盾に当たり、霧散した。余波が片山  
さんの体を穿ち、一瞬その足を止めさせる。ロッカーの戸はもう盾

としての役目を果たせないほどに破壊されている。いや、既に片山さんの両手が物を持てるような状態じゃなかった。恐らく今の攻撃だけではなく――気づかなかったけれど、警棒でセブンの風を受けた時からすでにずたずただっただろう。

「く、そがあああ!!」

セブンが後ろに飛ぶ。その一步が絶望的な距離に思えてならない。右手を翳し、狙いは片山さんに向ける。さっきまでは桐式だけを狙っていたセブンだけど、片山さんの体に隠れた桐式を攻撃する暇なんて無いと判断したのだろう。ただ真っ直ぐに片山さんに狙いをつけていた。

二発目の風が放たれる。やはり連射は出来ない様子で、第二射までの間に片山さんは三步進む事が出来た。だがそれでもたった三步。まだセブンとの距離は二十歩以上はあった。

「やめ……!!」

桐式の悲痛な叫びが聞こえる。だが、その声も空しく僕らの顔に、体に真っ赤な血が飛び散った。

「まだ、まだア!!」

片山さんは足を止めない。見れば片山さんの左腕は肘から先が無くなっていった。その気迫にセブンは恐怖と共に怪訝な表情を浮かべていた。まるで、威力が足りていないとでも言いたげな顔で――数歩下がり、セブンが再度風を放つ。

「っつらあ!!」

片山さんが右手を突き出し、その風を受け止めた。血と肉が僕らに降り掛かる。

「いや……やだ……」

桐式の足が緩やかに止まっていく。

「走れ――」

握った手を引くが、それでも桐式はもう走らなかった。いや、走れなかった――

「走ってくれ――!!」



言葉とは裏腹に、僕は手を離す。もう桐式は走れない。心が折れてしまった桐式には、もうセブンと戦う力も逃げる気力も無い。なんとしても、何があっても、僕がセブンを倒さなければならぬ。殺さなくてはならぬ――

「片山さん!!」

前を走る片山さんに桐式の様子なんて分かる筈がない。でも、僕の叫びに何かを察したのだろう、片山さんは両腕を失いながらもさらに力強く足を踏み出した。

「なんなんだよお前!!」

セブンが叫び、風を放った。

もう風を受ける盾は、腕はない。もう、その身を盾にして風を受けるしかない。そうなれば――人間の体など軽く吹き飛ばすセブンの黒い風で片山さんは死んでしまうだろう。そうなればもう僕が体を張るしかない。片山さんの血が全身に振りかかる。それを受けて鉄パイプを握り潰すほどに力を込める。だが――

「なんで、なんで死なないんだよ……!!」

――温かな、風が吹いた。

「死ねよ……死ねよ……死んでくれよ……!!」

怯えた声でセブンは風を放った。その風は確かに片山さんの身を挟んだが、だが――片山さんは倒れない。

「お前の為にやる命はねえよ」

掠れた声で、立てるはずも無い体で、しかしとうとう片山さんはセブンの元へ辿り着いた。

「守風に怒られるなあ、こりゃ」

頭を振りかぶる。そして、セブンの頭目掛けて全力で振り下ろす。鈍い音の後セブンがその場に尻餅を付いた。

「ふざけないで! さっさと死んでよお!!」

動揺に自己を保っていられなくなったセブンがまるで女のような声を上げて片山さんに風を放った。しかし、守風さんが守っているかのように――温かな風がセブンの黒く冷たい、ただ殺す為だけの

風を和らげる。だが、それももう限界だった。

二度、三度と風を受けた片山さんは、背中側にいる僕にセブンの姿が見える程の大穴を体に空けて絶命する。黒い体を返り血で真っ赤にしたセブン。流れる涙の筋が血を流していた。

桐式のみを狙っていたその目は恐怖に縛られ片山さんしか見えない。そのセブンに僕は――

「つつつ……！」

まるで守風さんのように風を使って早く走っていた片山さんに遅れるが、今度は躊躇無く、鉄パイプをセブンの頭目掛けて振り抜いた。

倒れるセブンを見てから一瞬桐式に視線を向ける。完全にその場に座り込み溢れる涙を両手で拭っていた桐式は、やはりもうその場から動けない。

「七、緒く――」

セブンの口から零れる言葉に反応し、鉄パイプで殴りつける。片山さんのものとは別の血が飛び散った。

何度か痙攣するセブンの体。しかし数瞬の後、セブンの手が僕に伸びてきた。

「私は、七緒君の事が――」

その伸びた手を払い、鉄パイプを振り下ろす。全力で殴った所為か鉄パイプは折れ曲がってしまった。

「七――」

僕の名を呼び、手を伸ばそうとするセブンを踏みつける。頭蓋骨が砕け、頭の中身が見えたが気にならない。放っておけば桐式が殺されてしまう事を思えば、気にしている暇は無い。

「あ……」

セブンが少しでも動けば踏みつけ、蹴り上げる。何か一言でも声を出せば砕き、折る。僕は人殺しがしたい訳じゃない。セブンが人であるとは思っていない。それでも、喜んで人を殺すような事はしたくなかった。セブンがまだ生きていると確認できたらその動きを

止める為に攻撃する。それだけを繰り返した。

首を折られても死なない。頭蓋骨を割られても死なない。ペルソナと同じ感覚を持つシャドウは確実に死ぬとイメージ出来る攻撃を受ければそのイメージ通りに死ぬ。だがそれすらも無いと言う事は、セブンは魔力さえあれば、体を修復さえ出来れば死なないのだから、魔力がなくなるまで僕は攻撃をし続ける。しなければ、僕は桐式を守れない。

「……………」

やがて、セブンは動かなくなる。何も喋らなくなる。それでも体が魔力の霧となり、消えていかないう事を見ると生きているようだった。

「七緒君——」

セブンが喋った。僕は反射のように、パブロフの犬のように、セブンの顔を踏みつけた。冷静さを取り戻したのか——歪んだ顔面がいつも鏡で見る僕の顔とまったく同じなのを改めて再認識し、自分を踏み潰し、蹴り飛ばしている事を思うと吐き気が込み上げてくる。そして、そして——セブンはその身を魔力の霧へと変えていく。

元の形へと戻っていく。鞍馬先輩の元へと、帰っていった。

膝が笑い、立っていらなくなる。自分の体に染み付いている片山さんの血の匂いに噎せ返る。自分が殺意を持って人を——人の姿をし、人の心を持った人でないモノを攻撃し、そして殺した事実が脳裏に焼きついた。

込み上げる吐き気を抑える事が出来ず、僕は胃の中の物を全て吐き出す。そんな僕の肩に手が置かれる。

「……頑張ったな、七緒」

セブンに止めを刺して居る時に到着していたのだろうか、神妙な表情をしていた父さんが僕を抱き締めた。

「片山さんが……」

「ああ、分かってる」

父さんが一度僕を放し、何かを言おうとして口を噤んだ。桐式の

事を見る。秋子さんに抱きついて大声で泣いていた。その光景を――ゆっくりと薄れていく意識の中で僕は見ていた。

## 第四章 片山秋人 その六

――七緒君。

脳裏に流れ込むセブンの記憶を、鞍馬智子は涙を流しながら思い返していた。

――痛いよ。

道中で、家で、仲が良さそうにしている七緒と紅葉。その二人の様子を影から盗み見ていたセブンは日に日にその嫉妬心を増幅させていた。

――こんなに好きなのに。

その怒りは桐式紅葉に向かい、智子の制止すら聞かずについに行動に移す。

――もう、

七緒の事は何があっても殺すまい。その決意の元に向かい、そして最愛の者に、ただの一言の言葉すら聞いてもらえずに叩かれ、殴られ、蹴られ続けたセブン。

――もう、いいや――

その想いが届かない。その結論に辿り着くと、智子の手によって魔力の供給さえ続けば永遠に死ぬ事の無い体を得た自分自身を、セブンは殺した。拒絶され、否定され続ける事に耐えられなくなった。

……私なら、どうしたかな。

智子は考える。

……私じゃ、こうは出来ないかな。

智子は羨む。

……でも、これでいいんだよね。

そして、智子は顔を上げた。足元には大きな旅行鞆があった。傍らにはアダムの姿が。そして目の前には己の師匠であり母の遺体  
が。

手にライターを持ち、近くにあった新聞に火を付けて自分が暮ら

してきた家に火をつける。

「さよなら、お母さん」

母の遺体に火が燃え移った事を確認すると、智子とアダムはその場を後にした。

# ◇Side 無口七緒

夜が更け、日が昇る。家に帰ってから一睡も出来なかった僕に対し、家に帰るなり倒れた桐式はそのまま泣きながら眠り続けていた。その涙を拭ってやりながら、何か出来なかっただろうかとずっと自問を続けていた僕は、とうとう自答する事は出来なかった。

家を出る。寒さすら気にならない。どこかにいく当てがあった訳じゃないけれど、散歩をする事にする。途中でコンビニの前を通る。何も食べていなかったけれど何かを食べたいとも思わず、そのまま素通りした。通勤時間にもなっていない駅前の人通りはなく、まるで世界から人間がいなくなったかのような道を通って家に戻る事にした。一時間ほど歩いたのだろうか、そんな時間の感覚すらも無くした状態で、僕は目の前に現れた鞍間先輩に力なく身構える。

「おはよう」

優しい笑顔を見せた先輩に僕は何も答えなかった。

「……信じてとは言わないけど、昨日はセブンが勝手にやったことなの」

そんな言い訳じみた言葉に、

「だから、なんなんですか」

僕は腹立たしげに答えた。先輩も、そうよね、と困った表情を見せる。

「七緒君、私ね、セブンが現れてから気付いたの。お母さんに縛られてる自分と、それを破ろうとしなかった自分に。それもセブンが教えてくれたのかな」

手に大きな鞆を持った先輩はぼつぼつと独白を始めた。

「私、七緒君の事が好きだった。色々打算的な理由はあるけど、その想いだけは嘘じゃないと思ってる。今も、好き。だから桐式さんが羨ましくて仕方ないの」

「だから狙ったんですか？」

「……うん、そうだね。でも、七緒君は私じゃなくて桐式さんを選んだから……もう、ちょっかい出すのはやめようって思ってたんだ。でもセブンはそれに反発して……」

その言葉は到底信じる事が出来なかった。けど目の前に立つ先輩に敵意は無いようには見えた。

「あはは、これ冗談。ほんとは悔しくて悔しくて、多分そんな想いのせいでセブンが勝手に動いちゃったんだね」

先輩が笑いながら体を反転させて僕に背中を向ける。その目に涙が滲んでいたのをうつすらと見えた。

普段おどおどとしていた様子しか見せなかった先輩の、楽しそうに、悔しそうに笑う今のその姿はどこか吹っ切れた様子だった。

「……私は七緒君の事が好き。だから、最後にこうして言い訳しに来たの。私が本気で桐式さんを殺そうとしたんじゃないって事。そうすれば……七緒君に、少しだけ鞍馬智子はいいい子だったって覚えてもらえるかなって。卑怯だよ、私」

手で涙を拭う仕草を見せた先輩。その背中に、

「最後……って？」

「うん。この街を出るんだ。もう私を縛るお母さんもないし、セブンがいらないから街に留まってる必要も無いし。ニキータさんを連れてどこかに隠れる事にしたの」

だから、と涙で赤くなった目を僕に向けながら、

「さようなら、七緒君」

それだけ言って、本当にそれだけを言って、僕に何一つ恨み言を言わずに、たったの一言も言わずに先輩は走っていった。昨日の様子を見るに足はそんなに早くないと思ったけど、大きな鞆を持ってなお全力で走ってるその姿はすぐに見えなくなった。

先輩の思惑通り、そんな姿を見ると胸に何か重いものが残った感じがした。でも――

「僕は、先輩の事を許しませんから」

色々な理由はあるけれど、この想いは嘘じゃない。人として許している事じゃない。だから――きつと僕は先輩の事を忘れないだろう。そう言う意味では、完全に先輩の思惑通りになってしまったと言う事か。

「……帰ろう」

何かが解決した訳じゃない。何かを吹っ切れた訳でもない。また一つ、心に辛い想いを刻んで僕は家路に着いた。



「別れの挨拶は済ませたのかい？」

バス停のベンチに座っていたアダームに問われ、智子は頷いた。本当ならば無口の家まで行くつもりだったが偶然七緒と会った事で早く戻ってきた智子に首を傾げるものの、

「それは良かった」

と、答える。

「この街を出て、どこか落ち着ける場所が見つかったら解放しますから」

そう言って二人は歩き始める。公共交通機関は何も動いていないが、もともと歩いていこうとした二人には問題は無かった。

石間町に張られたオズワルドの結界を抜ける。魔術師ではないアダームには分からなかったが、智子には自分に纏わり付いていた他人の魔術の不快感から解放され、ほっと溜息を吐く。

それと同時に、

「これで本当にお別れだね」

振り返って自分が育った街を見た。七緒と言った一つの悔いが残る街に後ろ髪を引かれつつも智子は歩き出す。その後をアダーム



ムが続き――

「あー、智子、解放の件なんだけれど」

「？ 落ち着いたらって――」

粘膜接触によって術式を相手に送り込み操る。その魔術を行使する智子が自分から魔術からの解放の件を切り出したアダームの言葉に疑問を浮かべるが――突如、自分の体が空に浮き上がった事に気付いて驚く。

「今ここで解放してもらうよ。いや、もう解放されてただけだね。今はまだ彼らに僕の動きを知られたくないんだ」

自分の腹に走る激痛に気付くか否かの瞬間、智子の全身にアダームの黒球から伸びる鎖が突き刺さる。

「さすが魔術師。パレットが派遣した超能力者達よりもほど良質な魔力を持ってるね」

ぶち、と自分の腕が、足が引き千切られた事に智子が恐怖する。

しかし声を上げようにも――後頭部から突き刺さった鎖が口から飛び出しているせいでくぐもった声しか上げられなかった。

千切られた手足が、体が、鎖によって小さく纏められて圧縮されていく。非難の言葉も、疑問の言葉も紡げない智子。その脳裏に、

――助けて、七緒君――

そんな資格がないと分かっているながらも、助けを呼ぶ言葉が浮かんでいた。

血が、骨が、肉が一つに纏められる。小さな肉塊となった智子の体を鎖が何重にも巻き上げて黒い球になった。それをアダームは自分の体に引き寄せ、

「ふむ、これでもまだ赤字か。せめて七緒君か、紅葉さんも欲しいね」

その身に黒球を吸収した。

◇Side 無口七緒

先輩との会話を反芻し、やっぱり先輩は許せない事を再確認しつつも――それを分かっているからこそ最後に挨拶をし、そしてこの街を出て行った先輩の計算高さに舌を巻く。けれど逆を言えばそこまでの事をした訳だから、もう完全にオズワルドの引き起こした事件に関わる気が無いと言う事だろう。セブンと言う脅威も消えた今、残るは白沢ただ一人。これは、片山さんがいてくれたからこそその結果だ。それも忘れてはいけない。

大きく溜息を吐く。昨日の今日で片山さんの死を吹っ切れる訳は無いけれど、受け入れなければならぬ。でも桐式がどう考えるかが心配でならなかった。そう思うと、家へ向かう足が自然に早まる。家の近くまで来ると味噌汁の香りが漂ってきた。明けない夜はなく、覚めない夢はない。食欲が無くても何か食べないと戦えない。そう、僕にはまだ戦わなくてはならない相手がいるのだ。詰め込んででも食事をして戦いに備えなければならない。

家に入り、台所から香るダシの匂いを振りきり、桐式の様子を見にまずは自分の部屋へ。静かに戸を開けて部屋の中を見ると、そこには姫ちゃんが暗い表情でちょこんと座っているだけだった。

「……大丈夫？」

昨夜身を張って桐式の事を守った姫ちゃんは、その怪我を治すためにずっと霊子化して桐式の傍に居た。怪我自体はすぐに治るのだけれど、あまりのショックに気絶し、防衛本能的なもので霊子化していたらしい。そんな姫ちゃんが僕を見上げると、力の無い笑顔で頷いた。片山さんが命を賭して僕らを守ってくれた時に姫ちゃんは起きていなかったはずだけれど、今の様子を見ると桐式か誰かから聞いているようだった。

姫ちゃんが前に僕が買ってあげた小さなホワイトボードを取り出して文字を書き始める。そこには、

「今日は帰る、か」

女の子らしい丸文字でそれだけ書かれていた。それからすぐにその文字を消してまた書き始める。大丈夫、心のせいりをつけてくる

だけ、と書いたボードを見せてくると、わかった、と僕は姬ちゃんの頭を撫でた。

「ご飯食べに行く？」

優しく問い掛けると姬ちゃんは頷いた。それからボードを傍に置いて両手を僕に向けて伸ばす。僕はその手を取って立ち上がらせようとすけれど、姬ちゃんはムツとした表情で手を引っ込め、その後でまた両手を伸ばしてきた。なんだろう、と一瞬考えた後、

「ああ、そう言うことか」

苦笑を浮かべつつ、姬ちゃんの体に手を回して抱き上げる。姬ちゃんの手がぎゅ、と僕の背中に回ってしがみ付いてきた。抱き易いように姬ちゃんのお尻に手を回すと――びく、と姬ちゃんが体を震わせて少し照れた様子で僕を見上げてきた。そう言えば、見た目がこんなでも中身は桐式と同じ年齢なんだと思うとこの抱き方がちょっと恥ずかしくなってくる。

「……降ろそうか」

ぶんぶんと首を振る姬ちゃん。そのままもっと体を密着するようにしてしがみ付いてきた。仕方なくそのまま部屋を出る事になると廊下でばったりと元永に出くわしてしまった。

「あらー……仲がいいねえ」

糸目で僕らを交互に見る元永。それから表情を暗くして、

「……その、昨日は大変だったね。あたし何も出来なくて……」

「ん、僕は大丈夫だよ。でも桐式がね……元永も桐式の事気に掛けてやってよ」

「それは七緒君のやることでしょ」

「まあ……まあ、そうだな」

からかうような口調で元永が言うとは何も言い返せなくなる。普段通りの元永。でもそれが凄く楽でもある。

「ほら姬ちゃん。七緒君が発情しちゃうからお姉さんがおんぶしてあげよう」

なんて言うのと、姬ちゃんはまたぶんぶんと首を振って僕にしがみ

付いてきた。

「あら……もてもてだね」

「あっははは……」

もじもじと僕の腕の中で動く姫ちゃん。なんだか幸せそうな顔をしていて、こんなところを桐式に見られたら、なんて考えてしまうのだった。

◇

広い客室の中にテレビの音だけが反響する。それを見ていたのはオズワルドただ一人。見ていたと言っても視点がテレビに向いているだけであり、その内容は見ていなかった。いや、正確には途中から思考が止まったと言うべきか。

オズワルドが立ち上がる。用意されていた服に着替える。部屋の外に出る為に戸に手を掛けるが、通路に人の気配を感じて手を離す。通路の人物が源太郎である事に気付き、思考を読む。自分の部屋に入ってくるつもりが無い事を確認すると、源太郎が離れていく事を確認してから通路に出た。

そのまま誰にも会う事もなく無口の家を出ると、オズワルドの足は迷いなく一つの場所へと向かって行った。

「……姉上」

その言葉に応えるものは誰一人いない。ヴァイオレットが連れ去られてからただの一瞬もオズワルドの傍を離れなかったジョンの姿すらもない。

オズワルドの目の前には、テレビに映っていた場所があった。雑居ビルの地下に続く階段の先には石間町でも珍しい、若者が好みそうなバー。しかしだからと言って繁盛した訳ではなく、数ヶ月前に閉店してしまった店であった。別の店が入る事もなく、管理する者もずぼらな管理しかないその場所はそこに通っていた数人の若者の溜まり場とされてしまい乱雑に物が散らかっている。そこに十数

人もの警察関係者がひしめきあっている。その中に、オズワルドも足を踏み入れた。

自身の存在を希薄にし周囲の人間に自分の存在を認識させない魔術を行使するオズワルドに気付く者は居ない。

バーの中に漂うのは噎せ返るほどの血の匂い。そこで起きた事全てを読み取ったオズワルドは、その目に涙を溜め――その場から立ち去った。

## ◇Side 無口七緒

自転車に跨り漕ぎ続けて僕は桐式の家の前に到着した。帰ってしまった桐式の様子を見るためだ。元永も付き合ってくれて一緒に来ている。姫ちゃんは僕の自転車の荷台に乗っていた。

家の前に着き、携帯を取り出す。何を話せばいいのか――それを考えていると、

「ほらほら、こんな時は心配して来てくれるだけで女の子は嬉しいんだから、悩んでないで電話する」

ばしん、と背中を叩いた元永に促されて電話を掛ける。十秒ほどの呼び出しの後、桐式が電話に出た。

「……もしもし」

「ん、僕だよ」

「ボクボク詐欺は受け付けてないよ」

「いやいや……」

電話口から聞けば元気そうな声で、でもどこか疲れ切ったような声で桐式はおどけてみせた。

「大丈夫か？　なんて、大丈夫な訳ないよな」

「まあ、なあ」

ぎし、とベッドの軋む音が微かに聞こえてきた。それを聞いてからふと桐式の家の一階の窓に視線を向けると、丁度カーテンを開いた桐式と目が合った。一瞬息を呑む気配がすると、桐式がすぐに部

屋の中に引っ込む。

「ごめん、今七緒と顔合わせたら何言っちゃうかわかんない」

「……そっか」

「……七緒の事が嫌いになったんじゃないから気にするなよ？ ただ、あたしの気持ちの整理がつかないだけ」

姫ちゃんが言ってきた事を桐式からもう一度聞く。

「ちよっと、今日は一人にして欲しいな」

「ん、分かった。あんまり根詰めるなよ」

「大丈夫だよ。またちよっとしたら遊びに行くから。……ごめんな七緒、あたし、七緒が思ってるほど強くなかった」

桐式が呟く。寂しそうに、申し訳無さそうに。でも僕は――

「桐式は強いよ。僕はそう信じてる。だから、また今度遊ぼうな」

「……うん。それじゃ。桜と姫にもよろしく言っというて」

電話が切れた。心なしか最後の言葉は嬉しそうな声色だった。

「おっとこらしいねえ！」

ばしーんと元永が背中を叩いてくる。桐式もよく背中を叩いてくるけど僕の背中には叩きやすいんだろうか。

そんな事を考えつつ、三人で来た道に戻る。最後に二階の窓を見てみると、桐式がそこに立っていてはにかんだ笑顔で手を振っていた。僕らも手を振り返し、そのまま家へと帰る事にしたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5769/>

---

マスカレイド

2011年7月19日03時22分発行